六角堂第3次・第4次調査

平安京跡研究調査報告

第21輯

財團法人　古代學協會

京　都

平成18年

序

西国十八番の札所である頂法寺は通称『六角堂』としてだけでなく、華道『池坊』の家元としても著名であり、聖徳太子信仰に関連して、愛宕郡折田郷土車里に建立されたという伝承から、平安京左京四条三坊十六町に、平安京内に建立された古代寺院の一つとして知られて来た。古代学協会は従来より平安京に関連した古代寺院として、仁和寺と平安時代山岳寺院の如意寺の調査研究を実施してきたが、この六角堂境内では頂法寺会館の建設工事に先立って昭和49年に古代学協会が依頼を受けて発掘調査を実施し、昭和52年には『平安京跡研究調査報告　第２輯』として報告書を刊行し、六角堂の創建問題について文献学その他からも多角的に検討した。その後第二次調査を経て、平成６年には池坊会館の建設による第三次調査があり、更に平成８年には愛染院跡の第四次調査を実施致した。今回は第三次と第四次調査の報告を合わせて刊行したが、特に文献に見える六角堂の火災と復旧の記事を出土遺物との関連を主眼とした考察をまとめることができた。

四度に亘り調査研究の機会を与えて頂いた頂法寺の池坊専永家元ならびに建設工事の期間中にもかかわらず、発掘調査にご協力を賜った鹿島建設の現場の方々、更にご指導頂いた研究機関に対して篤く敬意を表します。

平成18年３月

財團法人　古代學協會

理事長　角 田　文 衛

目　　次

はじめに …… 1
第１章　位置と環境 …… 2
第１節　地理的環境…… 2
第２節　遺跡の歴史的環境…… 5
第２章　調査の経過 …… 15
第１節　発掘にいたる経緯…… 15
第２節　調査地と調査区…… 16
第３節　発掘調査体制…… 16
第４節　発掘経過…… 17
第３章　第３次調査試掘調査 …… 18
第４章　第３次調査の層序と遺構 …… 19
第１節　層序の概要…… 19
第２節　遺構の概要…… 19
第３節　Ⅰ区の遺構…… 22
第４節　Ⅱ区の遺構…… 33
第５章　第３次調査の出土遺物 …… 39
第１節　出土遺物の概要…… 39
第２節　土器・陶磁器類…… 39
第３節　瓦　類…… 44
第４節　土製品…… 49
第５節　石製品…… 50
第６節　銅製品…… 50
第７節　鉄製品…… 51
第８節　骨製品…… 51
第９節　木製品…… 51
第10節　銭　貨…… 51
第11節　縄文・弥生時代の遺物…… 52

第６章　第４次調査試掘調査 …… 54
第７章　第４次調査の層序と遺構 …… 55
第１節　層序の概要…… 55
第２節　遺構の概要…… 55
第３節　西区の遺構…… 57
第４節　東区の遺構…… 68
第８章　第４次調査の出土遺物 …… 73
第１節　出土遺物の概要…… 73
第２節　西区出土の土器・陶磁器類…… 73
第３節　東区出土の土器・陶磁器類…… 76
第４節　瓦　類…… 79
第５節　土製品…… 86
第６節　石製品…… 86
第７節　鉄製品…… 87
第８節　銅製品…… 87
第９節　銭　貨…… 87
第９章　考　　察 …… 88
第１節　第３次・第４次調査からみた六角堂境内の変遷…… 88
第２節　六角堂出土遺物の変遷―特に瓦と仏教遺物について―…… 94
第３節　素描・六角堂略史…… 96
第10章　まとめ …… 100
おわりに …… 102
付論１　六角堂境内第４次調査出土人骨の鑑定 …… 103
付論２　六角堂出土軒瓦の型式一覧表について …… 106
英文要旨 …… 108

挿　図　目　次

第１図　平安京条坊図…… 1
第２図　遺跡の位置（1/25000）…… 2
第３図　調査区の位置と既往の調査（1/1000）…… 3
第４図　平安京の地形…… 4
第５図　周辺の発掘調査地位置図（1/2500）……12
第６図　グリッドの配置と断面図の位置（1/2000）……15
第７図　第３次調査試掘トレンチ平面図（1/500）……18
第８図　第３次調査試掘トレンチ断面図（1/100）……18
第９図　第３次調査調査区断面図１（1/120）……20
第10図　第３次調査調査区断面図２（1/120）……21
第11図　溝ＳＤ１平面図・断面図（1/30）……22
第12図　井戸ＳＥ10平面図・断面図（1/30）……22
第13図　井戸ＳＫ43平面図・断面図（1/30）……23
第14図　井戸ＳＫ92平面図・断面図（1/30）……24
第15図　土坑ＳＫ58平面図（1/10）……24
第16図　土坑ＳＫ129平面図・断面図（1/30）……24
第17図　土坑ＳＫ130平面図・断面図（1/30）……25
第18図　溝ＳＤ２・ＳＤ３平面図（1/30）……25
第19図　溝ＳＤ４平面図・断面図（1/60）……26
第20図　井戸ＳＥ12平面図・断面図（1/30）……27
第21図　土坑ＳＫ７平面図・断面図（1/30）……27
第22図　土坑ＳＫ72平面図（1/60）……27
第23図　土坑ＳＫ102平面図・断面図（1/30）……28
第24図　土坑ＳＫ109平面図・断面図（1/30）……28
第25図　土坑ＳＫ122平面図・断面図（1/30）……28
第26図　塀ＳＡ１平面図・断面図（1/60）……29
第27図　井戸ＳＥ４平面図・断面図（1/30）……30
第28図　井戸ＳＥ８平面図・断面図（1/30）……31
第29図　井戸ＳＥ11平面図・断面図（1/30）……31
第30図　流路ＳＤ６・ＳＤ７平面図（1/150）……32
第31図　流路ＳＤ６・ＳＤ７断面図（1/30）……32
第32図　土坑Ⅱ区ＳＫ６平面図・断面図（1/30）……33
第33図　土坑Ⅱ区ＳＸ１平面図・断面図（1/30）……34
第34図　太子堂跡およびその周辺遺構平面図・断面図（1/100）……35
第35図　太子堂跡平面図・立面図（1/100）……36
第36図　池および参道石積平面図・立面図（1/100）……37
第37図　塀Ⅱ区ＳＡ１平面図・断面図（1/60）……38
第38図　土坑ＳＫ58・土坑ＳＫ129出土土器実測図（1/3）……39
第39図　第３次調査出土瓦における刻印・記号集成……48

第40図　織部滑車実測図（1/4）……49
第41図　第３次調査出土縄文土器・弥生土器実測図（1/3）……52
第42図　第４次調査試掘トレンチ平面図（1/500）……54
第43図　第４次調査試掘トレンチ断面図（1/60）……54
第44図　第４次調査調査区断面図１（1/120）……56
第45図　第４次調査調査区断面図２（1/120）……57
第46図　溝ＳＤ19平面図・断面図（1/30）……58
第47図　土坑ＳＫ32平面図・断面図（1/30）……58
第48図　土坑ＳＫ02平面図・断面図（1/30）……58
第49図　土坑ＳＫ19平面図・断面図（1/30）……59
第50図　土坑ＳＫ21平面図・断面図（1/30）……59
第51図　土坑ＳＸ01平面図・断面図（1/30）……60
第52図　塀ＳＡ01・ＳＡ02平面図・断面図（1/60）……61
第53図　溝ＳＤ01平面図（1/60）……61
第54図　土坑ＳＫ09平面図・断面図（1/30）……62
第55図　土坑ＳＫ15平面図・断面図（1/30）……62
第56図　土坑ＳＫ16平面図・断面図（1/30）……63
第57図　土坑ＳＫ31平面図・断面図（1/30）……64
第58図　土坑ＳＫ04平面図・断面図（1/30）……64
第59図　土坑ＳＫ05平面図・断面図（1/30）……65
第60図　土坑ＳＫ11平面図・断面図（1/30）……66
第61図　土坑ＳＫ17平面図・断面図（1/30）……67
第62図　土坑ＳＫ18平面図・断面図（1/30）……67
第63図　石列ＳＸ02平面図・断面図（1/30）……67
第64図　土坑ＳＫ40平面図・断面図（1/30）……68
第65図　土坑ＳＫ68平面図・断面図（1/30）……69
第66図　溝ＳＤ16・ＳＤ17平面図・断面図（1/60）……70
第67図　土坑墓ＳＫ38平面図・見通図（1/30）……71
第68図　土坑墓ＳＫ78平面図・断面図（1/20）……72
第69図　土坑墓ＳＫ81平面図・断面図（1/30）……72
第70図　溝ＳＤ15平面図・断面図（1/30）……72
第71図　土坑ＳＸ01出土丸瓦実測図（1/4）……82
第72図　第４次調査出土瓦の記号集成……84
第73図　第４次出土軒瓦一覧表……85
第74図　六角堂境内における遺構変遷図１……89
第75図　六角堂境内における遺構変遷図２……90

図 版 目 次

図版１　第３次調査区全体図（1/800）
図版２　第３次調査溝ＳＤ１出土土器・陶磁器類実測図（1/3）
図版３　第３次調査土坑ＳＫ92出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）
図版４　第３次調査土坑ＳＫ92出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）
図版５　第３次調査土坑ＳＫ122・土坑ＳＫ109・土坑102出土土器・陶磁器類実測図（1/3）
図版６　第３次調査土坑ＳＫ72出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）
図版７　第３次調査土坑ＳＫ72出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）
図版８　第３次調査土坑ＳＫ７・土坑Ⅱ区ＳＸ１出土土器・陶磁器類実測図（1/3）
図版９　第３次調査土坑Ⅱ区ＳＫ６出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）
図版10　第３次調査土坑Ⅱ区ＳＫ６出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）
図版11　第３次調査土坑Ⅱ区ＳＫ６出土土器・陶磁器類実測図３（1/3）
図版12　第３次調査出土緑釉陶器・灰釉陶器・白磁実測図（1/3）
図版13　第３次調査出土青磁実測図（1/3）
図版14　第３次調査出土焼塩壷実測図１（1/3）
図版15　第３次調査出土焼塩壷実測図２（1/3）
図版16　第３次調査出土焼塩壷実測図３・つぼつぼ実測図（1/3）
図版17　第３次調査土坑ＳＫ129出土瓦実測図１（1/4）
図版18　第３次調査土坑ＳＫ129出土瓦実測図２（1/4）
図版19　第３次調査土坑ＳＫ129出土瓦実測図３（1/4）
図版20　第３次調査土坑ＳＫ129出土瓦実測図４（1/4）
図版21　第３次調査出土平安時代前期～鎌倉時代初頭瓦実測図１（1/4）
図版22　第３次調査出土平安時代前期～鎌倉時代初頭瓦実測図２（1/4）
図版23　第３次調査出土鎌倉時代後期～室町時代後期瓦実測図１（1/4）
図版24　第３次調査出土鎌倉時代後期～室町時代後期瓦実測図２（1/4）
図版25　第３次調査土坑ＳＫ７・太子堂池跡出土瓦実測図（1/4）
図版26　第３次調査出土桃山時代～江戸時代瓦実測図（1/4）
図版27　第３次調査出土鬼瓦実測図（1/4）
図版28　第３次調査出土石仏実測図（1/4）
図版29　第３次調査出土石硯実測図１（1/3）
図版30　第３次調査出土石硯実測図２（1/3）
図版31　第３次調査出土銅製品実測図１（1/3）
図版32　第３次調査出土銅製品実測図２・鉄製品実測図（1/3）
図版33　第４次調査区平面図
図版34　第４次調査溝ＳＤ19出土土器・陶磁器類実測図（1/3）
図版35　第４次調査土坑ＳＫ32出土土器・陶磁器類実測図（1/3）
図版36　第４次調査土坑ＳＫ16出土土器・陶磁器類実測図（1/3）
図版37　第４次調査土坑ＳＫ21出土土器・陶磁器類実測図（1/3）
図版38　第４次調査土坑ＳＸ01・ＳＫ12・ＳＫ15出土土器・陶磁器類実測図（1/3）
図版39　第４次調査溝ＳＤ01出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）

図版40　第４次調査溝ＳＤ01出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）
図版41　第４次調査溝ＳＤ01出土土器・陶磁器類実測図３・土坑ＳＫ31出土土器・陶磁器類実測図（1/3）
図版42　第４次調査土坑ＳＫ40出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）
図版43　第４次調査土坑ＳＫ40出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）
図版44　第４次調査土坑ＳＫ40出土土器・陶磁器類実測図３・土坑ＳＫ68・土坑ＳＫ72出土土器・陶磁器類実測図（1/3）
図版45　第４次調査土坑墓ＳＫ38出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）
図版46　第４次調査土坑墓ＳＫ38出土土器・陶磁器類実測図２・土坑墓ＳＫ42出土土器・陶磁器類実測図（1/3）
図版47　第４次調査溝ＳＤ16出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）
図版48　第４次調査溝ＳＤ16出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）
図版49　第４次調査溝ＳＤ16出土土器・陶磁器類実測図３（1/3）
図版50　第４次調査溝ＳＤ17出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）
図版51　第４次調査溝ＳＤ17出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）
図版52　第４次調査土坑ＳＫ55出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）
図版53　第４次調査土坑ＳＫ55出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）
図版54　第４次調査溝ＳＤ19出土瓦実測図１（1/4）
図版55　第４次調査溝ＳＤ19出土瓦実測図２・土坑ＳＫ13出土瓦実測図（1/4）
図版56　第４次調査土坑ＳＫ32出土瓦実測図１（1/4）
図版57　第４次調査土坑ＳＫ32出土瓦実測図２（1/4）
図版58　第４次調査土坑ＳＫ31・ＳＫ20・ＳＫ25出土瓦実測図（1/4）
図版59　第４次調査土坑ＳＫ21出土瓦実測図（1/4）
図版60　第４次調査土坑ＳＸ01出土瓦実測図（1/4）
図版61　第４次調査溝ＳＤ01・土坑ＳＫ46・ＳＫ55出土瓦実測図１（1/4）
図版62　第４次調査土坑ＳＫ55出土瓦実測図２（1/4）
図版63　第４次調査土坑ＳＫ55出土瓦実測図３（1/4）
図版64　第４次調査出土伏見人形実測図（1/3）
図版65　第４次調査出土石塔実測図１（1/4）
図版66　第４次調査出土石塔実測図２（1/4）
図版67　第４次調査出土石塔実測図３（1/4）
図版68　第４次調査出土石塔実測図４（1/4）
図版69　第４次調査出土砥石実測図（1/2）
図版70　第４次調査出土石硯・茶臼・石鍋・やっとこ実測図
図版71　第４次調査土坑墓ＳＫ38出土人骨実測図・写真
図版72　第４次調査土坑墓ＳＫ78人骨出土状況実測図および写真
図版73　第４次調査土坑墓ＳＫ78出土人骨実測図・写真
図版74　六角堂所用瓦型式分類表１
図版75　六角堂所用瓦型式分類表２
図版76　六角堂所用瓦型式分類表３
図版77　六角堂所用瓦型式分類表４
図版78　六角堂所用瓦型式分類表５
図版79　六角堂所用瓦型式分類表６

図版80　六角堂所用瓦型式分類表７
図版81上　六角堂と第３次調査調査区（北より）
　　下　第３次調査調査区北半終了状況（上が東）
図版82上　第３次調査調査区南半終了状況（上が東）
　　下　第３次調査区Ⅱ区終了状況（北より）
図版83上　第３次調査井戸ＳＥ10井戸枠検出状況状況（北東より）
　　下　第３次調査井戸ＳＥ10井戸枠内完掘状況（北より）
図版84上　第３次調査井戸ＳＫ43完掘状況（北より）
　　下　第３次調査井戸ＳＥ12完掘状況（北より）
図版85上　第３次調査井戸ＳＫ92断面（東より）
　　下　第３次調査井戸ＳＫ92土器出土状況（北より）
図版86上　第３次調査土坑ＳＫ58土器出土状況（北より）
　　下　第３次調査土坑ＳＫ129瓦出土状況（北より）
図版87上　第３次調査溝ＳＤ４検出状況（南より）
　　下　第３次調査溝ＳＤ４完掘状況（南より）
図版88上　第３次調査Ⅱ区太子堂跡・池跡出土状況（南西より）
　　下　第３次調査Ⅱ区池跡出土状況（南西より）
図版89上　第４次調査調査前光景（西北西・池坊会館屋上より愛染院を臨む）
　　下　第４次調査調査前光景（南西より）
図版90上　第４次調査試掘調査前光景（北より）
　　下　第４次調査試掘トレンチ終了状況（北より）
図版91上　第４次調査試掘トレンチ遺構検出状況１（西より）
　　下　第４次調査試掘トレンチ遺構検出状況２（西より）
図版92上　第４次調査調査区終了状況（南東より）
　　下　第４次調査調査区終了状況（東より）
図版93上　第４次調査溝ＳＤ01上層遺物出土状況（南より）
　　下　第４次調査溝ＳＤ01完掘状況（南より）
図版94上　第４次調査溝ＳＤ01下層遺物出土状況（南より）
　　下　第４次調査溝ＳＤ01上層内唐津盤・やっとこ出土状況（東より）
図版95上　第４次調査石列ＳＸ02出土状況（東より）
　　下　第４次調査溝ＳＤ19完掘状況（北より）
図版96上　第４次調査溝ＳＤ16・ＳＤ17完掘状況（南より）
　　下　第４次調査土坑ＳＫ40断面（西より）
図版97上　第４次調査土坑墓ＳＫ38土師器皿出土状況（西より）
　　下　第４次調査土坑墓ＳＫ38人骨出土状況（東より）
図版98上　第４次調査土坑ＳＫ20遺物出土状況（東より）
　　下　第４次調査土坑墓ＳＫ78人骨出土状況（南より）

付 表 目 次

第１表　六角堂焼亡・再建関連年表…… 10
第２表　土坑墓ＳＫ78出土人骨四肢骨計測表…… 105
第３表　六角堂周辺試掘・立会調査一覧表…… 110

例　　言

1．本書は京都府京都市中京区六角通東洞院西入ル堂ノ前町248番地に所在する六角堂境内の発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は華道家元池坊の委託を受けて平成６年５月16日から９月９日（第３次）と平成８年１月16日から３月２日（第４次）の２度，財團法人古代學協會・古代學研究所が実施した。

3．挿図及び図版で使用した方位と座標軸は平面直角座標第Ⅵ系に基づくものである。ただし，単位（m）は省略している。標高はＴ．Ｐ．(東京湾平均海面高度）による。

4．第２図には京都市文化市民局文化部埋蔵文化財センター『京都市遺跡地図』（京都，平成15年）を，第３図には平成10年測量京都市1/1000都市計画図を一部加筆の上使用した。

5．遺構・遺物の実測には江谷　寛，西田泰民，宮崎幹也，前川佳代，桐山秀穂，千喜良淳，浜田竜彦，嘉幡茂，渡辺直哉，池田和歌子，黒崎　充，上島玲子，井上宗嗣，山田喜代子，下村順子が行った。

6．図版の作成とトレースは江谷，桐山，岡本沙千代が行った。

7．写真の撮影は江谷と桐山が行った。

8．調査の記録と出土遺物は財團法人古代學協會・古代學研究所が保管する。

10．本書の執筆は江谷（はじめに，第２～第４章，第10章）と桐山（第１章，第５～第９章，おわりに，付論２），楢崎修一郎（付論１）が行い，編集は江谷と桐山が行った。

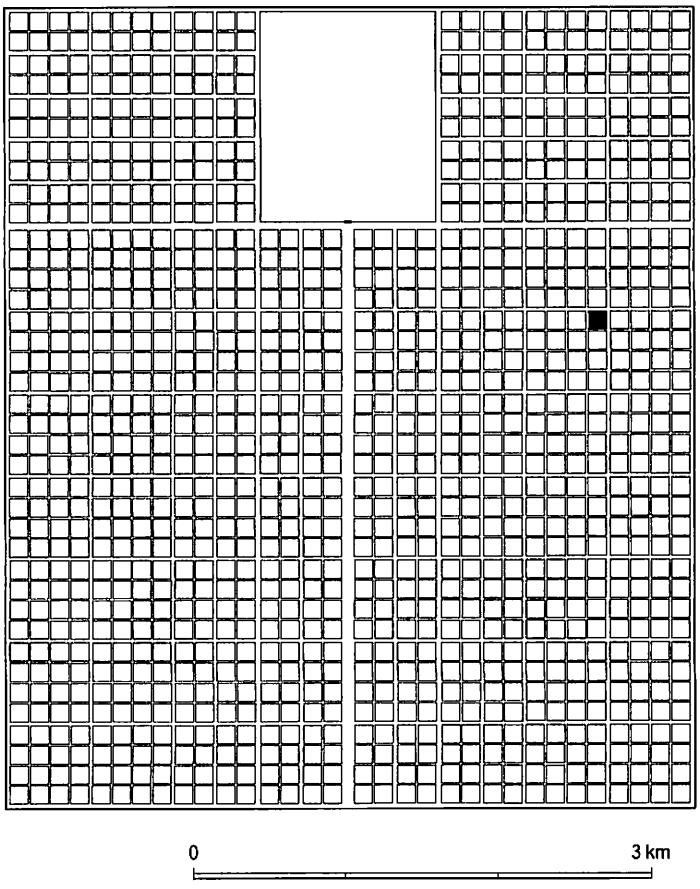
はじめに

「六角堂」と通称される寺院は正式には紫雲山頂法寺という。華道池坊流の家元，そして西国三十三ヶ所観音巡礼の十八番札所として広く知られている。本堂が平面六角形を呈することから，「六角堂」という通称が生まれた。天台宗の寺院で，本尊は如意輪観音像である。

平成6年に宗教法人頂法寺は池坊会館の建て替えとビル・駐車場の建設を計画し，平成8年の完成を目指して着工した。これは本堂北側の住心院（子院）及び東側の愛染院（子院）の位置に池坊会館と太子堂および地下駐車場を，本堂西側にビルを建設する大がかりな工事であった。これに対し，京都市埋蔵文化財調査センター（当時）はこれら工事予定地について，当該地（寺院）の重要性から埋蔵文化財の発掘調査が必要と判断していた。

平成6年工事に先立つ発掘調査の必要が生じ，財団法人古代学協会へ依頼があった。協会では検討の結果，これを受諾し発掘調査を担当することとなった。

発掘調査は平成6年度と平成7年度の2年に分けて行われた。本報告書はこの2次にわたる発掘調査の成果である。



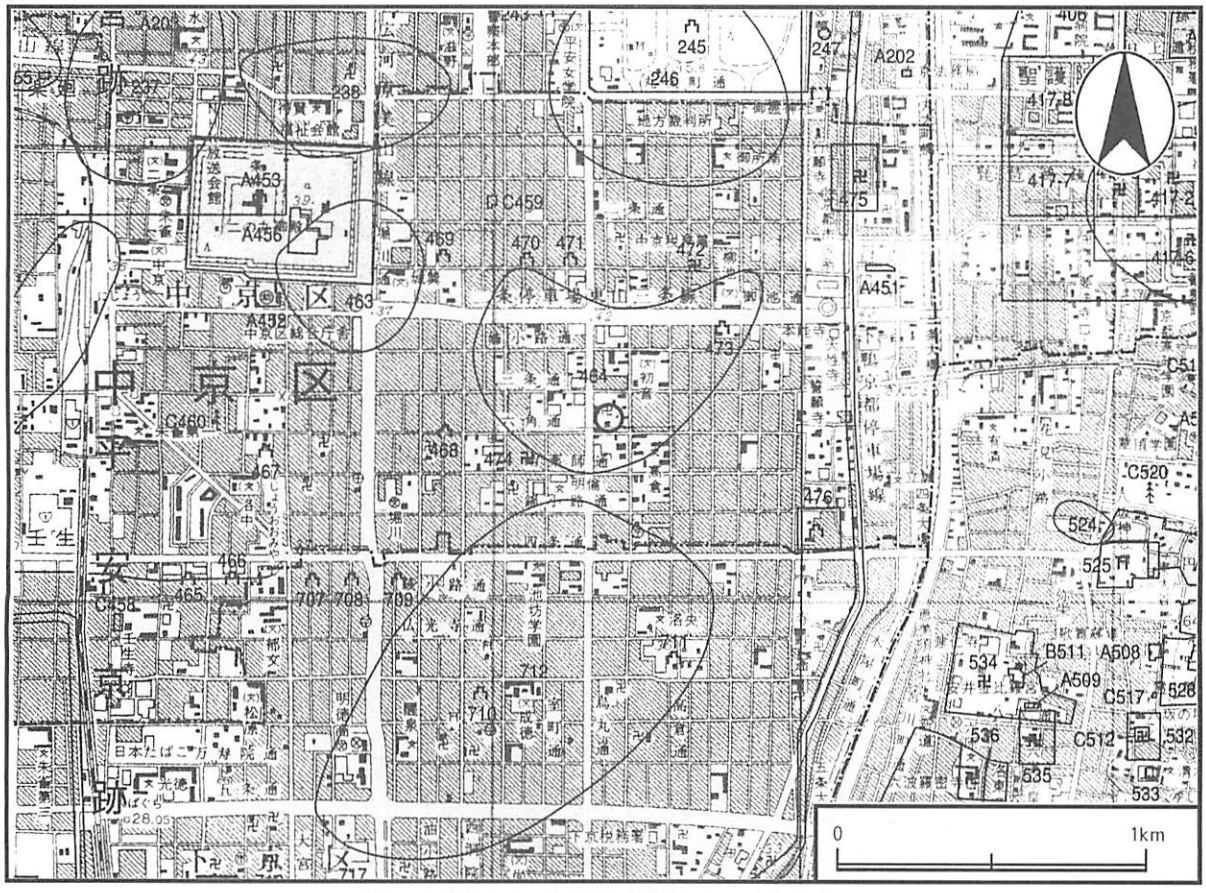
第1図　平安京条坊図と調査地点

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境[註1]

調査地は京都市中京区六角通東洞院西入ル堂ノ前町248番地の六角堂境内内に所在する（第１～３図）。烏丸通と六角通の交差点北東隅である。現在では建物が密集する都市部の真中であり，自然地形をうかがい知ることは難しい。しかし，ここは京都盆地を構成する扇状地上にあたる（第４図）。

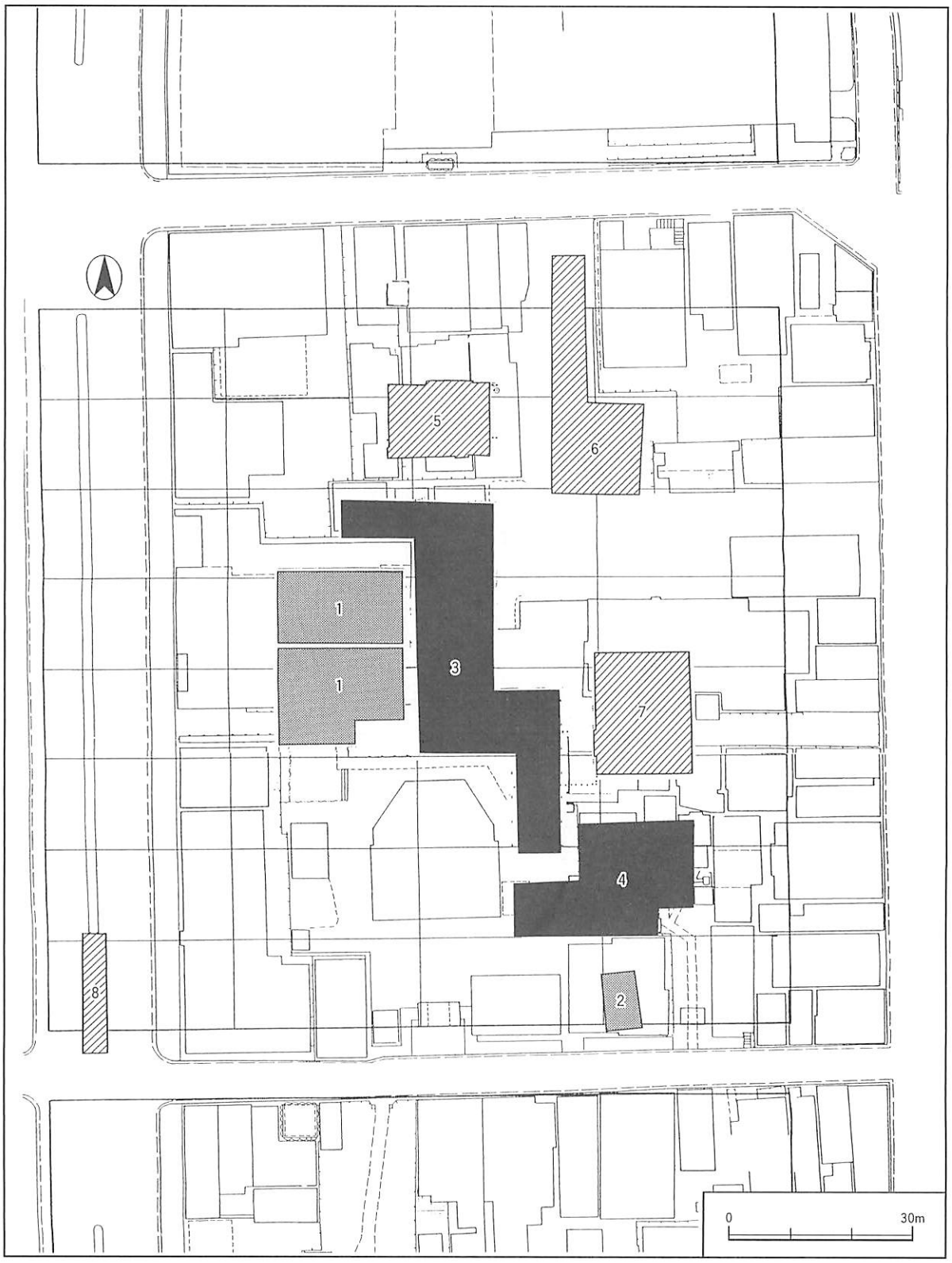
京都盆地は北から西は丹波高地の東辺である北山山地とそれに続く西山山地，東は比叡山地とそれに続く東山山地，南は生駒山地北端の男山丘陵によって区切られる盆地である。ほぼ中央には戦前までは巨椋池があり，こうした山々から流れ出る川を集め，そして淀川を通して大阪湾に注いでいた。巨椋池の北では丹波高地を水源とする桂川は盆地西部を南東方向に流れ，直接淀川に合流した。同じく丹波高地を水源とする天神川と堀川は蛇行しつつ盆地中央部を南流し，鳥羽で鴨川に合流し，巨椋池につながる。比叡山地を水源とする賀茂川，高野川，白川は鴨川がそれらをまとめ，盆地東部を南に流れ下り巨椋池に注いだ。東からは琵琶湖を水源とする宇治川，南からは大和高原を水源とする木津川があった。もともと盆地の平野部は狭く巨椋池の前身である古大阪湾が広



第２図　遺跡の位置（1/25000）
(464が烏丸御池遺跡である。そのほか237:聚楽遺跡,238:二条城北遺跡,245:頂妙寺の構え跡,246:烏丸丸太町遺跡,247:松蔭町遺跡,463:堀川御池遺跡,465:本隆寺の構え跡,466:立本寺の構え跡,467:旧本能寺の構え跡,468:本能寺城跡,469:妙顕寺城跡,470:妙覚寺城跡,471:二条殿御池城跡,472:等持寺跡,473:三条坊門殿跡,474:姥柳町遺跡(南蛮寺跡),475:法興院跡:476:四条道場跡,707:妙連寺の構え跡708:妙満寺の構え跡,709:本禅寺の構え跡,710:だいうすの城跡,711:竜臥城跡,712:烏丸綾小路遺跡,A202:頼山陽書斎(山紫水明処),A203:平安宮内裏内郭回廊跡,A451:,高瀬川一之船入A452:神泉苑,A453:旧二条離宮(二条城),A456:二条城二之丸庭園,C458:壬生寺庭園,C459:堀内家長生庵庭園,C460:武信稲荷神社のエノキである。)

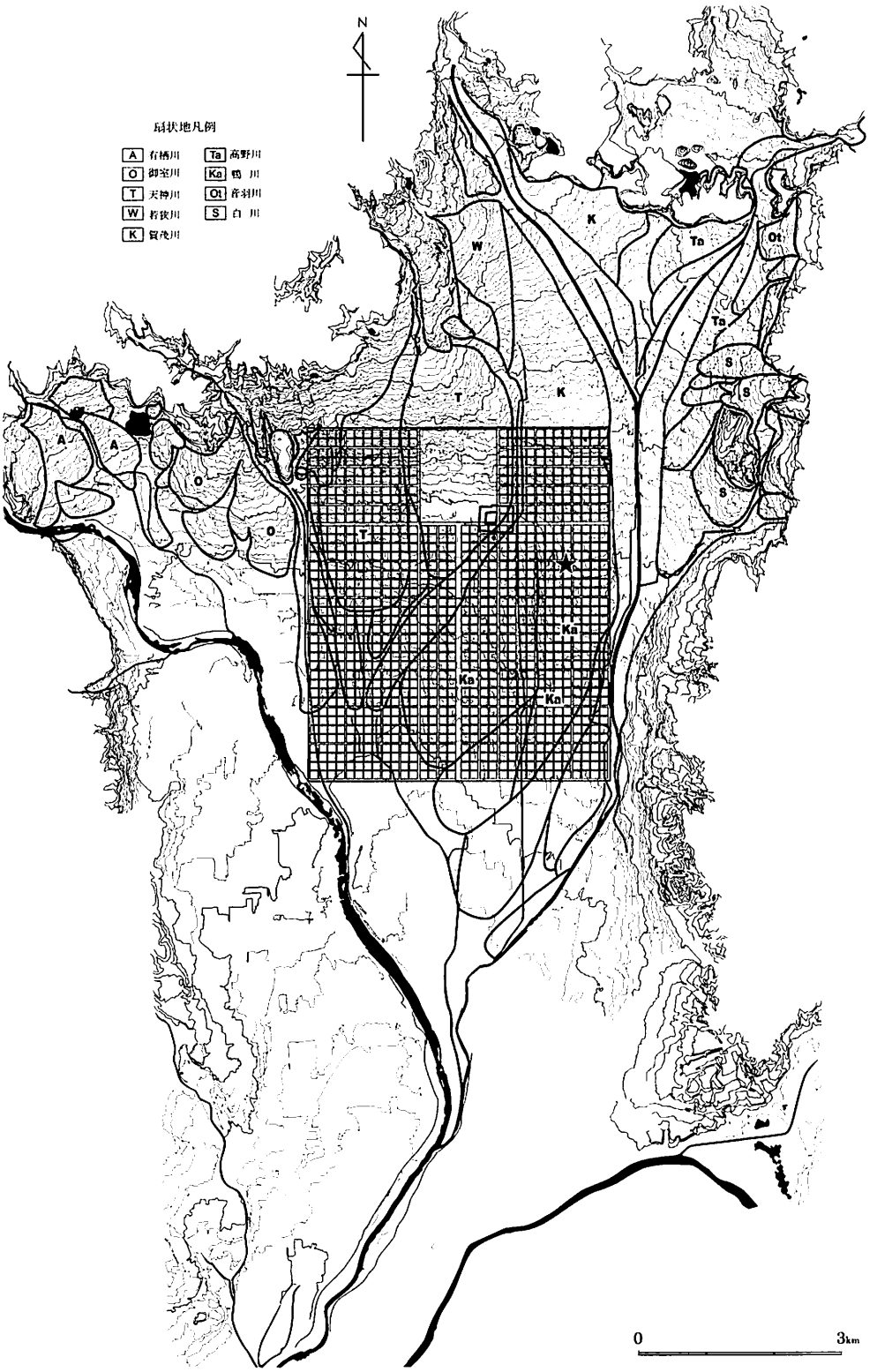
がっていたが，海退期にこうした川の山地への開析作用，あるいは沖積作用により次第に平野が形成され，広がっていった。

こうした平野のうち，京都盆地北部の扇状地群，すなわち白川扇状地・賀茂川扇状地・鴨川扇状地・天神川扇



第３図　調査区の位置と既往の調査（1/1000）
（1：六角堂第１次調査地，2：同第２次調査地、3：同第３次調査地，4：同第４次調査地，5・6：平安京左京三条四坊跡発掘調査団調査地，7：京都市埋蔵文化財研究所調査地，8：高速鉄道烏丸線内遺構調査会調査地）

状地は約4万～3万年前の最終氷期に形成された。調査地はこのうち鴨川扇状地に立地する。これは賀茂川と高野川の合流点の左岸，京都御所付近を頂点として南と南西に延びる扇状地である。これより北には上賀茂の狭隘部を頂点とし賀茂川により形成された扇状地が広がっている。また，堀川は鴨川扇状地と天神川扇状地の間の低地帯を流れるものであり，平安京以前においては扇状地の扇端部を巡りつつ東北から南西方向に向かって流れ，吉祥院辺りで天神川に注いでいたと考えられている。こうしたところに湧く伏流水を集めて流れる川であった。



第4図　平安京の地形（★印は遺跡の位置）

最終氷期の極相期にはこれら扇状地が侵食され谷を形成した。そして１万～６千年前の温暖期である縄文海進期には再び土砂堆積が進み，新たに形成された谷から扇状地が形成され発達した。調査地西方を南流する西洞院川の谷は鴨川扇状地のこうした谷の１つであり，八条辺りからこの谷の新しい扇状地が形成されている。調査地は標高約38mＴ.Ｐ.で，ほぼ扇状地の扇央部中位の自然堤防上に位置する。

こうした立地の特性から，調査地周辺には天然の湧水と埋没河川が多く存在する。天然の湧水は扇状地の伏流水が地表に噴き出たものである。調査地の六角堂では池坊の名称の由来となった池があり，これは天然の湧水を利用している。これ以外にも調査地周辺では龍池，御池通などの名称の由来となった二条殿（押小路殿・泉殿）の龍躍池（平安京左京三条三坊十一町），武野紹鴎ゆかりの名水菊水井（左京四条三坊十二町）など，天然の湧水を利用した園池・井戸がある。調査地とはやや離れるが，近年調査された平安京右京三条二坊十六町では平安時代中期において，天然の湧水点に泉を設け，それより導水した園地が確認されている(註2)。平安京における庭園での湧水点の利用は平安時代まで遡る。こうした良質の水が出る湧水点は古来より人間の生活空間にとって必須条件であったに違いない。平安京以降の時代はもとより，それ以前の時代においても人間の生活の場として機能していたことが想定できるだろう。また，こうした湧水点は埋没河川上に所々存在している。先に述べた最終氷期に形成された扇状地上の谷において，縄文時代以降徐々に土砂が堆積し新たな扇状地形を形成される。この埋没河川はその結果埋没したものである。これが地下水脈として機能し，伏流水を流しているのである。

第２節　遺跡の歴史的環境

１．平安遷都前

（１）烏丸御池遺跡について

調査地周辺は平安遷都前について烏丸御池遺跡の中に位置している（第２図）。まず，烏丸御池遺跡について概観し，ついで平安京相当域における遺跡の動態の中で位置についてみておこう。

烏丸御池遺跡は，北は現在の押小路通，南は蛸薬師通，西は西洞院通，東は麩屋町通に囲まれた自然堤防上に広がり，東西3.8km，南北2.7kmある。調査地はこの遺跡の南部に位置する。この遺跡はこれまでの発掘調査の結果，縄文時代前期・後期・晩期，弥生時代前期・中期・後期・終末期，古墳時代前期・後期，飛鳥時代の遺構ないし遺物が確認されている。

縄文時代について縄文前期・後期は土器片を確認したのみである。中京区三条通東洞院東入菱屋町30の中京郵便局新築に伴う発掘調査（高倉宮第１次調査）では縄文後期の土器片が出土(註3)，中京区高倉通姉小路下ル東片町623・曇華院前ノ町706他地点の京都文化博物館建設に伴う発掘調査（高倉宮第４次調査）において前期末，大歳山式の縄文土器片が出土した(註4)。判明しているのは以上の通りであり，縄文後期以前の遺跡の状況はよくわからない。縄文晩期については遺構・遺物とも確認されている。中京区三条通東洞院東入曇華院前ノ町705-1・菱屋町41他地点の白水三条ビル建設に伴う発掘調査では縄文晩期後半の突帯文土器に伴う遺構・遺物が検出された(註5)。遺構は土坑・土器溜りであるが，竪穴住居跡や土器棺墓の可能性が指摘されている。亀ヶ岡系土器や土偶や石棒といった宗教関連遺物も出土している。また弥生前期・中期の土器・石器も出土しており，この時期まで遺跡が継続すると推測される。中京区東洞院通六角下ル御射山町272地点の京都市男女共同参画センター建設に伴う発掘調査では北東から南西方向の流路が発見され，縄文晩期土器，弥生土器，土師器，須恵器など縄文晩期から古墳後期の土器類が出土している(註6)。ここからはまた浮線文系土器，精巧な石刀が出土している。事例は少ないが烏丸御池遺跡において縄文晩期の遺物・遺構は南東部を中心に分布しているようである。集落の実態はまだまだ解明されていないが，集落に次の弥生時代にも継続すること，宗教的社会性のあること，遠距離地域との交流があることから，縄文晩期におけるこの地域の拠点的な集落といえるだろう。

弥生時代については前期・中期・後期・終末期の遺構・遺物が確認されている。中京区両替町御池上ル金吹町

451地点の京都労働基準局改築工事に伴う発掘調査では後世の遺構に弥生土器が混入していた(註7)。中京区御池通東西線建設に伴う発掘調査の№13トレンチにて弥生終末期の竪穴住居跡1棟が検出されている(註8)。同じくF№3・4トレンチでは弥生・古墳時代の流路，弥生後期の土坑と弥生後期の土器が出土している(註9)。同じくT№8・F№1～7トレンチでは弥生時代後期～終末期の遺物が出土している(註10)。中京区烏丸通六角下ル七観音町635地点では弥生土器が出土(註11)。中京区東洞院通六角下ル御射山町272地点の京都市男女共同参画センター建設に伴う発掘調査では流路より弥生土器が出土(註12)。中京区高倉通六角下ル和久屋町343地点の高倉小学校改築に伴う発掘調査では弥生土器片が出土(註13)。弥生前期・中期に関しては烏丸御池遺跡の南東部を中心に分布しており，縄文晩期の遺物・遺構分布と重なるところが大きい。しかし後期は北部を中心に分布するようになり，かつ遺跡の西部にも分布を広げるようである。伊藤淳史氏も烏丸御池遺跡について現在の御池通周辺以北に弥生後期以降の遺跡の中心が存在することを想定している(註14)。遺跡地図の遺跡の範囲がさらに北に延びる可能性もあろう。

古墳時代について細かな時期が明確ではないが，いくつかの地点で遺物・遺構が出土している。中京区両替町御池上ル金吹町451地点の京都労働基準局改築工事に伴う発掘調査では後世の遺構に古墳時代の土師器・須恵器が混入していた(註15)。中京区御池通東西線建設に伴う発掘調査のF№3トレンチでは古墳時代の流路が見つかっている(註16)。同じくT№8・F№1～7トレンチでは古墳時代の遺物が出土している(註17)。同じくF№9～15トレンチから古墳時代土器類が出土している(註18)。中京区御池通富小路西入東八幡町地点の京都御池中学校改築に伴う発掘調査では古墳時代流路と杭跡が検出され，土器片が出土している(註19)。中京区御池通柳馬場下ル柳八幡町地点のマンション建設に伴う発掘調査では古墳時代の湿地が確認されている(註20)。中京区堺町通姉小路下ル大阪材木町地点のマンション建設に伴う発掘調査では古墳時代前期・布留式の溝が大量の土器とともに見つかっている(註21)。中京区烏丸通六角下ル七観音町635地点では古墳時代土器が出土(註22)，中京区東洞院通六角下ル御射山町272地点の京都市男女共同参画センター建設に伴う発掘調査では流路より古墳時代の土師器・須恵器が出土(註23)，中京区高倉通六角下ル和久屋町343地点の高倉小学校改築に伴う発掘調査では古墳時代土器片が出土(註24)。この中にはおそらく庄内併行期の遺物・遺構も含まれていると思われるが，土器実測図はなく，あくまで報告書の文言から判断しているのでこのあたりはよくわからない。しかし，弥生後期から遺跡が継続しているように想像される。竪穴住居跡や方形周溝墓などの検出例が皆無なので具体的に論じられないが，遺跡が存在していることは確実である。

飛鳥時代については中京区御池通地下鉄東西線建設に伴う立会調査のF№5～7トレンチでは飛鳥時代の土師器・須恵器が出土している(註25)。中京区東洞院通六角下ル御射山町272地点の京都市男女共同参画センター建設に伴う発掘調査では浅い落込より飛鳥時代の土師器・須恵器が出土(註26)，東隣の中京区高倉通六角下ル和久屋町343地点の高倉小学校改築に伴う発掘調査では飛鳥時代土器片が出土している(註27)。飛鳥時代については明確な遺構が見つかっていないが，遺物の分布から遺跡の北東部，北西部に分布しているようである。ただし，前段階の古墳時代と比較すると遺跡の規模はやや小さくなった印象がある。なお奈良時代の遺物・遺構は見つかっていない。

平安京相当域の旧石器時代から奈良時代の集落動態と関連づけてみてみよう(註28)。平安京相当域の旧石器時代遺跡についてはいずれも遺物のみで遺構は確認されていない。いずれも天神川扇状地の扇端部の低地帯に位置している。六角堂付近で見つかる可能性はないとはいえないが，極めて低い。縄文時代遺跡について千葉豊氏の研究によれば，京都盆地においては中期以前に比して後晩期の遺跡は沖積低地に立地するものが激増する(註29)。しかし烏丸御池遺跡では縄文前期末の土器が出土しており，注意される。こうした動向に先行して集落が営まれているからである。少量の出土遺物のみで手掛かりがないが，こうした動態は立地や自然環境の要因によるものか，いつ頃から集落が営まれるようになったのかなど，検討すべき課題が多い。縄文後晩期には鴨川扇状池状にも遺跡が多数出現するが，その中における烏丸御池遺跡の性格の特徴については先述した。

弥生時代について。内膳町遺跡，烏丸御池遺跡は先述のように晩期の拠点的集落であり，それが弥生前期まで

継続している。これ以外の前期の遺跡は付近に縄文晩期の遺跡があり，それとの関係が推測される。弥生中期では，拠点集落としばしば位置付けられる烏丸綾小路遺跡が出現する。断片的な調査であるが，竪穴住居跡や溝，それも方形周溝墓の一部とみられる溝も確認されている。居住域を中心部に，墓域を周縁部に配する典型的な弥生集落と思われる。また，近江系土器，河内産土器など他地域の影響を受けた土器や他地域産の土器も多数出土している。石器未製品なども多く出土し石器製作を行っていると考えられる。このような生産と交易の中心である集落は，この時期この地域の経済的中心であったことを物語っている。周辺には烏丸御池遺跡，東塩小路遺跡が展開するが，こうした遺跡は烏丸綾小路遺跡との関係で生まれた衛星集落というべき集落といえるだろう。弥生後期になると遺跡は盆地全体に分布するようになり，その数も爆発的に増加するが，伊藤淳史氏はそれを近畿地方の遺跡の動態として共通するものだとしている(註30)。後期は中期に比べ個別の遺跡の実態が分かるものはない。烏丸綾小路遺跡は集落の中心を移動させるようであり，遺構もあまり明確ではなくなる。規模も小さくなるようである。他の遺跡も同様で中小規模の遺跡が散在する印象が強い。烏丸御池遺跡も集落の中心が遺跡の南東部から北部に移るが，それはこうした動態とも関連する事象といえるだろう。

古墳時代遺跡について詳細な時期がよくわからないので具体的に論じられないが，弥生時代後期とそれほど増減はないようである。古墳については平安京右京八条一坊十二町において削平された古墳（梅小路古墳）が1基確認されている(註31)。平安京相当域において今後古墳の検出例が増加すると予想されるが，やはり古墳の僅少を特徴として指摘することはできるだろう。集落遺跡近辺に古墳群がある岡崎や北白川，下鴨，嵯峨野などとは対照的である。平安京相当域の古墳時代遺跡は古墳をあまり伴わないような中小規模の遺跡が散在する印象が強い。烏丸御池遺跡は遺構が明確でなく比較的規模の小さな集落であろうと思われる。これはこのような古墳時代の集落の様相と一致してくると考えられる。

飛鳥・奈良時代の遺跡については極端に減少する。特に奈良時代の遺構・遺物は聚楽遺跡・西京極遺跡で見つかっているに過ぎない(註32)。盆地北部の奈良時代遺跡がある太秦・嵯峨野周辺や北野，下鴨，北白川などと比較すると平安京相当域の奈良時代の遺跡は非常に希薄である。律令制下，条里制が施行されて集落が再編されたため，遺跡数が減少したのではないかと想像される。そしてそれは京都盆地における集落分布は基本的に段丘上ないし扇状地扇頂部に近い高地とされ，低地については基本的に耕作地とされたのではなかろうか。烏丸御池遺跡について奈良時代の遺物・遺構が発見される確率は非常に低いと考えざるを得ない。

（2）文献史料上の六角堂周辺

次に文献史料上における六角堂周辺についてみてみる。

六角堂周辺は律令制の国郡里制で愛宕郡に属す。愛宕郡衙の位置は現在不明である。愛宕郡条里については金田章裕が現在の地割と文献史料から復元をおいて試みているが，それは京外においてである(註33)。平安京に相当する地域については文献・考古とも史料がなく，全く不明である。これは葛野郡，紀伊郡についても同様で，平安京に相当する地域については全くわからない。

平安京以前の交通路についてもよくわからない(註34)。奈良時代の官道は平安京に相当する地域を通らない。しかし，官道ではない古道があったことは十分考えられる。また河川交通ではおそらく鴨川，桂川，旧天神川，旧堀川が主要な交通路としての機能を果たしたであろう。文献史料に登場する主要な港津には梅津，桂津，鳥羽津があるが，これらの中に平安遷都前に遡り得るものもあるかもしれない。

愛宕郡内における郷は平安時代以降について判明している(註35)。『和名類聚抄』によれば賀茂郷，大野郷，小野郷，蓼倉郷，栗野郷，出雲郷，上栗田郷，錦部郷，下栗田郷，八坂郷，鳥戸野郷，愛宕郷の十二郷がある。もちろんこれには平安京域に所在した郷名はない。奈良時代ならば，平安京相当域に郷が存在した可能性はあるだろうが，その郷名についてはほとんどよくわからない。『六角堂縁起』に登場する「折田郷」が奈良時代の郷名の唯一の例である。なお，愛宕郷は八坂郷・鳥戸野郷の西で鴨川との間の地域であるが，岸俊男は平安京以前の愛宕郷を鴨川左岸の平安京南東部と考えている(註36)。

また『延喜式』によれば式内社は賀茂別雷神社，出雲井於神社，賀茂御祖神社，出雲高野神社，賀茂山口神社，賀茂波爾神社，小野神社，久我神社，末刀神社，須波神社，伊多太神社，貴布祢神社，鴨川合坐小社宅神社，鴨岡太神社，太田神社，三井神社，大柴神社，高橋神社，片山御子神社の二十一座ある。いずれも平安京遷都前に遡ると考えられる神社である。これら以外でも八坂神社が古い。また山路興造は平安京内の下京区西洞院通松原下ルに所在する五条天神社が平安京遷都前に遡る神社ではないかとしている(註37)。

古代寺院について，六角堂を除けば平安京相当域に飛鳥・奈良時代の寺院はない。京都盆地に所在する飛鳥・奈良時代寺院には広隆寺（葛野秦寺），北野廃寺（野寺），出雲寺，北白川廃寺（粟田寺），法観寺（八坂寺），珍皇寺（愛宕寺）である。いずれも段丘上，ないし扇状地高位に立地している。六角堂は飛鳥時代創建の寺院という伝承があるが，沖積低地に立地しており，立地からみればやや異質である。

そして郷と式内社，古代氏族の間の密接な関係は角田文衛･山路興造などにより指摘されている(註38)。それは賀茂氏と賀茂郷，賀茂別雷神社，賀茂御祖神社，賀茂山口神社，賀茂波爾神社，鴨川合坐小社宅神社，鴨岡太神社で，いずれも賀茂川と高野川との間の地域に分布し，氏族の構成員はそこに居住していたと考えられている。高野川上流の小野郷と小野神社，小野氏，賀茂川右岸の出雲路周辺の出雲郷，出雲井於神社，出雲高野神社と出雲氏もまた同様である。氏神は不明であるが，愛宕郷と山代国造家もこれに準じて想定できる。それらは水陸交通の要衝に位置し，かつ考古資料における古墳・飛鳥時代集落と古墳群・古代寺院の分布とも重なってくるようにみえる。京都盆地ではこのようなまとまりがいくつも認められる。

こうした目で見た場合，六角堂周辺はどのように見えるだろうか。六角堂の位置は①低地に位置していること，②主要な陸路に近接していない，③水上交通路として鴨川あるいは旧堀川を考えても水系から離れている，④平安京遷都前に遡りうる神社が存在しない，⑤考古資料として周辺に奈良時代の集落の所在が未確認である，⑥同じく古墳が未確認であることは，京都盆地における他の飛鳥・奈良時代の集落や古代寺院と大きく異なる。このうち⑤⑥の点について今後の発掘調査により発見される可能性がある。また，②についても同様に確認されるか，新たな視点による研究で付近に古道が推定されるかもしれない。しかし，それ以外にも3点も相違点がある。この地に集落があったかどうか，そしてその地名が「愛宕郡折田郷土車里」であるかどうか，さらにそこに古代寺院があったかどうかはいずれも大いに問題があるといえる。

2．平安京遷都以降

（1）平安遷都以降の概要と六角堂の位置

延暦十三年（794）桓武天皇により長岡京から平安京に遷都された。盆地のほぼ中央，鴨川と桂川に挟まれた底地に平安京は建設された。先述したように平安宮は船岡山周辺から延びる丘陵上に位置し，左京域はほぼ鴨川扇状地上，右京域は天神川扇状地上にあった。しかし，右京域は左京域に比べ低湿地が多く広がり，平安中期は人家が廃れて，耕作地になったところが多かった。左京域は，八条・九条の一部が湿地帯のため開発がなされなかったのを除けば，ほぼ全域に開発が及び，人が集住する空間となった。宮に近い北辺から三条あたりには諸司厨町が所在し，皇族や有力貴族の邸宅が建ち並んでいた。12世紀に入ると，左京一条以北，白河，六波羅が開発されて貴族や武士の邸宅が建ち並ぶようになる一方，左京は二条大路辺りを境として北と南に都市域が分離し始めた。北の町は役人の居住の場，南は庶民的な商業の場として特徴づけられる。南の町は町小路を軸に三条町，四条町，七条町で盛んに交易が行われた。これらは新興の交易の場として後世の都市空間の原型を形成した。室町時代になり北の町は上京，南の町は下京とよばれるようになる。

平安京において調査地およびその周辺は平安京左京四条三坊十六町に位置する。九条家本『延喜式』所載『左京図』によれば十六町は東西を烏丸小路と東洞院大路，南北三条大路と六角小路に囲まれた方一町である。六角堂はそこに一町に満たない方形の区画に占地するとして描かれている。すなわち六角堂の寺域は北と東西道路からは距離を置き，南の六角小路のみに面している。この状況は古地図で判断する限り，現在に至るまで特に変化がないと考えられている。そして十六町内の北・東・西にある六角堂境内外の土地には民家が建ち並んでいたと

考えられている。

平安時代における十六町周辺の状況を見てみる。まず十六町の北，左京三条三坊十三町には白河法皇・鳥羽上皇の御所であり，後白河天皇の里内裏であった三条東殿が，その西の同じく十二町には白河法皇・鳥羽上皇・待賢門院藤原璋子らの御所であった三条西殿が所在した。北東の三条四坊四町は平安後期に以仁王の邸宅となった高倉宮があった。西隣の四条三坊九町には三条南殿（三条桟敷殿）があり，平安後期には鳥羽法皇らの御所として三条烏丸御所と呼ばれたりした。南隣の四条三坊十五町には平安後期に白河法皇近臣の藤原国明の六角東洞院第があった。ここも一時は白河法皇に献上され御所となった。平安末鎌倉初期であるが，小山朝政の宿所が三条東洞院に，平賀朝雅の宿所が六角東洞院にあったとされるからこの付近であろう。このほか隣接する町には居住者が伝わらないところもあるが，この一帯も皇族の御所や上級貴族の邸宅が多いことから推測すれば，同様に利用されていたのではないかと考えられる。

応仁の乱で左京のほとんどが焼け，壊滅状態となった。その後上京・下京を中心に徐々に復興していった。16世紀には自治組織である町組が生成し，これらが上京・下京をまとめていく基盤として成長した。上京・下京がそれぞれに土塁と堀を巡らせるなど惣構を建設し，盗賊や戦乱に備えた。六角堂はこの中にあって下京の中心的な施設であり，危急を知らせる早鐘が打ち鳴らされたりした。

その後京都は豊臣秀吉によって大きく改変される。秀吉は天正十四年（1586）に御土居を建設し上京・下京の惣構を破却した。そして御土居の内では平安京以来の地割を変更し，聚楽第を建設，それを中心に武家・公家の邸宅・寺院をそれぞれ集めて配置した。六角堂はこの中にあって位置が動くことはなかった。下京の中心部も町衆の反発に配慮してか，地割の変更が及んでいない。

豊臣秀吉の京都改造により京都は聚楽第を中心とする城下町と化した。これは現在に至る京都の原型を形成したものである。江戸時代になり京都は御土居の中で都市域を充実させていったが，やがては祇園と一体化するなど御土居を超えて都市域が広がっていった。それは近現代に至り交通機関の発達とともにさらに加速して膨張しているといえるだろう。そしてその中でも中世以来の町組の伝統も生きており，明治時代には地方行政の下部組織として機能したほか，現在でも祭礼の中心を担いつづけている。

（2）文献史料上の六角堂

ここでは朧谷寿氏が甲元真之編『平安京六角堂の発掘調査』（財團法人古代學協會『平安京跡研究調査報告』第2輯，京都，昭和52年）に収めた論考『文献よりみた六角堂』をもとに説明する。概略については略年表（第1表）の通りである。

六角堂は正式には紫雲山頂法寺といい，六角堂は本堂の形に由来する通称である。本尊は如意輪観音である。天台宗に属する。六角堂という名称は平安時代まで遡るが，頂法寺という名称が出てくるのはやや新しく，鎌倉時代末に『元亨釈書』で初めて登場する。

創建については『六角堂縁起』においては六角堂が飛鳥時代聖徳太子の創建であることで諸本共通する。しかし朧谷寿氏は，①『六角堂縁起』の成立は平安時代後期を遡らず，創建記事も信憑性に欠ける，②10世紀中頃成立の『聖徳太子伝暦』に登場せず，13世紀前半成立の『聖徳太子伝私記』に登場する，③文献史料上の「六角堂」の初出は『小右記』寛仁二年（1018）十一月二十二日条である。④昭和49～50年の第1次発掘調査で確認された六角堂出土遺物の上限が平安中期であり，それ以前の遺物・遺構が遷都以前の弥生時代の所産である，という4点から平安遷都以前の六角堂の存在に否定的で，平安時代中期創建の見解を示した。それは南に面する小路名「六角小路」は六角堂に由来すると考えられるが，その文献上の初出は『親信卿記』天延二年（974）であることから，六角堂の創建時期を950～970年ごろと推測した。また創建の背景については，太子信仰と末法思想とが作用したのではないかと推測するに留まり，将来の課題としている。そして創建の意義として朧谷は平安京内に建立された最初の私寺であったとしている。六角堂と同様に京内の貴賤の信仰を集める寺院として革堂と因幡堂もほぼ同時期の平安中期に建立されている。朧谷はこの時期はこうした寺院が盛んに建立されたとみている。

第1表　六角堂焼亡・再建関連年表

和暦	西暦	主　要　事　項
寛弘元年	1004	※行円が行願寺（革堂）を創建する。『日本紀略』十二月十一日条；『権記』同
寛弘四年以降	1008以降	※この頃橘行平が平等寺（因幡堂）を創建する。
長元二年	1029	烏丸六角で火災が発生するが、六角堂は類焼を逃れる。『小右記』九月十六日条
承保二年	1077	三条烏丸周辺で火災が発生するが、六角堂は類焼を逃れる。このため源俊房が六角堂で諷誦を修する。『水左記』十月六日条；『扶桑略記』同日条
永久五年	1117	三条烏丸周辺で火災が発生するが、六角堂は類焼を逃れる。『殿略』十月二十九
天治二年	1125	六角堂焼亡。『百錬抄』十二月五日条；『中右記』同日条
康治二年	1143	六角堂焼亡。『本朝世紀』十二月八日条
建久四年	1193	六角堂焼亡。『百錬抄』十二月七日条；『玉葉』同日条
建久五年	1194	六角堂上棟し，貴賤を問わず結縁する。『百錬抄』六月十三日条
建仁元年	1201	六角堂焼亡。『猪隈関白記』十一月六日条
承元元年	1207	六角堂焼亡。『明月記』四月五日条
建保元年	1213	六角堂焼亡。『明月記』十月十五日条
建保三年	1215	六角堂焼亡。『仁和寺日次記』十二月二十二日条
寛元四年	1246	六角堂焼亡。『葉黄記』六月六日条
建長元年	1249	六角堂焼亡。『一代要記』三月二十三日条
文永五年	1268	六角堂焼亡。『続史愚抄』正月二十四日条
文永十年	1271	六角堂棟上げ。『吉続記』八月十二日条
文永十年	1271	十一月十一日六角堂本尊遷座。『康富記』文安四年六月十八日条
永徳二年	1382	六角堂内阿弥陀堂・太子堂焼亡。『続史愚抄』閏正月二十六日条
応永三十三年	1426	中京焼亡。六角堂は延焼を逃れる。『満済准后日記』正月十五日条
永享六年	1434	中京焼亡。因幡堂・万寿寺焼亡するが、六角堂は延焼を逃れる。『看聞御記』二月十四日条
永享六年	1434	六角堂焼亡。『満済准后日記』三月十九日条；『看聞御記』同日条；『京城万寿禅寺』同日条
永享八年	1436	六角堂立柱。『看聞御記』六月二十七日条
文安四年	1447	六角堂再建。『康富記』五月六日条
文安四年	1447	六角堂本尊遷座。『康富記』六月十八日条
応仁元年	1467	下京焼亡（六角堂焼亡か。）『後法興院記』八月条
文明四年	1472	六角堂本尊遷座『親長卿記』十六年三月十九日条
永正六年	1509	六角堂鐘の鋳造のための勧進帳を任芸の請により三条西実隆が清書する。『実隆公記』二月四日・十四日・二十一日条
永正六年	1509	六角堂の鐘が鋳造される。『実隆公記』八月二十二日条
元和元年	1615	六角堂焼亡。『京都坊目誌』（『京都叢書』所収）下京第4学区
元和四年	1618	六角堂焼亡。『時慶卿記』八月六日・七日条；『梵舜日記』同月八日条
寛永十八年	1641	六角堂再建。
宝永五年	1708	六角堂焼亡。『続史愚抄』三月八日条
享保十三年	1728	六角堂再建。
天明八年	1788	六角堂焼亡。『大島直良日記』正月三十日条
元治元年	1864	禁門の変による大火のため六角堂焼亡。『竹内新之丞家文書「明治兵乱之記」』八月十九日条
明治十年	1877	六角堂再建

平安時代の六角堂は貴賤が盛んに参詣する寺院である。これは11世紀には既に始まっており，12世紀太子信仰および観音信仰の隆盛に伴って六角堂はますます多くの人の尊崇するところとなった。聖徳太子の六角堂創建を記した『六角堂縁起』が成立するのは11世紀のことである。また，観音信仰の流行とともに三ヶ寺，七ヶ寺（七観音），十ヶ寺（十観音）詣でが成立するが，そのなかには常時六角堂は含まれていた。治承二年（1178）には高倉天皇中宮徳子が六角堂に如意輪観音像を造進している。参詣ばかりでなく寄進もあった。

なお平安時代には天治元年（1125）十二月と康治二年（1143）十二月の2度火災により焼失している。康治二年被災後再建された六角堂について『寺門高僧記』に「九間南向，本尊如意輪三尺金銅，願主聖徳太子［或記云，金剛，三寸如意輪］」と記載がある。この建物は，後世の絵画史料を参考とすれば六角堂を覆う覆屋と解釈される。

鎌倉時代の六角堂もたびたび火災により焼失した。鎌倉時代の間でも8度，ほぼ8年に1度の割合で焼失し，その度に再建されている。焼失の多さばかりでなく，その再建の速さも驚くべきである。これも民間の信仰を集めていた証左であろう。再建について具体的に分かる事例は少ないが，建久四年（1193）焼失後の再建については建久五年に（『百錬抄』），文永五年（1268）正月焼失後の再建については文永十年に棟上げが行われたことが分かっている（『吉続記』）。

このころ六角堂は比叡山延暦寺の末寺になった。『天台座主記』によれば建保六年（1218）九月に延暦寺僧が

強訴をした際に延暦寺末寺社が閉門している。そのなかに六角堂は含まれておりこの時までには延暦寺の末寺に連なっていたことがわかる。こうした記事はこの後室町時代にも散見される。建仁元年（1201）親鸞が参篭し聖徳太子の夢告を得た有名な逸話があるが，その背景には延暦寺末寺としての関係が推測されている。

室町時代の六角堂は永徳二年（1382）閏正月，永亨六年（1434）三月，応仁元年（1467）八月の3回火災に遭っている。永徳二年の火災は『続史愚抄』に「六角堂内阿弥陀堂太子堂等火，」とある。本堂以外の堂が存在したことを示す史料にもなっている。永亨六年の焼失後の再建については文安四年（1447）に「地下人商売之徳人」が夢想之告により出資しそれで本堂が完成し本尊を運び込むことができたという。応仁元年の火災は応仁・文明の乱に伴う火災である。文明四年（1472）に本尊を遷座したことが史料中に出てくる。この年本堂が完成したと推測される。

六角堂と池坊の関係はこのころから判明する。池坊家は代々六角堂の執行職を務めた家であったが，文明年間に専慶がでて以来池坊家は「華之上手」として有名になった。天文十一年専応が『専応口伝』を著し，華道として成立した。池坊家の華道の家元が現在に至るまで六角堂の住職を務めている。

また六角堂は下京の中心としての役割を果たすようになった。天文元年（1532）に一向一揆が山崎で細川の軍勢を打ち破り，京都に入ろうとした際に，下京の町衆は六角堂の鐘を打ち鳴らし参集したという。上京では革堂，下京では六角堂がこのような中心となる施設であった。

江戸時代の六角堂は元和元年（1615），元和四年（1618），宝永五年（1708），天明八年（1788），元治元年（1864）の5度火災に遭っている。このうち元和元年の火災では本堂は焼けていないらしい。しかし，かなり傷みが進んでいたようで元和四年までにたびたび補修を受けている。元和四年の火災では本堂が焼失し，寛永十八年（1641）に再建されている。宝永五年，天明八年，元治元年の火災はいずれも京都の大火災に伴うものである。宝永五年の火災後，享保十三年（1728）に再建されている。元治元年の火災は禁門の変に伴う火災である。再建は明治十年（1877）である。近世初頭に整備された西国三十三ヶ所巡礼はやがて流行し，六角堂はその二十九番札所としても参詣客を集めるようになった。そしてそれは現在まで続いている。また，華道家元の所在地であり，池坊家の華道家元が代々住職を務めている。

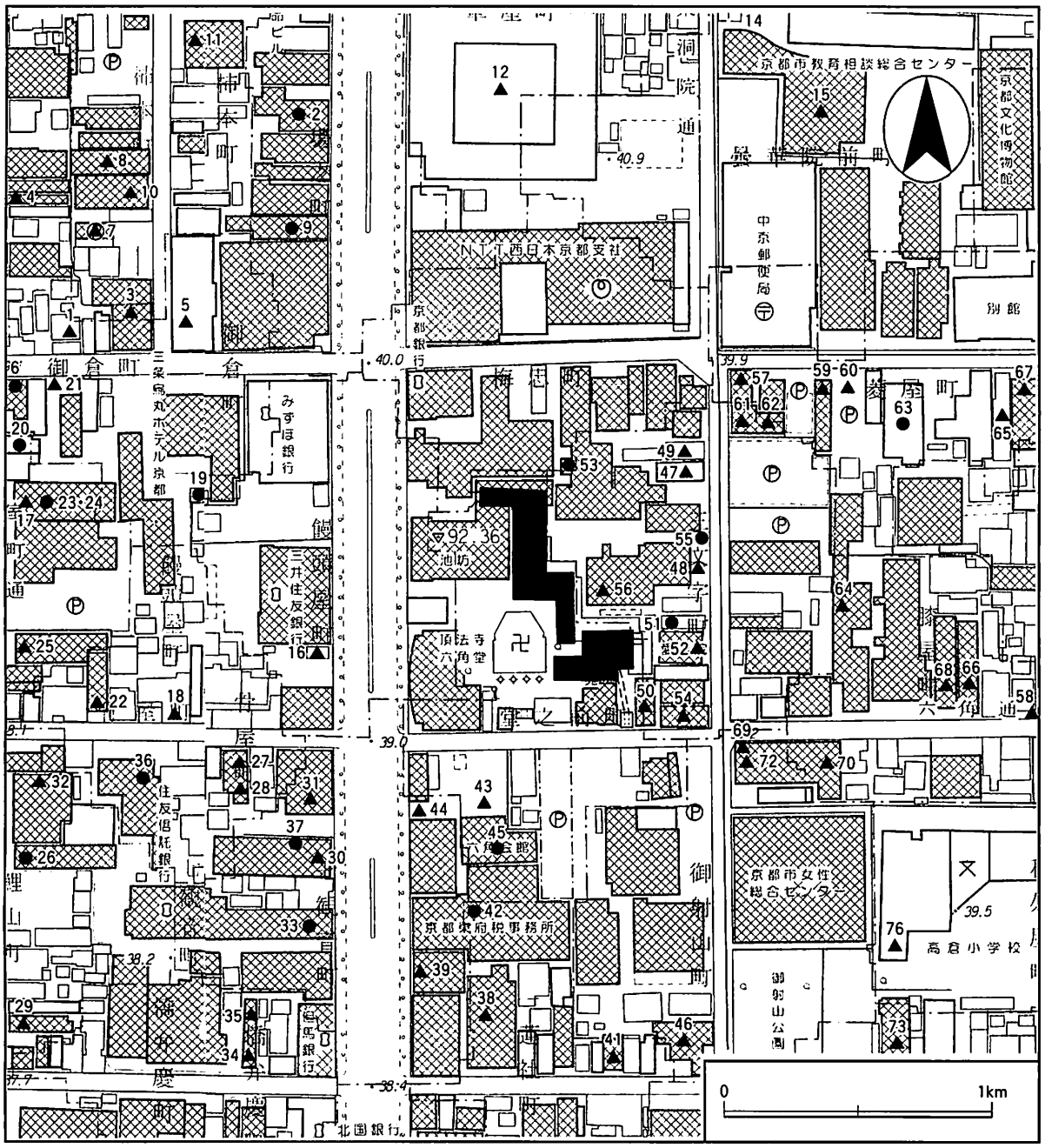
（3）六角堂境内周辺における発掘調査成果

六角堂が所在する平安京左京四条三坊十六町の調査事例について説明する。この区域についてこれまでに発掘調査は6回，試掘調査3回，立会調査7回行われている（第3・5図，第3表参照）。この他，周囲の町についても調査は多数行われている。この結果，六角堂の四至と周辺の宅地の状況とその変遷がかなり明らかにされてきている。

まず六角堂についてであるが，発掘調査がすでに2度古代学協会により行われている。

第1次調査は昭和49年10月から昭和50年6月に頂法寺会館建設に先だって行われた[註39]。六角堂境内の北西部の約530㎡である（第3図1）。焼土層が確認され，そのうち宝永五年，天明八年，元治元年の火災に関わる焼土層をほぼ特定することができた。そして元治元年焼失の旧池坊邸跡と考えられる幕末の礎石建物および池，井戸，天明八年焼失と考えられる江戸後期の建物跡と庭園跡，宝永五年焼失の建物の礎石，庭園跡，江戸前期の礎石，石組遺構，竈跡，暗渠跡，平安時代から室町時代にかけての土坑，平安後期から室町時代前半の東西溝を確認した。東西溝は幅1.2m，深さ50㎝の断面U字形の溝で，六角堂の北限を区画する溝と考えられた。なおこの溝は北三門と北四門の境界線上に位置する。

第2次調査は昭和52年6月20日から7月10日に頂法寺宿泊施設池坊花心苑の建設に先立って行われた[註40]。調査区域は六角堂境内の南東部の60㎡である（第3図2）。第1次調査と同じく江戸時代の火災に伴う層を確認したほか，溝1条，土坑4基，柱穴5基を確認した。柱穴は六角小路北側築地に伴う遺構，溝は東西溝でこの築地のうち溝と推測された。また平安末から鎌倉期の土坑1基確認され，土器類，瓦類がまとまって出土した。ほかは室町後期，あるいは近世初頭の土坑である。



第5図　周辺の発掘調査地位置図（1/2500）
（●：試掘調査，▲：立会調査。番号は第3表と対応する。）

十六町内六角堂の周辺では4ヶ所で発掘調査が行われている。六角堂北では平安京左京三条四坊跡発掘調査団（代表：江谷寛）により2ヶ所発掘調査が行われているが未報告で詳細はわからない（第3図5・6）。西四行北一門から北二門に相当する地区の調査において三条大路の南側溝が確認されているという（第3図5）。また江戸時代初頭の大般若経転読札が出土している[註41]。また西二行から西三行で北二門に相当する地区の調査では西二行と西三行の境界にあたるところで小道が検出されているという[註42]（第3図6）。六角堂西では地下鉄烏丸線建設に伴う発掘調査で，西一行北八門において平安後期の六角小路道路敷と北側溝，土坑群が確認されている[註43]（第3図8）。六角堂東では京都市埋蔵文化財研究所により1ヶ所発掘調査が行われている[註44]。西四行北四門から北五門に相当する地区である（第3図7）。ここでは平安後期の井戸，室町時代の塀跡・門跡が確認されている。

註

(１)第１節について，以下の文献を参照した。
石田志郎「京都盆地北部の扇状地―平安京遷都時の京都の地勢―」(「古代文化」第34巻第12号掲載，京都，昭和57年)；横山卓雄「平安遷都と鴨川つけかえ」(八幡，昭和63年)；同「第二章　京都盆地の自然環境」((財) 古代學協會・古代學研究所編「平安京提要」所収，京都，平成６年)。

(２)鈴木廣司・網　伸也編「平安京右京三条二坊十六町」(「京都市埋蔵文化財研究所調査報告」第21冊，京都，平成14年)。

(３)寺島孝一・松井忠春編「東洞院大路・曇華院跡　中京郵便局新築敷地埋蔵文化財発掘調査報告」(京都，昭和52年)。

(４)植山　茂・山田邦和「高倉宮・曇華院跡第４次調査」((財) 古代學協會「平安京跡研究調査報告」第18輯，京都，昭和62年)。

(５)植山　茂・山田邦和・南　博史編「平安京左京三条四坊四町」(「京都文化博物館 (仮称) 調査研究報告」第２集，京都，昭和63年)。

(６)山本雅和「平安京左京四条四坊」((財) 京都市埋蔵文化財研究所「平成２年度京都市埋蔵文化財調査概要」所収，京都，平成６年)。

(７)山本雅和「平安京左京三条三坊十町 (押小路殿・二条殿)」((財) 京都市埋蔵文化財研究所「京都市埋蔵文化財概報」2002－７，京都，平成14年)。

(８)小森俊寛・上村憲章・原山充志・長戸満男「平安京左京三条四坊」((財) 京都市埋蔵文化財研究所「平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要」所収，京都，平成６年)。

(９)小森俊寛「平安京左京三条一・二・四坊」((財) 京都市埋蔵文化財研究所「平成４年度京都市埋蔵文化財調査概要」所収，京都，平成７年)。

(10)小森俊寛・上村憲章「平安京左京三条四坊」((財) 京都市埋蔵文化財研究所「平成５年度京都市埋蔵文化財調査概要」所収，京都，平成８年)。

(11)小森俊寛・原山充志「平安京左京四条三坊１」((財) 京都市埋蔵文化財研究所「平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要」所収，京都，平成６年)。

(12)前掲註６山本報告。

(13)山本雅和・鈴木廣司「平安京左京四条四坊」((財) 京都市埋蔵文化財研究所「平成５年度京都市埋蔵文化財調査概要」所収，京都，平成８年)。

(14)伊藤淳史「京都盆地の弥生時代遺跡」(「京都大学構内遺跡調査研究年報　1992年度」所収，京都，平成７年)。

(15)前掲註７山本報告。

(16)前掲註９小森報告。

(17)前掲註10小森・上村報告。

(18)小森俊寛・上村憲章「平安京左京三条四坊」((財) 京都市埋蔵文化財研究所「平成７年度京都市埋蔵文化財調査概要」所収，京都，平成11年)。

(19)(財) 京都市埋蔵文化財研究所「平安京左京三条四坊十町　発掘調査現地説明会資料」(京都，平成15年)；尾藤徳行「平安京左京三条四坊十町跡」((財) 京都市埋蔵文化財研究所「京都市埋蔵文化財概報」2004－４，京都，平成16年)。

(20)古代文化調査会「平安京左京三条四坊十一町―コスモシティ御池富小路新築に伴う発掘調査―」(神戸，平成14年)。

(21)古代文化調査会「平安京左京三条四坊五町―メロディーハイム堺町新築に伴う調査―」(神戸，平成13年)。

(22)前掲註11小森・原山報告。

(23)前掲註６山本報告。

(24)前掲註13山本・鈴木報告。

(25)前掲註10小森・上村報告。

(26)前掲註６山本報告。

(27)前掲註13山本・鈴木報告。

(28)縄文時代については千葉豊「京都盆地縄文時代遺跡地名表」(「先史時代の北白川」〔「京都大学文学部博物館図録」第４冊〕所収，京都，平成３年)；同「京都盆地の縄文時代遺跡」(「京都大学構内遺跡調査研究年報　1989～1991年度」所収，京都，平成５年) を，弥生時代については伊藤淳史「山城地域における弥生集落の動態」(「みずほ」第23号掲載，奈良県田原本町，平成12年) および前掲註14伊藤論文を，また旧石器時代から奈良時代を通じて高橋潔「平安京造営前の遺跡―平安京域における下層遺跡の検討―」(「田辺昭三先生古稀記念論文集」所収，京都，平成14年) を参照した。

(29)前掲註28千葉論文。

(30)前掲註14伊藤論文；前掲註28伊藤論文。

(31)梶川敏夫「平安京跡で見つかった古墳」(「京都市文化財だより」第28号，京都，平成９年)。

(32)前掲註28高橋論文。
(33)金田章裕『郡・条里・交通路』((財) 古代學協會・古代學研究所編『平安京提要』所収，京都，平成6年)。
(34)前掲註33金田論文。
(35)山路興造『集落と神社』((財) 古代學協會・古代學研究所編『平安京提要』所収，京都，平成6年)。
(36)岸俊男『日本古代文物の研究』(東京，昭和63年)。
(37)前掲註35山路論文。
(38)角田文衛『愛宕郷と山代国造家』(『古代文化』第27巻第10号掲載，京都，昭和50年)；前掲註35山路論文。
(39)甲元真之編『平安京六角堂の発掘調査』((財) 古代學協會『平安京跡研究調査報告』第2輯，京都，昭和52年)。
(40)佐々木英夫・松井忠春『平安京六角堂跡第2次発掘調査概報』(京都，昭和55年)。
(41)江谷寛先生御教示。
(42)江谷寛先生御教示。
(43)烏丸線内遺跡№66地点。大矢義明・小森俊寛・永田信一ほか『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅲ1977～1981年度(京都，昭和57年)。
(44)小森俊寛・上村憲章『平安京左京四条三坊』(『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』所収，京都，平成元年)。

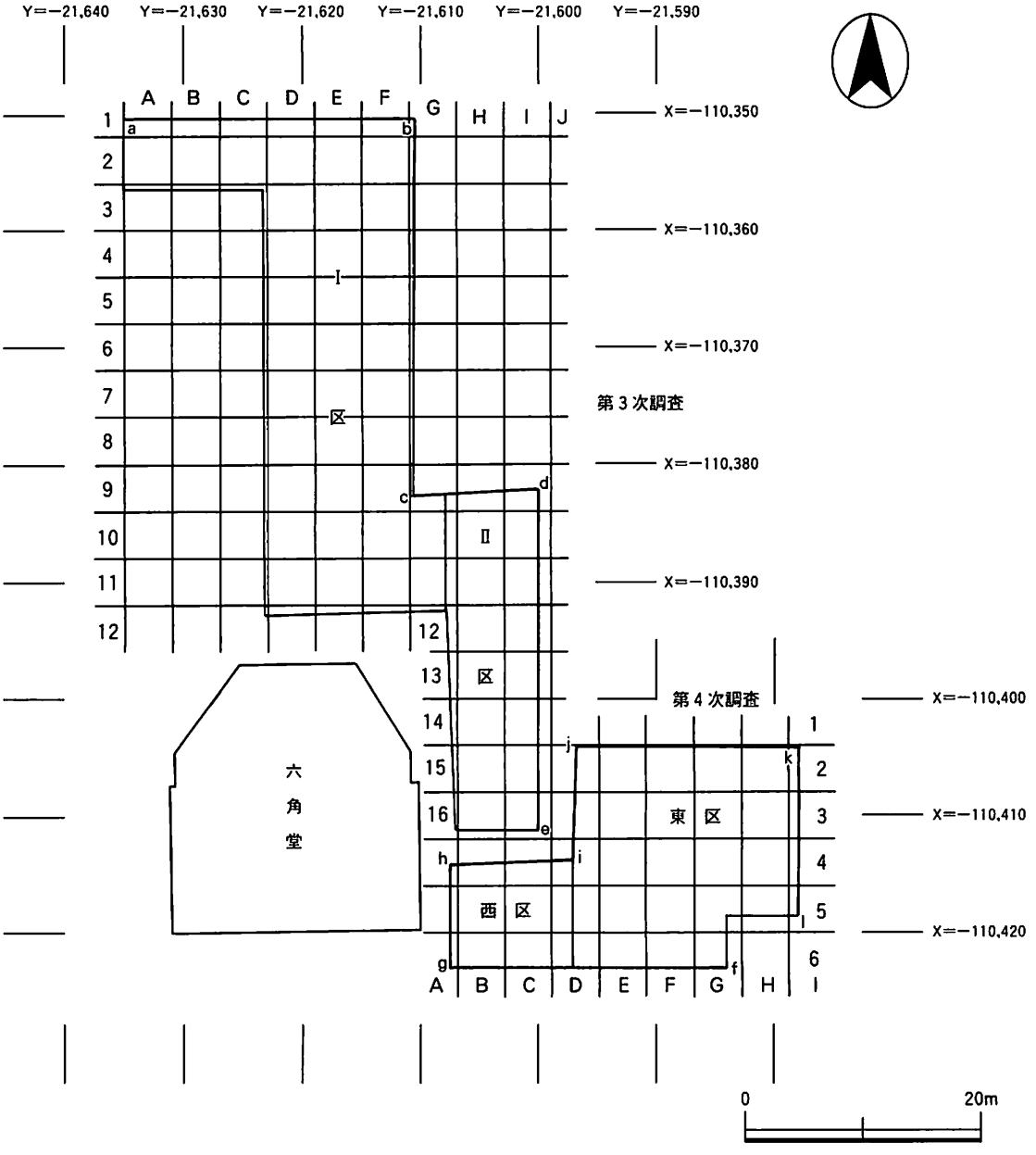
図註

第2図：京都市文化市民局文化部埋蔵文化財センター『京都市遺跡地図』(京都，平成15年) に加筆。
第3図：平成10年測量京都市1/1000都市計画図に加筆した
第4図：前掲註1石田論文第3図を縮小・再トレースの上，調査地の位置を加筆した。
第5図：京都市都市計画局作成平成10年測量京都市1/2500都市計画図に加筆した。

第２章　調査の経過

第１節　発掘にいたる経緯

平成５年に宗教法人頂法寺は池坊会館の増改築工事を計画した。これを京都市に申請したところ，京都市埋蔵文化財センターより建設に先だって発掘調査を行うよう指示があった。このため宗教法人頂法寺はこの発掘調査を財團法人古代學協會・古代學研究所に依頼した。古代學協會では京都市埋蔵文化財センターと工事の主体となる鹿島建設とを交えて，数度協議した結果，これを受託することとした。計画では発掘調査は２回に分けることとし，１回目の発掘調査，すなわち六角堂第３次調査は平成６年５月開始，２回目，すなわち六角堂第４次調査は平成７年度に行うこととなった。



第６図　グリッドの配置と断面図の位置（1/2000）
（ａ～ｌは第９・10図及び第44・45図と対応する。）

六角堂第3次調査は平成6年5月に準備を始めた。5月10日に宗教法人頂法寺との間で契約書締結，京都市埋蔵文化財センターへ関係書類の提出を行った。そして5月16日より発掘調査を開始した。

六角堂第4次調査は平成7年12月に準備を始めた。12月に発掘調査対象地にある建物を工事主体の鹿島が解体した。翌平成8年1月11日に古代學協會と宗教法人頂法寺との間で契約書締結，京都市埋蔵文化財センターへ関係書類を提出した。そして1月16日より発掘調査を開始した。

第2節　調査地と調査区

第3次調査の対象地は六角堂境内の住心院と太子堂のあった場所で，六角堂境内の北部から北東部にかけての地区である。面積は約800㎡である。発掘調査区は面的にはクランク状を呈するが，建設工事の都合上，東西にこれを2つの地区に分けて掘削せざるをえなかった。こうして分けられた地区を便宜的に西をⅠ区，東をⅡ区とする。また，Ⅰ区・Ⅱ区を合わせた調査区全体に，平面直角座標系第Ⅵ系の座標にあわせた4m四方のグリッドを設定した。そして東西方向をA～Iまで，南北方向に1～16までの名称を付し，各グリッドの名称はこれらアルファベットとアラビア数字の組み合わせで示すこととした（第6図）。

第4次調査は住心院の南端の一部と六角堂に隣接する愛染院の場所に当たり，六角堂の東に隣接する（図版89）。面積は約500㎡である。発掘調査区は面的に北東隅を欠く長方形である。かけた部分とそうでない部分とで東西にわけて，便宜的に東区，西区とした。また，この調査でも東区・西区を合わせた調査区全体に，平面直角座標系第Ⅵ系の座標にあわせた4m四方のグリッドを設定した。そして第3次調査とは別に，新たに東西方向をA～Iまで，南北方向に1～6までの名称を付し，各グリッドの名称はこれらアルファベットとアラビア数字の組み合わせで示すこととした（第6図）。

第3節　発掘調査体制

発掘調査の体制は以下の通りである。

第3次調査

調査主任：江谷　寛（財團法人古代學協會・古代學研究所教授）

調査員：西田泰民（当時財團法人古代學協會・古代學研究所助手，現新潟県立歴史博物館学芸員）

　　前川佳代（当時財團法人古代學協會・古代學研究所嘱託，現京都造形芸術大学講師）

調査補助員：浜田竜彦，嘉幡　茂，龍野和也，渡辺直哉，黒崎　充，池田和歌子

現場委託作業員：橋本組，株式会社リンク

基準点移設：（財）京都市埋蔵文化財研究所

写真測量：日開調査設計コンサルタント株式会社

整理作業員：下村順子，千喜良淳，土　静江，西村典子，美濃久子，山田喜代子

第4次調査

調査主任：江谷　寛（財團法人古代學協會・古代學研究所教授）

調査員：桐山秀穂（当時財團法人古代學協會・古代學研究所嘱託，現同助手）

調査補助員：嘉幡　茂，井上宗嗣

現場委託作業員：株式会社リンク

基準点移設：（財）京都市埋蔵文化財研究所

写真測量：日開調査設計コンサルタント株式会社

整理作業員：下村順子，土　静江，西村典子，美濃久子，山田喜代子

第４節　発掘経過

第３次調査

平成６年５月23日に開始し，９月９日に終了した。５月23日から重機により表土剥ぎを行った。５月30日より遺構検出を行い，５月31日より遺構検出に併行して掘り下げを開始した。８月30日に全景写真の撮影と写真測量を行った。９月９日には現場の作業を終了し，同日撤収した。調査面積は約800㎡である。

整理作業は発掘調査終了直後より翌平成７年４月までに，遺構図面の整理及びレイアウト，遺物の洗浄･復元･注記・抽出・実測までを行った。報告書の作成については第４次調査の成果と合わせて報告するため，それまで待つこととなった。

第４次調査

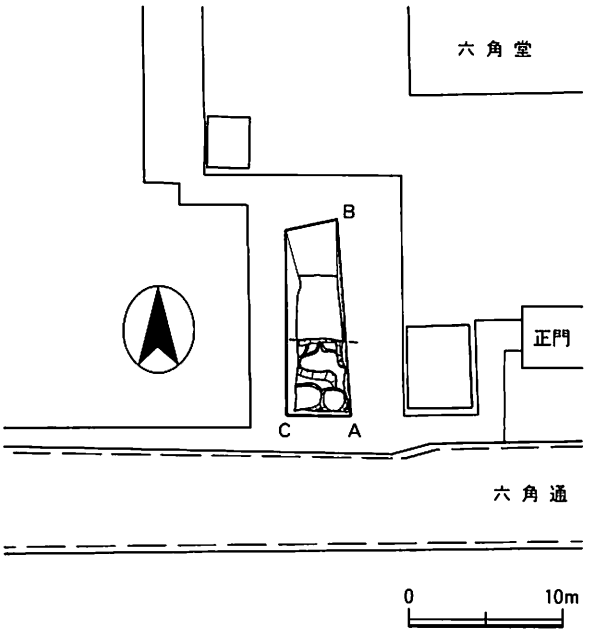
平成８年１月16日に開始し，同年３月２日に終了した。１月16日から18日に南側通路部で試掘調査を実施した。重機により長さ８ｍ，幅2.5ｍのトレンチを一本設定し掘り下げ，断面の観察を行った。実測後埋め戻した。引き続き１月22日から本調査を行う。22日から30日に重機による表土剥ぎを行う。ここでは後述の第５層までを重機により掘削した。１月23日より遺構検出を開始し，24日より併行して遺構の掘り下げを開始した。東区については２月７日までに第６層上面の遺構の精査・実測を終了し，２月８日と12日に重機を入れて第６層の掘り下げを行った。そして13日より遺構の検出･掘り下げを再開した。２月28日に全景写真の撮影と写真測量を行った。３月２日には現場の作業を終了し，同日撤収した。調査面積は約500㎡である。

整理作業は平成８年４月より開始し，平成９年３月にいったん終了した。遺構図面の整理及びレイアウト，遺物の洗浄・復元・注記・抽出・実測までを行った。

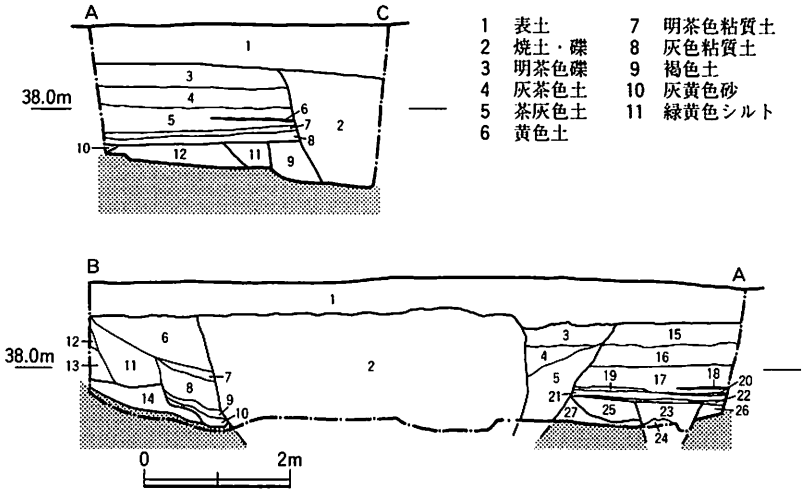
そして平成17年１月に再開し，平成17年度末までに第３次・第４次調査の報告書を刊行することとなった。

第3章　第3次調査試掘調査

第3次調査の本調査に先立って試掘調査を行った。位置は六角堂境内の南西部，現在のウェスト18ビルの立っているところである。長さ9m，幅3.8mのトレンチを設定し，重機により地山面まで掘り下げて，地山面上の遺構と断面観察による土層の堆積状況の確認を行った（第7・8図）。その結果，地山面は地表面より1.9mの深さで確認した。そして地表面から1.7m下までは天明の大火以降の焼土層および盛土層で，その下地山面までは平安時代の包含層を江戸時代前期の遺構が多数切っている状況であった。地山面上における遺構はトレンチ南部に1基の落ち込みとその中に6基の土坑を確認した。トレンチ中央部はまず元治元年大火時の大きな瓦溜が地山面にまで達しており，地山面上の遺構は確認できなかった。落ち込みと土坑はいずれも瓦溜に切られており，またこれらの遺構は出土遺物から江戸時代前期・中期の遺構である。これ以前については，トレンチ南端部に一部平安時代と推測される包含層が小さく残っていたほか，遺構については確認できなかった。出土遺物は少量のての字状口縁の土師器皿が出土したほか，江戸時代以降の土師器皿，陶磁器類，瓦などである。



第7図　第3次調査試掘トレンチ平面図（1/500）



第8図　第3次調査試掘トレンチ断面図（1/100）

第４章　第３次調査の層序と遺構

第１節　層序の概要

基本土層の観察はⅠ区・Ⅱ区それぞれの北壁・東壁にて行った（第９・10図）。今回の調査では平安～室町時代の堆積層は認められずほとんど同一面から遺構が掘り込まれていた。室町時代後半に１度整地がなされており，その層が存在する。そして江戸時代以降については焼亡するごとに整地がなされ，それも土層として確認した。江戸時代の土層については既に第１次調査に確認されており今回の調査はそれをほぼ追認している。

基本層序は７層に分けられる。

Ⅰ層：表土層である。

明治十年の再建の整地層である。コンクリート・バラスなどを含み若干の攪乱を受けている。

Ⅱ層：江戸時代末の元治元年（1864）焼失時の整地層及び遺構埋土である。第１次調査の第１焼土層を含む。

焼土，瓦を多量に含む。

Ⅲ層：江戸時代後期の天明八年（1788）焼失時の整地層及び遺構埋土である。第１次調査の第２焼土層を含む。

これは厚さ30cmほどの焼土を含む層と含まない層が，南から北に向かって低くなるように傾斜して，交互に堆積している状況が見て取れる。南から北に向かって整地がなされたことがわかる。

Ⅳ層：江戸時代中期の宝永五年（1708）焼失時の整地層及び遺構埋土である。第１次調査の第３焼土層を含む。

Ⅴ層：褐色土層。江戸時代前期の元和四年（1618）焼失時の整地層である。第１次調査の第４焼土層と対応する。焼土を含むがそれ程多くない。

Ⅵ層：灰褐色土層。室町時代後半の整地層である。調査区の大半において遺構に破壊されており，遺構の間にわずかに残っていた。第１次調査の第５焼土層に対応する。瓦は多量に含むが，焼土は多くない。

Ⅶ層：黄褐色土層。地山である。

第２節　遺構の概要

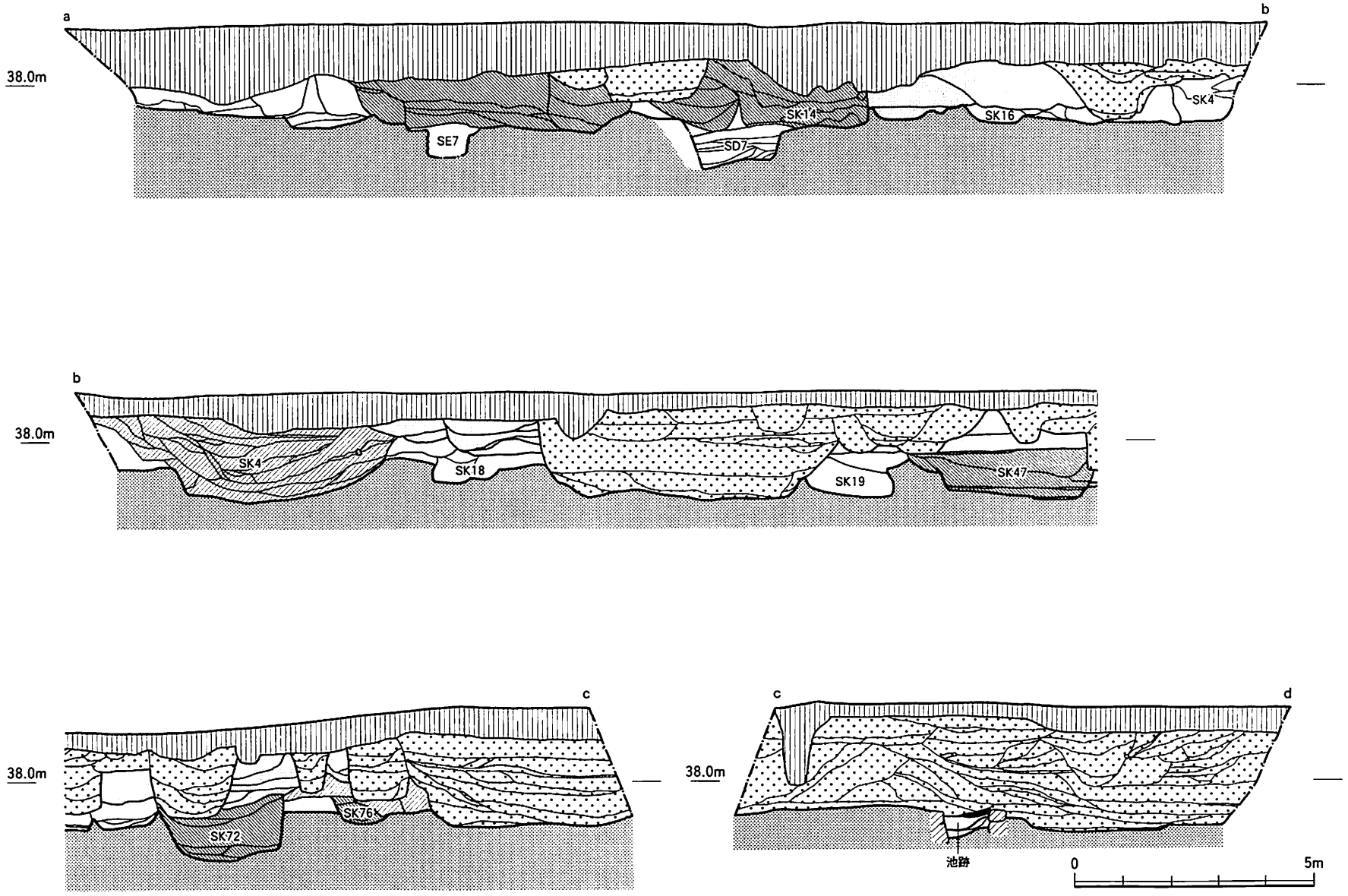
今回の調査で発見された遺構は江戸時代太子堂の遺構のほか，塀２条，井戸16基，溝13条（Ⅰ区７条，Ⅱ区６条），土坑150基（Ⅰ区138基，Ⅱ区12基）である（図版１・81・82）。予算と期間が限られた調査であったため，重機によってⅥ層上面まで掘削し，その面で遺構の検出と精査を行った。Ⅵ層は遺構の掘り下げの中で，人力により掘り下げた。遺構の概要はⅥ層上面での状況である。なお，遺構番号についてⅠ区とⅡ区とではオーダーを別にして番号を振った。したがって例えばＳＫ01はⅠ区にもⅡ区にも存在する。報告ではⅡ区の遺構にのみ，Ⅱ区ＳＫ１のように，「Ⅱ区」を冠して表記することにする。

遺構は大きく４時期に区分できる。江戸時代，鎌倉時代～室町時代，平安時代，縄文・弥生時代である。

江戸時代の遺構にはⅠ区で塀２条，井戸７基，土坑43基，Ⅱ区で太子堂遺構と土坑５基がある。

Ⅰ区では中央やや南よりに東西方向の塀ＳＡ１が見つかっている。そしてこれより北側に井戸の多くが分布している。また，塀の北側に，塀と平行に土坑が特に集中し並んで形成されているが，これはごみ廃棄用の土坑であろう。また土坑についてこのほかは調査区全体に分布しているが，いずれも２次焼成を受けた遺物や炭，焼土を含むことから大火に関わるごみ廃棄用の土坑である。土坑についてはこのうちＳＫ６，ＳＫ７，ＳＫ72，ＳＫ113の４基を取り上げ，次節で詳説する。

太子堂の遺構はⅡ区の北半部に位置する。太子堂と考えられる建物跡と池跡，橋跡から構成される。建物跡は建物全体の東南部を中心に検出したが，後世の遺構により攪乱されており残存状況が極めてよくない。柱穴が



第9図　第3次調査調査区断面図1（1/120）

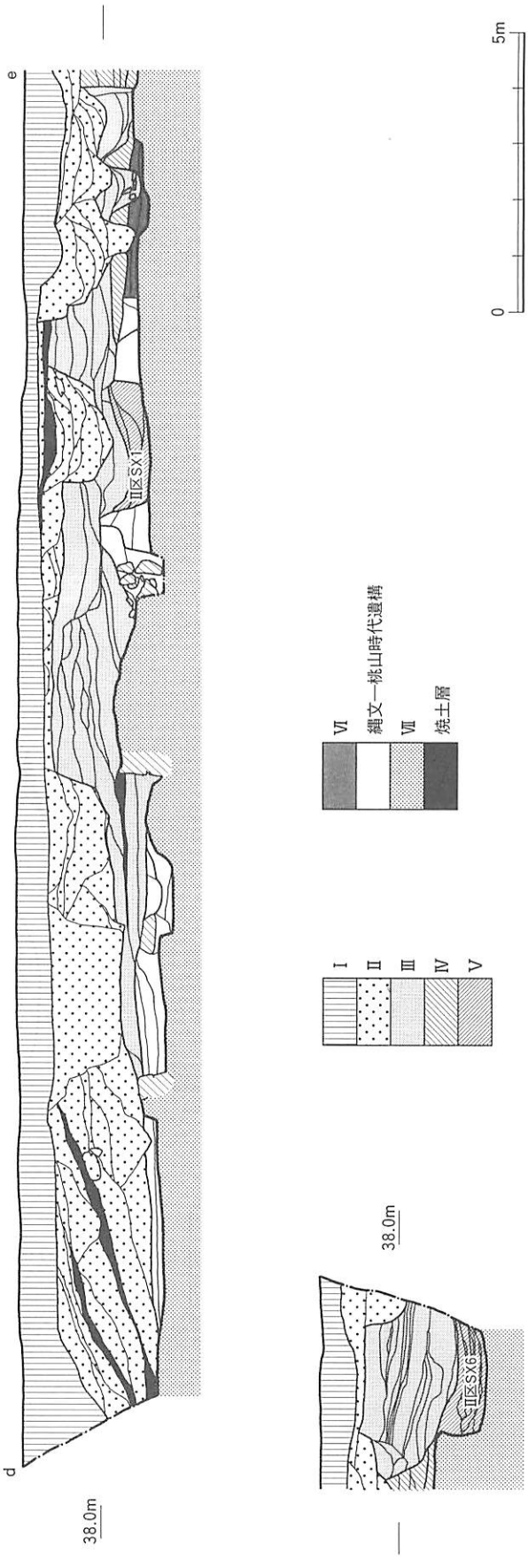
２，３認められる程度である。その建物の東西と南の三方に絵画史料によれば池が巡っているが，建物の西から南にかけての池跡を検出した。そして絵画史料では，その池には太子堂に渡る橋が掛かっていたが，調査では橋に向かうアプローチの部分とその橋脚を支える礎石を確認している。この池の南側には少し離れて土坑Ⅱ区ＳＫ６と土坑Ⅱ区ＳＸ１がある。これは太子堂に先行する時期の土器群を出土している。これと重なって南北方向の塀跡Ⅱ区ＳＡ１が見つかっている。切り合い関係からＳＫ６とＳＸ１が古く，ＳＡ１が新しい。このうち第４節では太子堂遺構と塀跡Ⅱ区ＳＡ1，土坑Ⅱ区ＳＫ６，土坑Ⅱ区ＳＸ１について報告する。

鎌倉時代～室町時代の遺構はⅠ区で井戸３基，溝３条，土坑59基がみつかった。溝ＳＤ２・ＳＤ３はⅠ区中央を横断する東西溝である。井戸はⅠ区北部ないし南部に分かれて分布している。土坑もⅠ区内で北部・南部に分かれて分布しているようである。土坑ＳＫ102・ＳＫ109・ＳＫ122の３基について次節報告する。Ⅱ区では溝Ⅱ区ＳＤ４を確認したに留まる。これは太子堂の池の下層で検出した東西溝である。

平安時代の遺構はⅠ区では井戸２基，溝１条，土坑２基がみつかった。いずれも平安時代後期の遺構である。井戸はそれぞれⅠ区の北と南に位置する。溝はⅠ区北端で見つかった南北溝である。土坑について土坑ＳＫ58は土師器皿埋納遺構，土坑ＳＫ129は九州系瓦がまとまって出土した土坑である。いずれもⅠ区北部に分布する。なおⅡ区では平安時代の遺構は見つからなかった。

縄文・弥生時代の遺構は流路ＳＤ６・ＳＤ７がある。流路ＳＤ６はⅠ区北東隅から南流し，Ⅰ区中央部で南西方向へ曲がり西流し調査区外へ抜ける。流路ＳＤ７はⅠ区中央部から南流し，南壁に当たり調査区外へ抜ける。どちらからも縄文土器が出土している。この流路上に土坑が２基ほど確認されたが，いずれも埋没時に現れた湿地状のくぼみである。

以下，遺構の詳細を報告するが，Ⅰ区とⅡ区に分けてすることにする。



第10図　第３次調査調査区断面図２（1/120）

第３節　Ｉ区の遺構

１．平安時代後期の遺構

溝ＳＤ１（第11図）

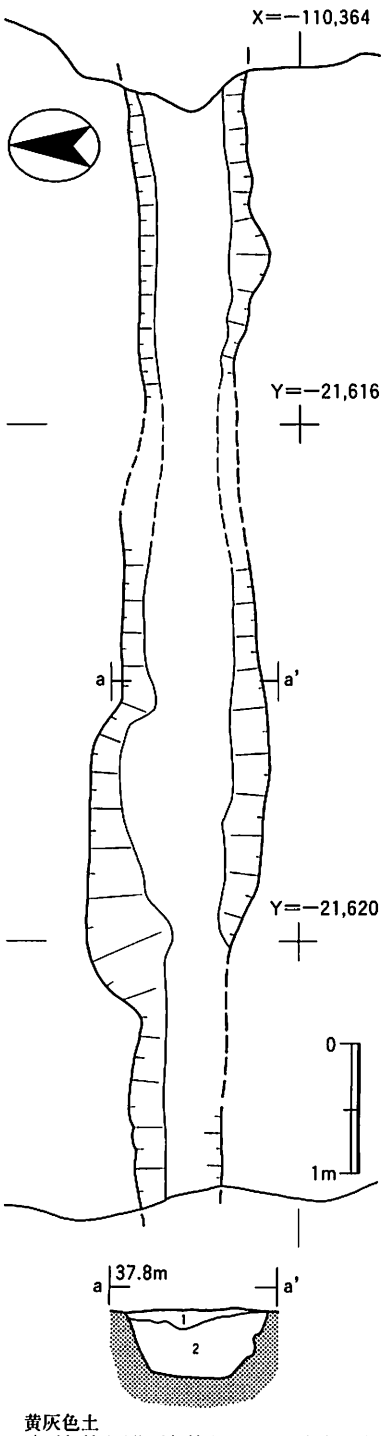
溝ＳＤ１はＩ区中央部，Ｄ４・Ｅ４に位置する東西溝である。所々後世の遺構に切られ全形を留めないが，ほぼ正東西方向に直線的に伸びる溝である。西端は調査区西壁に当たり，調査区外へさらに伸びる。東端も同様に東壁の外へさらに伸び，調査区外へ続く。幅0.7～1.5m，深さ50cmで断面逆台形を呈する。

埋土は２層に大きく分かれる。いずれも埋め戻された土で，機能時の堆積層はよくわからない。

出土遺物には土師器，須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器，瓦器，常滑，白磁，瓦類の破片が出土している。この所属時期は平安時代後期，11世紀末から12世紀後半である。

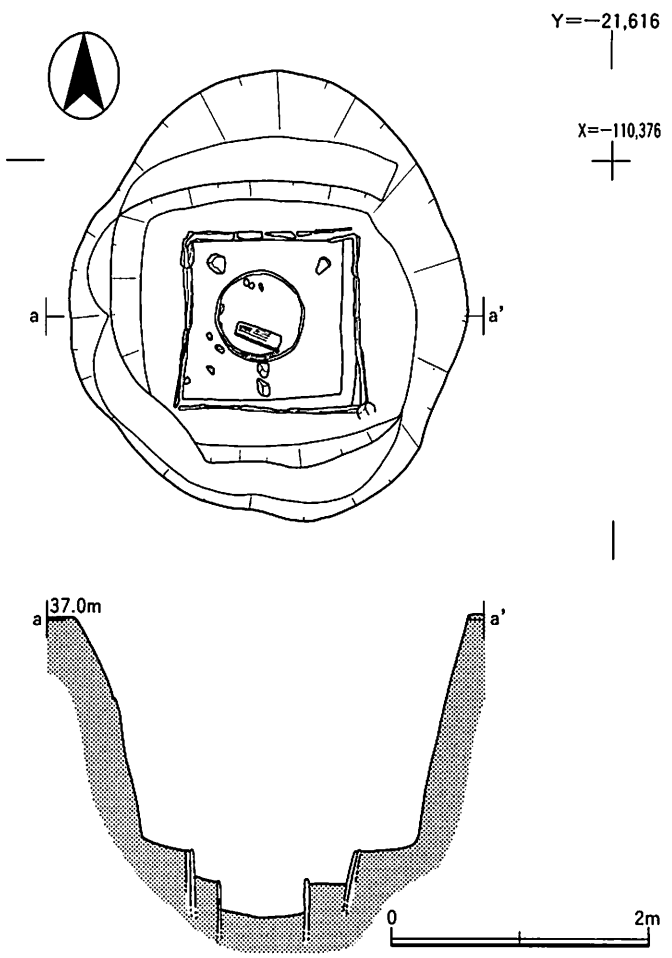
井戸ＳＥ10（第12図，図版83）

井戸ＳＥ10はＩ区中央部，Ｅ８に位置する。掘形は南北3.54m，東西3.1m，深さ2.4m以上を測り，平面形は楕円形を呈する。この底面には１辺1.4～1.5mの方形に木枠が組まれ，その内側が26cmほど掘り込まれている。さらにその中央には直径70cmほどの曲物が埋設されており，その内部がさらに30cm以上掘り込まれている。この埋設された曲物は井戸底の水溜めの施設である。なお木



1　黄灰色土
2　暗灰色粘土（黄灰色粘土ブロックを含む。）

第11図　溝ＳＤ１平面図・断面図（1/30）



第12図　井戸ＳＥ10平面図・断面図（1/30）

枠検出時に木枠内には幅12cmほど，長さ30cmほどの木板の破片がかなり堆積していた。井戸枠を抜き取ったのちに廃棄したものと考えられる。このような状況と井戸底の状況から井戸枠の構造は方形横桟縦板組と推測される。しかし，井戸枠は抜かれ，具体的にはわからない。そして井戸枠が抜かれた後に廃棄物とともに埋められている。

出土遺物には土師器，須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器，白磁がある。遺物の所属時期は10世紀から11世紀であり，井戸は11世紀には埋没したのであろう。

井戸ＳＫ43（第13図，図版84上）

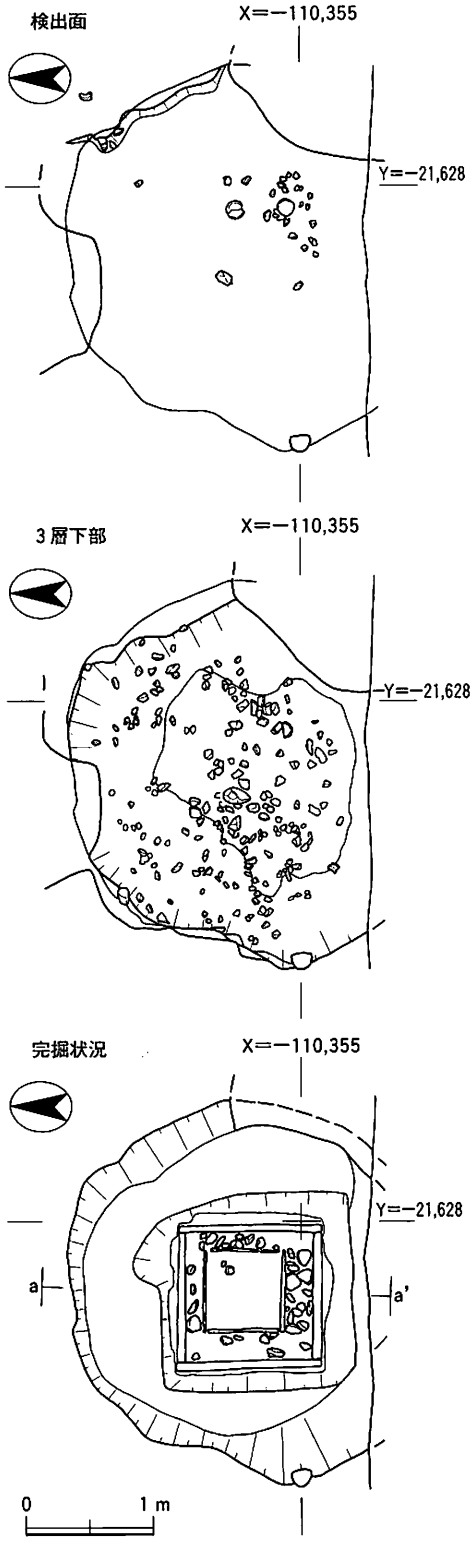
井戸ＳＫ43はＩ区北西部，Ｂ２に位置する。遺物が集中していたため，検出時は土坑として取り扱ったが，遺構の詳細が判明するにつれ，井戸であることがわかった。東側一部を江戸時代の土坑ＳＫ07に切られている。この遺構の南端は調査区南壁より外にあるが，南北2.2mが確認できる。東西は3.01m，深さ2.06mで平面形はほぼ円形を呈する。遺構はまず深さ1.67mまで円筒状に掘り込まれ，この底には井戸底の構造が残存している。底の中央に１辺64cmの方形の木組がなされその中が46cmほど落ち込む。この木組の落込みは井戸の水溜めの施設である。中央の木組の周りには直径10cm前後の礫が敷かれており，その外をさらに１辺1.1mの方形の木組により囲まれている。こうした井戸底の構造から井戸枠の構造は方形横桟縦板組と推測される。しかし，井戸枠は抜かれ，具体的にはわからない。そして井戸枠が抜かれた後に廃棄物とともに埋められている。

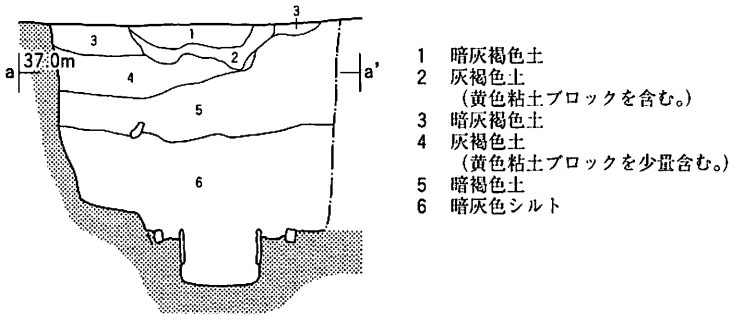
埋土は７層にわかれる。第７層が井戸の機能時の堆積土を一部含んでいると考えられるが，それ以外，第１層から第６層は井戸を埋めた際の埋土である。第１層上面において土師器皿がまとまって出土している。また第３層下部でも礫に混じって土器など遺物が大量に出土している。

出土遺物は土師器など土器類が中心である。土器の所属時期から遺構の時期について埋めたのは，平安時代後期である。

井戸ＳＫ92（第14図，図版85）

井戸ＳＫ92はＩ区南部，Ｆ10に位置する。遺物が集中していたため，検出時は土坑として取り扱ったが，遺構の詳細が判明するにつれ，井戸であることがわかった。この遺構の東側一部

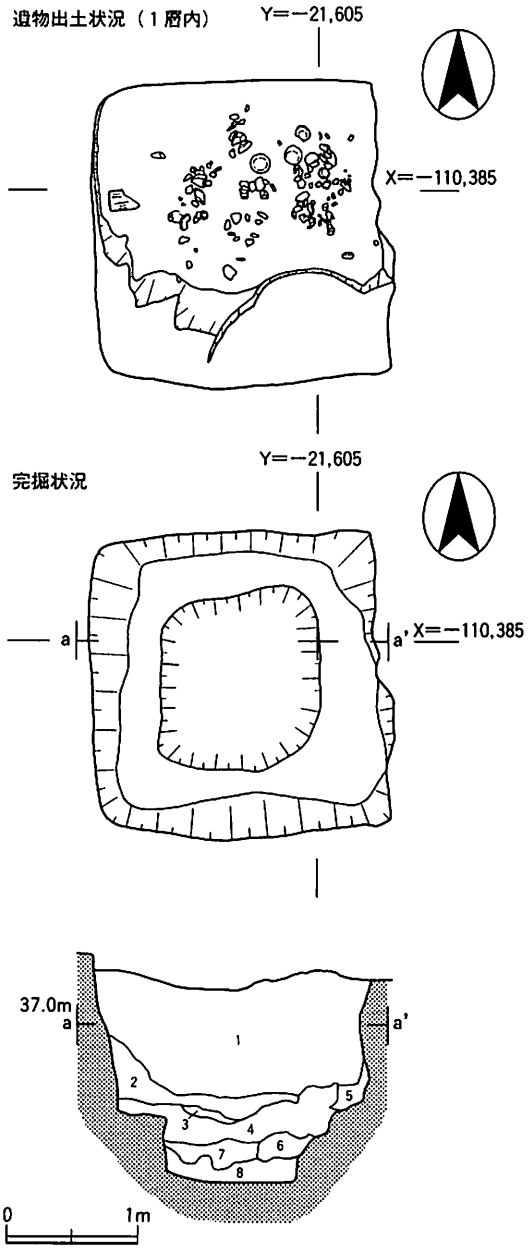




第13図　井戸ＳＫ43平面図・断面図（1/30）

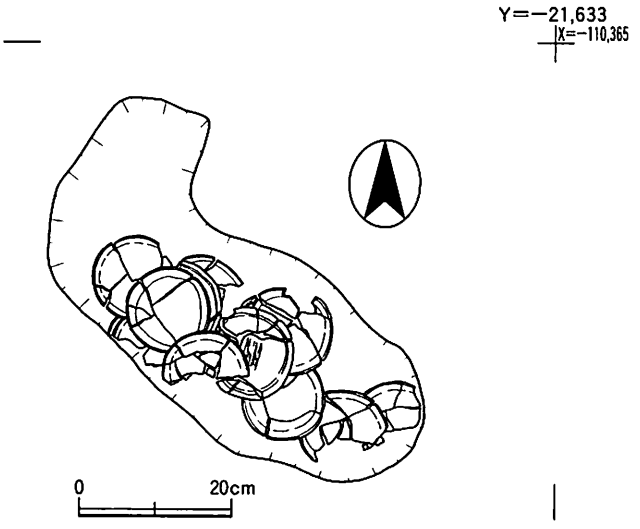
は土坑ＳＫ121に，南側一部を江戸時代の井戸ＳＥ11に切られる。南北2.4m，東西は2.3mで平面形は方形を呈する。深さ1.62m。遺構はまず深さ1.14mまで断面箱状に掘り込まれ，この底の中央にはさらに１辺1.2m，約40cmの方形の掘り込みがある。この掘り込みは井戸の水溜めの施設であろう。木枠など施設の痕跡は検出できなかった。井戸枠や水溜めなどの施設が抜かれた後埋められたと考えられる。しかし具体的にはわからないが，こうした遺存状況から井戸枠の構造は方形横桟縦板組と推測される。

埋土は８層にわかれる。第８層が井戸の機能時の堆積土を一部含んでいると考えられるが，それ以外，第１層から第７層には地山のブロックが混じり井戸を埋め戻した際の埋土である。第１層上面において土師器皿がまと

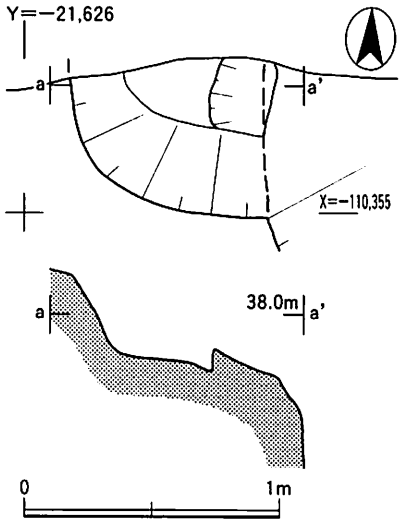


1　暗褐色土（石を多く含む）
2　褐色土（灰色粘土ないし灰褐色粘土ブロックを含む。）
3　灰褐色粘土
4　灰色粘土（褐色粘土ブロックを含む。）
5　暗灰色土（やや粘質）
6　淡灰色粘土
7　暗灰色粘土（砂を含む。）
8　暗灰色粘土（礫を含む。）

第14図　井戸ＳＫ92平面図・断面図（1/30）



第15図　土坑ＳＫ58平面図（1/10）



第16図　土坑ＳＫ129平面図・断面図（1/30）

まって出土している。

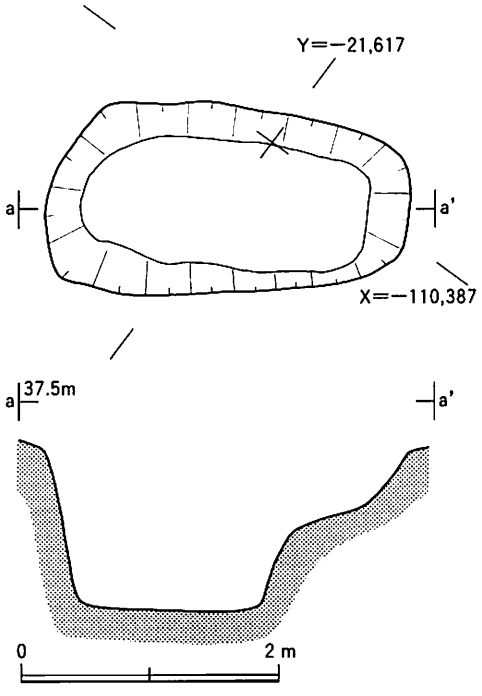
出土遺物は土師器など土器類，瓦が中心である。土器の所属時期から遺構の時期について埋め戻したのは，平安時代後期である。

土坑ＳＫ58（第15図，図版86上）

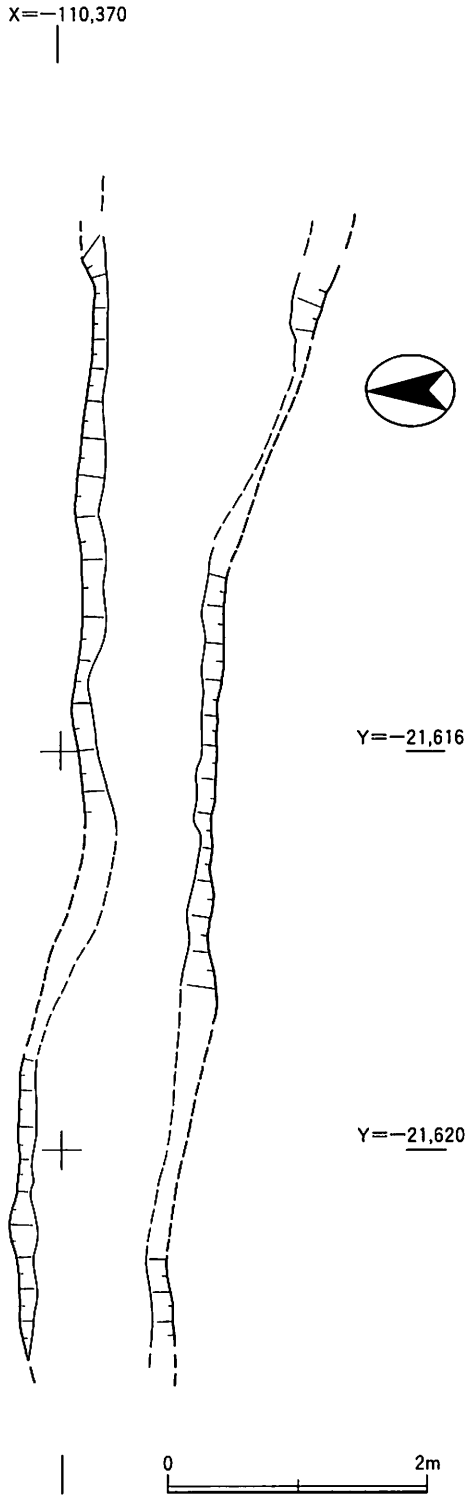
土坑ＳＫ58はＩ区北西隅，Ａ２に位置する。土師器皿が埋納された土坑である。平面形は長径58cm，短径25cm程の楕円形を呈する。長軸は北西―南東方向である。東端の一部を土坑ＳＫ５に切られる。深さは３cmと非常に浅く，断面形も皿状で立ち上がりが明確でない。ここからは平安時代後期の土師器皿が14枚，重なった状態で検出された。いずれも正位で置かれていた。出土遺物は土師器皿で平安時代後期，11世紀中葉のものである。

土坑ＳＫ129（第16図，図版86下）

土坑ＳＫ129はＩ区北西部，Ｃ３に位置する。平安時代後期の九州系瓦，播磨産瓦がまとまって出土した土坑である。南壁沿いに検出され南端は調査区外である。南北0.62mが確認できた。また，遺構の東側を土坑ＳＫ７に切られており，東西方向では1.05mが残存している。遺構の平面形は以上のように全容が掴めないが，おそらく方形を呈するものと思われ，その北東部分を検出していると見られる。断面形態もおそらく逆台形を呈するものと推測される。底面はやや起伏があるようで安定していない。埋土は暗褐色土であり，おそらく一気に埋め戻されたものと見られる。出土遺物には土師器皿，須恵器，白磁，瓦がある。瓦は軒丸瓦，軒平瓦，丸瓦，平瓦が完形も含めて出土した。所属時期は土器・瓦とも平安時代後期，12世紀前半である。土器と瓦の年代が近いので，瓦は使用されたものではなく，何らかの理由で使用前に埋め



第17図　土坑ＳＫ130平面図・断面図（1/30）



第18図　溝ＳＤ２・ＳＤ３平面図（1/30）

られた可能性が高い。

土坑ＳＫ130（第17図）

土坑ＳＫ130はＩ区南部で井戸ＳＫ92の南西，Ｅ11に位置する。平面形は長径1.42m，短径0.76mの楕円形を呈する。長軸は北東―南西方向である。深さは66cmで，断面逆台形を呈するが，北東側に中位に段がある。出土遺物には土師器皿，須恵器，灰釉陶器がある。平安時代後期の遺構である。

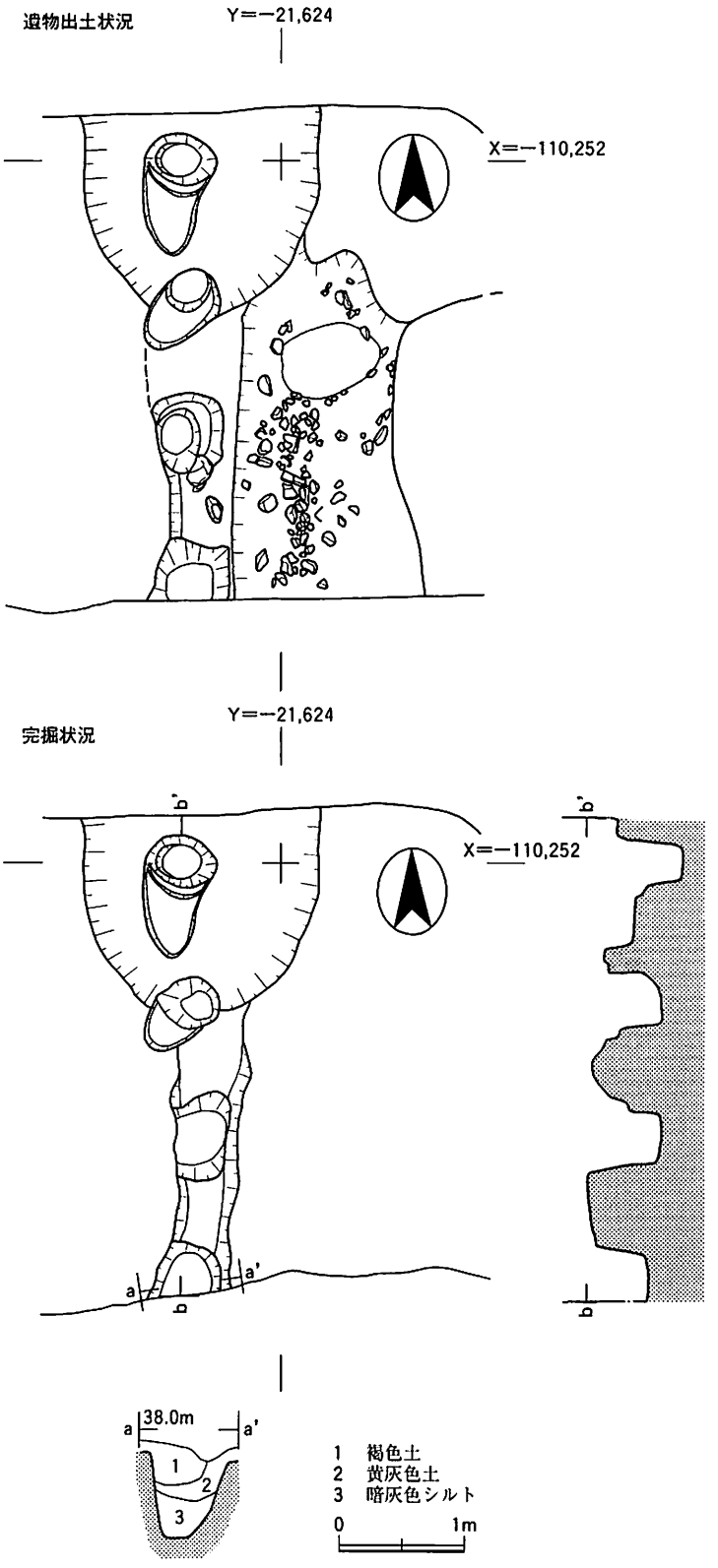
２．鎌倉時代～江戸時代前期の遺構

溝ＳＤ２・ＳＤ３（第18図）

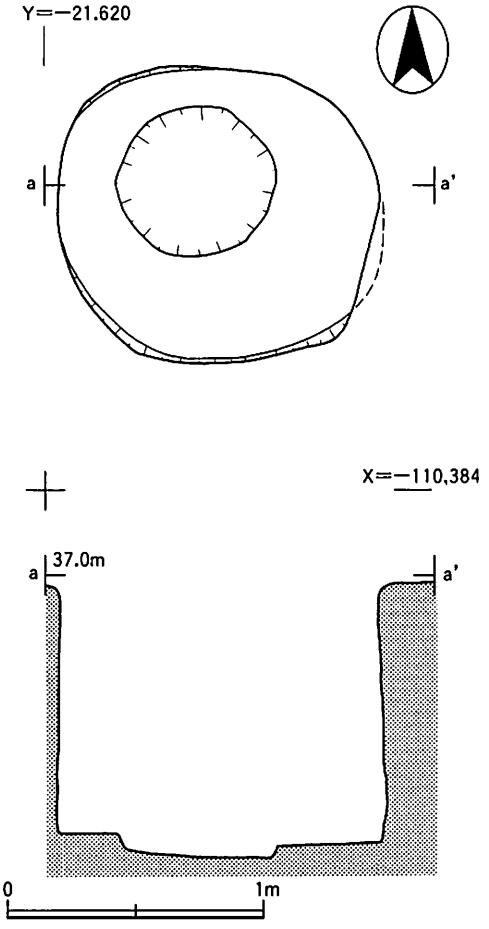
溝ＳＤ２・ＳＤ３はＩ区中央部，Ｄ６・Ｅ６・Ｆ６に位置する東西溝である。井戸ＳＥ６などいくつかの遺構に切られている。直線的な溝であるが，方向は正東西方向よりもわずかに北に振る。西端は西壁に当たり，調査区外へ続く。東端は江戸時代の土坑ＳＫ47に切られてよくわからないが，おそらくさらに東に伸び，調査区外へ続くものと推測される。幅0.46～1.05mで，断面浅い逆台形を呈する。埋土は２層に大きく分かれる。これはまず溝は掘られ，埋没した後再び同じ場所に同じような溝が掘られたためである。そこで上層をＳＤ２，下層をＳＤ３とした。溝ＳＤ２は16～17世紀，溝ＳＤ３は14～15世紀の遺物が出土している。

溝ＳＤ４（第19図，図版87）

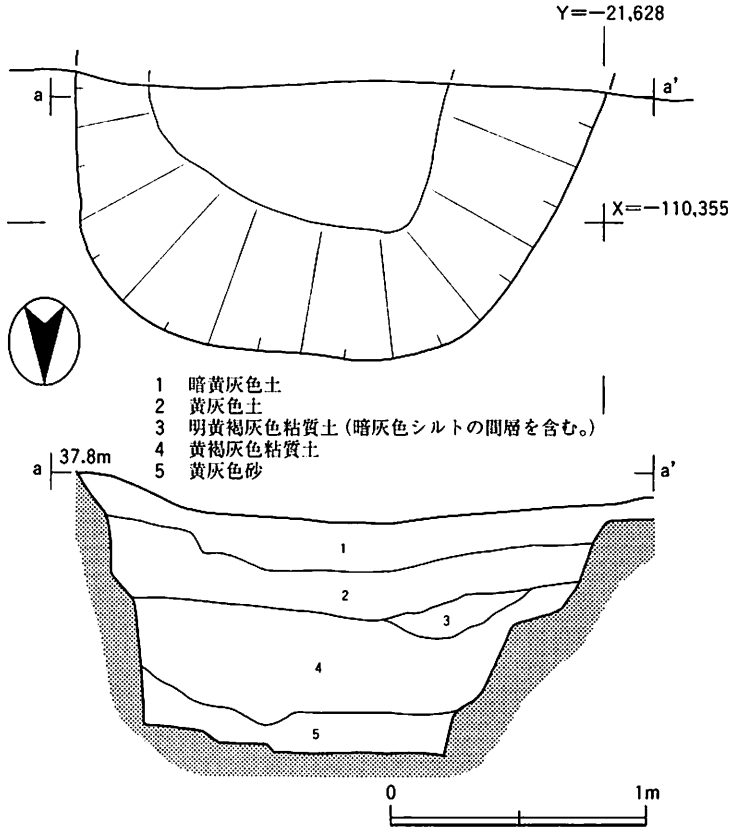
溝ＳＤ４はＩ区北部中央，Ｃ１・Ｃ２に位置する柱穴列を伴った南北溝である。溝は直線的な溝であるが，方向について正南北方向よりわずかに東に振る。北端は土坑ＳＫ42に切られよくわからないが，おそらく北にさらに伸び，調査区外へ続くと推測される。南端は南壁に当たり，調査区外へさらに続く。溝は幅0.6m，深さ30cmほどで断面逆台形を呈する。柱穴はこの溝のほぼ底面付近において４基確認されている。直径40～50cm，深さ60cmほどの柱穴が1.1m間隔で並ぶ。北２基の柱穴には柱の抜き取り痕跡が明確である。これは溝に先行して塀が設置されていたことを示している。塀はその廃棄にあたり柱を一部は抜き取られ，そ



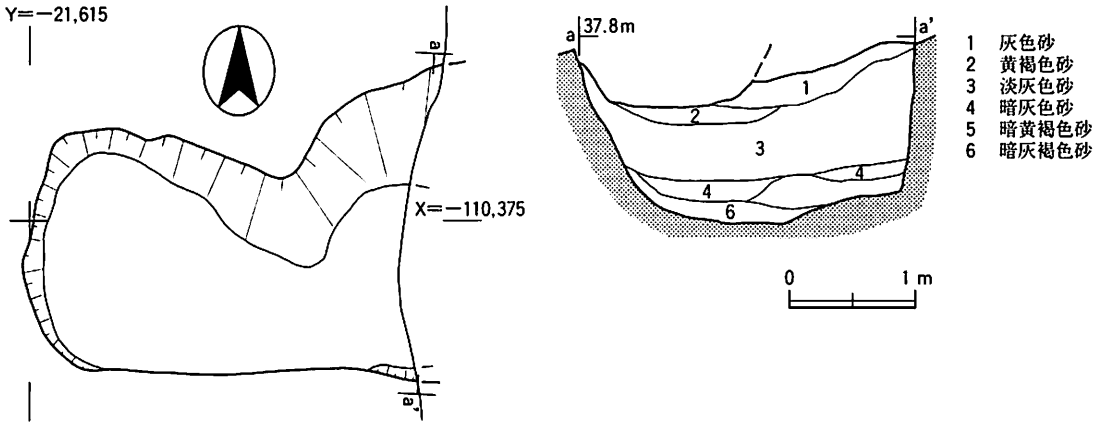
第19図　溝ＳＤ４平面図・断面図（1/60）



第20図　井戸ＳＥ12平面図・断面図（1/30）



第21図　土坑ＳＫ７平面図・断面図（1/30）



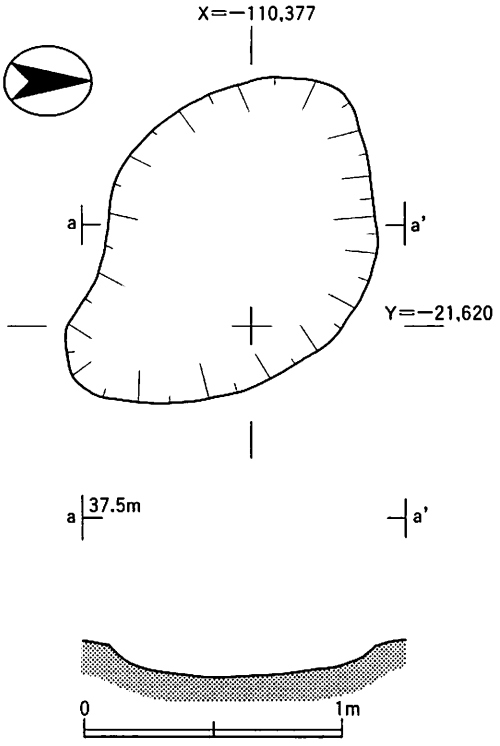
第22図　土坑ＳＫ72平面図・断面図（1/60）

の後溝が掘られているようである。溝の検出面では廃棄された礫や土器類が多数見つかっている（第19図上）。

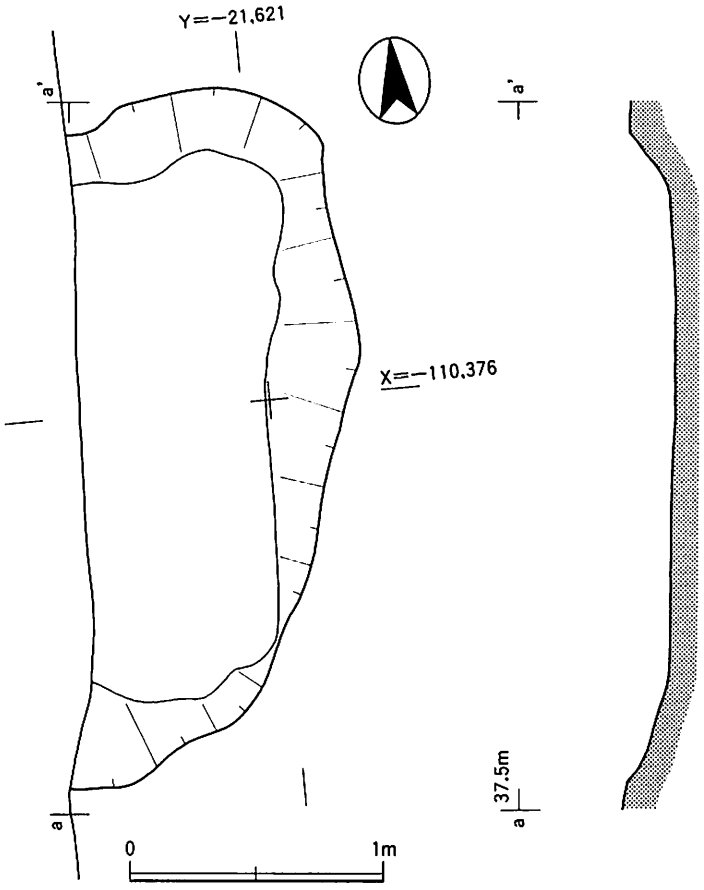
出土遺物には土器・陶磁器類がある。鎌倉時代から室町時代のものである。

井戸ＳＥ12（第20図，図版84下）

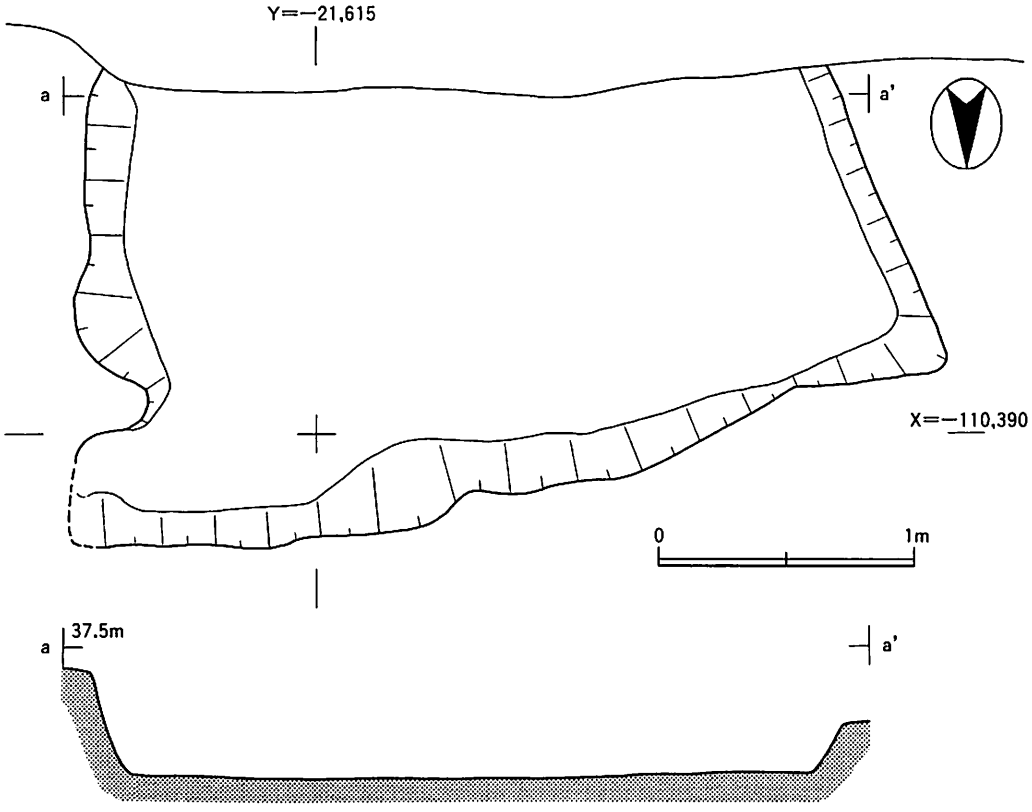
井戸ＳＥ12はＩ区南部，Ｅ９に位置する。平面形は直径1.24ｍの円形で，深さは1.08ｍである。掘形は円筒状で壁はややオーバーハング気味の個所もあるが，ほぼ垂直に立ちあがる。この底面は平坦であるが，中央やや北西よりに61cm，深さ９cmの浅い円形のくぼみがある。このくぼみは水溜めの施設の痕跡と考えられる。井戸枠などの施設は抜き取られており，残っていない。井戸の具体的な形態についても遺存状態からはよくわからない。埋



第23図　土坑ＳＫ102平面図・断面図（1/30）



第24図　土坑ＳＫ109平面図・断面図（1/30）



第25図　土坑ＳＫ122平面図・断面図（1/30）

土の状況から井戸枠を抜き取った後埋められたと考えられる。

出土遺物には土師器皿，灰釉陶器，白磁，銭貨がある。鎌倉時代から室町時代のいずれかの時期のものである。

土坑ＳＫ７（第21図）

土坑ＳＫ７はＩ区北西部南壁沿いのＣ２に位置する。井戸ＳＫ43と土坑ＳＫ129を切って形成されるが，調査区南壁により北半部の確認に留まった。遺構は調査区外の南方に広がる。南北方向は1.1ｍの確認に留まる。東西幅は2.06ｍで，おそらく平面形は円形に近くなると推測される。深さは0.93ｍで，断面形は逆台形である。この遺構の形状から井戸の掘形の可能性もある。

埋土は５層に分かれる。いずれも土器・陶磁器，瓦など廃棄物を含む。

出土遺物には土師器皿，焼塩壷，瀬戸美濃，丹波，瓦がある。17世紀前半のものである。

土坑ＳＫ72（第22図）

土坑ＳＫ72はＩ区中央東壁沿い，Ｆ７に位置する。溝ＳＤ５，土坑ＳＫ71・ＳＫ77・ＳＫ82を切って形成される。また調査区東壁のため，西部のみを確認したに留まっている。遺構は調査区外，さらに東へ広がる。東西は2.95ｍ確認した。南北幅は最大で2.46ｍある。平面形は，一部確認できないが，方形が２つ連なっているような形になると見られる。深さ1.4ｍで，断面形は逆台形を呈する。南側の壁の立ち上がり方が急なのに対し，北壁の立ち上がり方は比較的緩やかである。遺物に被熱した瓦や焼土，炭が多く含まれていることから，この土坑は火災後の廃棄土坑であろう。

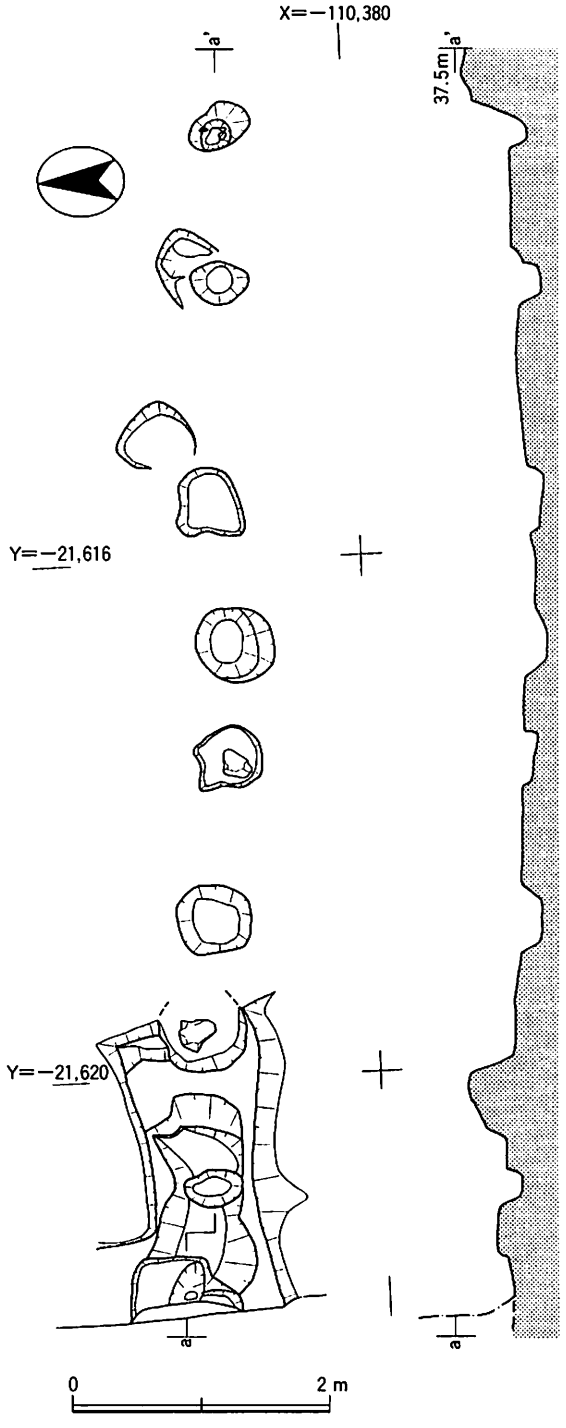
出土遺物には土師器，瓦質土器，常滑，丹波，瀬戸美濃，唐津，瓦がある。17世紀前半のものである。

土坑ＳＫ102（第23図）

土坑ＳＫ102はＩ区中央部，Ｄ８に位置する。平面形は長径1.54ｍ，短径1.3ｍのややいびつな楕円形である。深さは13cmで，断面形は非常に浅い皿状を呈し，立ちあがりは明確ではない。出土遺物には土師器皿，瓦質土器，唐津，瓦などがある。16世紀末のものである。

土坑ＳＫ109（第24図）

土坑ＳＫ109はＩ区中央部西壁沿い，Ｄ７・Ｄ８に位置する。遺構は西壁にかかり，西にさらに続く。したがって調査できたのは東半部のみである。東西1.2ｍは確認できている。南北2.68ｍで平面形はほぼ長方形を呈するものとみられる。深さは18cmで，断面形は浅い皿状を呈する。立ち上がりはあまり明確ではない。出土遺物には土師器皿・鍋，古瀬戸卸皿，青磁，瓦などがある。17世紀前半の遺物が混じるが，15世紀中葉の遺構と考えられる。



第26図　塀ＳＡ１平面図・断面図（1/60）

土坑ＳＫ122（第25図）

土坑ＳＫ122はⅠ区南端中央，Ｆ11に位置する。遺構は南壁にかかり，南へさらに続く。したがって調査できたのは北半部のみである。南北1.7mは確認できている。東西は3.35mで平面形はほぼ台形を呈するとみられる。検出しているのはその広端部である。深さは39cmで，断面形は逆台形である。出土遺物には土師器皿，須恵器，白磁，瓦などがある。14世紀前葉のものである。

３．江戸時代中期～後期の遺構

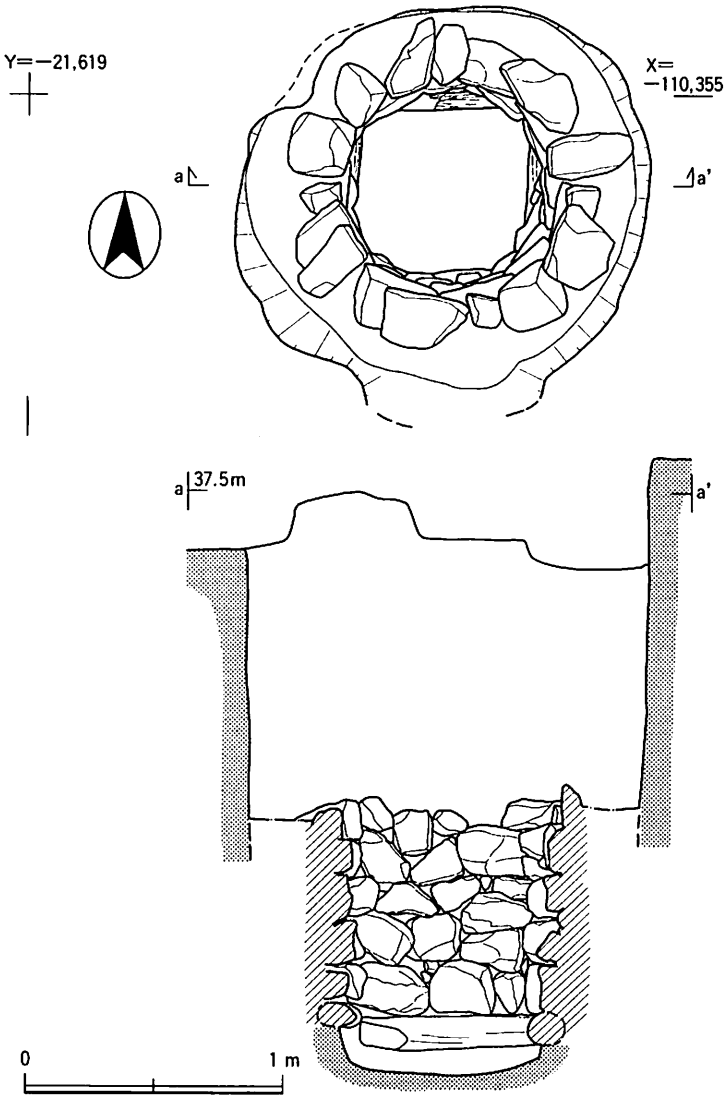
塀ＳＡ１（第26図）

塀ＳＡ１はⅠ区中央部，Ｄ８・Ｅ８・Ｆ８に位置する。東西方向の塀であるが，正東西方向よりわずかに南に振る。９基の柱穴列であるが，東西とも調査区外へさらに続くとみられる。柱穴は平面形は円形であるが，直径32～58cm，深さ10～44cmとややばらつきがある。底面レベルも36.88～37.04mと幅がある。間隔も0.8～1.5mとばらつき，列も直線というにはやや不揃いである。塀も１本ではなく，建て直しの結果数本が重なり合って現在目にする遺構となっていると考えられる。しかし，それを分離して示すことはできなかった。

井戸ＳＥ４（第27図）

井戸ＳＥ４はⅠ区中央部，Ｅ５・Ｅ６に位置する石積井戸である。井戸ＳＥ６，土坑ＳＫ３・ＳＫ38・ＳＫ48を切って形成されている。掘形は平面形が直径1.6mの円形を呈する。深さは2.43mを測るが，底から1.12mまで石積およびその底部の根木が残存する。それより上は石が抜かれており，その後埋め戻されている。残存する石積み井戸枠は平面形が直径0.85mの円形を呈する。石積みは15～20cmの石を，面を内側にして積上げられており，５段分残存している。その下に根木が残存する。根木は直径12cm，長さ1.1mないし0.7mの丸太を方形に組んで据えられていた。

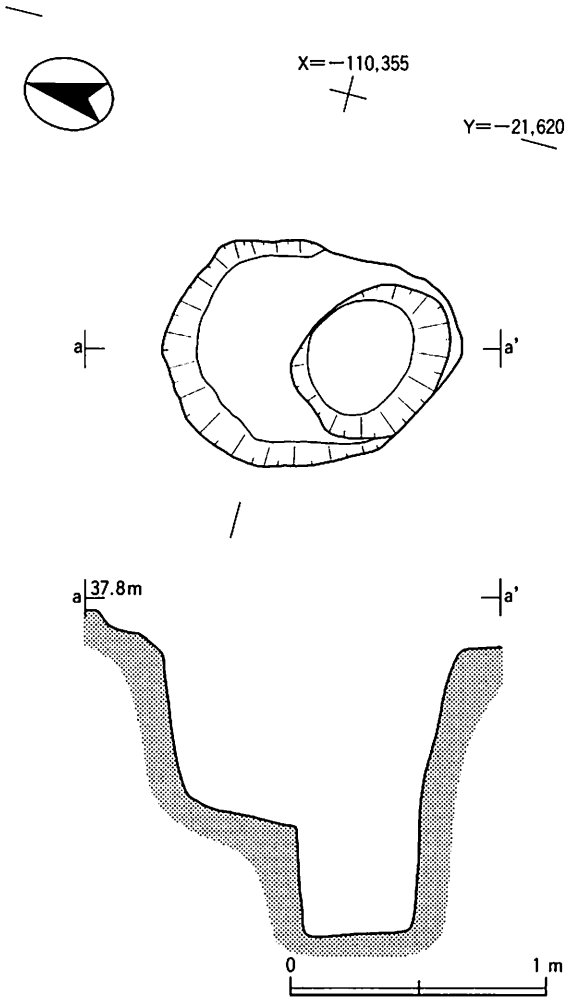
出土遺物には土師器皿，肥前陶磁，瓦などがある。18世紀のものである。



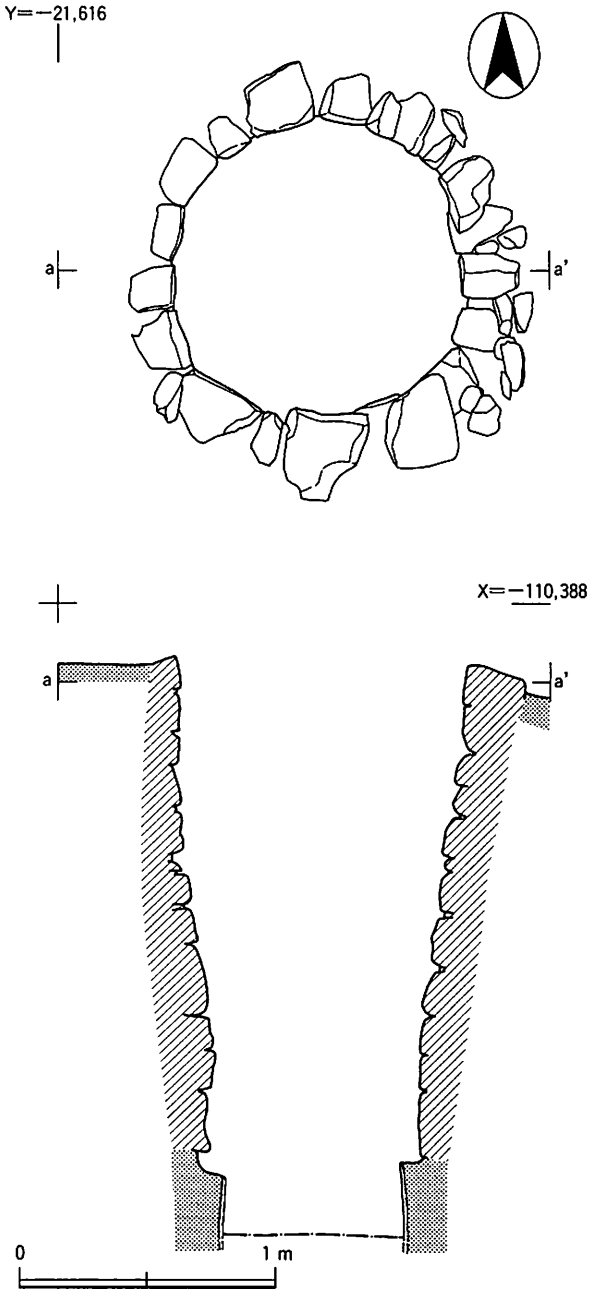
第27図　井戸ＳＥ４平面図・断面図（1/30）

井戸ＳＥ８（第28図）

井戸ＳＥ８はⅠ区北部，Ｄ２に位置する。平面形は長径1.16m，短径0.9mの楕円形を呈する。長軸は南北方向である。深さは1.26mであるが，平面形が直径42cmの円形の底面は南端による。南北断面で見れば，南壁は垂直に近く底面より急に立ち上がるが，北壁は底面から約40cm急に立ちあがった後，幅40cmほどの平坦に近い斜面があり，そこから再び急に立ち上がる。つまり底面に近いところでは直径40cmほどの円筒状に掘り込まれており，その北側にこれとは別の大きな掘り込みあると考えられる。底面に近い部分は本来の井戸の痕跡で，北側に広がる掘り込みは井戸枠を抜き



第28図　井戸ＳＥ８平面図・断面図（1/30）



第29図　井戸ＳＥ11平面図・断面図（1/30）

取った痕跡と推測される。井戸枠など井戸の施設は見つからなかった。

出土遺物には土師器皿，瀬戸美濃，白磁，青花などがある。江戸時代前期，17世紀のものである。

井戸ＳＥ11（第29図）

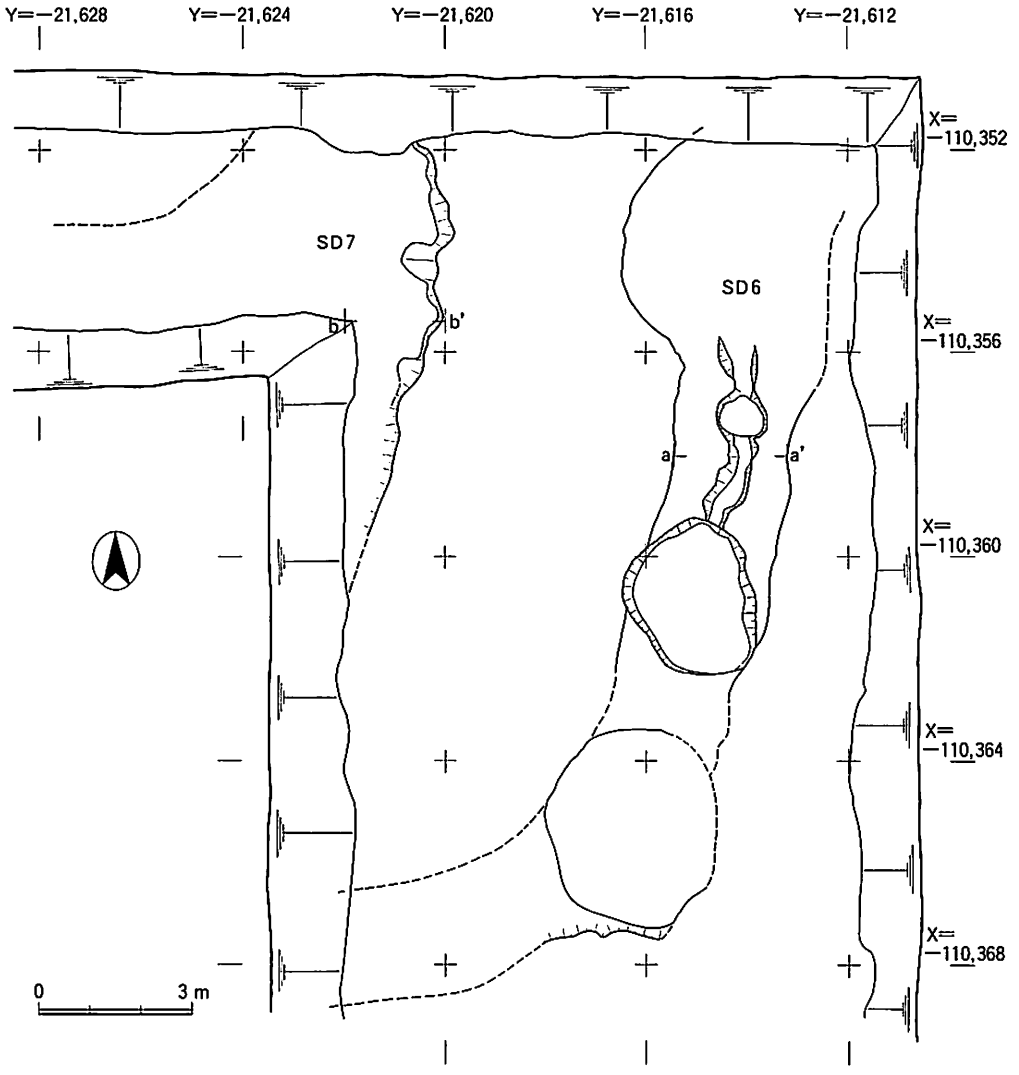
井戸ＳＥ11はＩ区南部，Ｆ10に位置する石積井戸である。井戸ＳＫ92を切って形成されている。検出面まで石積が残り，その井戸枠は直径1.23mの円形を呈する。深さは2.3m以上ある。石積は幅15～25cm，厚さ10～25cmの石を12段積上げている。最下部は桶を埋設して水溜めとしている。

出土遺物には土師器，肥前陶磁，瓦，銭貨などがある。18世紀～19世紀のものである。

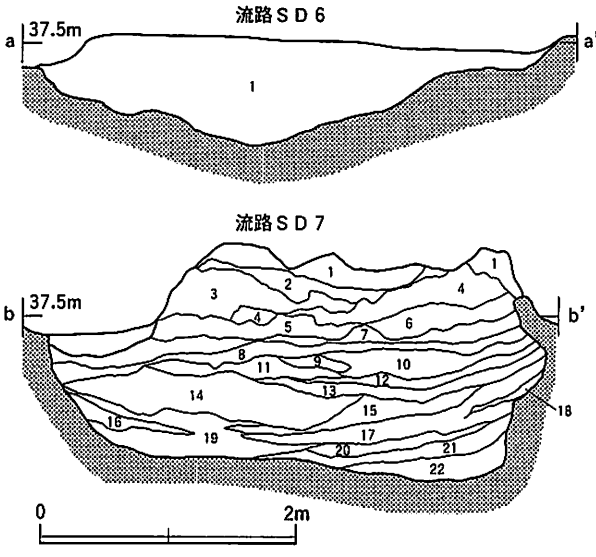
４．縄文・弥生時代の遺構

流路ＳＤ６（第30・31図）

流路ＳＤ６はＩ区北東隅から南流し，Ｉ区中央部で南西方向へ曲がり西流し調査区外に延びる。平安時代以降の遺構に至るところで切られているが，幅2.4～4.1m，深さ84cmが残存する。断面は皿状を呈し，埋土は砂あるい



第30図　流路ＳＤ６・ＳＤ７平面図（1/150）



1　灰色礫層（下部に灰色砂または淡褐色砂を含む）

1　淡黄褐色粘土
2　黒味を帯びた淡黄褐色土（礫を含む）
3　黒味を帯びた淡黄褐色シルト
4　淡黄褐色シルト
5　黒褐色土（礫を含む）
6　淡黒褐色砂
7　黄味を帯びた黒褐色砂
8　淡黄褐色シルト
9　黒褐色砂
10　黒褐色土（礫を含む）
11　砂礫（黒褐色土を含む）
12　淡黄褐色シルト
13　黒褐色土（礫を多量に含む）
14　淡黄褐色シルト（12より細かい）
15　黒味を帯びた黄褐色シルト
16　暗褐色粘土・淡黄褐色粘土・砂礫の互層
17　黒褐色土
18　淡黄褐色粘土
19　淡黄褐色シルト
20　砂礫（淡黄褐色シルトを含む）
21　黄味を帯びた黒褐色シルト
22　黒褐色粘土と砂礫の互層

第31図　流路ＳＤ６・ＳＤ７断面図（1/30）

は礫の互層である。出土遺物には縄文土器と弥生土器，チャート剥片がある。弥生前期後半には完全に埋没している。

流路ＳＤ７（第30・31図）

流路ＳＤ７はＩ区中央部から南流し，南壁に当たり調査区外に延びる。これも平安時代以降の井戸や土坑などに切られているが，幅3.5m以上，深さ1.8m以上が確認できた。断面は逆台形を呈する。埋土は砂あるいは礫の互層である。出土遺物には縄文土器と弥生土器がある。これも流路ＳＤ６と同様，弥生前期後半には埋没する。

第４節　Ⅱ区の遺構

１．鎌倉時代～江戸時代前期の遺構

溝Ⅱ区ＳＤ４（第34図）

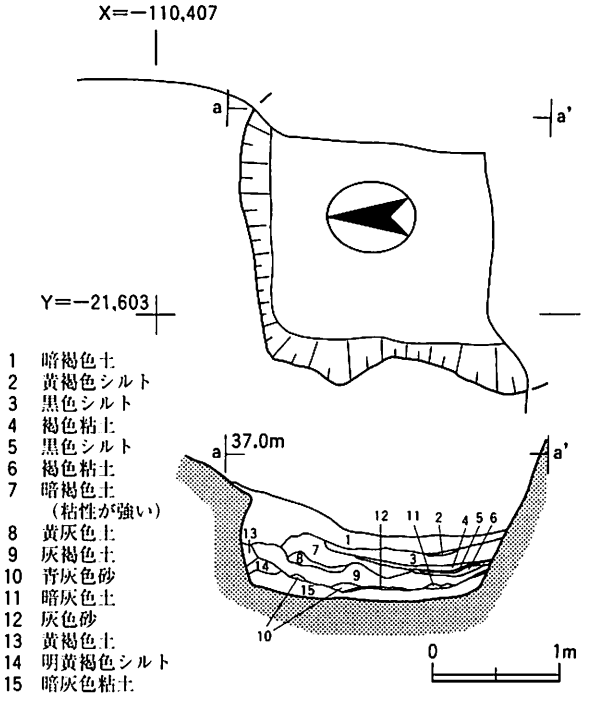
溝Ⅱ区ＳＤ４はⅡ区北部，Ｈ11・Ｉ11に位置する東西溝である。太子堂の池の下層より見つかった。東西はそれぞれ東壁，西壁にあたり，どちらも調査区外へさらに伸びる。溝の方向はほぼ正東西方向である。幅0.9m，深さ約40cmで断面浅いＵ字状を呈する。埋土は３層に分かれる。上層は礫や被熱した瓦片を含む灰褐色粘土層，中層は土師器片を含む青灰色粘土層，下層は青灰色砂層である。上・中層は厚さ15cmほどあるのに対し，下層は２cmほどの厚さである。中・下層が溝の機能時の堆積層と考えられるが，粘土が堆積していることから，水流はかなりゆるやかであったことが推測される。これは導水用の溝というよりもむしろ池などに通じる園池の一部の溝の可能性が高いと考えられる。

出土遺物には土師器Ⅲ・瓦などがある。14世紀後半のものと考えられる。

土坑Ⅱ区ＳＫ６（第32図）

土坑Ⅱ区ＳＫ６はⅡ区南東隅，Ｉ15・Ｉ16に位置する。南端・東端は調査区外にあり断定できないが，平面形方形を呈すると思われる。東西，南北とも2.2mが確認できた。深さは80cmで，壁はややオーバーハング気味に立ちあがる。底面は平坦である。埋土は15層に分かれるが，大きく廃棄物を含む層と，それを埋める土層に分かれる。底面に近い層は土器・陶磁器類，被熱した瓦類など廃棄物とともに焼土，炭を多量に含む。最上層はこれに対し遺物がほとんど含まれず，また，層の厚さも30～40cmと他の層に比して厚い。土坑を埋め戻した土層である。

出土遺物には土師器，瓦質土器，備前，信楽，丹波，瀬戸美濃，唐津，伊万里，明青花，瓦類がある。瓦には被熱して発泡したものが含まれる。17世紀前半のものである。



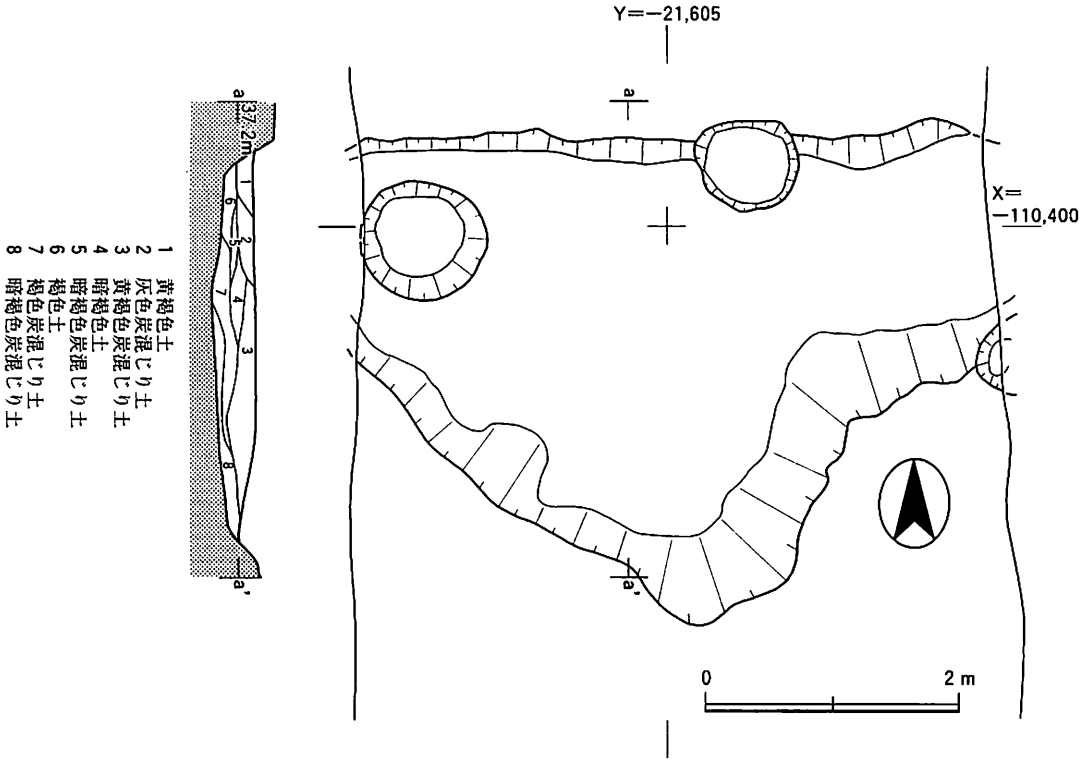
第32図　土坑Ⅱ区ＳＫ６平面図・断面図（1/30）

土坑Ⅱ区ＳＸ１（第33図）

土坑Ⅱ区ＳＸ１はⅡ区中央部，Ｈ13・Ｈ14・Ｉ13・Ｉ14に位置する。不整形の土坑である。東西とも調査区の壁に当たり，さらに調査区外に広がっている。南北は最大3.4mある。深さは35cmで，断面形は逆台形である。

埋土は８層に分かれる。いずれも土器・陶磁器，瓦など廃棄物を含む。

出土遺物には土師器，瀬戸美濃，唐津，瓦などがある。16世紀代の遺物も含むが，おおよそ17世紀前半のものである。



第33図　土坑Ⅱ区ＳＸ１平面図・断面図（1/30）

２．江戸時代中期～後期の遺構

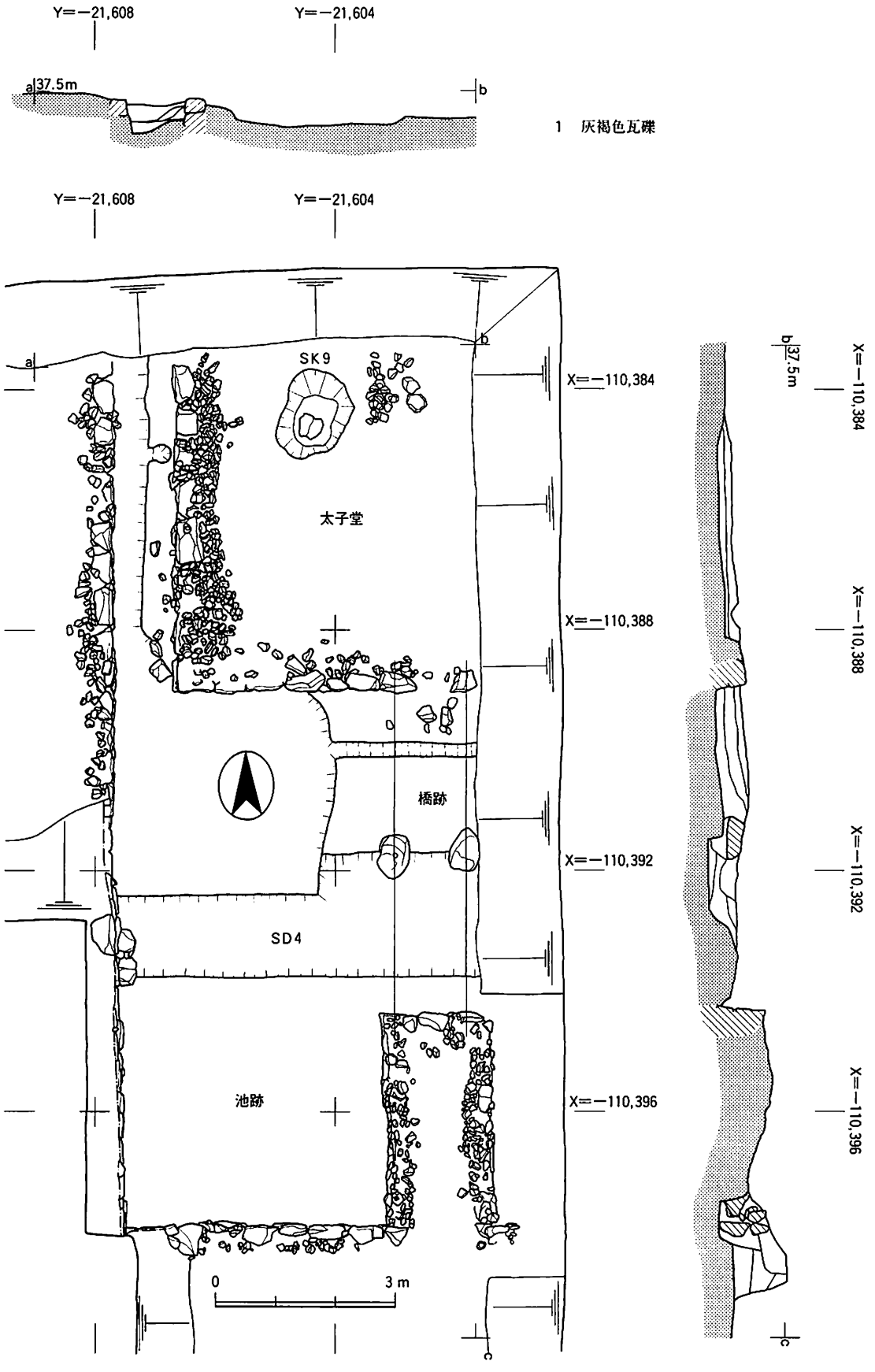
太子堂関連遺構（建物跡・池跡・橋跡）（第34～36図，図版88）

Ⅱ区北部，Ｈ・Ｉ９～13において太子堂の建物跡とそれを囲む池の跡の一部，太子堂に向かう参道（アプローチ）と橋の跡が見つかった。池は石積により護岸されており，この部分を石積の名称で取り上げる。

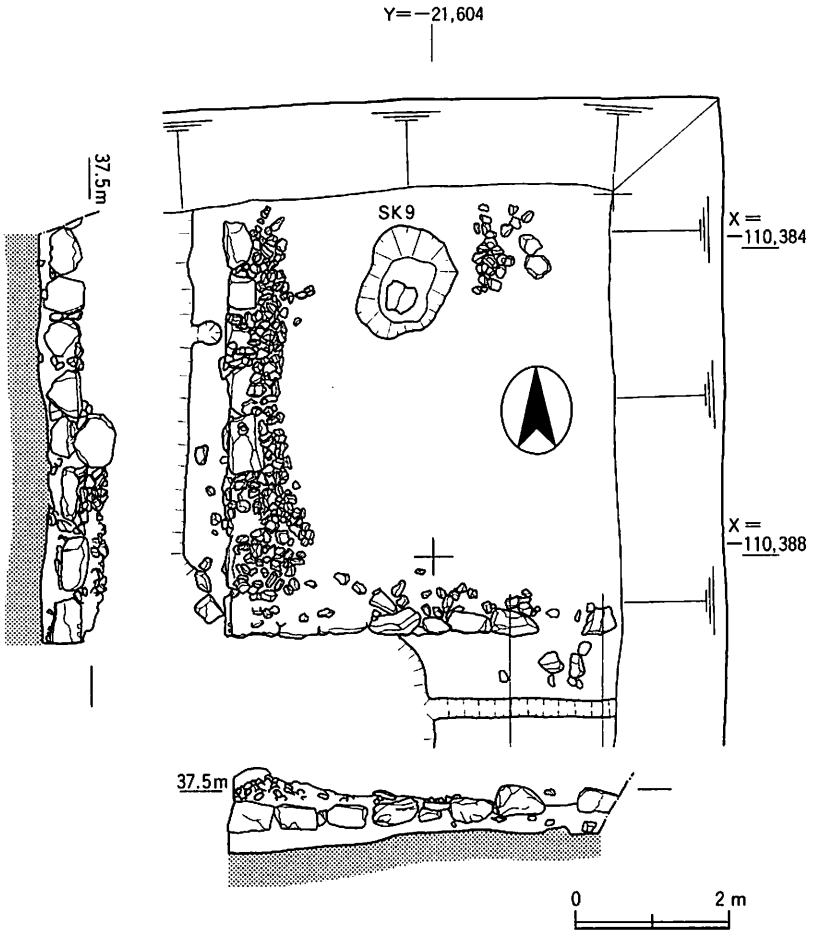
まず，太子堂について基壇と礎石据え付け痕の可能性がある土坑，集石それぞれ１基が見つかった（第35図）。基壇についてはＨ・Ｉ９～11において基壇の南東隅が検出された。基壇の西面石積はＨ９～11において正南北方向に伸びるのが検出され，また南面石積はこれとＨ11で直交し，Ｈ・Ｉ11で正東西方向に直線的に伸びるのが確認された。西面石積5.64m，南面石積5.16mを確認。西面北端と南面東端はどちらも調査区外にあり確認できていないが，検出したのが基壇の南東隅であり，基壇はほぼ正方位を向いていることがわかる。西面石積，南面石積とも直径50～70cmほどの石が，面を外側に向け，かつ面を揃えて積まれている。ただし，西面，南面とも１段のみ，高さ84cmが残る。西面では１ヶ所２段になっているところが残り，かつ西面石積の裏側には裏込の直径10cmほどの礫がありそれは石積よりも高い位置に分布していることから，本来はさらに上に石が積まれていたと推測される。

基壇上面については江戸時代の火災後の瓦溜りにより大きく破壊されており残っていない。かろうじて柱穴とみられる土坑１基と集石１基が見つかっている。土坑ＳＫ９は長さ1.5m，幅１mで平面形が楕円形の遺構である。長軸は北東―南西方向である。断面逆台形であるが，底面が小さく，擂鉢状の土坑といえる。この土坑の中位には直径10cmほどの礫が密集して検出された。

この東隣には直径10cmほどの礫が集中する集石がある。これには掘り込みなどが伴わない。しかし，この部分も後世の破壊が大きく，本来ならば土坑ＳＫ９と同様に土坑が伴うはずのものが，後世の攪乱により底面付近の集石のみが残存したと考えられる。したがってこれも礎石据え付け痕の可能性を考えたい。土坑ＳＫ９と集石は遺構の底面レベルが異なり，また，位置関係から見ても同一時期の柱穴とは考えられない。やはり時期差を考えるべきである。これらは江戸時代以降における時期を別にした柱穴で，基壇と同様に建物，すなわち太子堂南西隅の柱の痕跡と考えておきたい。これ以外の建物に関する痕跡は見当たらないので，他の礎石据え付け痕は調査



第34図　太子堂跡およびその周辺遺構平面図・断面図（1/100）



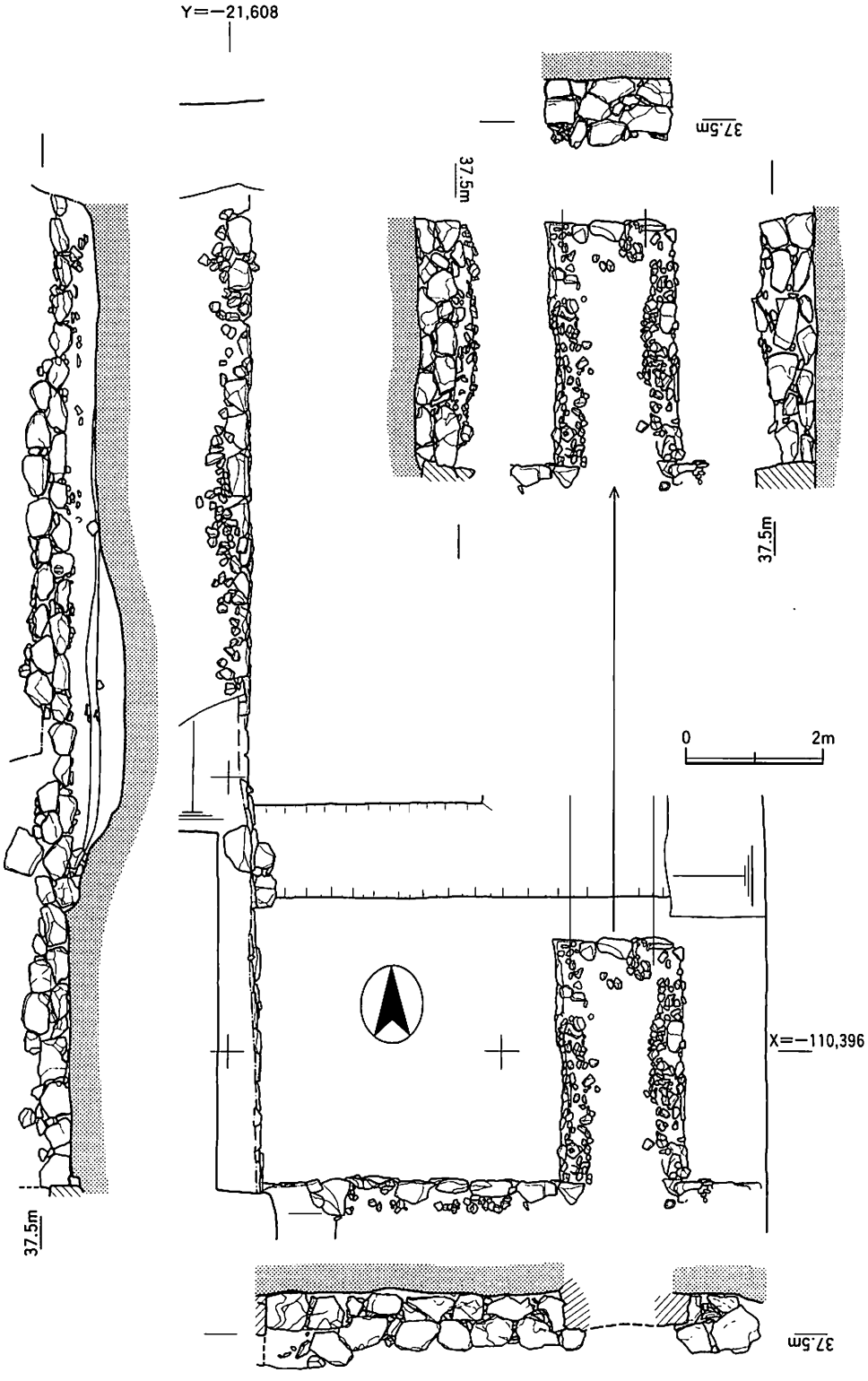
第35図　太子堂跡平面図・立面図（1/100）

区外に存在すると考えられる。また，建物の規模や様相について，確認できた遺構だけでは推測不可能である。

池跡については西岸石積と南岸石積が検出できたが，南岸には参道のため突出部が設けられている（第36図）。西岸石積はほぼHライン上に，9から13までの間で検出した。正南北方向にほぼ直線的に伸びており，H9北壁ではさらに調査区外へ続く。南岸石積はH13において西岸石積と直交し，I13にかけて正東西方向に直線的に伸びる。I13東壁ではさらに調査区外へ伸びることが確認できた。西岸石積，南岸石積とも高いところで1.1m，2段の石積が残る。しかし，西岸・南岸とも石積より高い位置に裏込めの礫が分布している個所があり，石積はさらに高かったと推測される。西岸石積，南岸石積とも直径50～70cmほどの石が，面を外側に向け，かつ面を揃えて積まれている。西岸石積北側は破壊が著しく，石積は1段しか残っていない。

南岸石積についてI13ではこれに参道の突出部が取りついている。この突出部は幅1.9m，長さ3.6mあり，西岸石積と南岸石積が直交する点より西へ4.4mのところに取りつく。高さは0.9mで，石積2段残存する。しかしこれも裏込めの礫が石積よりも高い位置に分布しており石積はさらに高くなる。この突出部は正南北方向を向き，まっすぐ太子堂に向かっている。おそらくこの中軸線は太子堂の中軸線と合っていると推測される。

この突出部と太子堂は橋でつながっていたと考えられるが，その遺構は池の中にある礎石2点のみである。ともに70cmほどの扁平な石で1.2mの間隔で東西に並ぶ。上面のレベルはともに37.3mである。これらは太子堂基壇南端と突出部北端のちょうど中間点に位置しており，両者から2.3m離れている。西の礎石には5cmほどの穴があけられているが，これは橋脚を固定する際に用いられたものであろう。この他に太子堂南端，および突出部北端には橋を固定したような痕跡は見当たらなかった。石積全体が上部を破壊されているので，このような痕跡も既に破壊されなくなっているのであろう。なお，橋が存在したと考えられる区域の池の底面は高くなっており，したがってこの区域のみ底が浅かったと考えられる。2つの礎石はこの高まりの上に位置している。

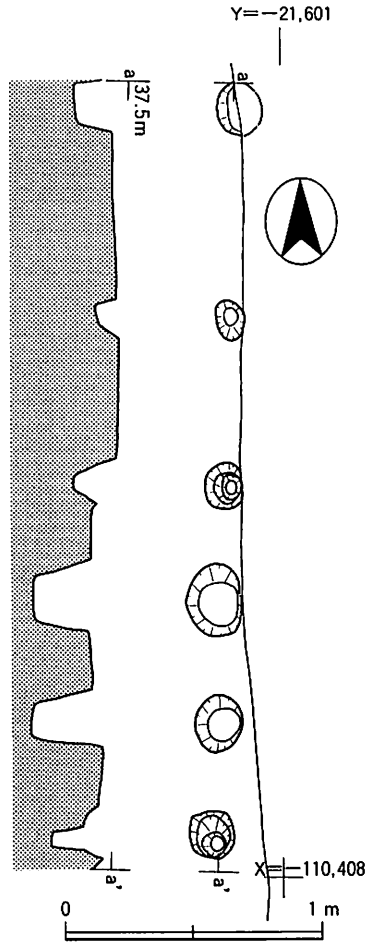


第36図　池および参道石積平面図・立面図（1/100）

池の底面について橋の区域のみ高くなっていることは先述した。このほか太子堂西面石積と西岸石積の間では，西に向かって傾斜している。また，太子堂基壇南西隅の付近から池の南西部では深くなっている。埋土は2層に分かれる。いずれも泥土層であり，池が機能していた時期に堆積したものと考えられる。また，断面観察から池は地山よりも低く，したがって地山を掘り込まれて造成されたことが分かる。また太子堂の基壇もこのときに掘り残された区画を石積により整備してできあがったらしいことが分かる。なお池の埋土の上に堆積するのはⅢ層，すなわち天明八年の焼土層であり，太子堂および池はこの時に棄却され埋められたと考えられる。

塀Ⅱ区ＳＡ１（第37図）

塀Ⅱ区ＳＡ１はⅡ区南東部，Ⅰ14・Ⅰ15の東壁際に位置する。南北方向の塀であるが，正南北方向よりわずかに東に振る。6基の柱穴列であるが，南北とも調査区外へさらに続くとみられる。柱穴は平面形円形であるが，直径30～58cm，深さ16～50cmとややばらつきがある。底面レベルも36.85～37.28mと幅がある。間隔も0.6～1.5mとばらつき，列も直線というにはやや不揃いである。塀も1本ではなく，建て直しの結果数本が重なり合って現在目にする遺構となっていると考えられる。しかし，ここでもそれを分離して示すことはできなかった。



第37図　塀Ⅱ区ＳＡ1平面図・断面図（1/60）

第５章　第３次調査の出土遺物

第１節　出土遺物の概要

第３次調査で出土した遺物は全体で約300箱である。土器・陶磁器類，瓦類，土製品，石製品，木製品，骨製品，銅製品，鉄製品，銭貨に分けられる(註1)。所属時期は縄文時代から江戸時代まである。このうち縄文・弥生時代の遺物は流路ＳＤ６からまとまって出土し，また弥生土器がいくつか江戸時代の遺構に混じって出土した。しかし古墳時代から奈良時代の遺物はない。平安時代前期から江戸時代の遺物は連続してある。

なお，以下各節において遺物の報告を行うが，あまりに膨大であるために，主要な遺構から出土した資料をまず報告し，ついでその他の遺構・包含層出土の主要な資料を取り上げた。予算の都合により掲載できなかったものも多数あることをあらかじめお断りしておく。

第２節　土器・陶磁器類

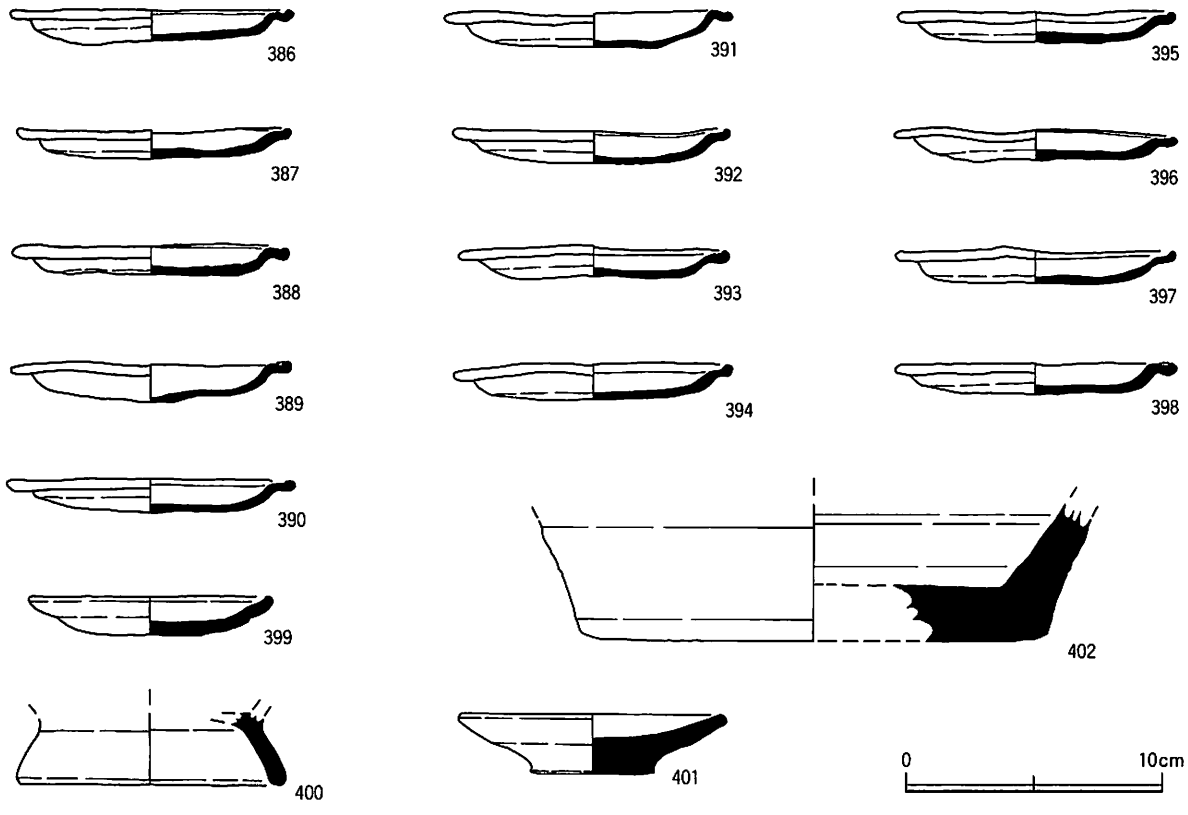
１．平安時代後期の主要遺構出土土器・陶磁器類

溝ＳＤ１出土土器・陶磁器（図版２）

土師器，須恵器，緑釉陶器，山茶椀，瓦器，常滑，白磁が出土している。

土師器には皿，羽釜がある。１～10は皿である。１～４は小皿で，２・３には二段凹みナデが施される。４はての字口縁の皿，５・６はコースター形の皿である。７～10は二段凹みナデの皿である。Ⅴ期の古～新に収まる。16は羽釜である。

須恵器には甕と鉢がある。17は甕の口縁部である。18は鉢の底部である。いずれも東播産である。



第38図　土坑ＳＫ58・土坑ＳＫ129出土土器実測図（1/3）

緑釉陶器には椀がある（11）。

山茶椀で12・13は椀の口縁部である。12は口縁内面直下に沈線１条が巡る。13は口唇を肥厚させ，玉縁状に仕上げる。

瓦器には椀がある。15は樟葉型瓦器椀の口縁から胴部で，Ⅱ－１類である。14は椀の底部である。

常滑には甕がある。19は常滑の甕の口縁部である。赤羽・中野編年の２型式である。

白磁には碗がある。20は白磁碗Ⅳ類，21は白磁碗Ⅴ類である。いずれも小破片で口径が復元できなかった。

以上から溝ＳＤ１の出土土器・陶磁器はやや時期幅があるが，11世紀末から12世紀後半のものである。

土坑ＳＫ58出土土器・陶磁器類（第38図）

土師器皿が14個体出土している。１個体を除き，ほぼ完形であり，これらを図示した（386～398）。いずれもての字口縁の皿である。Ⅳ期中，11世紀中葉のものである。

土坑ＳＫ129出土土器・陶磁器類（第38図）

土師器，須恵器，白色土器，須恵器が出土している。

土師器には皿，高台付皿がある。399はての字口縁の皿である。Ⅴ期古のものである。400は高台付皿の高台部である。白色土器には401の皿がある。須恵器には402の壺底部がある。おおよそ11世紀末～12世紀初頭のものであろう。

土坑ＳＫ92出土土器・陶磁器類（図版３・４）

土師器，須恵器，黒色土器，緑釉陶器，灰釉陶器，白色土器，瓦器，山茶椀，白磁が出土している。

土師器には皿，鍋がある。22～61は皿である。22～31は二段凹みナデの小皿，32～36は一段凹みナデの小皿，37～40はコースター形の皿，41はての字口縁の皿である。42～59は二段凹みナデの皿である。60・61は胎土が白色の皿で，底部外面には指頭圧痕が顕著である。41のように古いものも混じるが，ほとんどがⅤ期古～新のものである。119は鍋である。

須恵器には杯，杯蓋，鉢，甕がある。62は杯Ｂ蓋である。平安時代前期のものである。63は杯Ａの口縁部である。64～67は鉢である。このうち63は小形の鉢，64～66は東播産の鉢，67は平安時代前期の篠型鉢の口縁部で，鉢Ａｂ類になる。68は東播産の甕である。69は壺の口縁部である。

黒色土器には椀がある。70は黒色土器Ａ類の椀の底部である。

緑釉陶器には椀がある。72・73は椀の口縁部，74・75は椀の底部である。74は蛇の目高台，75は輪高台である。

灰釉陶器には椀がある。76は椀の口縁部である。

白色土器には皿がある。71は皿で，完形品である。

山茶椀には椀がある。77は椀で一応全体が復元できる破片である。78・79は椀の底部である。

瓦器には椀がある。80は椀の底部である。

白磁には碗がある。81・82は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。83は輪花皿の口縁部である。口禿げであり，白磁皿Ⅸ類である。84は碗の底部である。これも白磁碗Ⅳ類であろう。85は口縁部を丸く収める。白磁碗Ⅴ－１類である。86は口縁を屈折して外反させ，端部を水平にする。白磁碗Ⅴ－４ａ類である。

以上から井戸ＳＫ92の出土土器・陶磁器類はおおよそ11世紀末から12世紀中葉までのものである。ただし須恵器鉢66と白磁皿83はこれらよりも格段に新しく，混入とみられる。

２．鎌倉時代～江戸時代前期の主要遺構出土の土器・陶磁器類

土坑ＳＫ122出土土器・陶磁器類（図版５）

土師器，須恵器，白磁が出土している。

土師器には皿がある。87・88はへそ皿である。89・90は小皿，91・92は皿である。Ⅶ期中のものである。

須恵器には甕がある。93は東播産の甕の底部である。

白磁には蓋が１点ある（94）。完形品である。

土坑ＳＫ122の出土遺物は14世紀前葉のものと考えられる。

土坑ＳＫ109出土土器・陶磁器類（図版５）

土師器，瓦質土器，古瀬戸，唐津，白磁が出土している。

土師器には皿がある。95～97，100・101は小皿である。95は体部の立ちあがりが不明確である。98・99はへそ皿である。102～106は皿である。102・103には見込みに凹線状圏線が施されている。土師器皿は新旧２群に分けられる。古い１群は96～99・104～106でⅨ期古，新しい１群は95・100～103でⅪ期古と考えられる。

瓦質土器には羽釜がある。107は山城Ｆ型の羽釜である。

古瀬戸には天目茶碗，卸皿がある。110は天目茶碗の口縁部である。109は卸皿の底部である。

唐津には碗がある。108は灰釉碗の口縁部である。

白磁には皿がある。111・112とも皿の底部であるが，111は無高台，112は高台付きである。

土坑ＳＫ109出土遺物には新旧２群に分けられる。古い１群は土師器皿（96～99・104～106），瓦質土器羽釜（107），古瀬戸天目茶碗（108），同卸皿（109），白磁皿（111・112）で，15世紀中葉，新しい１群は土師器皿（95・100～103），唐津碗（110）で17世紀初頭である。

土坑ＳＫ102出土土器・陶磁器類（図版５）

土師器，瓦質土器，唐津が出土している。

土師器には皿がある。113～116は皿である。113・115・116には見込みに凹線状圏線がある。Ⅺ期古のものであろう。

瓦質土器には風炉がある。117は風炉の口縁部片で，口縁は内傾するが端部は水平になる。口縁下にはスタンプ文が巡る。

唐津には碗がある。118は碗の口縁部である。

土坑ＳＫ102はおおよそ16世紀末のものである。風炉（117）は混入であろう。

土坑ＳＫ72出土土器・陶磁器類（図版６・７）

土師器，瓦質土器，常滑，丹波，瀬戸美濃，唐津が出土している。

土師器には皿がある。120は小皿，121～133は皿である。Ⅺ期古のものであろう。

瓦質土器には鍋，羽釜，火鉢がある。148は鍋である。149は羽釜の上半部である。大和型である。150は火鉢の底部である。

常滑には甕がある。147は甕の口縁部であるが，赤羽・中野編年の１ｂ型式で古い。混入である。

丹波には擂鉢がある。151・152は擂鉢である。151は７本単位，152は６本単位の櫛状工具による擂目が付く。

瀬戸美濃には碗，鉢，皿，片口，香炉，蓋がある。134は碗である。139は香炉である。脚部が欠損している。142は折縁小皿である。143は志野の菊皿である。144は片口である。鉄釉が掛かる。145は香炉の底部である。146は蓋である。

唐津には碗と皿がある。135は碗であるが，口縁部が立ちあがりのまま直に上方を向く。136～138も碗であるが，短い頸部がある。140・141は丸皿で内面中位に段が付く。141は碁笥底である。

土坑ＳＫ72の出土土器。陶磁器類はおおよそ17世紀前半のものと考えられる。

土坑ＳＫ７出土土器・陶磁器類（図版８）

瀬戸美濃，丹波が出土している。

瀬戸美濃には皿と鉢がある。153は梅文皿である。見込みには梅枝文，体部外面には草花文が鉄絵で描かれている。154は織部の沓茶碗である。

丹波には擂鉢が１点ある（155）。１条単位の擂目が付く。

土坑ＳＫ７出土の土器・陶磁器類は17世紀前半と考えられる。

土坑Ⅱ区ＳＫ６出土土器・陶磁器類（図版９～11）

土師器，瓦質土器，備前，信楽，丹波，瀬戸美濃，唐津，磁器が出土している。

土師器には皿，鍋，焙烙がある。169～176は小皿，178～195は皿である。小皿は形があまり整わず，指頭圧痕が著しい。Ⅺ期古のものである。225は鍋である。226は焙烙の口縁部である。

瓦質土器には火鉢がある。230は火鉢の底部である。深鉢である。231は火鉢の浅鉢である。

備前には盤がある。228は盤である。

信楽には壷がある。211は壷の底部である。体部外面には櫛目が横位に施される。

丹波には壷と擂鉢がある。210は壷の口縁部から肩部である。227は擂鉢の口縁部である。

瀬戸美濃には天目茶碗，皿，向付がある。196～198は天目茶碗である。199は端反皿である。200は志野の菊皿である。201は丸皿である。209は志野の向付である。角違の深向の破片である。221は大皿である。折縁の上面には櫛描の波状文が，見込みには鉄絵の花文が施される。

唐津には碗，皿がある。202・203は丸皿である。204は端反の菊皿である。205・206は皿で，口縁部の下部が屈曲し，内面中位に段が付く。207・208は深手の皿である。213は刷毛目の碗である。229は大皿である。

磁器には碗と皿がある。212は白磁の端反碗である。214は青磁の筒茶碗である。215・216・219・220は染付の丸碗である。217は白磁の丸碗，218は染付の丸碗である。217･218は素地がやや粗い。222は染付の皿の口縁部である。223も染付の皿の口縁部である。口縁内面には唐草文が巡る。224は皿の底部である。

土坑Ⅱ区ＳＫ６出土の土器・陶磁器類はおおよそ17世紀前半のものであろう。

土坑Ⅱ区ＳＸ１出土土器・陶磁器類（図版８）

土師器，緑釉陶器，瀬戸美濃，唐津が出土している。

土師器には皿があるが，図示していない。

緑釉陶器には椀がある。156は椀の底部である。混入したものである。

瀬戸美濃には皿がある。157は丸皿である。158はひだ皿である。159は志野の丸皿である。160は菊皿である。161は黄瀬戸の端反皿で，見込みには花文が施される。

唐津には碗と皿がある。168は鉢の口縁部から体部である。162は絵唐津の皿の口縁部である。鉄絵の一部が内面に残存する。透明釉が掛かる。163～167は皿であるが口縁部の下部で屈曲し，内面中位には段がある。

土坑Ⅱ区ＳＸ１出土の土器・陶磁器類は16世紀代のものも含むが，おおよそ17世紀前半のものである。

３．緑釉陶器・灰釉陶器（図版12）

包含層から出土した緑釉陶器・灰釉陶器について報告する。

緑釉陶器には椀がある。232～239は緑釉陶器である。232は椀の口縁部，これ以外は椀の底部である。232･233は京都産，234・235は猿投産，236～239は近江産である。

灰釉陶器には椀がある。240～242は椀の底部である。

４．白磁・青磁（図版12・13）

包含層から出土した白磁・青磁について報告する。

白磁には碗，皿，水注がある。243～250は碗の口縁部である。243は白磁碗Ⅱ類，244～248は白磁碗Ⅳ類，249は白磁碗Ⅸ類である。251～255は碗の底部である。251～254は白磁碗Ⅳ類，255は白磁碗Ⅴ類である。256～263は皿である。256～259は皿の口縁部で，256～258は体部下部で屈曲し，口縁は外反する。258は見込みに文様の一部が残る。259は高台がない皿である。260～263は皿の底部である。260は見込みに花文が彫られている。263は高台がない。264は水注の注口の破片である。

青磁には碗，皿，鉢，壷，瓶がある。265～278，281・282は碗である。このうち265～272は口縁部，273は体部，274～278，281・282は底部である。265・266は内面に花文が彫られており，龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２類である。268～270は外面に蓮弁文があり，龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類である。271・272はラマ式蓮弁文の龍泉窯系青磁碗で

ある。273は内外面には櫛状工具により施文される。同安窯系青磁碗Ⅰ類である。274・275・277・278は外面に蓮弁文があり，龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類である。274･275は見込みに花文が施される。282は見込みに文様が彫られている。龍泉窯系青磁碗Ⅰ－４類である。279・280・283は皿である。279は高台がつかない。280は内面に櫛状工具により施文される。同安窯系青磁皿Ⅱ－１－２類である。284～287は瓶の口縁部である。288，289は鉢である。288は鉢の口縁部である。289には底部内面には花卉文がヘラにより彫られる。また底部に脚が付く。

５．焼塩壷・つぼつぼ（図版14～16）

江戸時代の素焼土器である焼塩壷とつぼつぼをここで一括して報告する。

まず焼塩壷について報告する。出土遺構から江戸前期と江戸中後期に大きく分けることができるので，それぞれ順に紹介する。

まず江戸時代前期の焼塩壷には１区では土坑ＳＫ72，土坑ＳＫ07，２区では土坑ＳＫ01，土坑ＳＫ06，土坑ＳＸ01の各遺構出土資料がある。また，渡辺分類で身Ａ類・蓋Ａ類とされたものは，下限が天和二年（1682）前後であり，他遺構出土のこれらも取り上げることにする。身Ｇ類についても同様に取り上げる。

まず主要遺構出土の焼塩壷について。290～295は土坑ＳＫ72出土の焼塩壷である。290～293が身，294・295が蓋である。身について290のみＧ類で，他291～295はＡ類である。蓋は294・295ともＡ類で，身Ａ類の蓋になる。296～298は土坑ＳＫ７出土の焼塩壷で，296･297は身のＡ類，298は蓋Ａ類である。296は胴部下位がやや膨らみ，口がややすぼまる。円筒状を呈する他のＡ類とは形態的に若干異なる。299～301は土坑Ⅱ区ＳＸ１出土の焼塩壷で，299・300は身，301は蓋である。299はＡ類であるが，300はＥ類である。301は蓋のＡ類である。302～309は土坑Ⅱ区ＳＫ６出土の焼塩壷である。302～304が身のＡ類，305～309が蓋のＡ類である。305は天井部が丸く球面状を呈している。他の個体とは異なる。310～312は土坑Ⅱ区ＳＫ１出土の焼塩壷である。310・311は身Ａ類，312は蓋Ａ類である。

ついでその他遺構，ないし包含層出土の焼塩壷身Ａ類・身Ｇ類・蓋Ａ類について。313～329は身Ａ類，330は身Ｇ類である。323・325～328には「みなと藤左衛門」の刻印がある。329は他のＡ類と異なり，頚部の括れがなく口縁がやや内傾する。袋状の器形を呈している。口縁部の断面形態は他のＡ類と異ならない。330は身Ｇ類であるが，口縁部はすぼまって上方に立ち上がる。下半を欠くが胴部は膨らむようである。331～338は蓋Ａ類である。331～334は作りがやや薄く，335～338は厚い。331は天井部がやや丸みを帯びている。

次に江戸中後期の焼塩壷を報告する。主要な出土遺構には井戸ＳＥ３，土坑Ⅱ区ＳＫ３・土坑Ⅱ区ＳＫ４がある。その他渡辺分類の身Ｂ類・Ｋ類，蓋Ｂ類・Ｃ類もここで取り上げる。

まず主要遺構出土の焼塩壷について。339～341は井戸ＳＥ３出土の焼塩壷で，339は蓋Ｂ類，340は身Ｂ類，341は蓋Ｃ類である。340には「泉湊伊織」の刻印がある。341の蓋の中央には直径３㎜の穴があけられている。342･343は土坑Ⅱ区ＳＫ３出土で，342は蓋Ｂ類，343は身Ｂ類である。343には「泉湊伊織」の刻印がある。蓋受けは段状でしっかりしている。344～347は土坑Ⅱ区ＳＫ４出土の焼塩壷蓋Ｂ類である。

その他遺構ないし包含層出土の焼塩壷について。347～349は焼塩壷の身Ｂ類である。347は口縁が上方に立ち上がり少し尖り気味に収まる。蓋受けはゆるやかで痕跡的に残る。「泉湊伊織」の刻印がある。これに対し348・349は口縁部が上方にわずかに立ち上がり上面を面取りしている。蓋受けは段状で比較的しっかりしている。これらにはどちらにも「泉湊伊織」の刻印がある。350～352は蓋Ｂ類である。353は身Ｋ類である。355・356は蓋Ｂ類である。上面より底面の直径が小さく，側面観が逆台形を呈する。これらの出土遺構は土坑Ⅱ区ＳＫ２であり，元治元年（1864）の焼失の際，埋められた遺構である。19世紀中頃のものである。これらは他の蓋Ｂ類よりも新しいものといえる。

次につぼつぼについて報告する。357～385は第３次発掘調査で出土したつぼつぼである。大きく３つに分類することができる。Ⅰ類：胴部は球状を呈し，口縁部は内傾したまま丸く収まるもの（357～364）。Ⅱ類：胴部は球状を呈するが，口縁部はやや上方に立ち上がり頚部を形成するもの（365～380）。Ⅲ類：胴部はややつぶれた

球状を呈し，口縁部はやや上方に立ち上がり頸部を形成するもの（381～385）。382の胴部には1個所草書体で「伊」が，383にも同じく「妙」が墨書されている。Ⅰ類・Ⅱ類はほぼ同じような法量で口縁部の大きさも近似するが，Ⅲ類はⅠ・Ⅱ類よりも口径・胴径とも若干大きくなる。Ⅲ類の出土遺構をみると江戸後期にまとまることから，Ⅲ類はⅠ類・Ⅱ類よりも新しい形態と考えられよう。

第3節　瓦　類

第3次発掘調査では瓦類は整理箱にして約100箱出土した。時期的には平安時代前期から現代に至るまでのものである。大きく4つの時期，すなわち平安時代前期～中期，平安時代後期，鎌倉時代後期～室町時代，江戸時代に分けることができた。その順番で報告する。種類としては軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・鬼瓦・鳥衾瓦？を確認した。なお平安時代後期以降の軒瓦については型式を記述しているが，それについては付論2を参照していただきたい。

1．平安時代前期～中期の軒瓦（図版22）

前期の軒丸瓦1点と中期の軒平瓦1点が出土している。35は前期の軒丸瓦である。蓮華文軒丸瓦と思われるが内区が剥落しており具体的な文様がよくわからない。外区外縁は無文，内縁には珠文4個残存する。表面黒色，断面灰白色を呈し，軟質である。36は中期の軒平瓦で，池田瓦窯の製品である。唐草文が簡略化されて，波状の表現になっている。瓦当面上端を横位にヘラ削りされる。凹面は布目痕が残る。凸面について瓦当の顎部から平瓦部にかけて縦位幅広のヘラケズリが施される。焼成は良好，色調は表面黒色，断面褐灰色を呈する。1区土坑ＳＫ43より出土。

2．平安時代後期の瓦

軒瓦について，軒丸瓦は9型式9種9点，軒平瓦は14型式14種16点が出土している。また平安時代後期の瓦がまとまって出土した遺構には1区土坑ＳＫ129がある。

土坑ＳＫ129出土瓦類（図版17～20）

土坑ＳＫ129からは完形の九州系軒丸瓦2点（1・2）と瓦当面完存の播磨系軒平瓦1点（3）のほか，九州系の丸瓦･平瓦が多数出土している。1はＮＭ006Ａ型式。九州系の複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。丸瓦部の凸面は格子目タタキ成形，凹面には布目痕を残す。凹面玉縁近くに円形の押印が1つある。玉縁には釘孔が1つあけられている。焼成は良好で，表面黒灰色，断面白色を呈している。2はＮＭ006Ｂ型式。1と同じ九州系の複弁8葉蓮華文軒丸瓦であるが，瓦笵・タタキ原体とも同笵ではない。丸瓦部凹面の押印はある。釘孔はある。焼成は良好。3はＮＨ006型式。播磨系の唐草文軒平瓦である。瓦当面は完存しているが平瓦部が2/3が欠失している。全体に灰白色を呈するが，焼成は良好で良く焼き締まっている。4・5は平瓦である。いずれも凸面に格子タタキ目，凹面に布目痕を残す。5は凸面の周縁が面取りされている。瓦質で表面黒色，断面灰白色を呈する。よく焼き締まっている。6～10は丸瓦である。7以外は凸面に格子タタキ目，凹面には布目痕を残す。6はほぼ完形品である。凸面小口付近に短い直線のヘラ記号が1ヶ所施されている。須恵質でよく焼き締まる。7は玉縁部の破片で，凸面を縄目タタキ成形の後丁寧にナデ消している。玉縁には釘孔がある。須恵質で表面・断面とも青灰色を呈する。硬質である。8は胎土に砂をやや多く含む。軟質である。表面黄灰色，断面にぶい橙色を呈する。9・10は小口を含む破片である。ともにやや軟質で，表面黄灰色，断面にぶい橙色を呈する。9は凸面の小口付近をヨコナデ，凹面は面取りしている。凹面に円形の押印が施されている。土坑ＳＫ129出土瓦はほとんどが凸面格子タタキ目の瓦で占められており，それ以外の瓦はほんのわずかである。軒瓦の時期はいずれも12世紀前半でも古い様相を示しており，製作時期がほぼ同時期と考えられる資料である。これにあわせて丸瓦･平瓦もまた，同時期・同じような生産地のものであろう。また2次焼成の痕跡がみられない。これは建物に使用された瓦ではなく，生産地より六角堂周辺に運ばれてきたが，使用される前に何らかの理由により埋没した資料と考えた方が

よいであろう。

その他の遺構・調査区出土軒瓦（図版21・22）

11～18は軒丸瓦である。このうち11～13は蓮華文軒丸瓦，14～18は巴文軒丸瓦である。

11・12は播磨系の複弁８葉蓮華文軒丸瓦である。11はＮＭ005型式で，12はＮＭ007型式。被熱して赤変している。江戸時代の土坑ＳＫ１より出土。12は剥落が著しく外区の珠文についてはよくわからない。ともに軟質で，表面断面とも灰白色を呈する。13はＮＭ009型式の蓮華文軒丸瓦で栗栖野瓦窯の製品である。花弁は摩滅してよくわからないが，複弁12葉になるとみられる。この瓦当面の真中には縦に笵傷が入っている。２次焼成を受けており，全体に灰白色でやや軟質である。14～16は珠文を巡らした巴文軒丸瓦である。いずれも中央官衙系の軒丸瓦で瓦当裏面には指頭圧痕が顕著である。14はＮＭ013型式。被熱して，表面にぶい橙色，断面灰白色を呈する。軟質である。土坑ＳＫ18出土。15はＮＭ014型式。表面褐灰色，断面灰色を呈し，軟質である。16はＮＭ012型式。表面黒色で断面白色を呈し，やや硬質によく焼き締まっている。土坑ＳＫ19出土。17・18は巴文のみの軒丸瓦である。17はＮＭ019型式。中央官衙系の軒丸瓦で右巴である。表面黄灰色，断面灰白色を呈し，やや硬質に焼き締まっている。Ⅱ区池跡ＳＤ３出土。18はＮＭ020型式。播磨系の軒丸瓦で左巴である。表面断面とも青灰色を呈し，須恵質に堅く焼き締まっている。溝ＳＤ１出土。

19～34は軒平瓦である。このうち19～29は唐草文，30～33は巴文，34は剣頭文である。19はＮＨ002型式。栗栖野瓦窯の製品である。瓦当は平瓦広端部の凸面側に粘土を付加して成形している。瓦当凸面にヨコナデ，側面をヘラケズリする。表面褐灰色，断面灰白色を呈する。やや軟質である。20も栗栖野瓦窯の製品である。ＮＨ004型式。瓦当文様は瓦笵に対して瓦当面の厚さが足りず，下外区の下部が欠けている。胎土はやや砂が多い。表面褐灰色，断面灰色を呈する。やや軟質である。21も栗栖野瓦窯の製品でＮＨ003型式。瓦当は半折り曲げ技法により成形するが，瓦当凸面にヨコケズリ，頚部に強めのヨコナデが施される。側面と凹面側縁もヘラケズリが施される。瓦当文様について瓦当面の厚さが足りず，上外区の上部の文様が欠けている。２次焼成を受け黒変している。土坑ＳＫ109出土。22はＮＨ007型式の播磨系の軒平瓦である。破断面の中心を平瓦広端部の痕跡が横断しており，瓦当は包み込み技法により成形されていたことがわかる。表面・断面とも灰色を呈し，やや硬質に焼き上がる。土坑ＳＫ43出土。23･24は中央官衙系の軒平瓦で同笵品である。ＮＨ013型式である。どちらも瓦当の成形はいわゆる半折り曲げ技法であるが，23は頚部にヨコナデが施される。またどちらも２次焼成を受け表面灰白色を呈し軟質である。23は包含層出土，24は土坑ＳＫ80出土。25はＮＨ015型式。中央官衙系の軒平瓦。瓦当凸面にはヨコナデ，瓦当外縁上端面，側面・凹面側縁にはヘラケズリが施される。表面黒色，断面白色を呈し硬質である。土坑ＳＫ43出土。26はＮＨ017型式で幡枝瓦窯の製品。瓦当凸面にヘラケズリが施される。表面黄灰色，断面灰白色を呈し，硬質である。土坑ＳＫ28出土。27はＮＨ016型式で栗栖野瓦窯の製品。２次焼成により赤変して軟質である。土坑ＳＫ40出土。28はＮＨ026型式で中央官衙系の軒平瓦。瓦当の成形はいわゆる完全な折り曲げ技法である。平瓦部凸面には縄目タタキ目が，凹面には布目痕が残る。また，凹面にはヘラ記号がある。瓦当外縁上端面と側面にはヘラケズリが施される。胎土はやや砂を含み，表面・断面とも褐灰色を呈する。やや硬質である。29はＮＨ019型式で播磨系の軒平瓦である。須恵質で硬質に焼きあがる。土坑ＳＫ15･ＳＫ32出土。30はＮＨ031型式で中央官衙系の軒平瓦。左三巴の連巴文の左端のみが残存する。２次焼成により赤変して軟質である。土坑ＳＫ42出土。31はＮＨ030型式で栗栖野瓦窯の製品。左三巴文の雁巴文で，右端の雁文と巴文３個分が残存する。表面黒色を呈するが，やや軟質である。32はＮＨ032型式で播磨系の軒平瓦。左三巴の連巴文で，右端より３個分が残存する。須恵質で硬く焼き締まる。表面黒色を呈する。土坑ＳＫ42出土。33はＮＨ033型式で中央官衙系の軒平瓦。連巴文で右端より２個分が残存するが，右側の巴は陰刻の左三巴，左側の巴は陰刻の三巴だが，巴の向きには左と右が共存する。これと同文の瓦に神出古窯跡出土瓦があるが，これは瓦当の成形は半折り曲げ技法で中央官衙系の瓦である。２次焼成を受け表面・断面とも灰白色を呈し軟質である。土坑ＳＫ119出土。34はＮＨ034Ａ型式で中央官衙系の軒平瓦。下向きで幅広の剣頭文である。瓦当の成形は折り曲げ技法で，

瓦当凸面と瓦当外縁上端面にヨコナデが施される。2次焼成により赤変しておりもろい。胎土には砂を多く含む。

丸瓦・平瓦（図版22）

37・38とも井戸ＳＫ92より出土した平瓦である。37は讃岐産の平瓦である。凸面粗い縄目タタキ，凹面布目痕を残す。凹面広端部近くに方形の非常に低い出っ張りが認められる。表面には中心に縦方向の筋状の隆起があるが，特に文様などは施されていない。この出っ張りはほぞの痕跡ではないかと推測される。おそらく，ほぞがある何か別の器具であったものを凸型台に転用したため，できた出っ張りと考えられる。38は凸面では縄目タタキをナデ消しており，凹面には布目痕のほか糸切り痕が顕著に残る。一部タテナデが施される。側縁はヘラケズリしたのち上部を面取りしている。また広端部下部を面取りしている。須恵質で硬質に焼きあがる。表面・断面とも暗青灰色を呈する。このほか平瓦・丸瓦には凸面に縄目タタキ目，あるいは格子目タタキ目を施したものが多数出土している。

3．鎌倉・室町時代の軒瓦

軒丸瓦は4型式8種，軒平瓦は6型式7種が確認できた。出土量が多く当初の整理方針が特徴的なもののみを取り上げることとしていたため，全点を把握しきれていない。ここでは特徴的なものを報告することになる。軒丸瓦9点，軒平瓦19点である。まとまって出土した遺構には江戸時代初期の土坑，1区土坑ＳＫ42と1区土坑ＳＫ07がある。

土坑ＳＫ42出土軒瓦（図版23）

軒丸瓦は1点，軒平瓦は4点出土している。39はＮＭ101Ｂ型式の巴文軒丸瓦である。離れ砂を使用。胎土はわずかに砂を含む。表面黒色，断面灰色でやや軟質である。40はＮＨ114型式。瓦当面上端・顎凸面・顎裏面が面取りされる。平瓦凹面は布目痕が残るが一部ナデにより消されている。表面・断面とも灰色で硬質である。41～43はＮＨ114改型式の唐草文軒平瓦である。界線は上のみで下はないが，唐草文の細部が一致することからＮＨ114改型式はＮＨ114型式の下縁を切り詰めたものと判断できる。瓦当面上端・顎凸面・顎裏面が面取りされる。平瓦凹面は布目痕が残存するが，一部ナデにより消される。これらも表面・断面とも灰色で硬質であるが，41のみ2次焼成を受け一部赤変している。

土坑ＳＫ７出土軒瓦（図版25）

軒丸瓦が2点，軒平瓦が1点ある。軒丸瓦について70･71はともに巴文軒丸瓦である。70はＮＭ106Ａ型式。表面黒色，断面灰色を呈し，硬質である。71はＮＭ106Ｂ型式。表面黒色，断面灰色を呈し，硬質である。軒平瓦は72で，ＮＨ117型式の唐草文軒平瓦である。全体に丁寧に磨かれる。瓦当外縁上端･顎裏面を面取りする。表面黒色，断面灰色を呈し，硬質である。

その他の遺構・包含層出土軒瓦（図版23・24）

まず軒丸瓦について。44～49はいずれも外区内縁に珠文を伴った三巴文の軒丸瓦である。巴の頭は尖っている。44はＮＭ102型式。表面・断面とも灰色を呈しやや硬質である。溝ＳＤ05出土。45はＮＭ103型式。離れ砂を使用する。2次焼成を受け赤変しており，軟質である。土坑ＳＫ19出土。46はＮＭ105Ｃ型式。離れ砂を使用。表面黒色，断面灰色を呈し，やや軟質である。土坑ＳＫ125より出土。47は凸面広端部に多く粘土を付加して瓦当面を作っており，瓦当面が丸瓦部と比べるとやや高い位置にある。この点鳥衾瓦の可能性が指摘できる。離れ砂を使用。凸面タテナデ。凹面布目痕をナデ消している。胎土は砂を含む。表面黒色，断面褐灰色を呈し，やや硬質である。Ⅱ区溝ＳＤ04出土。48は右三巴文の軒丸瓦である。離れ砂を使用。凸面ナデ，凹面は布目痕が残る。表面暗灰色，断面灰白色を呈し，やや軟質である。49はＮＭ103Ｄ型式。2次焼成を受け一部煤けている。土坑ＳＫ08より出土。50は右三巴文の軒丸瓦である。珠文が4個残存する。胎土には砂を多く含む。表面灰色，断面暗灰色でやや軟質である。土坑ＳＫ45出土。51は残存率が悪いが右巴文軒丸瓦である。珠文が5個残存する。瓦当裏面下縁にヨコナデが施される。表面・断面とも灰色を呈し，やや軟質である。土坑ＳＫ109より出土。

次いで軒平瓦について。52～69はすべて唐草文軒平瓦である。中心飾りには蓮華，菱形，宝珠がある。52～54はＮＨ101型式。54では笵割れが瓦当外縁上端中央に１個所と外縁右中央に１個所の計２個所認められる。平瓦部凹面はナデにより平滑であるが，細かな布目痕が残る。瓦当面上端と顎凸面，顎裏面を面取りする。胎土は細かな砂を含む。表面黒色，断面灰白色を呈し，硬質である。55はＮＨ102型式。瓦当外縁の面取りはない。平瓦部凹面は布目痕が残るが，一部ナデにより消されている。凸面はタテナデ。顎凸面・顎裏面ともヨコナデにより仕上げられている。表面･断面とも灰色を呈し，須恵質で硬質に焼き締められている。56はＮＨ104型式。平瓦部凹面は摩滅しており調整方法がわからない。布目痕が一部残存している。凸面は頚部から平瓦部にかけてタテナデ。顎凸面の調整も摩滅して不明，顎裏面はヨコナデが施される。２次焼成を受け白化し，軟質になっている。57はＮＨ107型式。瓦当外縁上端を面取りする。平瓦部凸面は布目痕が残るが，一部ナデにより消されている。凸面はタテナデ。顎凸面・顎裏面とも面取りされている。胎土に細かな砂を含む。表面・断面とも褐灰色を呈し，やや軟質である。土坑ＳＫ103より出土。58～60はＮＨ108型式である。平瓦部凹面は布目痕が残るが，一部ナデにより消されている。凸面は頚部にヨコナデが認められるが，平瓦部の調整は欠損しておりわからない。顎凸面･顎裏面を面取りする。顎形態には若干の個体差がある。59は表面灰色，断面灰白色を呈し，硬質である。58･60は２次焼成を受け赤変している。58は土坑ＳＫ10，59は１区包含層，60は溝ＳＤ05より出土した。61・63はＮＨ114型式。平瓦部凹面について61は布目痕が残すが，63は布目痕を丁寧にナデ消している。同笵ではあるが調整技法の差が指摘できる。凸面は頚部にヨコナデが認められる。瓦当外縁上端･顎凸面･顎裏面を面取りする。ともに表面灰色，断面黄灰色を呈し，硬質である。61は土坑ＳＫ28より，63は土坑ＳＫ06より出土。62はＮＨ115型式。ＮＨ114型式と同文であるが，唐草の曲がり方が異なる。特に62は下向きの唐草の巻き込み方が２回ほど屈曲しぎこちない。平瓦部凹面は布目痕が残す。凸面は頚部にヨコナデが認められるが，平瓦部の調整は欠損しておりわからない。瓦当外縁上端・顎凸面・顎裏面を面取りする。表面・断面とも灰色を呈し，硬質である。62は土坑ＳＫ28より出土。64～66はＮＨ114改型式。平瓦部凹面について個体差がある。64･65は布目痕が残す。66は布目痕を一部ナデ消している。これも同笵ではあるが調整技法の差が指摘できる。凸面は頚部にヨコナデが認められる。瓦当外縁上端・顎凸面・顎裏面を面取りする。64は表面灰色，断面黄灰色を呈し，硬質である。65・66は２次焼成を受けている。64は２区包含層，65は土坑ＳＫ06より，66は土坑ＳＫ36より出土。67はＮＨ116型式。凹面は布目痕を残す。凸面についてはよくわからない。瓦当外縁上端・顎凸面・顎裏面を面取りする。表面黒色，断面灰色を呈し，硬質である。Ⅱ区土坑ＳＫ06出土。68はＮＨ113型式。瓦当外縁上端･顎凸面を面取りする。全体に摩滅が著しい。２次焼成を受けたためか，表面・断面灰白色を呈し，軟質である。太子堂周辺の池内より出土。69はＮＨ111型式。顎凸面・顎裏面を面取りする。表面黒色，断面暗灰色を呈し，硬質に焼き締まる。１区包含層出土。

４．江戸時代の軒瓦

軒丸瓦は３型式19種，軒平瓦は21型式21種が確認できた。また「小丸」「小菊」とも呼ばれる小型の軒平瓦も出土している。ここでは「棟丸瓦」とするがこれも２型式２種確認できた。これも出土量が多く当初の整理方針が特徴的なもののみを取り上げることとしていたため，全点を把握しきれていない。ここでは当初抽出した特徴的なものを報告する。軒丸瓦３点，軒平瓦４点，棟丸瓦２点である。まとまって出土した遺構には２区溝ＳＤ03がある。

Ⅱ区太子堂池跡出土軒瓦（図版25）

軒丸瓦２点と軒平瓦１点がある。軒丸瓦について73･74はともに巴文軒丸瓦である。同笵でＮＭ201Ｋ型式である。丸瓦部凸面はタテナデ，凹面は布目痕をナデ消している。胎土は砂を多く含む。73は表面灰色，74は表面黒色でともに断面は白色である。硬質である。軒平瓦は75の唐草文軒平瓦がある。ＮＨ210型式。平瓦部凸面･凹面ともナデが施される。顎凸面・顎裏面を面取りする。表面黒色，断面灰色を呈し，硬質である。

その他の遺構・包含層出土軒瓦（図版26）

76はＮＭ254型式の棟丸瓦である。全体に摩滅が著しい。２区包含層より出土。77～79は唐草文軒平瓦である。77はＮＨ201型式。瓦当外縁上端・顎凸面・顎裏面を面取りする。表面・断面とも灰色を呈し，硬質である。土坑ＳＫ32出土。78はＮＨ208型式。瓦当面にミガキが施される。雲母を使用。瓦当外縁上端・顎凸面・顎裏面を面取りする。表面黒色，断面灰色を呈し，硬質である。２区包含層出土。79はＮＨ212型式。右脇区には「大仏瓦師右□」という刻印がある。瓦当外縁上端・顎凸面・顎裏面を面取りする。表面黒色，断面白色を呈し，硬質である。Ⅱ区土坑ＳＫ06出土。80は高熱により変形した軒丸瓦である。型式はよくわからないが，おそらくＮＭ106Ａ型式のように思われる。江戸時代の井戸ＳＥ11より出土した。81はＮＭ251型式の棟丸瓦である。

５．鬼瓦（図版27）

第３次調査では鬼瓦の破片を多数回収しているが，復元して形態が明確なのは82の鬼瓦のみである。長さ32.4㎝，幅37.8㎝，最大厚21.1㎝，鬼板厚7.0㎝。手作りで頭から顎まで空洞となっている。眉間には宝珠がある。角は後向きに伸び，角の後ろに耳がある。角の下に目があり，鼻は大きく盛り上げ鼻穴を通している。口は真中が狭く左右端を大きく開ける。牙は左右端に上下４本ある。歯は下顎に左右

第39図　第３次調査出土瓦の刻印・記号集成（実大）

４本づつ描かれている。唇は薄い。髭は下顎の左右に１本づつ束ねられている。鬼の左右鬼板の外縁には押印により直径３㎝程の円形文が並べられている。一方に５個１列に並ぶ。その円形文帯の周りを１条の沈線が巡っている。裏面は全体をケズリにより仕上げている。鼻の裏側は大きく抉っており，おそらくここに縦位置の把手が付くと考えられる。

６．刻印・ヘラ記号（第39図）

第３次調査で出土した平安時代から江戸時代の瓦には刻印・記号を施したものが10点出土している。

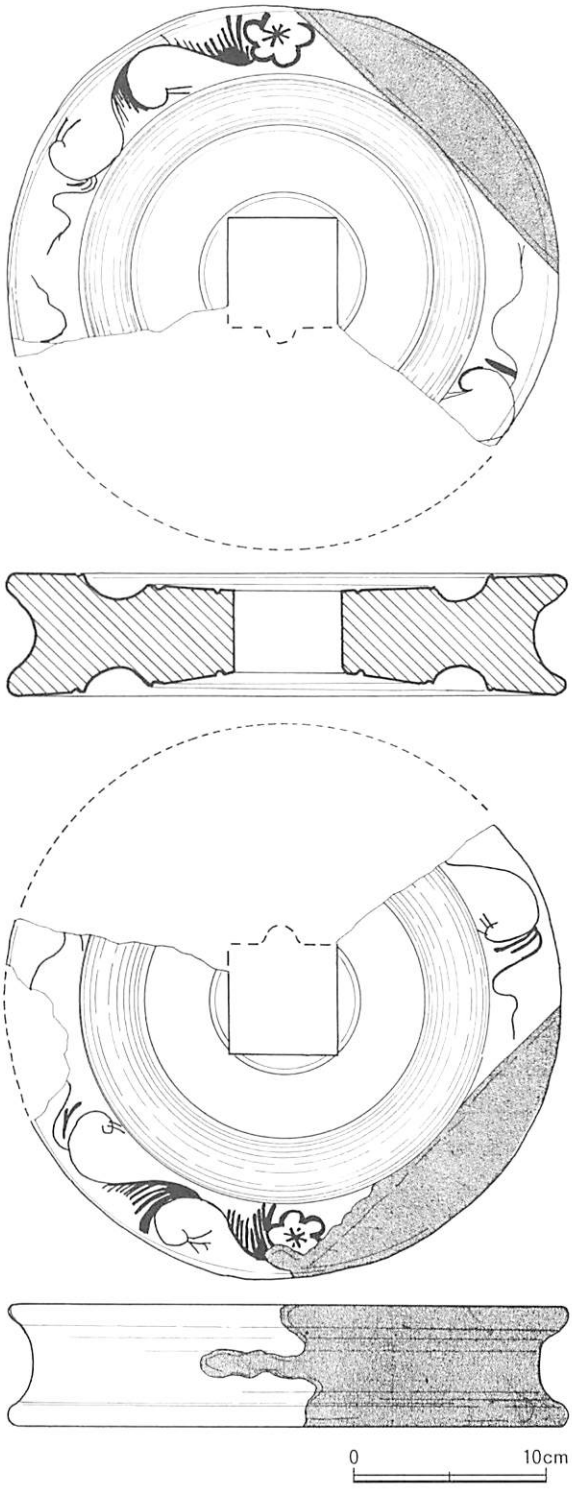
まず刻印から１～３は土坑ＳＫ129から出土した瓦に押されていた丸印の刻印である。線が１個所切れている。１は軒丸瓦１の丸瓦部凹面玉縁との接続部分に押されていた。この軒丸瓦は平安時代後期の九州系軒丸瓦でＮＭ006Ａ型式である。２は同じく九州系の平瓦４の凹面中央やや狭端よりに押されている。３も九州系丸瓦９の凹面中央の広端近くに押されている。１～３は同一の印である可能性がきわめて高い。４は土坑ＳＫ113より出土した丸瓦破片に施されたものである。丸に二の字の刻印である。連結面中央に押されていた。この瓦は破片であり，詳細は不明であるが，おそらく室町時代の瓦と推測される。５は前述した軒平瓦79の脇区にある方形の刻印である。「大仏瓦師右□」と陰刻される。この軒平瓦は江戸時代のＮＨ212型式である。６は２種類の刻印がある。右は丸に二の字，左は一部欠けるが方形の印で「大仏瓦町瓦師井上重良□□」と陰刻される。これも江戸時代のものである。７も３と同様の方形の刻印である。約左半分が残るが,「深草瓦師青木善右エ門」と陰刻されている。江戸時代のものである。８は円形の印で「深宇」と陰刻されている。江戸時代のものである。

またヘラ記号については２点確認した。９は軒平瓦28の平瓦部凹面右につけられたヘラ記号である。キの字状を呈する。この軒平瓦は平安時代後期のＮＨ025型式である。10は土坑ＳＫ129より出土した丸瓦６に付けられていたヘラ記号である。直線である。丸瓦の凸面中央の広端面近くに縦に施されていた。平安時代後期の瓦である。この時期の九州系の瓦について，中央官衙系瓦と異なり軒瓦でなくとも刻印やヘラ記号が施されていることがわかる。

第４節　土製品

第３次調査で出土した土製品には瀬戸美濃産織部滑車，伏見人形，泥面子，土製円盤がある。ここでは瀬戸美濃産織部滑車を取り上げる。

１は瀬戸美濃産の織部滑車である（第40図）。約1/3欠



第40図　織部滑車実測図（1/4）

損するが，直径28.8cm，厚さ6.4cmで，中央に一辺5.6cmの方形の穴が刃物で切り取られたように空けられている。全体を長石釉が掛けられた後，正面・裏面とも鉄釉で花蔓草が描かれている。一方に銅緑釉が浅く漬け掛けされ，縁部に仕上げられている。瀬戸市新七窯より類例が採集されている(註2)。江戸時代後期のものである。包含層より出土。

第5節　石製品

第3次調査で出土した石製品には石仏と石硯がある。以下分けて報告する。

1．石仏（図版28）

第3次調査では石仏1点出土した。1は花崗岩製の石仏である。舟形光背の中央を方形に掘りくぼませている。そこに菩薩形の仏像が2体横に並立して彫られている。二尊仏である。太子堂池跡より出土した。

2．石硯（図版29・30）

第3次調査では石硯が13点出土した。長方硯（2～11），楕円硯（12），台形硯（13）がある。長方硯には大きさに大小がある。4と6は裏面を浅くくぼませる。5は裏面に「高嶋虎斑石」の線刻がある。10にも裏面に「岩本卯／享保二年／卯四月／□不月／岩本卯太郎」の線刻がある。3はＳＥ03出土，5はⅡ区ＳＫ03，7はＳＥ04，これ以外は包含層出土である。江戸時代のものである。12は楕円硯で側面は傾斜しており，裏面には凹レンズ状の浅い抉りがある。包含層出土。13世紀を中心とする時期のものと考えられる。14は台形硯で裏面を抉り左右側縁に沿った脚部を削り出している。側面は傾斜している。石材の縞模様が顕著である。包含層出土。形態から鎌倉時代から室町時代前期のものと考えられる。石材は3と4が砂質ホルンフェルス，それ以外は粘板岩である。

第6節　銅製品

第3次調査で出土した銅製品には小形の仏像，独鈷杵，碗？，伏鉦，炭ばさみ，火箸，水滴，小柄の鞘，小柄，切羽，環，球，煙管，装飾，釘がある（図版31・32）。1は小形の如意輪観音菩薩像である。裏面には腹部あたりに板状の突起があり先に丸い穴があいている。光背に取り付けるためのものであろう。この仏像は懸仏と考えられる。作風から鎌倉時代後期，13世紀のものと考えられる(註3)。高さ4.9cm，幅2.8cm，厚さ1.7cm。Ⅱ区ＳＤ03出土。2は小形の阿弥陀如来立像である。鍍金がわずかに残る。作風から鎌倉時代後期のものであろう。残存する高さ4.4cm，残存幅2.3cm，厚さ1.9cm。包含層出土。3は独鈷杵である。両端が尖り気味で眼が明確に表現されているところは古い要素である。鎌倉時代のものであろう。高さ11.8cm，幅1.9cm。4は菊花形の碗である。お供えの碗であろう。Ⅱ区土坑ＳＸ01出土。5も碗である。Ⅰ区ＳＫ15出土。6は伏鉦である。穴の開いた耳が2つ付いている。また脚も高くかつやや裾広がりである。伏鉦としては古く15世紀後半のものであろう。外径10.2cm，高さ2.8cm。包含層出土。7は炭ばさみである。長さ19.1cm，幅3.0cm。Ⅱ区土坑ＳＫ03出土。8は火箸である。長さ29.4cm，最大径0.5cm。Ⅱ区ＳＤ03出土。9もおそらく火箸の頭であろう。包含層出土。10・11は簪である。飾りの部分は欠失し，髪に挿す先の部分のみが残る。10・11はⅡ区Pit 7出土。12は水滴である。水を入れる口と注ぐ口とも一部欠損しているがほぼ完形である。長さ5.5cm，幅3.5cm，残存する厚さ1.2cm。Ⅱ区11Ｈ・Ⅰ瓦溜りより出土。13は小柄である。銅板を折り曲げて平たい筒状に形作る。表には鳥・雲・人物の文様が浮き彫りにより施されている。高さ9.8cm，幅1.5cm，厚さ0.6cm。なおこれに入る刀子は14である。ともにⅡ区石列より出土。15はハバキである。高さ2.0cm，幅3.4cm，厚さ1.0cm。Ⅱ区石列より出土。16は切羽である。長さ4.0cm，幅2.3cm。Ⅰ区土坑ＳＫ08出土。17は銅の球である。直径1.45cm。Ⅰ区ＳＫ133出土。18は銅の環である。飾りの一部であろう。Ⅰ区土坑ＳＫ40出土。19～21は煙管の雁首である。火皿につながる直前が細くなり，比較的急に上方に曲がるもの（19・20）と，あまり細くならないまま緩やかに斜め上方に曲がるもの（21）の2種類がある。前者は江

戸時代18世紀前半，後者は18世紀後半のものである。19・20は包含層，21はⅡ区石列より出土。22～24は煙管の吸口である。比較的長く口に向かって徐々に細くなるもの（22・23）と短くかつ口に向かって急に細くなるもの（24）の２種類がある。ともに18世紀以降のものである。22はⅠ区ＳＫ133出土，23はⅠ区土坑ＳＫ12出土，24はⅡ区ＳＫ04出土。25は留金具である。Ⅰ区土坑ＳＫ133出土。26～28は木製の棒状物の飾り金具の一部である。26・27は棒状物の端部を覆っていたものであろう。28は棒状物に巻きつけていたものと考えられる。いずれも木質部はなく，金具のみが残る。26はⅡ区石列，27は包含層，28はⅠ区土坑ＳＫ40より出土。27は板状の飾り金具の一部である。この金具を固定した釘が一部残存する。Ⅱ区石列より出土。28・29は薄く細い飾り金具である。28はⅡ区ＳＸ01出土，29はⅡ区包含層出土。30は板状の飾り金具の破片である。平面形は台形状になるとみられる。形や文様を浮きだたせるような作りになっている。Ⅰ区ＳＫ01出土。31も板状の飾り金具の一部であるが，平面形端を丸くした小札状を呈する。端には釘で固定するための穴があいている。Ⅱ区石列より出土。32～34は文様を浮き彫りにした飾り金具である。32は菊花紋，33は五三桐紋，34は３つ連なった桜花紋が施されている。34には裏面に１ヶ所釘状の突起が付き，これによって固定されていたと考えられる。32・33はⅡ区ＳＫ02出土。34はⅠ区ＳＤ02出土。35は円盤状の飾り金具である。円形を浮きだたせるような作りになっている。中央に釘で固定する穴があいている。一部欠損。Ⅱ区ＳＫ02出土。36・37は引き金具である。ともにⅠ区土坑ＳＫ107出土。38は刀状の飾り金具である。Ⅰ区土坑ＳＸ02出土。39～49は銅釘である。このうち39と40は大形の釘である。ともにⅡ区ＳＸ01出土。41～49は小形の銅釘である。41・42・46・48はⅡ区ＳＫ04，43・47はⅡ区ＳＫ02，44はⅡ区ＳＸ01，45はⅠ区ＳＫ02，49はⅡ区ＳＫ06出土である。

第７節　鉄製品

刀子，ナイフ，釘がある（図版32）。14は刀子である。13の鞘に入っていた。長さ12.1cm，幅1.2cm。50はナイフである。柄と刃は一体で作られている。近代のものである。51・52は釘である。ともにⅡ区ＳＫ03出土で江戸時代のものである。このほか釘は遺構を中心に多量に出土している。

第８節　骨製品

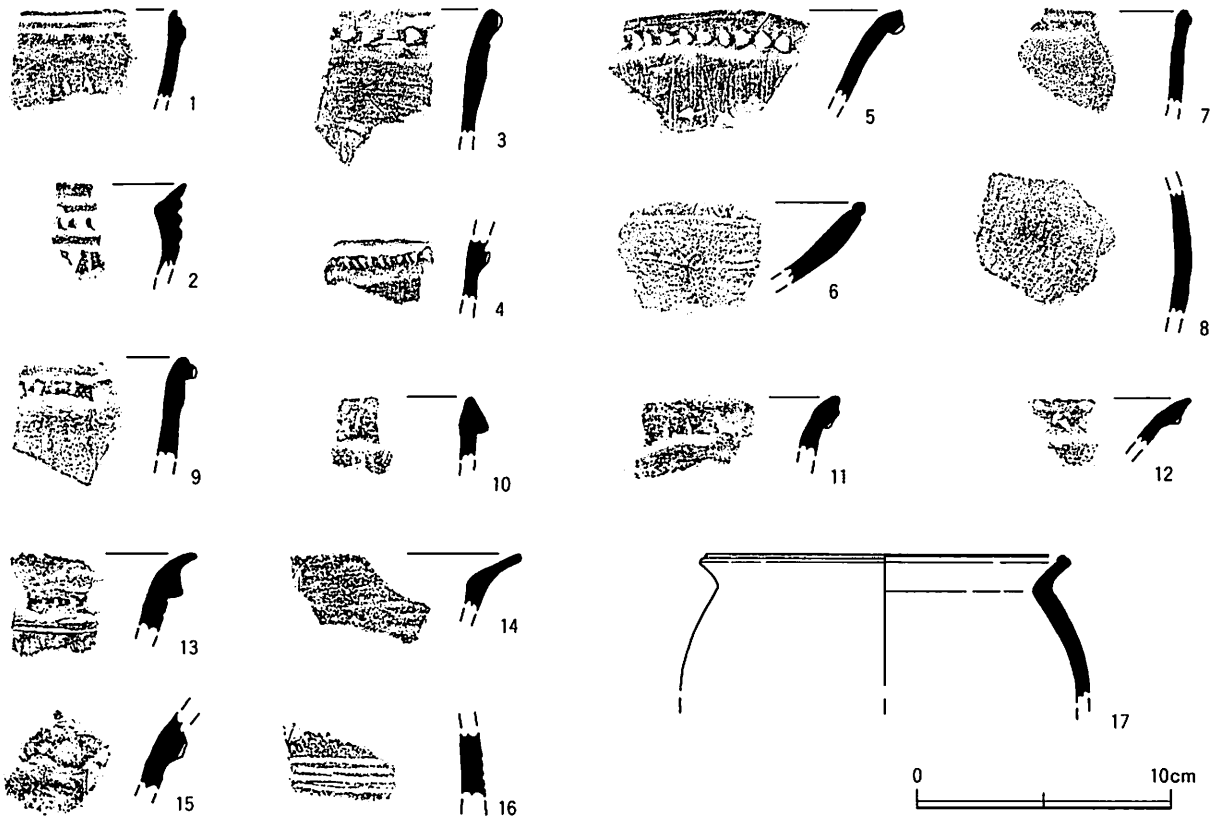
簪，双六の駒，不明骨製品が出土している（図版32）。53は簪である。長さ13.0cm，幅0.8cm。Ⅱ区ＳＫ04出土。54は双六の駒である。直径2.0cm，厚さ0.55cm。包含層出土。

第９節　木製品

55は板状木製品である（図版32）。巡礼札の可能性があるが，文字はよく確認できない。残存する長さ8.5cm，幅2.9cm。Ⅰ区ＳＫ23より出土。

第10節　銭貨

豆板銀，渡来銭，寛永通宝が出土している（図版32）。56から71は豆板銀である。56は長径2.8cm，重さ19.8ｇ，57は長径2.6cm，重さ15.8ｇ，58は長径2.5cm，重さ15.0ｇ，59は長径2.5cm，重さ12.3ｇ，60は長径2.2cm，重さ11.3ｇ，61は長径2.4cm，重さ18.1ｇ，62は長径2.2cm，重さ15.0ｇ，63は長径2.2cm，重さ14.8ｇ，64は長径2.0cm，重さ9.5ｇ，65は長径1.8cm，重さ10.0ｇ，66は長径2.0cm，重さ10.5ｇ，67は長径1.7cm，重さ9.8ｇ，68は長径1.8cm，重さ10.0ｇ，69は長径1.8cm，重さ10.5ｇ，70は長径1.7cm，重さ10.0ｇ，71は長径1.0cm，重さ8.0ｇ。このほか図面を掲



第41図　第３次調査出土縄文土器・弥生土器実測図（1/3）

載していないが，宋銭，明銭，寛永通宝が多量に出土している。

第11節　縄文・弥生時代の遺物

縄文土器、弥生土器及び石器が出土している（第41図）(註4)。１～12・14・15は縄文土器である。１は鉢の口縁部である。口縁部は断面三角形状を呈し、口唇には２条の沈線が施される。後期前葉の堀ノ内１式に類例がある。２は深鉢の口縁部である。外面には横位の沈線の間に刺突文が施される。また図では示せなかったが、口唇には三角形状の刺突文が施されている。中期初頭の新保・新崎式系の土器である。３・５・７・９～12は突帯文土器の深鉢の口縁部、４は胴部である。８は下半にタテケズリが施される。突帯文土器の胴部とみられる。６は浅鉢の口縁部である。口縁直下、内外面に沈線１条が施される。後期前葉の縁帯文土器に類例がある。14は滋賀里Ⅲａ式の深鉢の口縁部である。外面には貝殻条痕文が残る。15は突帯文土器の壷の頸部である。突帯に横Ｏ字状の刻目が施されている。

13・16・17は弥生土器である。13は遠賀川系の甕の口縁部である。頸部に沈線２条と貼付突帯が１条巡る。16は壷の頸部である。ヘラによる沈線が４条以上施される。前期後半の土器である。17は第Ⅳ様式の甕である。

１～16は流路ＳＤ６、17はＩ区ＳＫ６より出土した。なお、石器について図示していないが、流路ＳＤ６よりチャートの剥片が２点出土している。

註

(１)出土遺物を分類するにあたって下記の文献を参考にしている。

＜平安時代以降の土器類＞

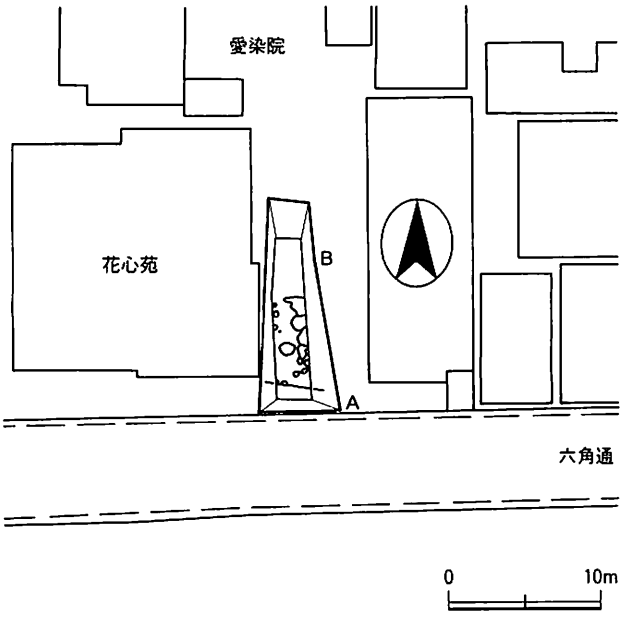
横田洋三『出土土師皿編年試案』（財團法人古代學協會『平安京左京五条三坊十五町』所収，京都，昭和56年)。

横田洋三『土師器皿（Ｂタイプ系）の器形，規格の変化と製作技術について』（財團法人古代學協會『押小路殿　平

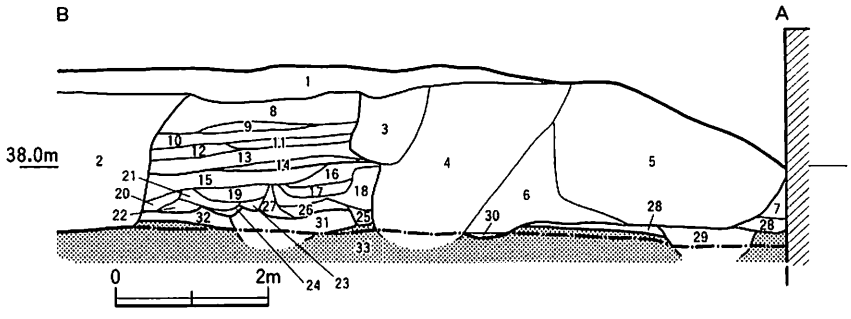
安京左京三条三坊十一町』所収，京都，昭和56年)。
財團法人古代學協會・古代學研究所『平安京提要』(京都，平成５年)。
小森俊寛・上村憲章『京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究』(財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『研究紀要』３所収，京都，平成７年)。
＜東播産須恵器＞
森田　稔『東播系中世須恵器生産の成立と展開―神出古窯址群を中心に―』(『神戸市立博物館研究紀要』第３号掲載，神戸　昭和61年)。
＜瓦器椀＞高槻市教育委員会『上牧遺跡発掘調査報告書』(高槻，昭和55年)。
＜瓦質土器・羽釜＞
菅原正明『畿内における土釜の製作と流通』(『文化財論叢』所収，京都，昭和58年)。
＜瓦質土器・奈良火鉢＞
立石堅志『瓦質土器（奈良火鉢)』(中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』所収，高槻，平成７年)。
＜瀬　戸＞藤沢良祐『古瀬戸中期様式の成立過程』(『東洋陶磁』第８号掲載，東京，昭和57年)。
藤沢良祐『瀬戸大窯発掘調査報告』(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ掲載，瀬戸，昭和61年)。
藤沢良祐『瀬戸古窯址群Ⅱ―古瀬戸後期様式の編年―』(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅹ掲載，瀬戸，平成３年)。
藤沢良祐『瀬戸古窯址群Ⅲ―古瀬戸前期様式の編年―』(『(財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第３輯掲載，瀬戸，平成７年)。
＜常　滑＞赤羽一郎・中野晴久『生産地における編年について』(『シンポジウム　中世常滑焼を追って』資料集所収，愛知県美浜町，平成６年)。
＜信　楽＞木戸雅寿『信楽』(中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』所収，高槻，平成７年)。
畑中英二『信楽焼の考古学的研究』(彦根，平成15年)。
＜備　前＞伊藤　晃・乗岡　実・石井　啓・重根弘和・上西高登『中世陶器の物流―備前焼を中心として』(『日本考古学協会2004年度広島大会研究発表資料集』所収，広島，平成16年)。
＜輸入陶磁器＞
横田賢次郎・森田　勉『大宰府出土の輸入陶磁器について―型式分類と編年を中心として―』(『九州歴史資料館研究論集』４所収，太宰府，昭和53年)。
森田　勉『14～16世紀の白磁の分類と編年』(『貿易陶磁研究』No.２掲載，東京，昭和57年)。
亀井明徳『日本出土の明代青磁碗の変遷』(『鏡山猛先生古希記念古文化論攷』所収，福岡，昭和55年)。
上田秀夫『14～16世紀の青磁碗の分類について』(『貿易陶磁研究』No.２掲載，東京，昭和57年)。
小野正敏『14～16世紀の染付碗・皿の分類と年代』(『貿易陶磁研究』No.２掲載，東京，昭和57年)。
＜江戸時代の九州産陶磁器＞
九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年―九州近世陶磁学会10周年記念―』(佐賀県有田町，平成12年)。
＜焼塩壷＞渡辺　誠『焼塩壷』(江戸遺跡研究会編『江戸の食文化』所収，東京，平成４年)。
＜石　塔＞川勝政太郎『日本石材工芸史』(京都，昭和48年)。
＜石　硯＞水野和雄『日本石硯考』(『考古学雑誌』第70巻４号掲載，東京，昭和60年)。
(２)藤沢良祐『本業焼の研究（１)』(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ所収，瀬戸，昭和62年)。
(３)仏像・仏具については井口善晴氏・松浦正昭氏より御教示いただいた。
(４)縄文土器・弥生土器については泉　拓良氏・伊藤淳史氏・冨井　眞氏より御教示いただいた。

第6章　第4次調査試掘調査

第4次調査の本調査に先立って試掘調査を行った。位置は六角堂境内の南東部，愛染院の参道に当たるところである。長さ16.5m，幅5.5mのトレンチを設定し，重機により地山面まで掘り下げて，地山面上の遺構と断面観察による土層の堆積状況の確認を行った（第42・43図，図版90・91）。その結果，地表下2.1mにて地山面を確認した。そして地表より1.3m下までは天明の大火以降の焼土および盛土層，そこから2.0mまでは宝永の大火以降の焼土層とその時期の土坑，そこから地山面までは室町時代以前の包含層であった。地山面上における遺構はトレンチ南部に2条の溝と12基の土坑を確認した。南側の溝は幅1.2mで遺構の輪郭が明確であり，しっかりとした溝と推測された。堆積土は腐植土で木質遺物が多数含まれていた。しかし，位置的には六角小路北側溝の推定ラインより南に2.75mずれている。緑釉陶器・灰釉陶器など平安時代の遺物が出土しているが室町時代のものと推測される。トレンチ中央部はまず元治元年大火時の大きな瓦溜が地山面にまで達しており，地山面上の遺構は確認できなかった。落ち込みと土坑はいずれも瓦溜に切られており，また出土遺物から室町時代から江戸時代の遺構とみられる。平安時代に遡る遺構については確認できなかった。出土遺物は緑釉陶器，灰釉陶器など平安時代遺物が含まれるが，大半は江戸時代以降の土師器皿，陶磁器類，伏見人形，瓦などである。



第42図　第4次調査試掘トレンチ平面図（1/500）



1	表土	12	黄褐色砂質土	23	黒褐色粘質土
2	近代の撹乱	13	黒褐色砂質土	24	暗灰茶色粘質土
3	瓦溜り	14	暗灰褐色粘質土	25	灰茶色砂質土
4	江戸時代の撹乱	15	灰茶色粘質土	26	灰茶色粘質土
5	江戸時代の撹乱	16	灰黒色粘質土	27	茶褐色土
6	灰褐色砂質土	17	暗灰色粘質土	28	青灰色粘土
7	黒褐色砂質土	18	茶褐色粘質土	29	灰黒色砂
8	黄茶色砂質土	19	暗茶色粘質土	30	灰褐色粘土
9	明黄色粘質土	20	黄灰色粘土	31	暗褐色砂質土
10	淡褐色砂質土	21	灰黒色粘質土	32	黄褐色砂質土（地山）
11	褐色砂質土	22	黄茶色粘質土		

第43図　第4次調査試掘トレンチ断面図（1/60）

第７章　第４次調査の層序と遺構

第１節　層序の概要

基本土層の観察は北壁にて行った（第44・45図）。基本的には第３次調査と同じである。今回の調査では平安～室町時代の堆積層は認められずほとんど同一面から遺構が掘り込まれていた。そして室町時代後半に１度整地がなされており，その層を確認している。江戸時代以降については焼亡するごとに盛土整地がなされ土層として確認している。この土層については既に第１次調査に確認されており今回の調査はそれを追認している。

基本層序は８層に分けられる。

Ⅰ層：表土層である。

Ⅱ層：江戸時代末の元治元年（1864）焼失時の整地層及び遺構埋土である。第１次調査の第１焼土層を含む。

Ⅲ層：江戸時代後期の天明八年（1788）焼失時の整地層及び遺構埋土である。第１次調査の第２焼土層を含む。

Ⅳ層：江戸時代中期の宝暦五年（1708）焼失時の整地層及び遺構埋土である。第１次調査の第３焼土層を含む。

Ⅴ層：褐色土層。江戸前期の元和四年（1615）焼失時の整地層である。第１次調査の第４焼土層に対応する。

東区で確認した。溝ＳＤ01以西に広がる。

Ⅵ層：灰褐色土層。室町時代後半の整地層である。

西区，溝ＳＤ01以西に広がる。第１次調査の第５焼土層に対応する。

Ⅶ層：黄褐色土層。地山である。

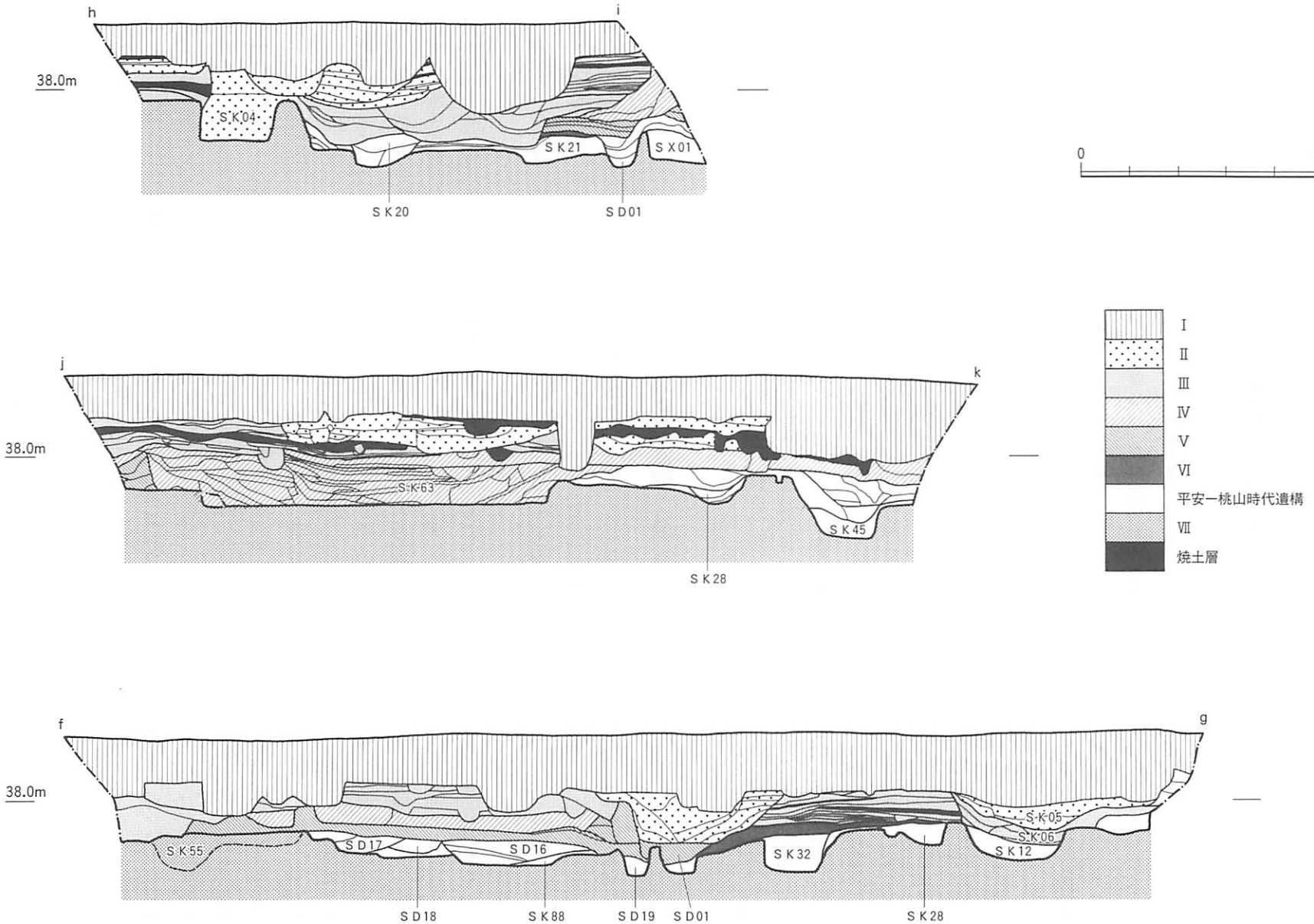
第２節　遺構の概要

第４次調査で発見された遺構は石列１条，塀１条，溝19条，土坑93基，ピット84基である（図版33・92）。予算と期間が限られた調査であったため，重機によってⅥ層上面まで掘削し，その面での調査終了後，Ⅵ層は重機により，Ⅶ層は人力により掘り下げて遺構の調査を行った。従ってⅥ層上面を第１面，Ⅶ層上面を第２面として以下概略を説明する。

第１面では溝13条，土坑　基が見つかった。いずれも江戸時代以降の遺構である。溝ＳＤ15が内部に柱穴をもち，布掘りと考えられることから建物にかかわるものとみられる。それ以外の溝は近現代の建物，旧愛染院庫裏の基礎工事による撹乱の一部である。土坑は基本的にごみ廃棄用の土坑である。特に土坑ＳＫ07，ＳＫ25，ＳＫ26は元治元年の大火に関わる瓦溜まりであった。また，土坑ＳＫ01，ＳＫ03，ＳＫ05，ＳＫ29，ＳＫ30は近年の植木の移植に伴う撹乱の一部である。土坑ＳＫ22，ＳＫ23は近現代の撹乱である。

第２面では石列１条，塀１条，溝19条，土坑93基が確認された。平安時代から室町時代の遺構である。ＳＤ01を境に大きく遺構の様相が異なる。すなわち，ＳＤ01以西はⅦ層が分布し，基本的には直径２～３ｍの廃棄土坑で構成される。また，西端から石列ＳＸ02と土坑ＳＫ02が見つかっている。土坑ＳＫ02は柱当たりと見られる堆積層があり柱穴の可能性がある。これらは現在の六角堂本堂に近接しており，おそらく過去の六角堂本堂の基壇とかかわってくるものと考えられる。ＳＤ01以東は溝と土坑で構成される。ＳＫ40は鎌倉時代の廃棄土坑である。ＳＤ01とＳＤ16・ＳＤ17に挟まれた区域は幅約５ｍで細長く南北に延び道と考えられる。室町時代後半から江戸時代前期のものである。また，室町時代後半の土坑ＳＫ38，ＳＫ42，ＳＫ78，ＳＫ81からは人骨が出土し墓と考えられる。

そしてＳＤ01が廃絶した後，塀ＳＡ01が作られ，このラインは境界として意識され続けている。これは結論からいえば，中世までの六角堂の東境であり，それより西は六角堂境内，東は六角堂の外である。したがって，遺



第44図　第4次調査調査区断面図1（1/120）

構の詳細はＳＤ01以西を西区，それより東を東区として述べることにする。

第３節　西区の遺構

１．平安時代後期の遺構

溝ＳＤ19（第46図，図版95下）

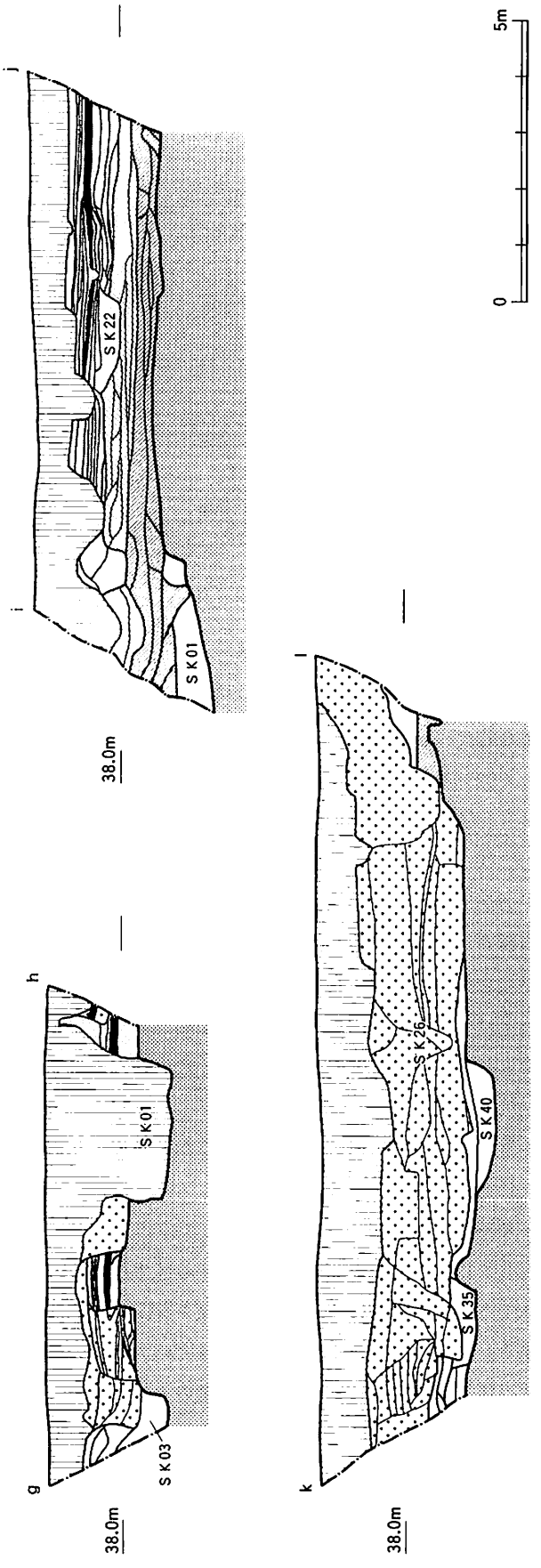
溝ＳＤ19は西区の東端の南壁付近に位置する。溝ＳＤ01の東隣を平行に，南北に走る溝である。溝ＳＤ01と土坑ＳＸ01に一部壊されて完全ではないが，幅1.1m，深さ40cm以上を測り，断面逆台形を呈する。埋土は灰色粘質土で，底面近くには砂利が多く堆積していた。しかしこの埋土や砂利の堆積は溝の機能時の滞水や流水の痕跡とは考えられない。北端が確認されているが，それは急に底面が上がり，かなり急な壁状を呈している。平面形では方形に近い。こうした状況は溝ＳＤ19が１，土坑ＳＸ01等によって壊されているが，これ以上北に延びず終点である可能性が高いことを示している。この溝は南壁にぶつかり，南端は調査区外にあり，わからない。遺構の位置や形状からおそらく六角堂の東を区画する溝と考えられる。

出土遺物には土師器皿，須恵器鉢・甕，灰釉陶器椀，常滑甕青磁碗・皿，白磁碗・皿，青磁碗・皿，軒平瓦，軒丸瓦，平瓦，丸瓦などがある。これらの年代はおおよそ11世紀中葉から12世紀末にまとまることから，11世紀中葉ごろに開削され，12世紀末には埋没した溝と考えられる。

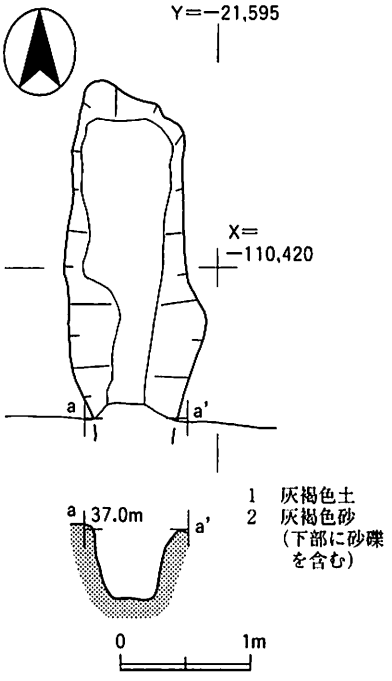
土坑ＳＫ32（第47図）

土坑ＳＫ32は西区東側に位置する。北端を一部土坑ＳＫ31に壊され，かつ一部南壁にかかり調査区外に広がるが，幅1.31m，長さ1.19m以上の平面不整方形を呈する。断面形は逆台形を呈し，深さ52cmを測る。埋土は灰オリーブ色砂質土である。遺物は底面近くから出土した。土器・瓦が中心でおそらくそれら廃棄するための土坑であろう。

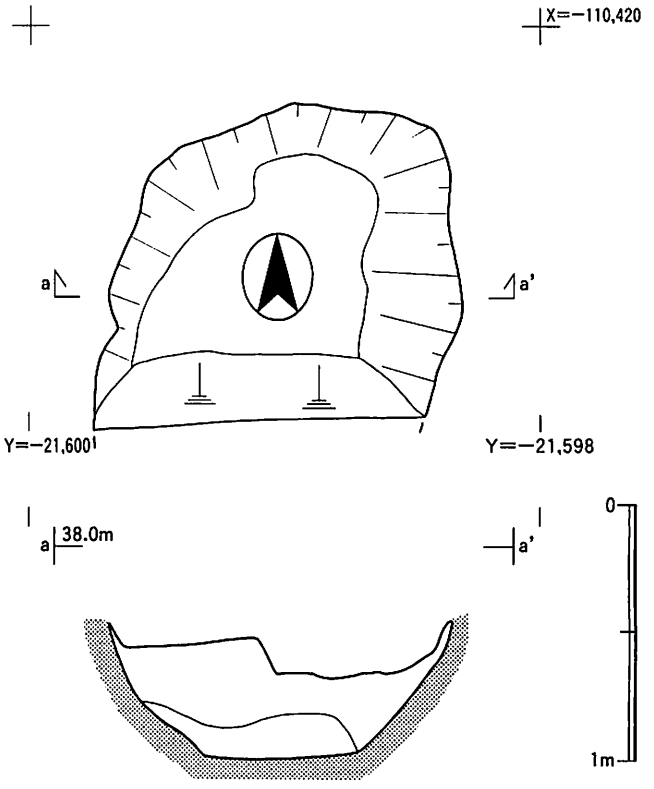
出土遺物には土師器皿・鍋・羽釜，瓦器皿，備前甕，白磁碗，青磁碗，軒平瓦，平瓦，丸瓦がある。時期は12世紀中葉から末に位置づけられよう。



第45図　第４次調査調査区断面図２（1/120）



第46図　溝ＳＤ19平面図・断面図（1/30）



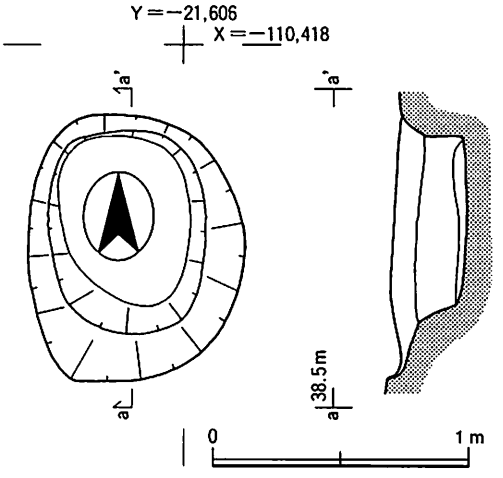
第47図　土坑ＳＫ32平面図・断面図（1/30）

2．鎌倉時代～室町時代前半の遺構

土坑ＳＫ02（第48図）

土坑ＳＫ02は西区西端に位置する。この位置は地山が高まりとして残っているが，その地山を掘り込んで形成されている。平面形は円形に近い楕円形。２段に掘り込まれており，上段の断面形は壁の傾斜が緩い浅い皿状，下段は壁が垂直に近い箱状を呈している。長さ1.03m，幅0.84m，深さ30cmを測る。埋土は中央に平面円形の茶褐色土があり，そのまわりを灰褐色土と直径30cmほどの礫が巡っていた。柱穴の可能性のある土坑である。

出土遺物には土師器皿破片，東播産こね鉢破片，瓦破片がある。15世紀前半の遺構であろう。



第48図　土坑ＳＫ02平面図・断面図（1/30）

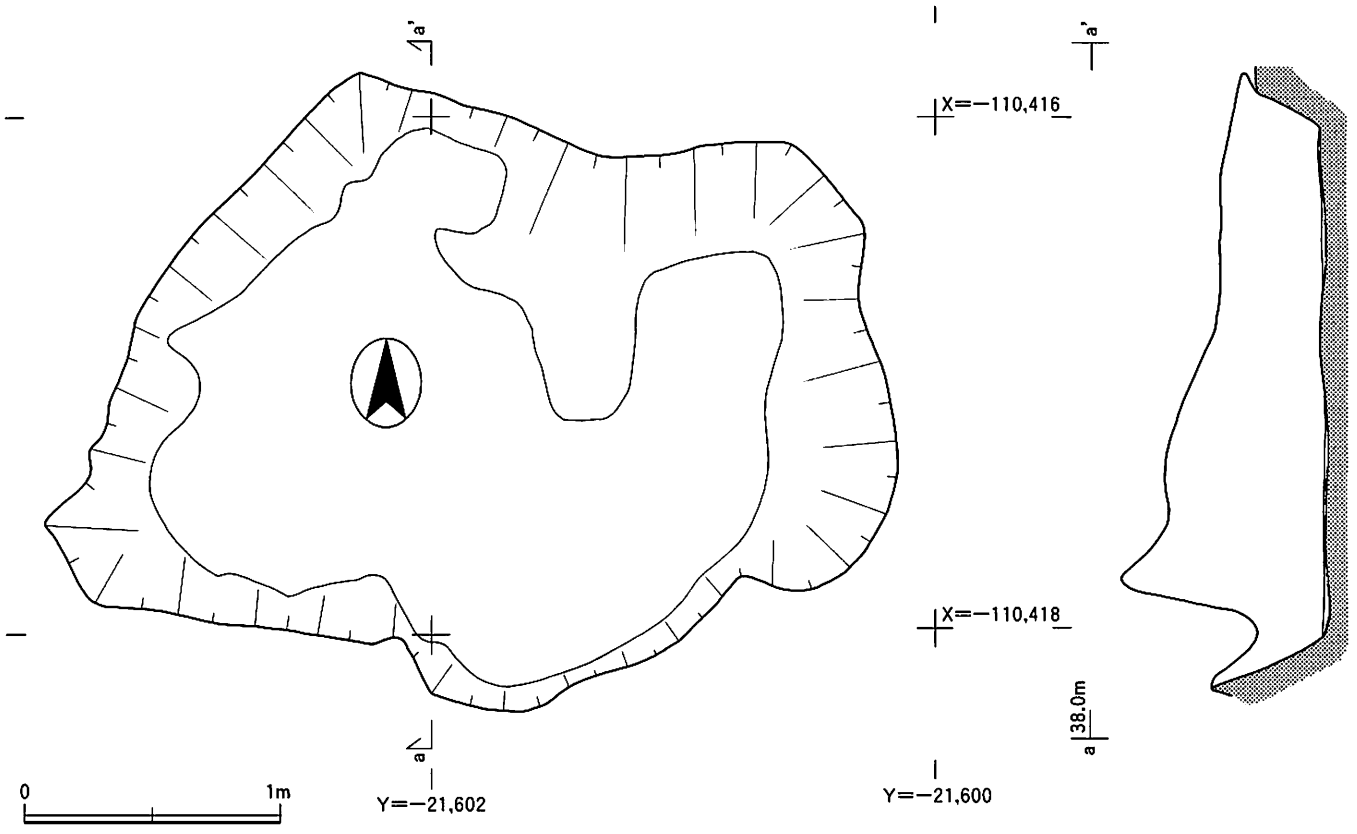
土坑ＳＫ19（第49図）

土坑ＳＫ19は西区中央北よりに位置する。土坑ＳＫ04・ＳＫ07・ＳＫ08・ＳＫ16・ＳＫ18・ＳＫ20・ＳＫ21に切られて下半部のみが残る。平面形は長さ2.47m，幅3.38mで不整な方形を呈し，深さは最深部72cmで断面逆台形を呈する。埋土は灰褐色土で子供の頭ほどの大きさの礫や瓦を多く含む。遺物は破片のみであること，埋土は一気に埋め戻されていることからごみ廃棄の土坑である。

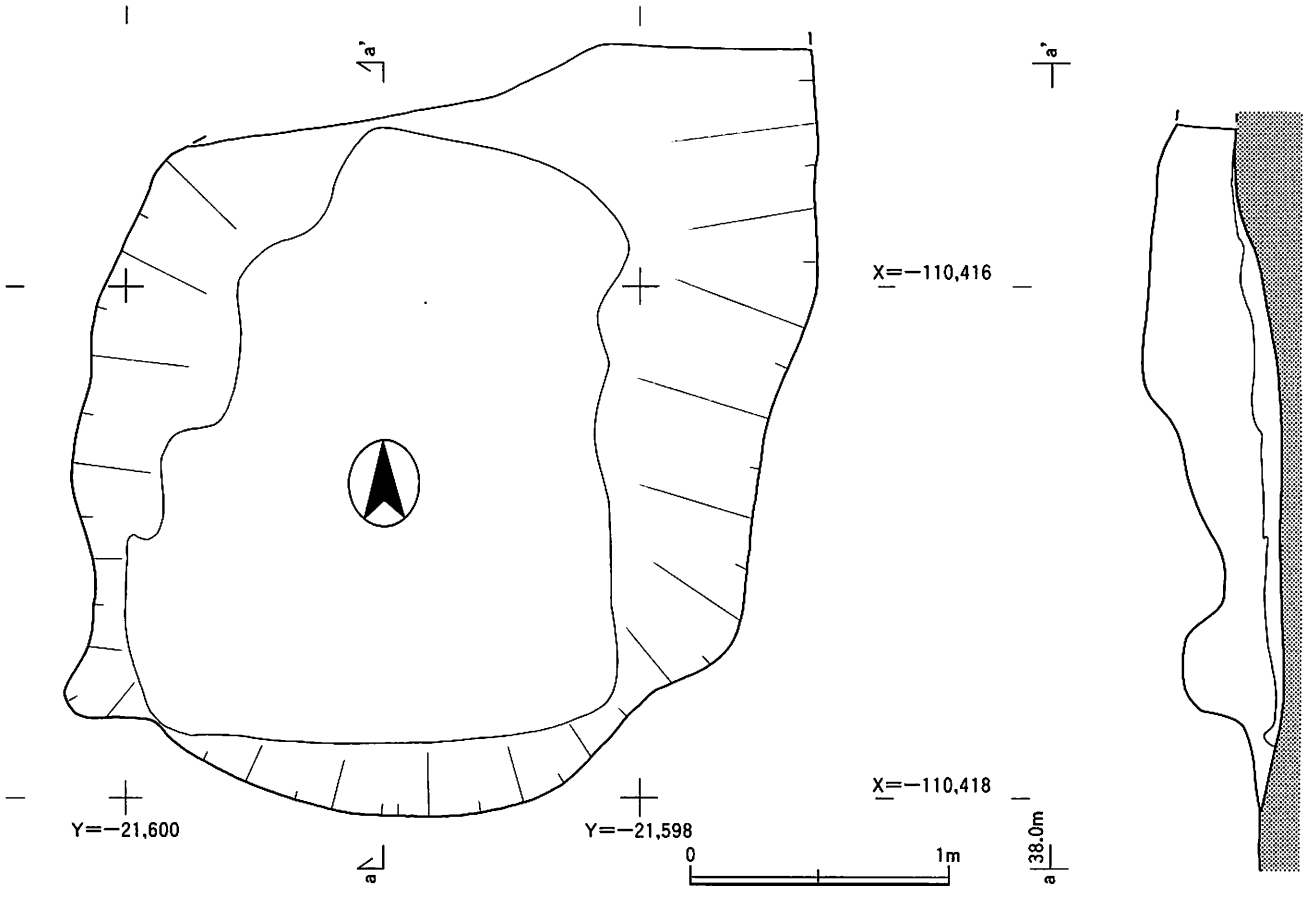
出土遺物は土師器皿，備前甕，信楽甕・擂鉢，瀬戸美濃天目茶碗，瓦がある。時期は15世紀前半に位置づけられよう。

土坑ＳＫ21（第50図）

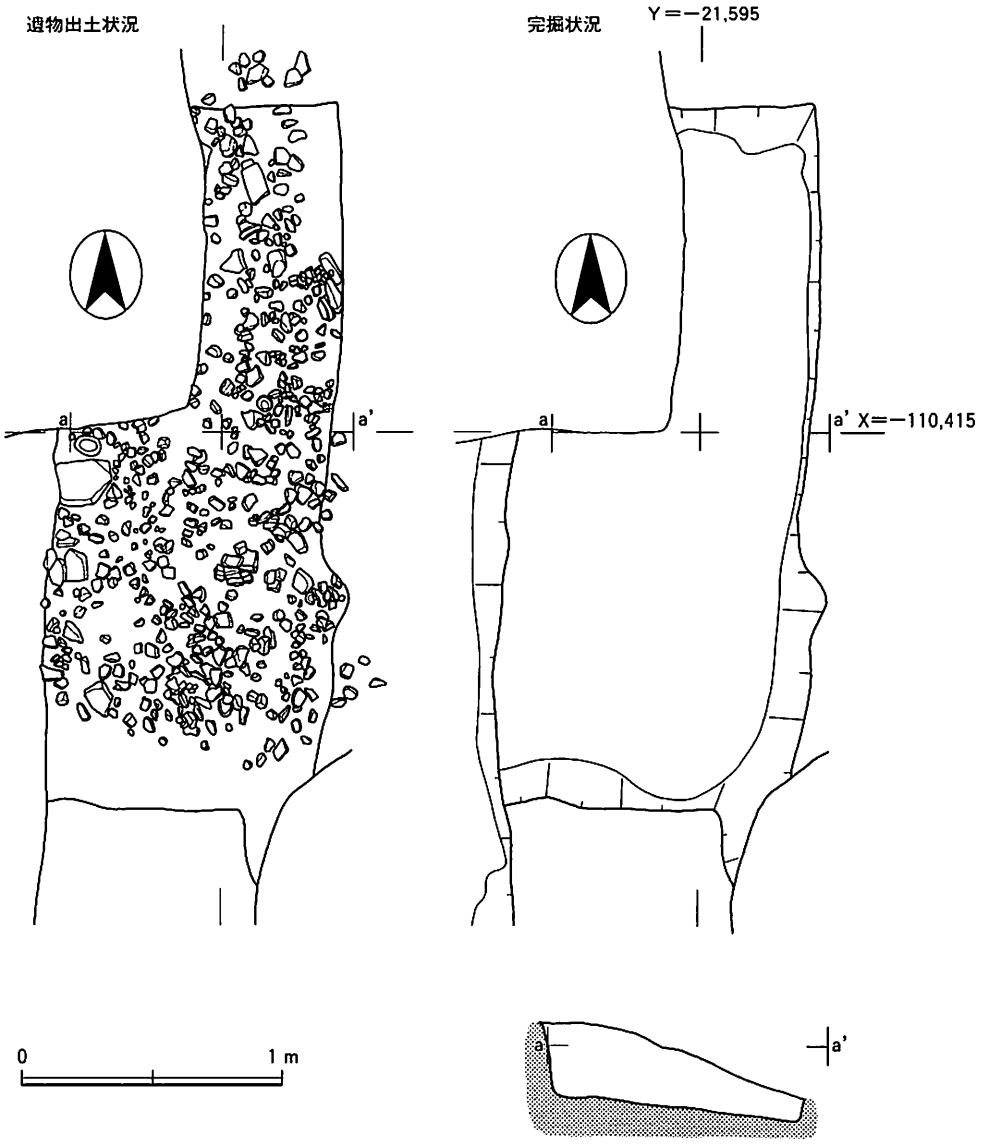
土坑ＳＫ21は西区中央北壁近くに位置する。溝ＳＤ01，土坑ＳＫ07・ＳＫ09・ＳＫ11・ＳＫ20に切られて下半部のみが残る。また，土坑ＳＫ19を切る。この土坑の北端は調査区外にあるため確定できないが，平面形は長さ



第49図　土坑ＳＫ19平面図・断面図（1/30）



第50図　土坑ＳＫ21平面図・断面図（1/30）



第51図　土坑ＳＸ01平面図・断面図（1/30）

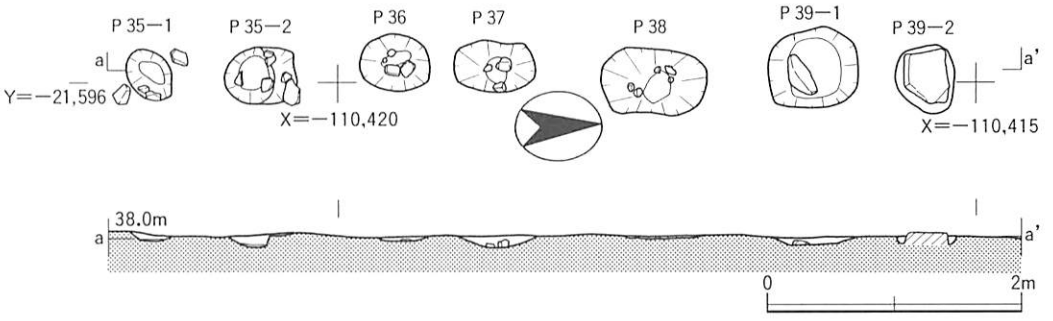
３ｍ以上，幅2.94ｍの不整方形を呈し，深さ56㎝で，断面逆台形を呈する。埋土は明褐色粘質土で下部に灰青色粘土ブロック，砂を含む。遺物は破片のみであること，埋土は一気に埋め戻されていることからごみ廃棄の土坑である。

出土遺物には土師器皿，須恵器鉢・甕，瓦質土器鉢・鍋・羽釜，常滑甕，備前甕，信楽甕・擂鉢，瀬戸美濃天目茶碗・灰釉皿・鉄釉鉢，白磁碗・皿，青磁碗がある。時期は15世紀中葉に位置づけられよう。

土坑ＳＸ01（第51図）

土坑ＳＸ01は西区東端に位置する。溝ＳＤ01に切られて西端がわからないのと北西部が調査区外にあるので確定できないが，平面形はほぼ長方形を呈するとみられる。断面は壁が垂直に近い逆台形である。長さ4.82ｍ，幅2.22ｍで深さ78㎝を測る。埋土は褐色砂質土で，子供の頭ほどの大きさの礫や土器･瓦を多く含む。検出当初は礫がまとまって出土していることと平面形が整っていることから掘り込み地業の可能性を考えた。しかし，遺構の規模が小さいこと，礫の分布に疎密があること，上部にこれに伴う礎石据え付けの痕跡が確認できなかったことからその可能性はないと判断した。遺物は破片のみであること，埋土は一気に埋め戻されていることからごみ廃棄の土坑であろう。

出土遺物には土師器皿，須恵器甕，瓦器皿，瓦質土器鉢・鍋・羽釜，常滑甕，備前甕，信楽甕・擂鉢，瀬戸美



第52図　塀ＳＡ01・ＳＡ02平面図・断面図（1/60）

濃天目茶碗・灰釉碗・灰釉皿・鉄釉鉢，白磁碗，青磁碗，軒丸瓦，軒平瓦，平瓦，丸瓦がある。時期は15世紀中葉に位置づけられよう。

３．室町時代後期～江戸時代前期の遺構

塀ＳＡ01・ＳＡ02（第52図）

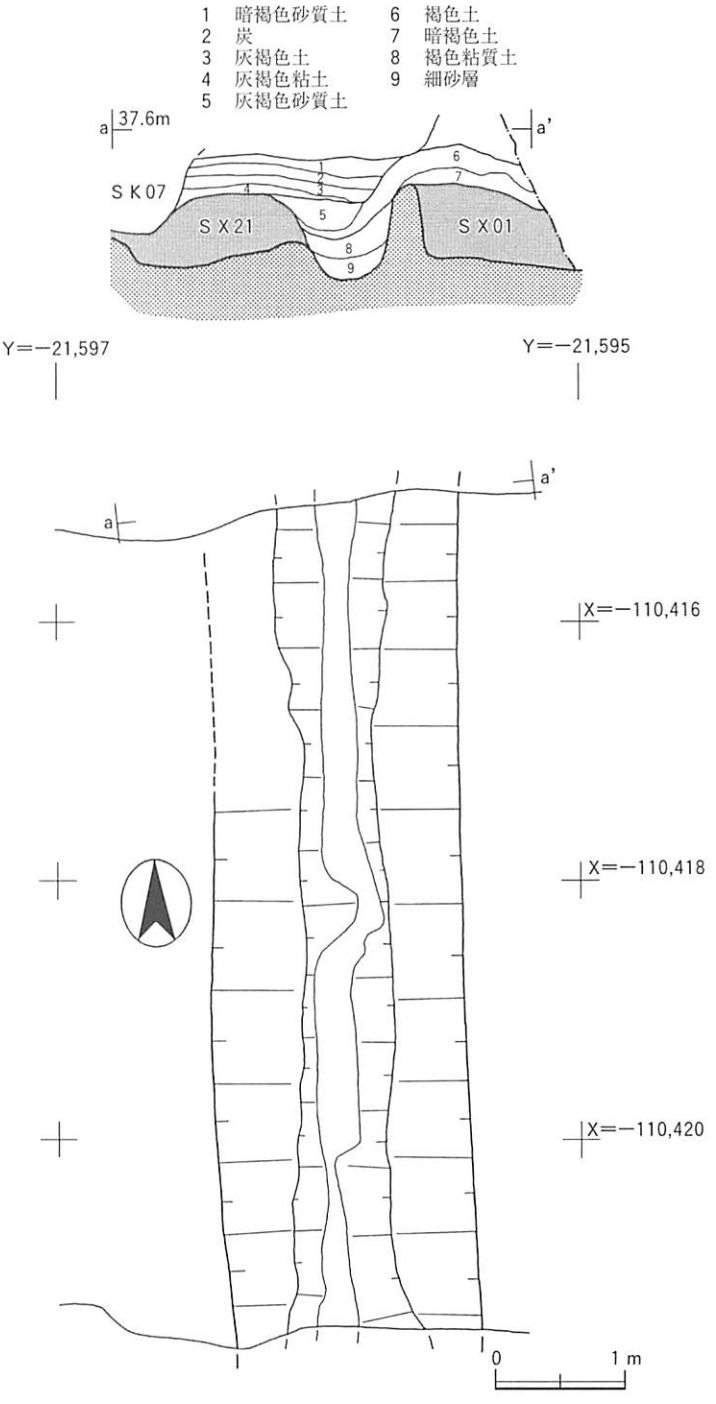
塀ＳＡ01・ＳＡ02は西区東端の溝ＳＤ01東肩とほぼ同じ地点に位置する。南北方向の塀である。溝ＳＤ01の上層を除去した時点で検出した。ＳＤ01下層を切って塀の基礎が削り出されており，その基礎の上面から礎石据え付け穴ないし柱穴が７基（Ｐ35－１，Ｐ35－２，Ｐ36，Ｐ37，Ｐ38，Ｐ39－１，Ｐ39－２）検出された。いずれも溝ＳＤ01上層掘削により上部が破壊されて底部付近のみが残存していると考えられる。Ｐ39－２には長さ36㎝，幅42㎝ほどの礎石が残る。それ以外は柱穴と考えられる。埋土はいずれも暗褐色土であった。

これらは２ｍ間隔でＰ35－１，Ｐ36，Ｐ38，Ｐ39－２のまとまりとＰ35－２，Ｐ37，Ｐ39－１のまとまりに分けることができ，前者を塀ＳＡ01，後者をＳＡ02とした。

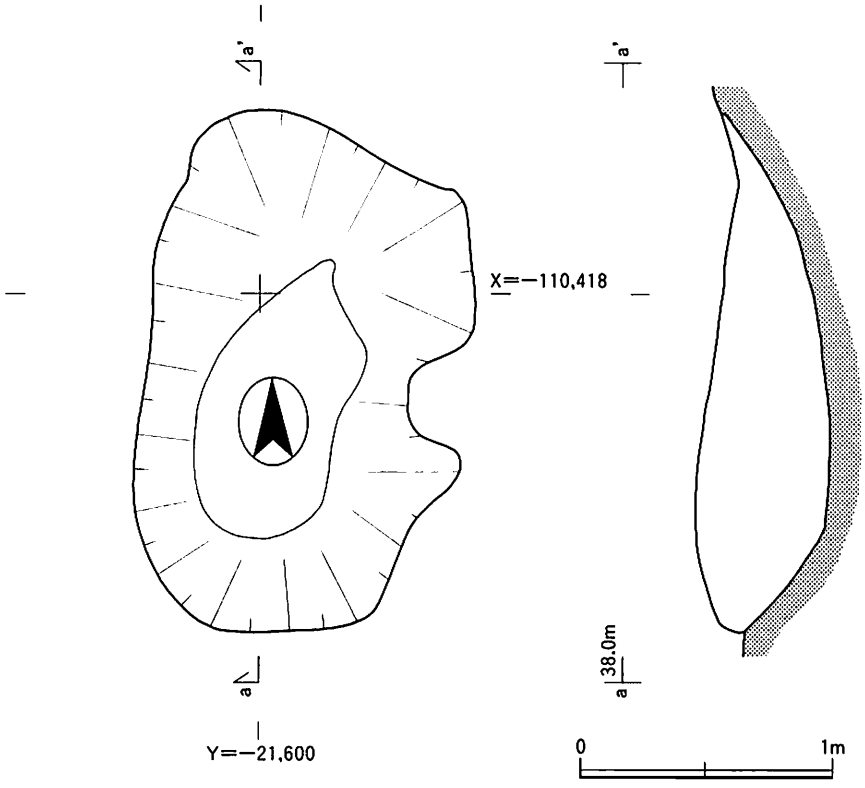
出土遺物はないが，切り合い関係からこの遺構の所属時期は16世紀末から17世紀前半に限定することができる。

溝ＳＤ01（第53図，図版93・94）

溝ＳＤ01は西区東端に位置する。南北溝であるが，南北とも調査区外に延びる。この溝は大きく上層と下層に分かれるが，これは本来２つの遺構と認識すべきものであるが１つの遺構として登録している。ここでは２つを



第53図　溝ＳＤ01平面図・断面図（1/60）



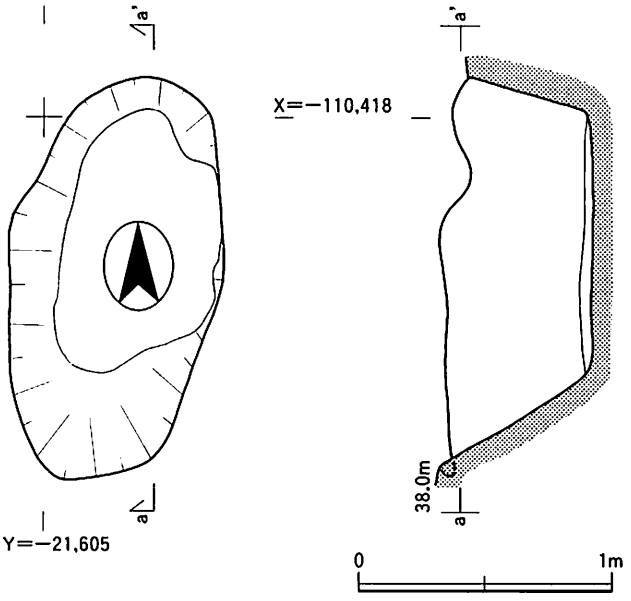
第54図　土坑ＳＫ09平面図・断面図（1/30）

区別しつつ述べることにする。

上層は江戸時代の廃棄にかかわる溝である。幅1.8m，深さ35cmで，断面は浅い皿状を呈する。埋土は黒灰色土で炭化物を多く含む。また，炭化物の層や灰褐色砂質土層が薄い間層として入る。これは廃棄され人為的に埋没する過程で生じたものである。この遺構は平面の形状から溝としたが，性格から見れば廃棄土坑としても差し支えないものである。

上層の出土遺物には土師器皿，近世陶磁器碗・皿，軒平瓦，軒丸瓦，平瓦，丸瓦，やっとこ，鉄釘などがある。時期は17世紀前半のものである。

下層は鎌倉時代から室町時代の溝である。幅0.9m，深さ50cmで，断面は壁が比較的急に立ち上がる逆台形を呈する。埋土は３層に分かれる。最下層には褐色砂が堆積しており，溝の機能時に水が流れていた所産と考えられる。そして土層の状況から自然に埋没していったとみられる。遺構の位置や形状からおそらく六角堂境内の東限を区画する溝と考えられる。

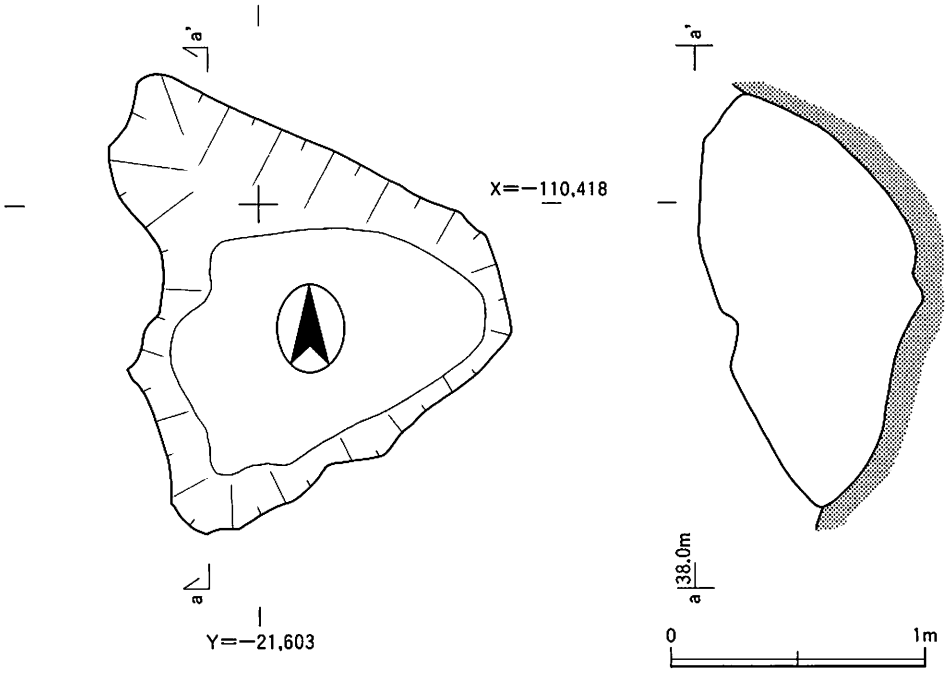


第55図　土坑ＳＫ15平面図・断面図（1/30）

下層の出土遺物には土師器皿，瀬戸美濃天目茶碗・碗・皿・鉢，常滑甕，備前甕，白磁碗，青磁碗，平瓦，丸瓦がある。時期は16世紀後半である。

土坑ＳＫ09（第54図）

土坑ＳＫ09は西区中央やや東寄りに位置する。土坑ＳＫ07に切られ，上半は破壊されている。東端がＳＫ11に切られているが，平面形はほぼ長方形を呈するとみられる。断面は逆台形を呈する。長さ2.08m，残存する幅1.30



第56図　土坑ＳＫ16平面図・断面図（1/30）

m，深さ50cmを測る。埋土は淡灰青色粘質土で，下部に子供の頭大の礫，黄灰色ないし褐灰色粘土ブロック，遺物を多量含んでいた。また底面直上には砂が薄く堆積していた。ごみ廃棄のための土坑であるが，土層の状況から井戸が破壊された跡の可能性も考えられる。

出土遺物には備前甕，信楽擂鉢，焼塩壷がある。時期は17世紀前半に位置づけられよう。

土坑ＳＫ12（図版33）

土坑ＳＫ12は西区西部の南壁沿いに位置する。土坑ＳＫ05・ＳＫ06に切られ，上部は破壊されている。南端が調査区外にあるため全容はわからないが，平面は2.00m×1.54mの長方形を呈するものと考えられる。深さ63cmを測り，断面形は壁が垂直に近い逆台形を呈する。破片の遺物を多く含むこと，埋土は一気に埋め戻されていることからごみ廃棄の土坑である。

出土遺物には土師器皿，須恵器甕，備前甕，信楽甕・擂鉢，瀬戸美濃天目茶碗・灰釉皿，唐津皿があり，15世紀の遺物も混じるが，主体は17世紀前半である。したがって遺構の時期は17世紀前半と考えられる。

土坑ＳＫ15（第55図）

土坑ＳＫ15は西区の東側中央よりに位置する。平面は長径1.59m，短径0.88mの楕円形，断面は深さ60cmで逆台形を呈する。Ⅶ層直下の遺構でⅧ層上面より掘り込まれている。埋土は灰褐色土で，黄灰色粘土・褐灰色粘土ブロック，拳大の礫，砂を含む。底近くに遺物がまとまっていること，遺物は破片のみであること，埋土は一気に埋め戻されていることからごみ廃棄の土坑である。

出土遺物には土師器皿，備前甕，信楽甕・擂鉢，瀬戸美濃天目茶碗，青白磁破片がある。時期は15世紀中葉に位置づけられよう。

土坑ＳＫ16（第56図）

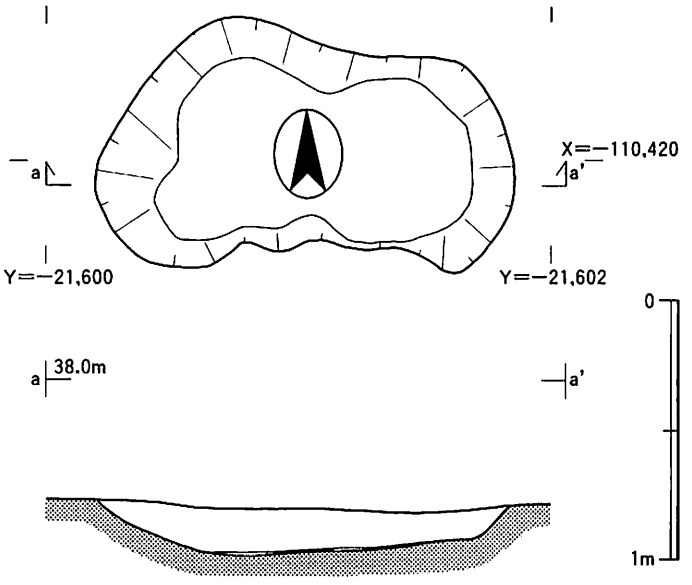
土坑ＳＫ16は西区の東側中央よりに位置する。土坑ＳＫ04・ＳＫ05・ＳＫ07に切られて上部は８割ほど破壊されているが，平面形は長さ1.80m，幅1.59mの不整三角形を呈し，断面形は最深の深さ88cmで逆台形を呈する。層位的にはⅦ層の直下にあり，Ⅷ層上面から掘り込まれている。土坑ＳＫ19を切っている。埋土は灰褐色粘質土で，灰青色粘土ブロックを含む。破片の遺物を多く含むこと，埋土は一気に埋め戻されていることからごみ廃棄の土坑である。

出土遺物には土師器皿，須恵器甕，緑釉陶器椀・皿，灰釉陶器椀，瓦質土器鉢・羽釜，常滑甕，備前甕・壷，

信楽甕・擂鉢，瀬戸美濃天目茶碗・灰釉皿，白磁片，青磁碗・皿・鉢，染付皿がある。10～11世紀の遺物も混じるが，遺構の時期は15世紀末と考えられる。

土坑ＳＫ20（図版33，図版98上）

土坑ＳＫ20は西区中央北壁付近に位置する。土坑ＳＫ07・ＳＫ08に切られ上半は破壊されている。南端では土坑ＳＫ19を切る。また北側は調査区外に延び一部を確認したに留まっている。長さ0.7m以上，幅1.4mで方形を呈するものとみられる。深さ35cmで，断面形は低い逆台形を呈する。埋土は灰褐色土である。破片の遺物を多く含むことからこれもごみ廃棄の土坑であろう。

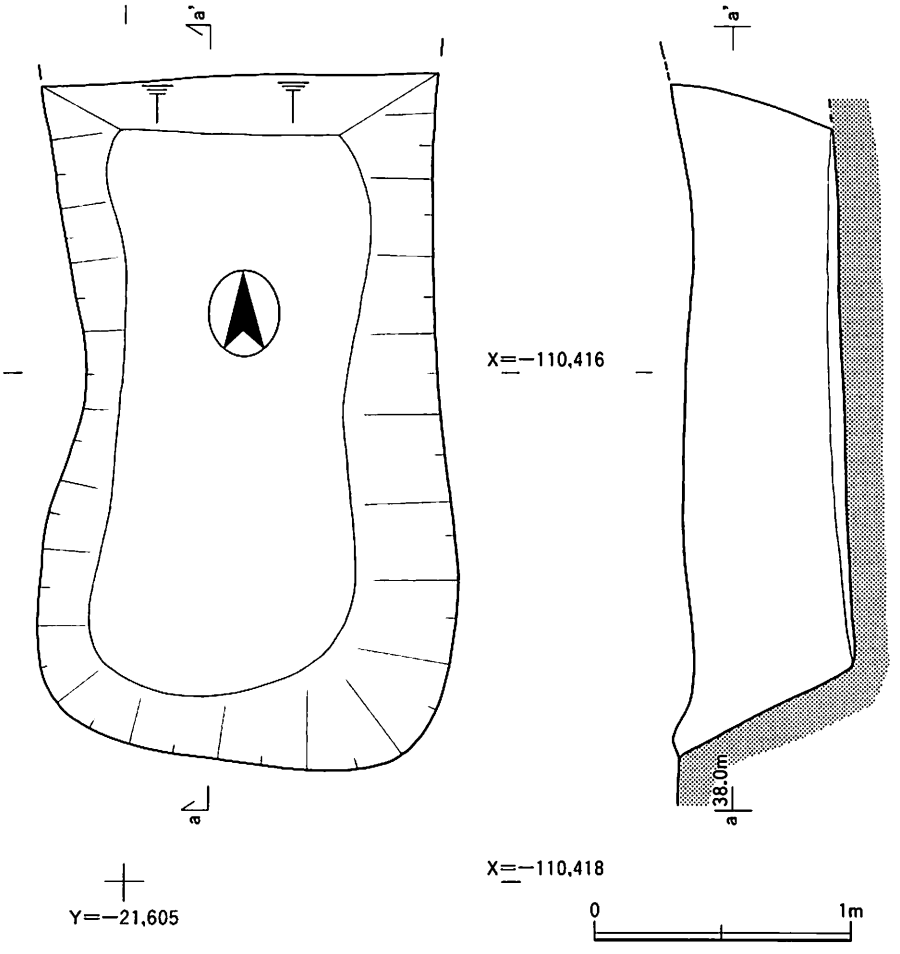


第57図　土坑ＳＫ31平面図・断面図（1/30）

出土遺物には軒瓦，平瓦，丸瓦，一石五輪塔，宝篋印塔の笠部がある。土坑ＳＫ19より新しい遺構であること，出土した瓦が室町時代のものであることから，ほかの遺構の例から類推して15世紀末の遺構であろう。

土坑ＳＫ31（第57図）

土坑ＳＫ32は西区東側に位置する。Ⅷ層上面で検出したが，一部ＳＫ07に切られる。南端では土坑ＳＫ31を切る。長径1.66m，短径0.99mの平面不整楕円形を呈する。断面形は浅い皿状を呈し，深さ24cmを測る。埋土は緑灰色砂質土である。遺物は底面近くから出土した。土器・瓦が中心でおそらくそれらを廃棄するための土坑であろう。



第58図　土坑ＳＫ04平面図・断面図（1/30）

出土遺物には土師器皿，瓦質土器鍋・羽釜，信楽壷・擂鉢，瀬戸美濃天目茶碗・灰釉盤，唐津青緑釉碗・絵唐津皿・灰釉盤，青磁碗，明染付皿，焼塩壷，軒平瓦，平瓦，丸瓦がある。時期は

12世紀代の遺物が混じるが遺物の時期の中心は16世紀後半であり，そのころに遺構の時期が位置づけられよう。

４．江戸時代の遺構

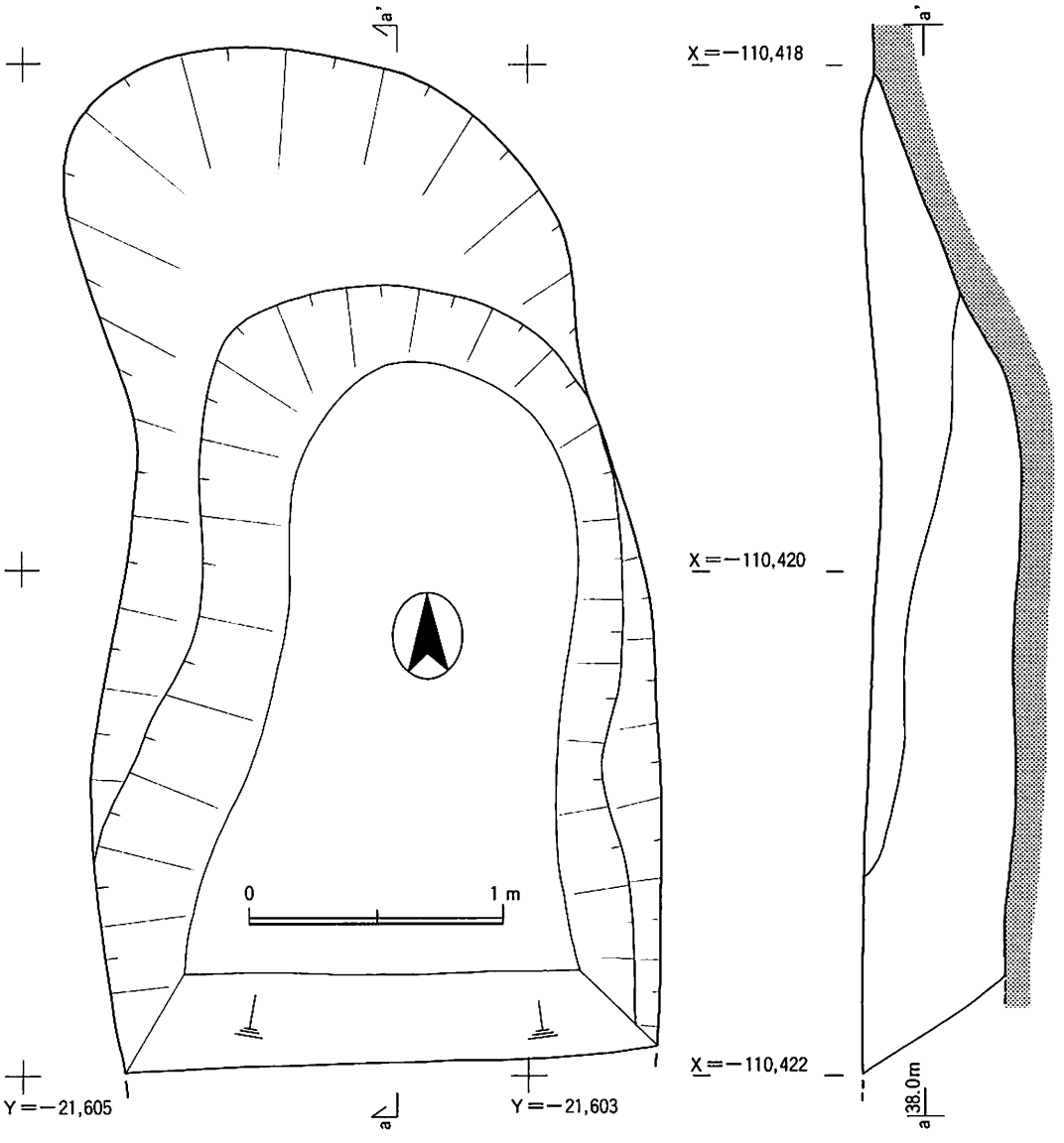
土坑ＳＫ04（第58図）

土坑ＳＫ04は西区西寄りに位置する。発掘の進行上Ⅵ層上面にて検出したが，北壁断面の観察からこの遺構はⅢ層上面より掘り込まれた遺構である。土坑ＳＫ16，ＳＫ17，ＳＫ18を切る。南北に延びる土坑で北端は調査区外である。幅1.64ｍで長さ2.75ｍ以上を測る。深さは1.5ｍで断面は壁が垂直に立ち底面が平坦な箱形を呈する。基本的に瓦溜りであり，瓦の他，子供の頭大の礫，木炭，陶磁器類が大量に投棄されているが，そこには褐色砂が若干混じる。

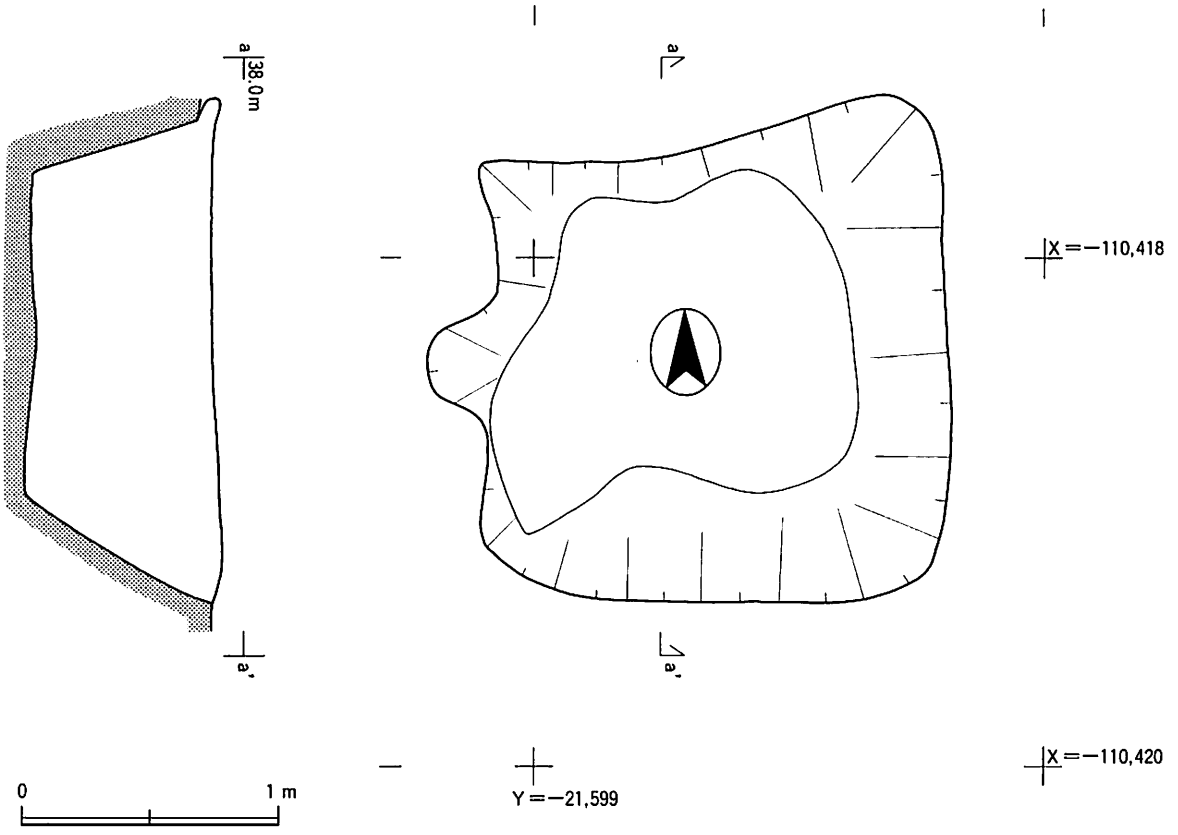
出土遺物には近世陶磁器類，瓦類が大量にある。時期は18世紀後半であり，天明の大火に伴う片づけの所産と考えられる。

土坑ＳＫ05（第59図）

土坑ＳＫ05は西区西寄りに位置する。土坑ＳＫ04と同じ性格・様相も遺構である。発掘の進行上Ⅵ層上面にて検出したが，北壁断面の観察からこの遺構はⅢ層上面より掘り込まれた遺構である。土坑ＳＫ06に切られるが，土坑ＳＫ12，ＳＫ13を切る。南北に延びる土坑で南端は調査区外である。幅2.20ｍで長さ4.02ｍ以上を測る。深



第59図　土坑ＳＫ05平面図・断面図（1/30）



第60図　土坑ＳＫ11平面図・断面図（1/30）

さは1.5mで断面は壁が垂直に立ち底面が平坦な箱形を呈する。基本的に瓦溜りであり，瓦の他，子供の頭大の礫，木炭，陶磁器類が大量に投棄されているが，そこには褐色砂が若干混じる。

出土遺物も土坑ＳＫ04と同じく近世陶磁器類，瓦類が大量にある。時期は18世紀後半であり，天明の大火に伴う片づけの所産と考えられる。

土坑ＳＫ11（第60図）

土坑ＳＫ11は西区中央やや東寄りに位置する。土坑ＳＫ07に切られ，上半は破壊されている。西端では土坑ＳＫ09，東端ではＳＤ01を切る。平面形は一辺1.6～1.9mのほぼ方形を呈する。深さは77cmを測り，断面は壁が垂直に近い逆台形を呈する。埋土は黒色砂質土で，子供の頭大の礫，木炭，井戸枠材である漆喰を多量含んでいた。土層の状況から井戸が破壊された跡の可能性が考えられる。

出土遺物には土師器皿，一分金がある。18世紀代の遺構と考えられる。

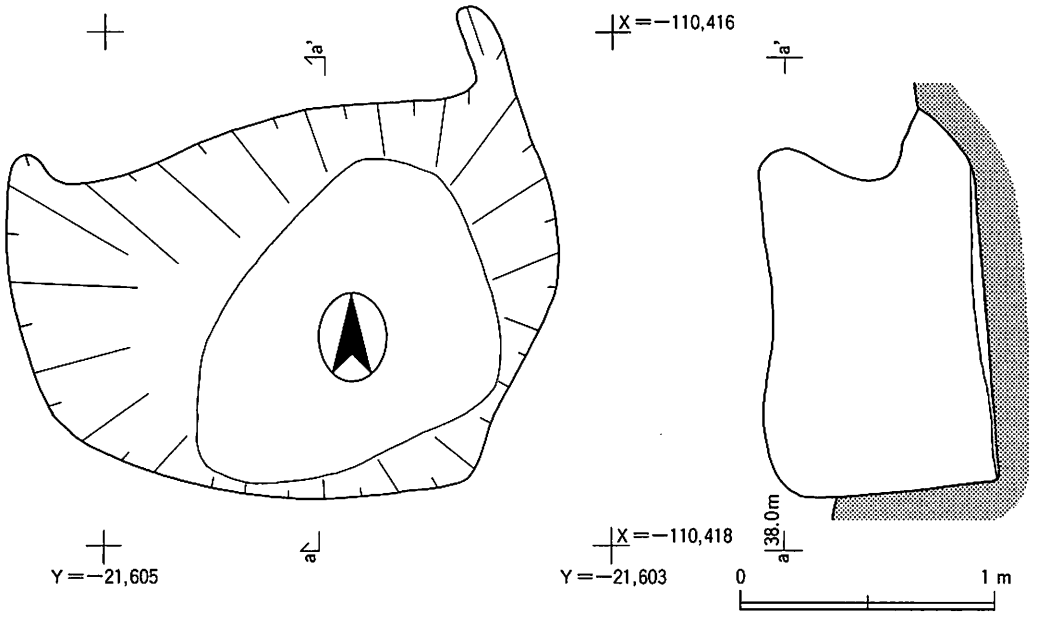
土坑ＳＫ17（第61図）

土坑ＳＫ17は西区西寄りに位置する。土坑ＳＫ04に切られ，上部の大半が破壊されている。平面形は幅2.2m，長さ1.92mのほぼ方形の土坑である。深さ94cmを測る。断面形は壁が垂直に立つ箱形を呈する。基本的に瓦溜りであり，瓦の他，子供の頭大の礫，木炭，陶磁器類が大量に投棄されているが，そこには黒褐色砂が若干混じる。

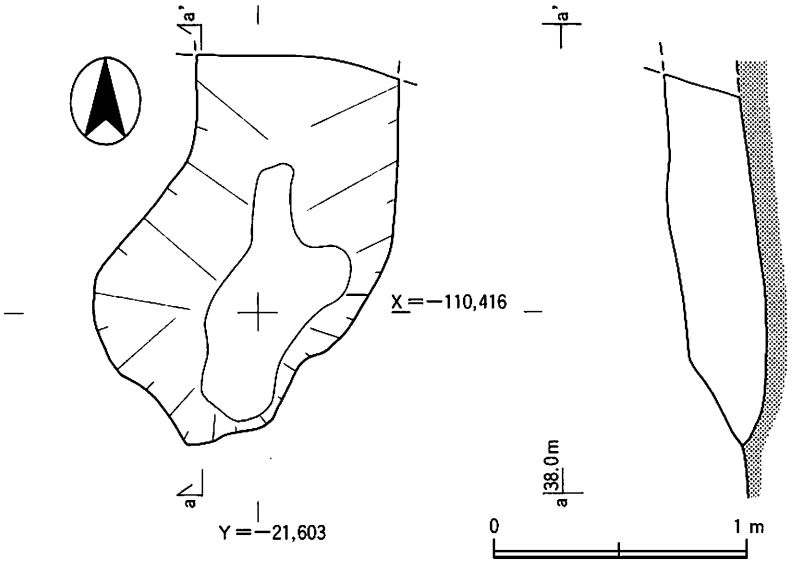
出土遺物も近世陶磁器類，瓦類が大量にある。時期は18世紀初頭であり，宝暦の大火に伴う片づけの所産と考えられる。

土坑ＳＫ18（第62図）

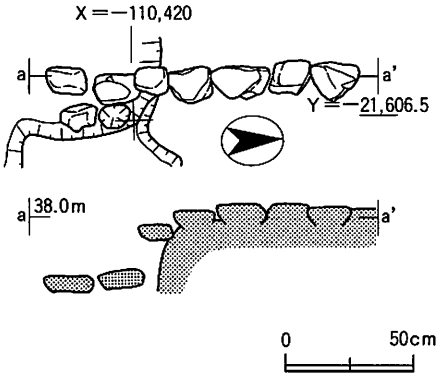
土坑ＳＫ18は西区西寄りに位置する。土坑ＳＫ08に切られ，東部の大半が破壊されてわからない。また，北壁より更に北へも遺構は延びる。今回確認できる平面形は幅1.1m，長さ1.5m以上のほぼ方形の土坑である。深さ94cmを測る。断面形は壁が垂直に立つ箱形を呈する。基本的に瓦溜りであり，瓦の他，礫，木炭，陶磁器類が大量に投棄されている。黒褐色砂が若干混じる。



第61図　土坑ＳＫ17平面図・断面図（1/30）



第62図　土坑ＳＫ18平面図・断面図（１/30）



第63図　石列ＳＸ02平面図・断面図(1/30)

出土遺物も土坑ＳＫ17と同じく近世陶磁器類，瓦類が大量にある。時期は18世紀初頭であり，宝暦の大火に伴う片づけの所産と考えられる。

石列ＳＸ02（第63図，図版95上）

石列ＳＸ02は西区西端，調査区西壁際に位置する。約20～40cmの礫を扁平な面を上にして南北方向に並べている。北の５個は地山の高まりの上に並べられているが，南の２つは１段，約30cm下がったところに並ぶ。南北ともさらに続いていたと推測されるが，攪乱などにより残っていない。残存長2.44m。この石列の東側，西側とも攪乱が著しく，これに伴うような盛土等施設が残っていなかった。天明の大火の焼土で埋まっているのでそれ以前の遺構である。現在の六角堂本堂に近い位置にあることから，天明八年以前の六角堂本堂に関する遺構であろうと推測される。

第４節　東区の遺構

１．鎌倉時代～室町時代前期の遺構

土坑ＳＫ40（第64図，図版96下）

土坑ＳＫ40は東区北東部の東壁付近に位置する。土坑ＳＫ26の底で検出された。ＳＫ26によって上半は破壊されており，底付近のみが確認できた。また，東端は調査区外にあり，一部の確認に留まる。平面形は軸を西に振る一辺2.4ｍの方形になるものとみられる。深さは35cmで，断面は壁がゆるやかに立ち上がり，皿状を呈する。埋土は暗灰色土で拳大の礫や木炭を含む。遺物が壁から底のかけて投げ捨てられたように分布し，埋土も一気に埋められた状況であることからごみ廃棄の土坑である。

出土遺物には土師器皿・鍋・羽釜，須恵器小椀・甕，常滑甕，白磁皿，青磁碗・鉢がある。時期は13世紀中葉に位置づけられよう。

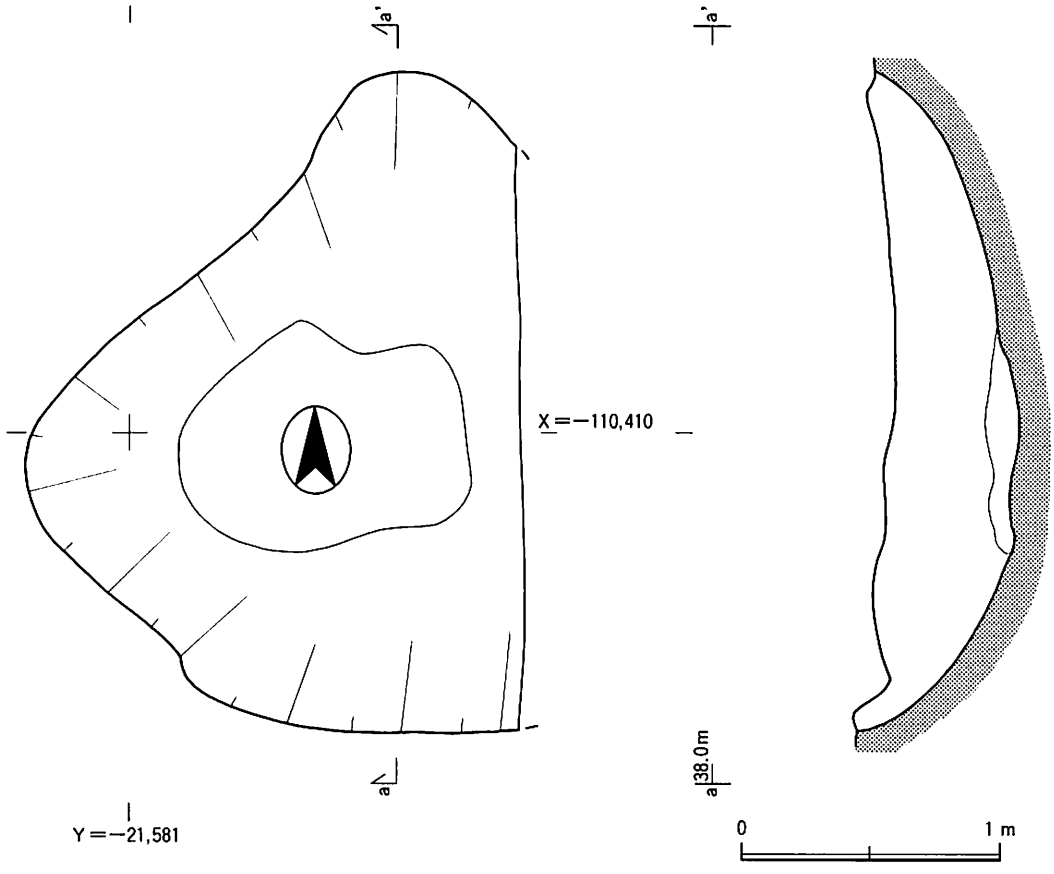
土坑ＳＫ68（第65図）

土坑ＳＫ68は東区中央に位置する。Ⅶ層上面で検出されているが，上部は大部分土坑ＳＫ60に切られており，東側は溝ＳＤ16に破壊されてわからない。現存する遺構は長さ3.13ｍ，幅2.13ｍの平面形で南北に長い不整形を呈する。深さは58cmを測り，断面形は底面がほぼ平坦で壁が急に立ち上がる逆台形を呈する。埋土は褐色土で子供の頭大の礫を多量に含む。遺物を破片として比較的多く含むことからごみ廃棄の土坑と考えられる。

出土遺物には土師器皿，常滑甕，瀬戸美濃天目茶碗・灰釉碗，平瓦，丸瓦がある。時期は14世紀中葉に位置づけられる。

土坑ＳＫ72（図版33）

土坑ＳＫ72は東区中央北寄りに位置する。Ⅶ層上面で検出された。北端はＳＫ63に切られており，西端は溝Ｓ



第64図　土坑ＳＫ40平面図・断面図（1/30）

Ｄ17に破壊されてわからない。現存する遺構の平面形は南北に長い三角形で，長さ4.4ｍ，幅1.8ｍを測る。深さ45㎝で底面はほぼ水平で壁は急に立ち上がる。断面逆台形を呈していたものとみられる。埋土は褐色土で子供の頭大の礫を含む。遺物を破片として比較的多く含むことからごみ廃棄の土坑と考えられる。

出土遺物には土師器皿，須恵器皿・甕，瓦質土器鉢，常滑甕，瀬戸美濃天目茶碗・灰釉碗・灰釉鉢・灰釉瓶子，白磁碗，青磁碗がある。時期は14世紀中葉に位置づけられる。

２．室町時代後期～江戸時代前期の遺構

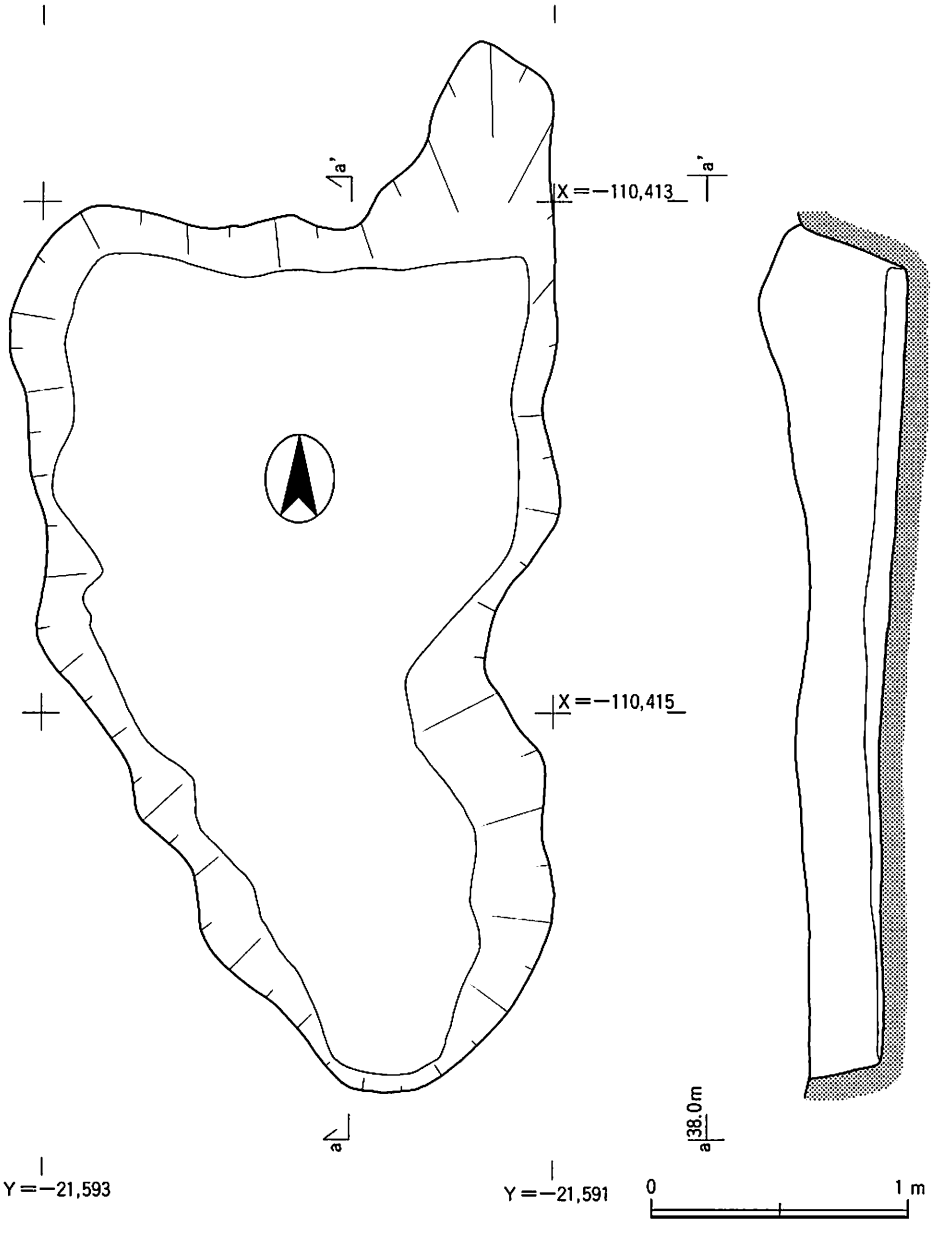
塀ＳＡ03（図版33）

塀ＳＡ03は東区の中央を南北方向に位置する。Ⅷ層上面にて検出した。北壁より南へ柱穴が約２ｍ間隔で４基（Ｐ29，Ｐ30，Ｐ32，Ｐ33）並ぶ。いずれも直径40～70㎝，深さ20㎝ほどのものである。さらに南北にのびるものと考えられるが，南については検出することができなかった。遺構の位置より溝ＳＤ16に伴うものと考えられる。

出土遺物には土師器皿がある。時期はＳＤ16と同じ15世紀～16世紀に位置づけられよう。

溝ＳＤ16（第66図，図版96上）

溝ＳＤ16は東区のほぼ中央を南北に走る溝である。南北とも調査区外に更に伸びる。Ⅷ層上面で検出した。土



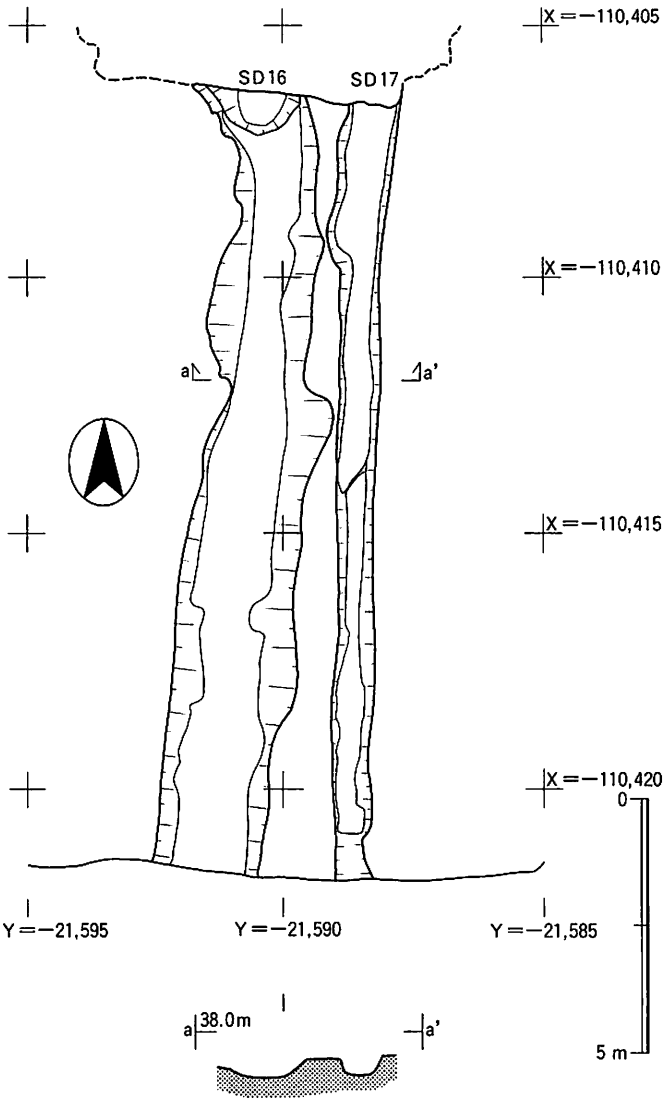
第65図　溝ＳＤ16・ＳＤ17平面図・断面図（1/30）

坑ＳＫ63に切られるが，溝ＳＤ17・ＳＤ18，土坑ＳＫ49・ＳＫ60・ＳＫ61・ＳＫ66・ＳＫ68を切る。幅1.4～2.4m，深さ45cmで断面深い皿状を呈する。溝の中心線はやや東に振る。埋土は暗灰褐色土で，拳大の円礫を多量に含む。木炭も含む。底面に砂はほとんどなく，流水などの可能性は低い。埋没は人為的に一気に埋められたものとみられる。

出土遺物には土師器皿，須恵器甕・鉢，瓦質土器鉢・鍋・羽釜，緑釉陶器椀，灰釉陶器椀，常滑甕，備前甕，信楽甕・擂鉢，瀬戸美濃天目茶碗・灰釉碗・灰釉盤・灰釉瓶子・灰釉香炉，白磁碗・皿，青磁碗・皿・瓶がある。遺物の年代は12世紀以降断続的にあるが，土師器皿の年代と遺構の切り合いから15世紀～16世紀の遺構と考えられる。

溝ＳＤ17（第66図，図版96上）

溝ＳＤ17は東区のほぼ中央を南北に走る溝である。南北とも調査区外に更に伸びる。Ⅷ層上面で検出した。塀ＳＡ03，溝ＳＤ16，土坑ＳＫ63に切られるが，溝ＳＤ18，土坑ＳＫ72・ＳＫ86を切る。幅0.75～1.1m，深さ40cmで断面逆台形を呈する。溝の中心線はわずかに東に振る。埋土は４層に細分することができる。第１層は暗褐色土層。第２層は黄灰色粘土ブロックを含む暗褐色土層，第３層は暗灰色粘質土層，第４層は暗灰褐色砂層である。第１層には土器片・木炭を多量に含む。第３層・第４層の状況から流水・滞水の可能性を指摘できる。第１層・第２層の状況から埋没は人為的に一気に埋められたものとみられる。



第66図　溝ＳＤ16・ＳＤ17平面図・断面図（1/60）

出土遺物には土師器皿，須恵器甕・鉢，瓦質土器鉢・鍋・羽釜，常滑甕，備前甕・擂鉢，信楽甕・擂鉢，瀬戸美濃天目茶碗・灰釉碗・灰釉盤・灰釉鉢・鉄釉小壷，白磁碗・皿，青磁碗・皿・瓶，明染付皿がある。遺物の年代は15世紀以降断続的にあるが，土師器皿の年代と遺構の切り合いから16世紀末～17世紀前半の遺構と考えられる。

土坑墓ＳＫ38（第67図，図版97）

土坑墓ＳＫ38は東区北東部に位置する。Ⅷ層上面で検出した。溝ＳＤ15，土坑ＳＫ36，ＳＫ52を切る。一辺1.2mの方形の土坑墓である。深さは54cmで，断面箱形を呈する。西壁沿いに成人男性を一体土葬していた。伸展葬である。まず，その上を瓦や３～５cm程の石を敷き詰め，さらにその上に土師器皿を重ね置きして並べている。そして暗褐色土をかぶせて完全に埋めている。土葬のため遺体が腐敗したのちの落ち込みが土師器や瓦の出土状況からも認められる。そして，頭蓋骨も土圧のため３つに割れているのも確認された。

出土遺物には土師器皿と瓦片がある。土師器皿はほとんどが完形であり，埋納されたものであることを示す。瓦は細片ばかりであり，布目の付いた瓦や縄目の叩き痕の付いた瓦など平安・鎌倉時代の瓦も混じる。石とともに周辺から集められたものである。時期は16世紀中葉である。

土坑墓ＳＫ42（図版33）

土坑墓ＳＫ42は東区北部に位置する。Ⅷ層上面で検出した。南端を土坑ＳＫ46，北西隅をＰ23に切られるが，長さ1.12m以上，幅0.88mの長方形の土坑墓である。深さは54cmで，断面箱形を呈する。埋土は暗褐色土で黄灰色粘土ブロックを少量含む。人の頭蓋骨の一部が出土しており，また，人為的に埋められた埋没状況を示していることから，土坑墓の可能性が高いと判断した。

出土遺物は土師器皿と人骨片である。時期は16世紀中葉のものであろう。

土坑墓ＳＫ78（第68図，図版98下）

土坑墓ＳＫ78は東区南壁近くに位置する。Ⅷ層上面で検出した。長さ61cm，幅78cmの方形の土坑墓である。深さは15cmで，断面箱形を呈する。埋土は暗褐色土で黄灰色粘土ブロックを少量含む。成人男性の四肢骨の南北に敷き並べられていた。他の部位の骨が見つからなかったので，おそらくは再葬墓であろう。

出土遺物は土師器皿片と人骨である。時期は16世紀のものであろう

土坑墓ＳＫ81（第69図）

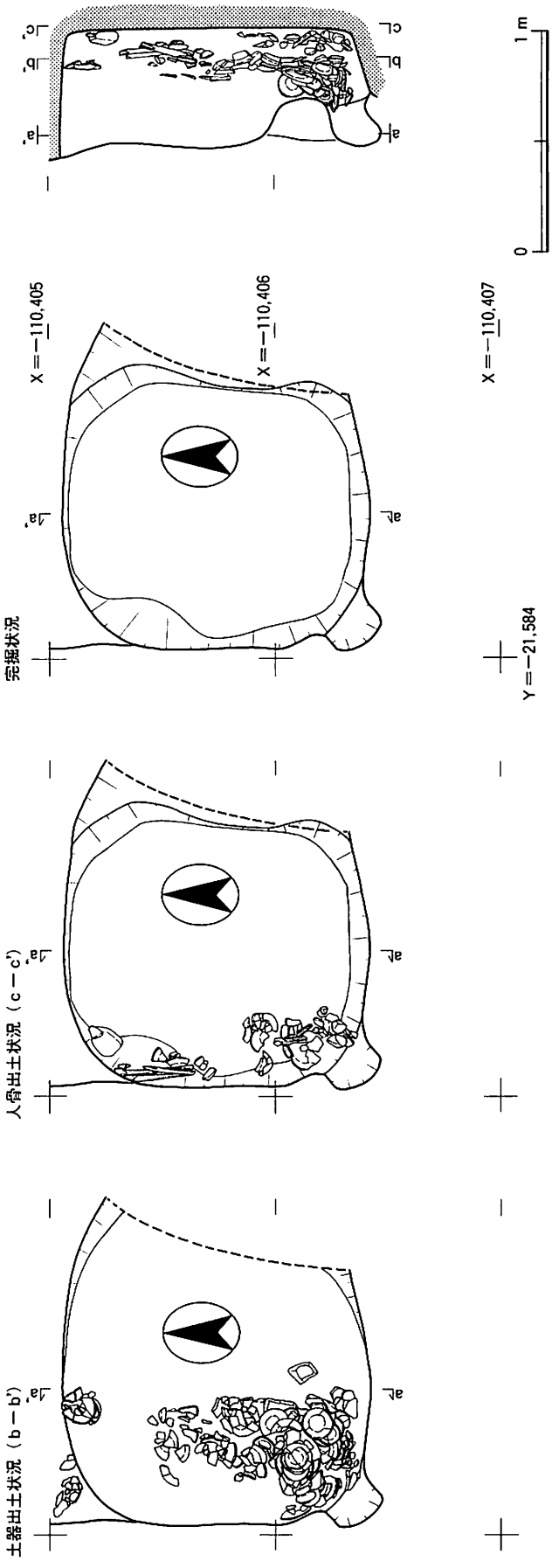
土坑墓ＳＫ42は東区南東隅に位置する。Ⅷ層上面で検出した。南端を土坑ＳＫ82，北西隅を土坑ＳＫ26に切られるが，長さ0.82m以上，幅0.80mの方形の土坑墓である。深さは22cmで，断面箱形を呈する。埋土は暗褐色土で黄灰色粘土ブロックを少量含む。人の頭蓋骨の一部が出土しており，また，人為的に埋められた埋没状況を示していることから，土坑墓の可能性が高いと判断した。

出土遺物は土師器皿と人骨片である。時期は16世紀のものであろう

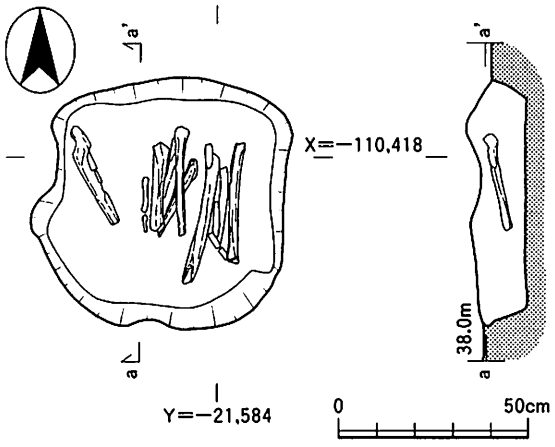
３．江戸時代中期～後期の遺構

溝ＳＤ15（第70図）

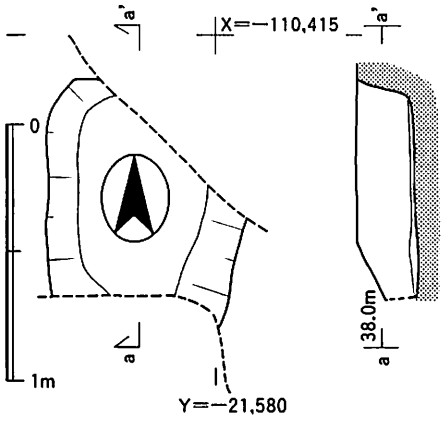
溝ＳＤ15は東区中央北よりに位置する。Ⅷ層上面にて検出した。Ｐ17を切るが，土坑ＳＫ38に切られ，東端はわからない。ほぼ東西方向の溝で，幅22cm，西側1.02mが残存する。深さは18cmで断面Ｕ字状を呈する。埋土は褐色土で土



第67図　土坑墓ＳＫ38平面図・見通図（1/30）



第68図　土坑墓ＳＫ78平面図・断面図（1/20）



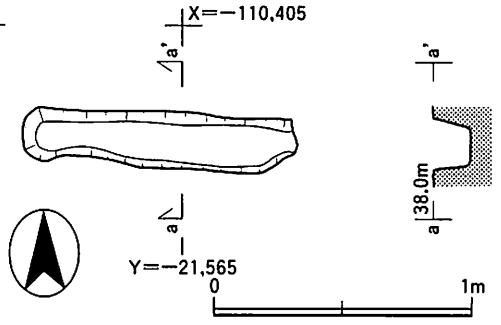
第69図　土坑墓ＳＫ81平面図・断面図（1/30）

器片，木炭を多く含んでいた。底面直上には子供の頭大の石がいくつか置かれていた。この石の存在から何かの建物の基礎に関係する遺構の可能石があろう。

出土遺物には土師器皿，須恵器甕，瓦質土器羽釜，緑釉陶器椀，灰釉陶器椀，備前甕，瀬戸美濃天目茶碗，白磁片がある。

土坑ＳＫ55（図版33）

土坑ＳＫ55は東区中央南壁付近に位置する。Ⅷ層上面で検出した。南壁および東壁は調査区外にあり，一部を確認したん留まる。長さ２ｍ以上，幅２ｍ以上，深さ1.8mの大型の土坑である。断面箱形を呈する。埋土は黒褐色砂質土で木炭を多く含む。



第70図　溝ＳＤ15平面図・断面図（1/30）

出土遺物も近世陶磁器類，瓦類が大量にある。時期は18世紀後半であり，天明の大火に伴う片づけの所産と考えられる。

第８章　第４次調査の出土遺物

第１節　出土遺物の概要

第４次調査で出土した遺物は全体で約300箱である。土器・陶磁器類，瓦類，土製品，石製品，木製品，銅製品，鉄製品，銭貨に分けられる[註1]。所属時期は弥生時代から江戸時代まである。このうち弥生時代・古墳時代の遺物は江戸時代の遺構に混入したものが出土したが，１点のみである。飛鳥時代から奈良時代の遺物はない。平安時代前期から江戸時代の遺物は連続してある。

なお，以下各節において遺物の報告を行うが，あまりに膨大であるために，主要な遺構から出土した資料をまず報告し，ついでその他の遺構・包含層出土の主要な資料を取り上げた。予算の都合により掲載できなかったものも多数あることをあらかじめお断りしておく。また，第４次調査では西区と東区とで出土遺物の様相も大きく異なることから別にして報告することにする。

第２節　西区出土の土器・陶磁器類

１．平安時代後期の主要遺構出土土器・陶磁器類

溝ＳＤ19土器・陶磁器類（図版34）

土師器，白色土器，白磁が出土している。

１～25は土師器皿である。１～15はいわゆる「ての字」状口縁の皿である。１・２は屈曲が明瞭であるが，３～15はやや曖昧である。16～25は小皿である。28～41は皿である。いずれも二段凹みナデが施される。26・27はいわゆる「コースター」形の皿である。

42・43は白色土器である。42は脚付皿である。43は高杯の杯底部から脚部上半部の破片である。

44は白磁で皿Ⅶ類である。底部は上げ底気味の平底で，内面には剣花文が施される。

土師器と白色土器はおおよそ平安京編年のⅣ期中からⅤ期新に属する。11世紀中葉～12世紀後半のものである。白磁もおおよそ同時期である。

このほか図示していないが，15世紀の瓦質土器花瓶が出土している。溝ＳＤ19は土坑ＳＸ01に切られているので，これはおそらくそこからの混入と考えられる。

土坑ＳＫ32土器・陶磁器類（図版35）

土師器，瓦器，山茶椀，青磁が出土している。

45～70は土師器皿である。新旧２群に分かれる。

古い１群について。45・46はての字状口縁の皿，47はコースター形の皿である。48～57は小皿である。48～51は口径に比して器高が低く，口縁部は一段凹みナデが施される。52～56は二段凹みナデが施される。57は口径に比して器高が高く，口縁部には一段凹みナデが施される。58～61は皿である。58・59は通有のヨコナデが，60・61は二段凹みナデが施される。平安京編年で45・46はやや古くⅣ期新ないしⅤ期古に位置付けられる。それ以外はⅤ期新からⅥ期中のものである。

新しい一群について。63～68は小皿，69・70は皿である。66・67は口縁部を断面三角形状に仕上げる。体部下半には指頭圧痕がめだつ。69の見込みに凹線状圏線が施される。Ⅸ期新からⅩ期古のものである。

瓦器は皿が１点出土している（62）。

山茶椀は椀の底部が１点出土している（71）。尾張型である。

青磁は碗が１点出土している（72）。龍泉窯系青磁碗である。

出土遺物は新旧2群に分かれる。新しい1群は土師器皿（63～70）がある。土坑ＳＫ32は16世紀後半の土坑ＳＫ31に切られているので，これはそこからの混入と考えられる。この遺構に本来伴っていた遺物は古い一群，すなわち土師器皿（45～61），瓦器皿（62），山茶椀椀（71），青磁碗（72）であろう。

2．鎌倉時代～室町時代前期の主要遺構出土の土器・陶磁器類

土坑ＳＫ16土器・陶磁器類（図版36）

土師器，白色土器，古瀬戸，信楽，白磁，青磁が出土している。

土師器には皿，羽釜，鍋がある。

73～79は土師器皿である。新旧2群に分かれる。まず古い1群について。73～75は小皿である。二段凹みナデが施される。Ⅵ期古，12世紀末から13世紀初頭のものと考えられる。新しい一群について。76･77は小皿である。78・79は皿である。見込みに凹線状圏線が施される。16世紀に位置付けられる。87・88は釜である。87は口縁部である。88は体部で外面を羽が巡る。89･90は鍋である。いずれも口縁部片で，体部外面には指頭圧痕が目立つ。

白色土器には皿がある。80は皿の底部片である。

古瀬戸には皿がある。85は灰釉皿の底部である。内面施釉，外面露胎で，内面見込みには刺突による花文が施されている。

信楽には盤がある。86は盤の口縁部である。口縁が内側に屈曲する。

白磁には皿がある。81は白磁皿Ⅶ類の口縁部である。内面に劃花文が施される。82も同じ白磁皿Ⅶ類の底部である。

青磁には碗がある。83・84は龍泉窯系青磁碗の口縁部である。83は外面頸部に沈線が2条以上巡る。84は外面に蓮弁文がある。

出土遺物は新旧2群に分かれる。古い1群は土師器皿（73～74），白色土器（80），白磁皿（81）で，12世紀末～13世紀初頭のものである。新しい1群は土師器皿（76～79），土師器釜（87・88），土師器鍋（89・90），瀬戸皿（85），信楽盤（86）で，16世紀に位置付けられよう。土坑ＳＫ16は特に古い時期の遺構との切り合いが認められないが，12世紀末～13世紀初頭の遺構を壊して形成されたと考えるべきであろう。こう考えた場合土坑ＳＫ16は16世紀に形成されたと考えられる。

土坑ＳＫ21土器・陶磁器類（図版37）

土師器，須恵器，瓦器，古瀬戸，白磁，青磁が出土している。

土師器には皿と鍋がある。91～105は土師器皿である。新旧2群に分かれる。古い1群には91･92がある。91は小皿，92の皿で，ともに二段凹みナデが施される。Ⅵ期古のものである。93はへそ皿である。94～105は小皿であるが，口径で2つに分かれる。94～96は口径8㎝前後，97～102は口径10㎝前後である。94は口径に比して器高が大きい。97も同様に器高が大きい。98は口縁端部をヨコナデにより断面三角形状に仕上げている。99～102は体部下半にオサエが施され，口縁部が緩く外反する。103～105は皿である。93～105はⅨ期新に属すると考えられる。118は土師器鍋である。口縁やや下がった位置に断面三角形状の太い突帯が1条巡る。

須恵器には鉢と器種不明の底部がある。106は器種不明の底部である。117・118は東播産の鉢の口縁部である。森田編年の第2期第2段階のものである。

瓦器は椀がある。107は樟葉型瓦器椀の口縁部である。内面にかろうじてヘラミガキが確認できる。Ⅲ－1期のものである。

古瀬戸には天目茶碗，卸皿，香炉がある。112･113は天目茶碗である。112は口縁部片，113は底部片であるが，ともに古瀬戸後期様式Ⅵ期古段階のものである。114は卸皿の口縁部で，内面に卸目がわずかに残る。115は筒型香炉の脚部である。

白磁には皿がある。108は皿の底部で白磁皿Ⅳ類である。109も皿の底部で森田編年のＡ群である。

青磁には碗がある。110は龍泉窯系青磁の碗の口縁部片である。111は同じく龍泉窯系青磁の碗の底部片である

が，体部外面には細い蓮弁文が残る。

出土遺物は新旧２群に分けることができる。古い１群は土師器皿（91・92），須恵器鉢（116・117），瓦器椀（107），白磁皿（108）で，12世紀末～13世紀初頭である。一方新しい１群は土師器皿（93～95），土師器鍋（118），古瀬戸（112～114），白磁皿（109）からなり，15世紀中葉と考えられる。土坑ＳＫ21は特に古い時期の遺構との切り合いが認められないので，12世紀末～13世紀初頭の遺構を壊して形成されたと考えるべきであろう。こう考えた場合土坑ＳＫ21は15世紀中葉に形成されたと考えられる。

土坑ＳＸ01土器・陶磁器類（図版38）

土師器，須恵器，白色土器，灰釉陶器，瓦器，瓦質土器，古瀬戸，青磁が出土している。

土師器には皿がある。119・120はへそ皿である。121～124は小皿である。123・124は体部下半に指頭圧痕が目立つ。125・126は皿である。これも体部下半に指頭圧痕が目立つ。これらはⅨ期新のものである。

須恵器には壺がある。133は壺の底部である。底よりやや上がった位置の側面に突帯が１条巡る。

白色土器には皿の底部が１点ある（128）。底部外面には回転糸切り痕が残る。

灰釉陶器には椀と皿がある。127は皿の底部である。132は椀の口縁部である。

瓦器には皿が１点ある（135）。

瓦質土器には鉢と風炉がある。134は鉢である。口縁はやや内湾する。136･137は風炉の口縁部である。ともに内傾する口縁のやや下がった位置に花菱文が一周し，体部の透窓の一部が残る。

古瀬戸には天目茶碗がある。129は天目茶碗の底部である。古瀬戸後期様式Ⅱ期のものであろう。

青磁には鉢と馬上杯がある。130は龍泉窯系青磁の鉢の口縁部である。体部外面には３条以上の沈線が，内面には線描による花文が施される。131も龍泉窯系青磁で馬上杯の脚部の破片である。突線が２条残る。

出土土器は須恵器と瓦器にやや古いものが混じっているが，おおよそ14世紀末から15世紀中葉のものである。

土坑ＳＫ12土器・陶磁器類（図版38）

古い土器群を報告する。土師器の皿が出土している。138～140は小皿，141～146は皿である。141～143は体部下半には指頭圧痕が目立つ。144は底部から体部へ稜を形成しないものの，急に立ちあがる。口縁端部のみヨコナデがなされる。145は器高がやや高く，深手の皿であるが，144と同様に体部が急に立ちあがり，口縁端部のみヨコナデがなされる。146は，これも深手の器形であるが，体部は外へ直線的に立ちあがり，口縁が内湾する。口縁部にはヨコナデが施される。

土坑ＳＫ15土器・陶磁器類（図版38）

土師器の皿が出土している。147は小皿，148～151は皿である。148は器高が低く，扁平である。149～151は体部下半に指頭圧痕が顕著である。147はＸ期中のもので混入と考えられる。148～151はⅨ期新，15世紀中葉のものと考えられる。

３．室町時代後期～江戸時代前期の主要遺構出土土器・陶磁器類

溝ＳＤ01土器・陶磁器類（図版39～41）

上層と下層に分かれるので，それぞれについて報告する。

下層出土土器･陶磁器について土師器と瀬戸美濃が出土している。土師器は皿が出土している（178～182）。Ｘ期新のものであろう。瀬戸美濃は天目茶碗と皿がある。183は折縁菊皿である。184は天目茶碗の口縁部である。ともに大窯３期のものであろう。下層の出土土器はおおよそ16世紀後半と考えることができる。

上層出土土器・陶磁器について土師器，瓦質土器，瀬戸美濃，備前，唐津，白磁，染付，焼塩壺が出土している。

土師器には皿がある。185～188は小皿である。185・186は底部と体部の境が明確ではないが，187・188は体部の立ちあがりが比較的明瞭である。189～194は皿である。これらはⅪ期古に属する。

瓦質土器には羽釜，灯篭，風炉がある。171･172は羽釜の口縁部である。大和型である。173は灯篭である。灯

明皿の部分は残存しているが，覆い部分は欠損している。174は風炉の口縁部である。立石分類の風炉Ⅲである。175・176も風炉の口縁部である。

瀬戸美濃には碗，天目茶碗，皿，鉢がある。153は小形の天目茶碗である。164は丸碗である。154は丸皿，161は志野ひだ皿，165は織部鉢である。165の内面には鉄釉により筆描きの文様が描かれている。これらは大窯5期以降のものである。

備前には小形の鉢がある（152）。

信楽には擂鉢がある（177）。4条単位の擂目がある。

唐津には碗，皿，鉢，大皿がある。162・163は端反碗である。163は白化粧土により刷毛目文が描かれる。166は三島手の碗の底部である。155は灰釉杯，156～160は灰釉皿である。169・170は灰釉の大皿である。これらはいずれも盛編年のⅡ期に位置付けられる。

白磁には環がある（168）。直径4.2cm，厚さ0.9cmの約1/2片である。

染付には鉢がある。167は鉢の底部で，見込みには花文，体部外面には唐草文が描かれている。

焼塩壷は身・蓋ともある。195～197は蓋で，渡辺分類のA類，198～204は身で，渡辺分類のA類である。

上層出土土器・陶磁器はおおよそ17世紀前半のものと考えられる。

土坑ＳＫ31土器・陶磁器類（図版41）

土師器の皿が出土している。新旧2群に分けられる。

古い1群について205は小皿，207・208は皿である。207・208には一段凹みナデが施される。Ⅵ期古，すなわち12世紀末～13世紀初頭のものと考えられる。

新しい1群について206は小皿，209・230は皿である。Ⅹ期新，16世紀後半のものである。

土坑ＳＫ31は12世紀末～13世紀初頭の土坑ＳＫ32を切って形成されているので，古い1群はそこからの混入である。したがって土坑ＳＫ32に本来伴う土器は新しい1群であり，16世紀後半に形成されたと考えられる。

第3節　東区出土の土器・陶磁器類

1．鎌倉時代～室町時代前期の主要遺構出土の土器・陶磁器類

土坑ＳＫ40土器・陶磁器類（図版42～44）

土師器，瓦質土器，白磁，青磁が出土している。

土師器には皿がある。211～260は小皿である。211～240までは一段凹みナデ，241～254は二段凹みナデが施される。255～260はやや器高が高い小皿で，口縁はヨコナデにより仕上げられている。261～318は皿である。261～297は一段凹みナデが施される。298～318は口縁端部がヨコナデにより断面三角形状に仕上げられている。Ⅵ期新のものである。

瓦質土器には羽釜がある。319・320は羽釜で，319は山城Ｅ型，320は山城Ｆ型である。

白磁には皿がある。321～323はいわゆる「口禿げ」の白磁，森田分類のＡ群である。

青磁には盤と杯がある。324は盤の口縁部で，体部外面には蓮弁文がある。325は杯の口縁部である。体部下半に沈線が1条巡る。

以上，土坑ＳＫ40出土の土器・陶磁器はほぼ13世紀中葉に限定して考えることができる。

土坑ＳＫ68土器・陶磁器類（図版44）

須恵器，瓦質土器，灰釉陶器，古瀬戸，信楽，白磁，青磁が出土している。

須恵器には鉢がある。330は東播産の鉢の口縁部である。第2期第2段階のものである。

瓦質土器には浅鉢と羽釜がある。331は浅鉢の体部片で菊花のスタンプ文が押されている。333は山城Ｆ型の羽釜の口縁部である。

灰釉陶器には椀がある。329は椀の底部である。

古瀬戸には皿がある。334は折縁皿の口縁部である。

信楽には鉢の底部が１点ある（332）。

白磁には碗がある。326・327はともに白磁碗Ⅳ類である。

青磁には鉢がある。328は鉢の体部で，外面には櫛状工具による文様が施されている。

土坑ＳＫ68の出土遺物の時期には幅があるが，12世紀末から14世紀中葉までの間には収まると考えられる。

土坑ＳＫ72土器・陶磁器類（図版44）

土師器の皿が出土している。新旧２群に分けることができる。古い１群は340～342で，340・341は二段凹みナデの皿，342はての字口縁の皿である。Ⅴ期新，11世紀末に位置付けられる。新しい１群は335･336のへそ皿，337～339の小皿である。Ⅶ期新，14世紀中葉のものである。

２．室町時代後期～江戸時代前期の主要遺構出土土器・陶磁器類

土坑墓ＳＫ38土器・陶磁器類（図版45・46）

土師器の皿が大量に出土している。343～379は小皿である。このうち343～355は底部と体部の境が不明瞭なもので，外面には指頭圧痕が顕著である。356～379は底部と体部の境が明瞭で，見込みには凹線状圏線が巡る。380～437は皿である。これも底部と体部の境が明瞭で，見込みには凹線状圏線が巡る。390は底部中央に穿孔がある。これらはⅩ期中，16世紀中葉のものである。

土坑墓ＳＫ42土器・陶磁器類（図版46）

土師器，灰釉陶器，古瀬戸が出土している。

土師器には皿がある。438・439は小皿，440・441は皿である。Ⅹ期古のものであろう。

灰釉陶器には椀底部が１点ある（442）。古瀬戸には灰釉皿の口縁部が１点ある（443）。

これらはおおよそ16世紀前葉の範囲内に収まるものと考えられる。

溝ＳＤ16土器・陶磁器類（図版47～49）

土師器，須恵器，灰釉陶器，瓦質土器，古瀬戸，備前，信楽，白磁，青磁，染付が出土している。

土師器には皿と鍋がある。皿は新旧２群に大きく分かれる。

古い１群の皿について，444はての字口縁の皿，446はコースター形の皿，445は一段凹みナデの皿，447は二段凹みナデの皿である。448は耳皿である。Ⅴ期ないしⅥ期のものである。

新しい１群の皿について，449～451はへそ皿，452～454は小皿である。体部下半に指頭圧痕が顕著である。455～460は皿で，456・457には体部下半に指頭圧痕がある。461～468は見込みに凹線状圏線が巡る皿で，461～464は小皿，465～468は皿である。これらはおおよそⅨ期～Ⅹ期中のものである。

鍋について515と516がある。515は口縁がやや外反し，516は外に折れ曲がって収まる。外面はナデ，内面はヨコハケにより調整する。

須恵器には杯と鉢がある。469は杯の口縁部である。508～510は東播産の鉢の口縁部である。

灰釉陶器には椀がある。470・471は椀の底部である。

瓦質土器には羽釜と風炉がある。506・507は羽釜の口縁部である。ともに山城Ｆ型である。512～514はいずれも風炉の口縁部であるが，それぞれ形態が異なる。512は口縁が上方に直立し，口唇には平坦な面を形成する。513は内傾する口縁で口縁より下がった位置に花菱文が巡る。体部の透窓が一部残存する。514は口縁が上方に直立し，口縁外面を渦巻状文が巡る。

古瀬戸には天目茶碗，碗，杯，花瓶，卸皿がある。491は杯の口縁部である。492・493は天目茶碗の口縁部である。494～496は碗の底部である。497は花瓶の口縁部，498は花瓶の頚部である。499は卸皿の底部で卸目がある。500は卸皿の口縁部で，内面に突帯が１条巡る。

備前には甕と擂鉢がある。502・503は甕の口縁部であるが，504・511は擂鉢の口縁部である。

信楽には壺と擂鉢がある。501は壺の口縁～頸部である。505は擂鉢の口縁部である。

白磁には碗と皿がある。472は白磁碗Ⅳ類である。473は白磁皿口縁部，474は同じく底部である。

青磁には碗，皿，鉢，瓶，壺がある。475は龍泉窯系青磁碗である。476は龍泉窯系青磁の小碗Ⅲ類である。口縁は折れ曲がって外反する。外面に蓮弁文がある。477は龍泉窯系青磁碗の口縁部である。478は同安窯系青磁皿の口縁部である。479は龍泉窯系青磁皿の口縁部である。480は龍泉窯系青磁皿である。481は同安窯系青磁の碗Ⅰ類の底部である。櫛状工具により施文されている。482は龍泉窯系青磁の碗Ⅰ類である。483・484・485は龍泉窯系青磁碗の底部である。486は瓶の口縁部である。487は壺の口縁部である。

青白磁は瓶の口縁部と思われる破片が1点出土している（488）。

肥前磁器には染付碗と青磁碗がある。489は染付碗の口縁部である。口縁下の外面に圏線2条と花が描かれる。490は青磁碗の底部である。

溝ＳＤ16の出土土器・陶磁器類には新旧2群に大きく分かれる。

古い1群は土師器皿（444～447），須恵器鉢（508・509），白磁碗（472）がある。おおよそ11世紀後半から13世紀初頭の遺物である。この時期の遺物が一定量存在するので，溝ＳＤ16に先行するなんらかの遺構が存在した可能性を考えたい。とすれば溝ＳＤ19と対になるような溝が溝ＳＤ16とほぼ同じ位置に存在した可能性も考えられよう。この遺物群は時期的に溝ＳＤ19の遺物群と重なること，溝ＳＤ19と溝ＳＤ16に挟まれた地域は遺構が非常に薄く，道として機能していた可能性が考えられるからである。

新しい1群は土師器皿（449～468），瓦質土器（506・507・512～514），古瀬戸（491～500），備前（502～504・511），信楽（501・505），白磁皿（473），青磁（475～487），青白磁（488）がある。おおよそ15世紀～16世紀の遺物である。これは溝ＳＤ16が本来機能していた時期に埋没した遺物と言えるだろう。

なお肥前磁器は新しい1群の遺物よりもさらに新しいものである。溝ＳＤ17は16世紀末～17世紀前半の遺構で，溝ＳＤ16を切っているので，この遺構からの混入と考えられる。

溝ＳＤ17土器・陶磁器類（図版50・51）

土師器，須恵器，瓦質土器，古瀬戸，備前，白磁，青磁，染付が出土している。

土師器には皿，鍋，つぼつぼがある。517～546は皿である。517はへそ皿である。518は一段凹みナデの小皿である。519～524は小皿，525～546は皿である。522～546は見込みに凹線状圏線が巡る。517・518は特に古いが，溝ＳＤ17は溝ＳＤ16を切る遺構なので，溝ＳＤ16より混入したものであろう。それ以外はＸ期新のものと考えられる。547はつぼつぼである。直径と器高がほぼ等しい。561は鍋である。口縁は内湾する。

須恵器には鉢がある。559は東播産の鉢である。

瓦質土器には羽釜と火鉢がある。548はミニチュアの羽釜である。558は火鉢の口縁部である。

古瀬戸には小皿，小鉢，壺，瓶子がある。554は小鉢の口縁部である。555は小皿の口縁部である。556は瓶子の口縁部，557は壺の底部である。

備前には擂鉢がある。560は擂鉢の口縁部で，4条単位の擂目が施される。

白磁には皿がある。549・550は白磁皿である。549は口縁が鋭く外反する。550は内面に沈線が巡る。白磁皿Ⅲ類であろう。

青磁には碗がある。552は蓮弁碗である。細蓮弁文で亀井分類のＢ－2類である。553も蓮弁碗であるが鎬蓮弁文である。横田・森田分類の龍泉窯系青磁Ⅰ－5類である。

染付には皿がある。551は染付皿である。体部外面には唐草文，内面見込みに圏線2条が巡り，花文が描かれる。口縁には1条の圏線が巡る。小野分類のＢ1群である。

出土遺物は13世紀から16世紀末までと時期幅がある。しかし，溝ＳＤ17は16世紀後半以前の溝ＳＤ16を切って形成されているので，掘削時期がこれより古くなることはない。16世紀後半以前の遺物は溝ＳＤ16から混入したものと考えるべきであり，溝ＳＤ17の機能時に埋没した遺物はほぼ16世紀末～17世紀前半のものと言えよう。

３．江戸時代中期の主要遺構出土土器・陶磁器類

土坑ＳＫ55土器・陶磁器類（図版52・53）

土師器，瓦質土器，備前，瀬戸美濃，唐津，肥前，明染付が出土している。

土師器には皿，鍋，焙烙，つぼつぼがある。562～576は小皿，577～590は皿である。ⅩⅢ期のものである。605・606・608は鍋である。607は焙烙である。612～614はつぼつぼである。口縁部に上方へのわずかな立ちあがりが認められる。

緑釉陶器には椀の底部が１点出土している（591）。混入である。

瓦質土器には灯篭と火鉢がある。609は灯篭であるが，灯明皿・覆いともに欠損している。610は火鉢の底部である。

備前には徳利と盤がある。603は徳利である。体部に櫛状工具による文様が施されている。611は盤である。

瀬戸美濃には天目茶碗，丸碗がある。592・593は天目茶碗，595は志野丸碗である。

唐津には碗がある。594は灰釉の丸碗である。

肥前磁器には碗と水滴がある。596・600は白磁碗である。597も白磁碗であるが，釉がかいらぎ状にちぢれている。598・599は青磁碗である。601は染付碗である。604は水滴である。鳥の浮き彫りが施されている。

明青花には皿がある。602は皿で，見込みには虎が描かれている。

出土土器・陶磁器には若干古い時期の遺物も含まれるが，18世紀後半までの遺物である。

第４節　瓦　類

第４次発掘調査でも瓦類は整理箱にして50箱程出土した。時期的には平安時代前期から現代に至るまでのものである。第３次調査出土瓦類と同じく大きく４つの時期，すなわち平安時代前期～中期，平安時代後期，鎌倉時代後期～室町時代，江戸時代に分けることができたが，瓦の年代や性格を考える上で出土遺構の年代や出土状況が重要となることを考慮して，ここでは主に出土遺構ごとに報告する。種類としては軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦を確認した。なお平安時代後期以降の軒瓦については型式を記述しているが，それについては付論２を参照していただきたい。ただし，細かな破片も出きる限り掲載したため，型式分類表の対象としなかった資料もある。

１．平安時代後期の主要遺構出土瓦類

溝ＳＤ19出土瓦類（図版54・55）

軒丸瓦６点（うち２点瓦当なし），軒平瓦８点，丸瓦片７点，平瓦片６点が出土している。

１～３と14・16は平安時代後期から鎌倉時代初頭の軒丸瓦である。４は鎌倉・室町時代の軒丸瓦である。１・３・４は巴文軒丸瓦，２は蓮華文軒丸瓦である。14・16は瓦当を欠失しているが，ヘラ記号が施されており軒丸瓦と判断できる。１はＮＭ015型式。全体に表面の摩滅が著しく調整はよく確認できない。表面灰色，断面黄灰色で，軟質である。２はＮＭ001型式。丹波系の複弁８葉蓮華文軒丸瓦である。表面青灰色，断面灰色で，硬質である。３はＮＭ016型式。中央官衙系の巴文軒丸瓦である。２次焼成を受け黒変している。４は鎌倉・室町時代の軒丸瓦。右巴文で珠文が巡る。14・16とも凸面縄目タタキのある丸瓦である。14は玉縁にくの字状のヘラ記号が施されている。16は×印のヘラ記号が一部残る。どちらも２次焼成を受けている。

５～12は軒平瓦である。12のみ剣頭文軒平瓦であり，それ以外はすべて唐草文軒平瓦である。また10・11は鎌倉時代後期のもので，それ以外はすべて平安時代後期から鎌倉時代初頭である。５はＮＨ014型式。栗栖野瓦窯の製品である。瓦当凸面にヨコナデ，側面にヘラケズリが施される。２次焼成を受け赤変している。平瓦部凹面は糸切り痕と布目痕が残る。６はＮＨ008型式。瓦当の成形は半折り曲げ技法である。栗栖野瓦窯の製品である。一部２次焼成を受け赤変している。７はＮＨ029型式。栗栖野瓦窯の製品であるが，５よりも新しい。顎裏面下端を面取りする。平瓦部凹面には布目痕が残る。表面・断面とも灰白色で，軟質である。８はＮＨ027型式。栗栖

野瓦窯の製品で，7よりもさらに新しい。瓦当の成形は折り曲げ技法である。瓦当外縁上端・瓦当凸面・側面にヘラケズリが施される。表面暗灰色，断面灰白色で，やや硬質である。9はＮＨ022型式。播磨系の軒平瓦である。2次焼成を受け赤変している。10はＮＨ103型式。顎裏面をヘラケズリした後ナデを施す。平瓦部凸面はタテナデが施される。表面黒色，断面灰白色で，やや硬質である。11はＮＨ109型式。顎凸面を面取りする。頚部にヨコナデが，平瓦部凸面はタテナデが施される。表面・断面とも灰色で，須恵質に硬く焼き締まる。12は下向きで鎬のある剣頭文の軒平瓦である。瓦当外縁上端を面取りする。表面黒色，断面灰白色で，やや硬質である。

13～21は丸瓦片である。このうち14・16は先述したように軒丸瓦の一部である。13は凸面縄目タタキ，凹面に布目痕を残す。表面，断面とも灰色で，須恵質に硬く焼き締まる。15・17～20は中央官衙系の瓦である。凸面縄目タタキを，凹面に布目痕を残す。18～20は2次焼成を受けている。21は凸面タテナデ，凹面には布目痕と吊り紐痕を残す。2次焼成を受けている。鎌倉時代の瓦である。

22～27は平瓦片である。22～25は凸面縄目タタキ，凹面に布目痕が残る。25は広端面に×印のヘラ記号が付いている。中央官衙系の瓦である。26は厚みがある瓦で凸面に粗い縄目タタキが残る。丹波系の瓦である。凹面には布目痕が残る。27は凸面に格子目タタキ目，凹面には布目痕が残る。胎土も白い鉱物が比較的大きく多く含まれており，表面黒色，断面褐色を呈しやや軟質である。産地不明の瓦で少なくとも京都産ではない。

以上のように出土した瓦には平安時代後期から鎌倉時代初頭と鎌倉時代後期と大きく2つの時期に分かれる。土器の所属時期も11世紀から12世紀のほか15世紀前半の遺物があり，後者は土坑ＳＸ01からの混入と考えた。したがってここでも鎌倉・室町時代の瓦は土坑ＳＸ01からの混入と考えたい。

土坑ＳＫ13出土瓦類（図版55）

軒丸瓦1点，軒平瓦1点，平瓦片が2点出土している。

29は平安時代後期の軒丸瓦で，ＮＭ023型式である。瓦当裏面は指頭圧痕がめだつ。離れ砂を使用。2次焼成を受け赤変している。軟質である。

28は平安時代後期の軒平瓦で，ＮＨ039型式である。瓦当外縁上端には横位のヘラケズリが短く連続する。平瓦部凸面は縄目タタキが，凹面は布目痕が残る。顎裏面には鉄釘が付着している。2次焼成を受け，全体が白化している。

30・31は平瓦である。30は2枚の粘土板を貼り合せ，凸面に粗い縄目タタキ，凹面には布目痕を残す。丹波系の瓦である。表面灰色，断面灰白色で，硬質である。31は凸面には縄目タタキをナデ消すが，凹面には布目痕と糸切り痕が残る。2次焼成を受け，一部赤変している。中央官衙系の瓦である。

土坑ＳＫ32出土瓦類（図版56・57）

軒丸瓦2点，軒平瓦3点，丸瓦片3点，平瓦片22点出土している。

32・33は平安時代後期の軒丸瓦である。32はＮＭ008型式。播磨系の複弁8葉蓮華文の軒丸瓦である。表面暗灰色，断面褐灰色で，須恵質に硬く焼き締まる。33はＮＭ022型式。中央官衙系の巴文軒丸瓦である。瓦当裏面は指頭圧痕がめだつ。表面黒色，断面白色で，やや硬質である。

34～36は軒平瓦であるが34・35は平安時代後期，36は鎌倉時代後期のものである。34はＮＨ034Ｂ型式の剣頭文軒平瓦。頚部には強いヨコナデが施されている。平瓦部凸面は縄目タタキが残る。凹面には布目痕が残るが，それは市松模様である。おそらく唐綾を使用しているのであろう(註2)。平瓦部凹面側縁をタテケズリで調整している。表面暗灰色，断面灰色で，軟質である。35はＮＨ025型式の唐草文軒平瓦。平瓦部凸面には縄目タタキが，凹面には布目痕が残る。凹面には「廾」形のヘラ記号がある。2次焼成を受けている。36はＮＨ101型式の唐草文軒平瓦。破断面より瓦当貼り付けであることがわかる。瓦当外縁上端・顎凸面・顎裏面を面取りする。表面黒色，断面白色で，硬質である。

59～61は平安時代後期の丸瓦片である。59は凸面縄目タタキ，凹面布目痕が残る。60は玉縁が残る破片で，凸面は平行タタキ，凹面は布目痕が残る。玉縁に釘孔が1つあいている。61は玉縁部の破片である。すべて2次焼

成を受けている。

37～58は平瓦片である。このうち58のみが室町時代後期のもので，全体を丁寧にナデで仕上げられている。混入である。それ以外はすべて平安時代後期の中央官衙系の平瓦である。37～42は凸面・凹面とも糸切り痕が顕著に残るものである。37のように凹面についてはナデ消されているものも存在するが，39のように両面ともほとんど消されていない例も存在する。43～50は凸面に縄目タタキ，凹面に布目痕があるものである。51～57は凸面がハケ状工具によるナデが施されているものである。すべて２次焼成を受けている。

以上のように土坑ＳＫ32から出土した瓦には平安時代後期の瓦のほか，鎌倉時代後期，室町時代後期の瓦があった。ほとんどが２次焼成を受けていることが特徴である。出土した土器の様相を見れば，主体となるのは12世紀後半の土器群で，16世紀後半の土器も混じっている。後者はＳＫ32を切る土坑ＳＫ31からの混入と考えられる。したがってここでも鎌倉・室町時代の瓦は土坑ＳＫ31からの混入と考えられよう。

土坑ＳＫ31出土瓦類（図版58）

土坑ＳＫ31は既に述べたように16世紀後半の遺構であるが，土坑ＳＫ32を切って形成されているため，平安時代後期の瓦も多数含まれている。そうした瓦を本来土坑ＳＫ31に含まれていたものと考え，ここで報告することにする。丸瓦片４点，平瓦片７点出土している。

62～65は丸瓦片である。62・63は鎌倉・室町時代の瓦，64・65は平安時代後期の瓦である。62は凸面タテナデが施され，凹面は布目痕と吊り紐痕が残る。表面黒色，断面灰色で硬質である。63が凸面タテナデ施され，凹面は布目痕が一部ナデ消されている。62と形態が近似しておりほぼ同時期のものと考えられる。２次焼成を受けている。64は凸面ナデが施され，凹面には布目痕が残る。65も玉縁接合部の破片であるが，凸面ナデが施され，凹面には布目痕が残る。64・65は２次焼成を受けている。

66～72は平瓦片である。72は全体に摩滅しており所属時期が判断できないが，それ以外は凸面に縄目タタキ，凹面に布目痕があり，平安時代後期の中央官衙系の瓦と判断できる。すべて２次焼成を受けている。

その他遺構出土軒瓦（図版58）

73・74は剣頭文軒平瓦である。73はＮＨ034Ｃ型式。頚部には強いヨコナデが施される。顎凸面，凹面側縁，側面にヘラケズリが施される。平瓦部凸面は縄目タタキが残る。凹面には布目痕が残る。布目は市松模様であることから唐綾である。２次焼成を受け白化し，軟質である。土坑ＳＫ20より出土。74はＮＨ034Ｄ型式。下向きで鎬のある剣頭文である。平瓦部凹面には布目痕が残る。表面黒色，断面灰色で，やや軟質である。土坑ＳＫ25より出土。

２．鎌倉時代～室町時代前期の主要遺構出土瓦類

出土量が多く当初の整理方針が特徴的なもののみを取り上げることとしていたため，全点を把握しきれていない。ここでは特徴的なものを報告することになる。まとまって出土した遺構には土坑ＳＫ21と土坑ＳＸ01がある。

土坑ＳＫ21出土瓦類（図版59）

軒丸瓦３点と丸瓦７点，平瓦９点が出土している。

75～77は軒丸瓦である。75は鎌倉時代の巴文軒丸瓦である。ＮＭ104Ｂ型式。表面･断面とも灰色で，硬く焼き締まる。76は鎌倉時代の巴文軒丸瓦の小破片である。右巴文で珠文が３個残存する。２次焼成を受け赤変している。77は平安時代後期の巴文軒丸瓦である。ＮＭ010型式。瓦当裏面には指頭圧痕が顕著に残る。表面･断面とも灰白色で，やや軟質である。78～84は平安時代後期の丸瓦である。凸面には縄目タタキ，凹面には布目痕が残る。82は表面黒色，断面灰色で，やや硬質である。82以外は２次焼成を受ける。85～93は平安時代後期の平瓦である。85・86は凸面に縄目タタキ，87～90は凸面格子目タタキ，91・92はハケ状工具によるナデが残る。93は凸面を丁寧にナデ消している。いずれも凹面に布目痕が残る。88は表面褐灰色，断面灰色で軟質である。89は表面・断面とも灰色でやや硬質である。これら以外は２次焼成を受ける。

以上のように土坑ＳＫ21から出土した瓦は平安時代後期の瓦と室町時代の瓦と大きく２つに分かれる。土坑ＳＫ21出土の土器は，12世紀代の土器も混じるが主体は15世紀中葉である。したがって瓦についても主体となるのは室町時代の瓦で，平安時代後期の瓦は遺構が形成される際に土器とともに混入したものであろう。

土坑ＳＸ01出土瓦類（第71図・図版60）

軒丸瓦４点，軒平瓦３点，丸瓦８点，平瓦２点が出土している。

94～97は軒丸瓦である。94・95は鎌倉時代後期の巴文軒丸瓦，96は平安時代後期の巴文軒丸瓦，97は平安時代後期の蓮華文軒丸瓦である。94はＮＭ105Ａ型式。離れ砂を使用。表面黒色，断面灰色で，やや硬質である。95はＮＭ105Ｂ型式。離れ砂を使用。表面暗灰色，断面灰色で，軟質である。96はＮＭ011型式。瓦当裏面は指頭圧痕がある。２次焼成を受け赤変している。97はＮＭ003型式。播磨系の単弁10葉文蓮華文軒丸瓦である。２次焼成により黒変し，軟質である。

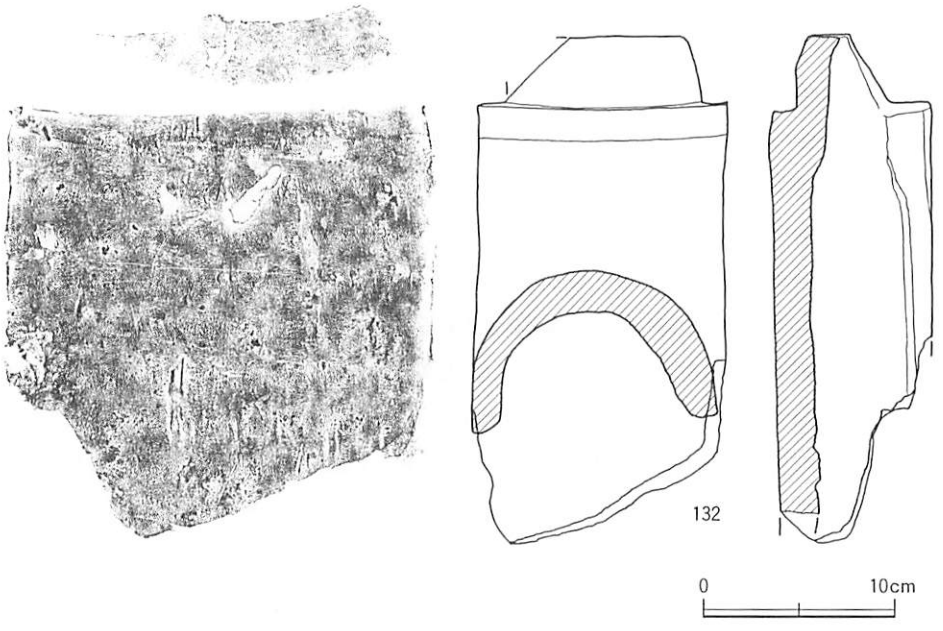
98～100は軒平瓦で，平安時代後期の唐草文軒平瓦である。98はＮＨ024型式。平瓦部凹面には布目痕が残る。顎凸面を面取りする。２次焼成を受け赤変している。99は栗栖野瓦窯の製品でＮＨ016型式である。全体に摩滅が著しい。平瓦部凹面には布目痕が残る。表面･断面とも浅黄色で，軟質である。100は栗栖野瓦窯の製品でＮＨ018型式である。瓦当外縁上端・瓦当裏面下端にはヘラケズリが施される。表面黒色，断面灰色で，硬質である。

101～107・132（第71図）は丸瓦である。このうち101～104は鎌倉・室町時代の丸瓦である。凸面タテナデ，凹面には布目痕を残すもの（101・103・104）と布目痕をハケ状工具でナデ消すもの（102）がある。101は側面と凹面側縁にヘラケズリが施される。表面黒色，断面暗灰色で，硬く焼き締まる。102～104は２次焼成を受け赤変している。105～107･132は平安時代後期の丸瓦である。105～107は凸面には縄目タタキ，凹面には布目痕が残る。105は凸面の縄目タタキをナデ消している。101～107は２次焼成を受けている。132は播磨系の丸瓦である。凸面ナデにより調整され，凹面には布目痕が残る。表面灰色で，須恵質に硬く焼き締まる。完形に近い形を保っており，埋没直前まで屋根に葺かれていた可能性が考えられる。

108･109は平安時代後期の平瓦である。凸面縄目タタキ，凹面はナデにより仕上げられている。108は２次焼成を受け赤変している。109は表面黒色，断面灰白色で，軟質である。

３．室町時代後期～江戸時代前期の主要遺構出土瓦類

前項と同様に全点を把握しきれていないので，特徴的なものを報告することになる。まとまって出土した遺構には溝ＳＤ01がある。



第71図　土坑ＳＸ01出土丸瓦実測図（1/4）

溝ＳＤ01出土瓦類（図版61）

軒丸瓦１点，軒平瓦２点，丸瓦１点，平瓦１点がある。いずれも上層より出土した。

112は軒丸瓦の小破片である。外区内縁に珠文を巡らす。鎌倉・室町時代のものであろう。

111・114は軒平瓦である。111は唐草文軒平瓦の破片である。瓦当外縁上端・顎凸面・顎裏面を面取りする。脇区が広く江戸時代の瓦である。114は江戸時代の唐草文軒平瓦である。ＮＨ203型式。平瓦部凹面はヨコナデ，凸面には離れ砂が付着し，頚部に凹形台の痕跡が残る。瓦当外縁上端・顎凸面・顎裏面を面取りする。表面黒色，断面白色で，硬質である。

112は平安時代後期の丸瓦である。113は平安時代後期の平瓦である。ともに凸面に縄目タタキ，凹面には布目痕が残る。２次焼成を受けている。

以上のように溝ＳＤ01から平安時代後期，鎌倉・室町時代，江戸時代の瓦がある。溝ＳＤ01上層は元和年間の火災後の廃棄土坑として考えているので，江戸時代の瓦はこれに近い時期のもの，それ以外の瓦は残存状態が悪いので２次的な混入の可能性が高い。

４．江戸時代中期の主要遺構出土瓦類

前項と同様，全点を把握しきれていない。主要な遺構より出土した瓦類を報告する。土坑ＳＫ46と土坑ＳＫ55がある。

土坑ＳＫ46出土瓦類（図版61）

軒丸瓦２点がある。115・116は軒丸瓦である。ともに江戸時代の巴文軒丸瓦である。115はＮＭ201Ｈ型式。表面暗灰色，断面灰白色で，硬質である。116はＮＭ201Ｊ型式。全体に摩滅が著しい。表面灰色，断面灰白色で，やや軟質である。

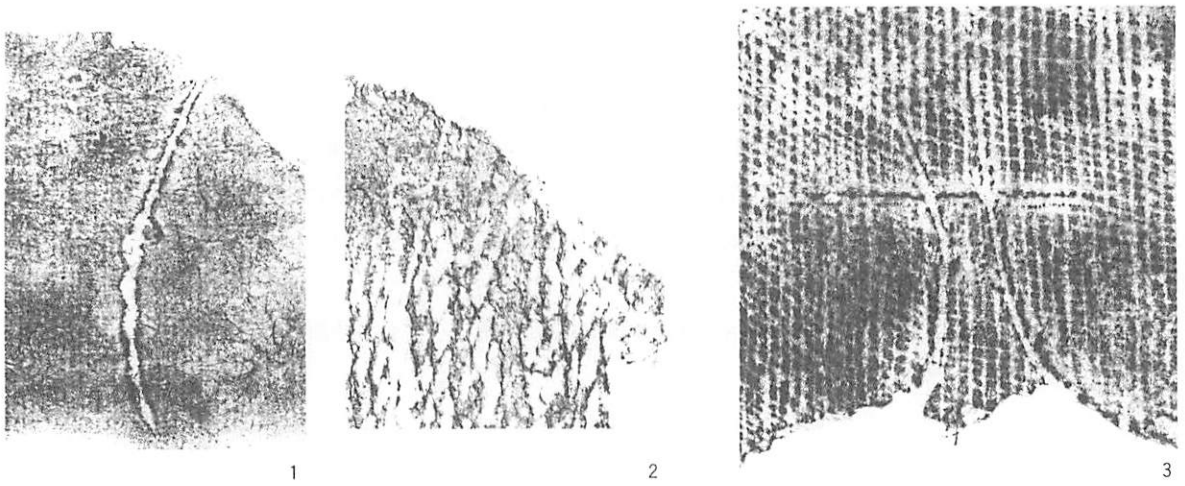
土坑ＳＫ46は天明の大火後の廃棄土坑と考えられる。したがってこれら江戸時代の瓦は大火以前の瓦に位置付けられる。

土坑ＳＫ55出土瓦類（図版61～63）

軒丸瓦６点，軒平瓦８点，丸瓦１点がある。

117・119～123は軒丸瓦である。いずれも巴文軒丸瓦であるが，119～123は江戸時代の，117は室町時代の瓦である。115は巴文と珠文のみが残存する。右三巴文とみられる。離れ砂を使用。表面灰色，断面灰白色で，やや硬質である。119はＮＭ201Ｉ型式。丸瓦部の凸面はタテナデ，凹面は布目痕をナデ消している。２次焼成を受けている。120はＮＭ201Ｇ型式。２次焼成を受けたためか，表面が荒れている。121は巴文と珠文の一部が残存する。右巴文である。２次焼成を受け黒変している。122・123はともに丸瓦凹面に滑り止めとなる鰭状の突起があり，布目痕と吊り紐痕が残る。そして凸面はタテミガキで仕上げられている。122はＮＭ201Ａ型式。表面暗灰色，断面灰色で，硬質である。123はＮＭ202型式。表面黒色，断面灰色で，硬質である。

124～131は軒平瓦である。いずれも唐草文軒平瓦であるが，131は平安時代前期の，124～126・128・130は室町時代の，127～129は江戸時代の瓦である。124～126は同笵瓦である。ＮＨ112型式。平瓦部凹面･凸面ともタテナデにより仕上げられる。瓦当外縁上端・顎凸面・顎裏面を面取りする。いずれも２次焼成を受け赤変している。127はＮＨ202型式。平瓦部凹面・凸面ともナデにより仕上げられる。顎凸面・顎裏面を面取りする。胎土は砂を多量に含みやや粗質である。表面黒色，断面灰白色で，やや軟質である。128はＮＨ110型式。平瓦部凹面・凸面ともナデにより仕上げられる。瓦当外縁上端・顎凸面・顎裏面を面取りする。２次焼成を受け赤変している。129はＮＨ204型式。平瓦部凹面・凸面ともナデにより仕上げられる。瓦当外縁上端・顎凸面・顎裏面を面取りする。表面暗灰色，断面灰色で，やや硬質である。130はＮＨ119型式。平瓦部凹面･凸面ともナデにより仕上げられる。瓦当外縁上端・顎凸面・顎裏面を面取りする。表面黒色，断面灰白色で，硬質である。131は均整唐草文軒平瓦。西賀茂瓦窯ＮＳ205ｂ型式であるが，製作地についてはわからない。顎形態は曲線顎。顎凸面にヘラケズリ，平瓦部凸面には無文のタタキが施される。凹面の調整は摩滅により不明である。胎土は砂を含み表面暗灰色，断面灰



第72図　第4次調査出土瓦の記号集成（実大）

色を呈する。やや硬質である。

丸瓦について。118は丸瓦の玉縁部である。凸面はミガキ，凹面は布目痕が残る。胎土は砂を多く含み，表面黒色，断面暗灰色を呈する。やや軟質である。

以上のように土坑ＳＫ55出土瓦は平安時代前期，室町時代，江戸時代という３つの時期にわかれた。しかし土器・陶磁器から土坑ＳＫ55は天明の大火後の廃棄土坑と考えられる。平安時代前期の瓦及び室町時代の瓦は２次的な混入品である。江戸時代の瓦については大火以前の瓦に位置付けられる。

５．記号（第72図）

第４次調査で出土した瓦類には記号を施したものが３点出土している。いずれも平安時代後期のものである。刻印は見つかっていない。１は軒丸瓦14の玉縁外面につけられたヘラ記号でくの字状である。２も軒平瓦16の丸瓦部外面につけられたヘラ記号で一部欠けるが×印の記号である。３は軒平瓦35の平瓦部中央に付されたヘラ記号である。「廾」形の記号である。

６．小結（第73図）

ここでは以上取り上げた軒瓦について時期ごとに簡単にまとめておきたい。第74図が瓦当文様の一覧である。

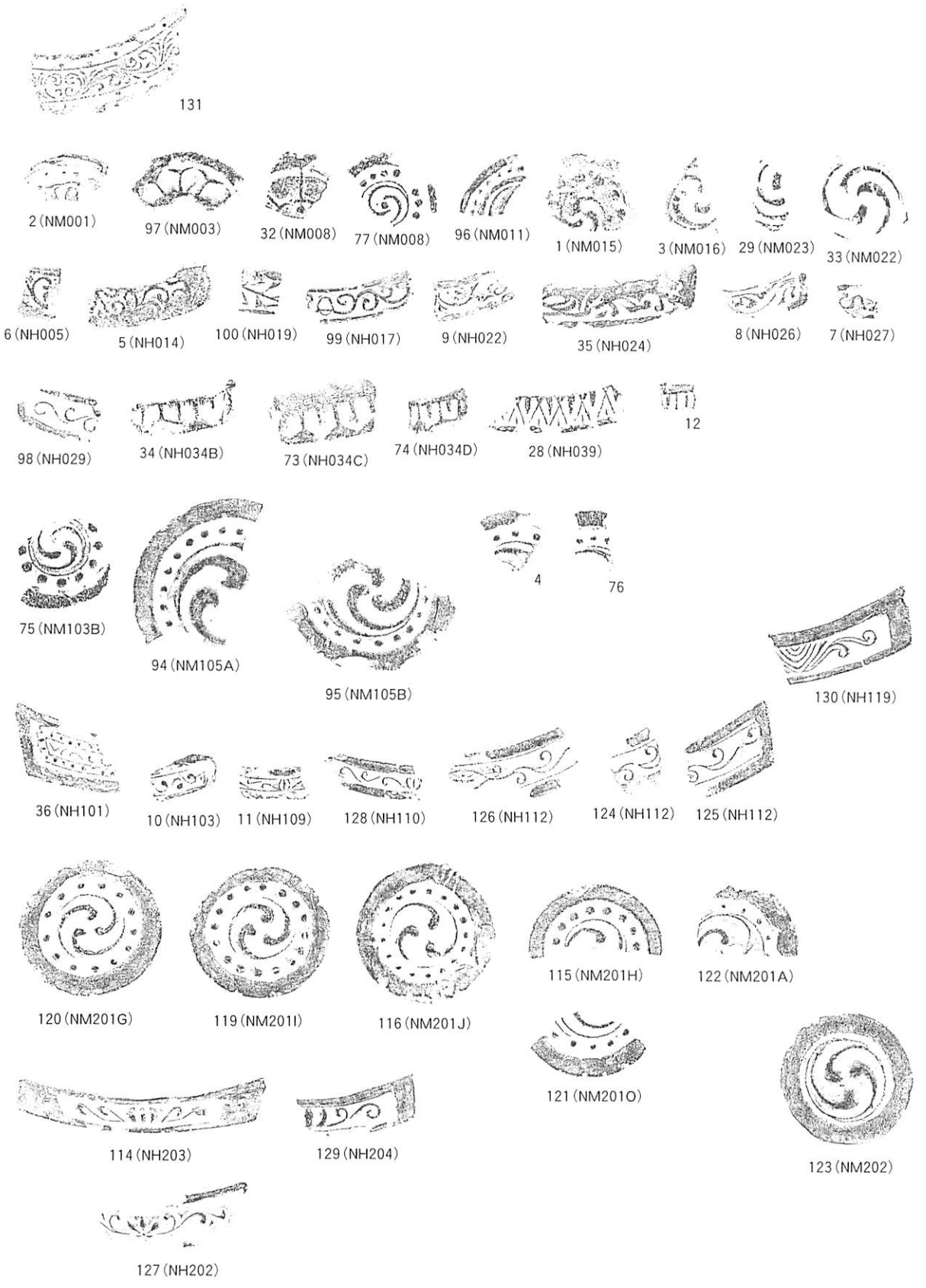
平安時代後期の軒瓦について軒丸瓦は10型式10種10点，軒平瓦は12型式12種13点が出土している。内訳は溝ＳＤ19から軒丸瓦４型式４種４点，軒平瓦５型式５種６点。土坑ＳＫ13から軒丸瓦１型式１種１点，軒平瓦１型式１種１点。土坑ＳＫ32から軒丸瓦２型式２種２点，軒平瓦２型式２種２点。土坑ＳＫ20から軒平瓦１型式１種１点。土坑ＳＫ25から軒平瓦１型式１種１点。土坑ＳＫ21から軒丸瓦１型式１種１点。土坑ＳＸ01から軒丸瓦２型式２種２点。軒平瓦２型式２種２点。以上である。

鎌倉・室町時代の軒瓦について軒丸瓦は４型式５種，軒平瓦は６型式６種が確認された。内訳は溝ＳＤ19から軒平瓦２型式２種。土坑ＳＫ32から軒平瓦１型式１種。土坑ＳＫ21から軒丸瓦１型式１種。土坑ＳＸ01から軒丸瓦１型式２種，軒平瓦１型式１種。土坑ＳＫ55から軒丸瓦２型式２種，軒平瓦２型式２種。以上が出土している。

江戸時代の軒瓦について軒丸瓦は２型式６種，軒平瓦は４型式４種が確認された。内訳は溝ＳＤ01から軒平瓦１型式１種。土坑ＳＫ46から軒丸瓦１型式３種。土坑ＳＫ55より軒丸瓦１型式３種，軒平瓦３型式３種。以上出土している。

第５節　土製品

第４次調査で出土した土製品には伏見人形がある（図版64）。１～６は狐の人形である。１は口に玉をくわえている。２は接着面で剥がれた狐の頭部1/2片である。これは巻物をくわえている。３～４は胴部の破片である。



第73図　第４次出土軒瓦一覧表

このうち3～5は接着面で剥がれて約半分が残存する。粘土を型に入れたときの指痕が認められる。7～10は人形の台の部分である。7は最も簡素な形態で，高さがあまり高くない直方体をしている。8はやや裾広がりとなり各側面中央下を抉る。9は側面に広狭間があしらわれる。9は平面形小判形の台で側面に「金」の字が横に並べられ装飾となっている。なおこの裏面には「小判乗」という墨書がある。11は毘沙門天の頭部破片である。12は布袋頭部破片である。13は扇形の一部でその中に鶴の頭部が残っている。これは福助の背景に扇形をあしらったものがあり，その一部である(註3)。1・4・7～9は試掘トレンチ，2・3・5は土坑ＳＫ11，10は溝ＳＤ07，11～13は土坑ＳＫ35より出土した。

第6節　石製品

第4次調査で出土した石製品には石塔，砥石，石硯，茶臼，石鍋がある。以下分けて報告する。

1．石塔（図版65～68）

第4次調査で出土した石塔には一石五輪塔，五輪塔，宝篋印塔，卒塔婆がある。1～16は一石五輪塔である。1はほぼ完形品で，正面には梵字の「キャ」「カ」「ラ」「バ」「ア」が彫られている。また地輪には「永正六年」「妙心禅尼」「二月二十四日」と彫られている。石材は不明であるが安山岩に似ている。ＳＫ20より出土。2～12は砂岩製の一石五輪塔である。2～5・6・8・9・12には正面に梵字が彫られている。7は火輪に「蓮」，水輪に「華」の字が彫られている。2はほぼ完形品で地輪には梵字以外で「天□□年」「善」「十一月十日」という文字が認められる。10・11は地輪のみの破片で，10には「天文五年」「□淨貞□」「五月一日」，11には「天□□年」「妙□□女」「八□□日」という文字が認められている。12もほぼ完形品で，正面に梵字のほか地輪には「永禄九年」「宗清大姉」「十月六日」の文字が彫られている。12のみ土坑ＳＫ38より出土し，それ以外は土坑ＳＫ55より出土した。13～16は花崗岩製の一石五輪塔である。13は火輪と水輪のみの破片で，梵字の「ラ」「バ」が彫られている。このほかの一石五輪塔には認められない。いずれも土坑ＳＫ55より出土した。砂岩製の一石五輪塔と比してやや大ぶりである。17･18は一石五輪塔の空輪･風輪である。17は花崗岩製，18は砂岩製である。19は五輪塔の火輪である。梵字の「ラ」が彫られている。花崗岩製で包含層より出土した。20は宝篋印塔の笠である。隅飾は大半が欠損しておりよくわからない。花崗岩製で包含層より出土した。21は宝篋印塔の基礎である。反花は複弁で，線彫りによって表現されており立体感がない。砂岩製で土坑ＳＫ46より出土した。22は卒塔婆の塔身である。四角柱状で下半部が欠けている。正面には「南無妙法」，両側面と裏面には「妙法蓮」の文字が彫られている。これはしたがって題目塔である。上面には円形のほぞが作り出されている。この上に笠形が載せられたのであろう。花崗岩製で包含層より出土した。

2．砥石（図版69）

砥石は10点出土した。32は小豆色の粘板岩製，それ以外は白色ないし黄灰色の粘板岩製でいずれも仕上げ砥と考えられる。23は土坑ＳＫ55より，24・27・28・32は土坑ＳＫ40より，25・31は溝ＳＤ19より，26・29・30は溝ＳＤ16より出土した。

3．石硯（図版70）

第4次調査では石硯が2点出土した。33と34はいずれも粘板岩製の長方硯である。裏面は平坦である。33は土坑ＳＫ30出土，34は土坑ＳＫ55出土である。

4．茶臼（図版70）

茶臼は1点出土した。35は下臼の約1/4の破片で臼面は周縁平滑型の8分画である。受け皿部の口縁はやや膨らみ丸みを帯びて仕上げられている。底面は浅く掘りくぼめられている。いわゆる宇治石とよばれる宇治の輝緑岩製で「宇治臼」とよばれるものである。土坑ＳＫ22より出土。

５．石鍋（図版70）

滑石製石鍋は１点出土した。36は口縁部の破片で，外面の口縁よりやや下がった位置に隆帯が１条巡る。溝ＳＤ19より出土。

第７節　鉄製品

やっとこと鉄釘が出土した(図版70)。37は完形のやっとこである。溝ＳＤ01上層より出土。実測図を掲載していないが，鉄釘は遺構を中心に多量に出土している。

第８節　銅製品

図示しなかったが包含層を中心に飾り金具などが出土している。

第９節　銭貨

二朱金銭，渡来銭，寛永通宝が出土している（図版70)。38は万延二朱金である。土坑ＳＫ10より出土。このほか実測図を掲載していないが，宋銭，明銭，寛永通宝が多量に出土している。

註

(１)出土遺物を分類するにあたって第５章註１前掲（52頁）の文献を参考にしている。

(２)植山　茂「平安時代の瓦における布目」(『日本古代学論集』所収，京都，昭和59年)。

(３)伏見人形窯元７代目丹嘉の大西時夫氏より御教示いただいた。

第9章　考　察

第1節　第3次・第4次調査からみた六角堂境内の変遷

第3次・第4次調査の結果から，六角堂境内の遺構の変遷をまとめてみる。遺構は第3次・第4次調査から奈良時代以前，平安時代，鎌倉時代～桃山時代，江戸時代の4時期に分けることができた。その時期区分にしたがって遺構の変遷をまとめてみたい。

1．奈良時代以前（第74図）

第3次調査の流路ＳＤ6・ＳＤ7がある。どちらも第3次調査Ｉ区北部を北東―南西方向に蛇行しつつ流れる。その堆積層より縄文中期から晩期と弥生前期の土器片が出土している。この流路は他の時期の遺物は含まず，弥生前期で埋没するものと考えられる。付近に集落があったと推測されるが，発掘調査では見つからなかった。なお第4次調査の調査区では奈良時代以前の遺構は見つかっていない。

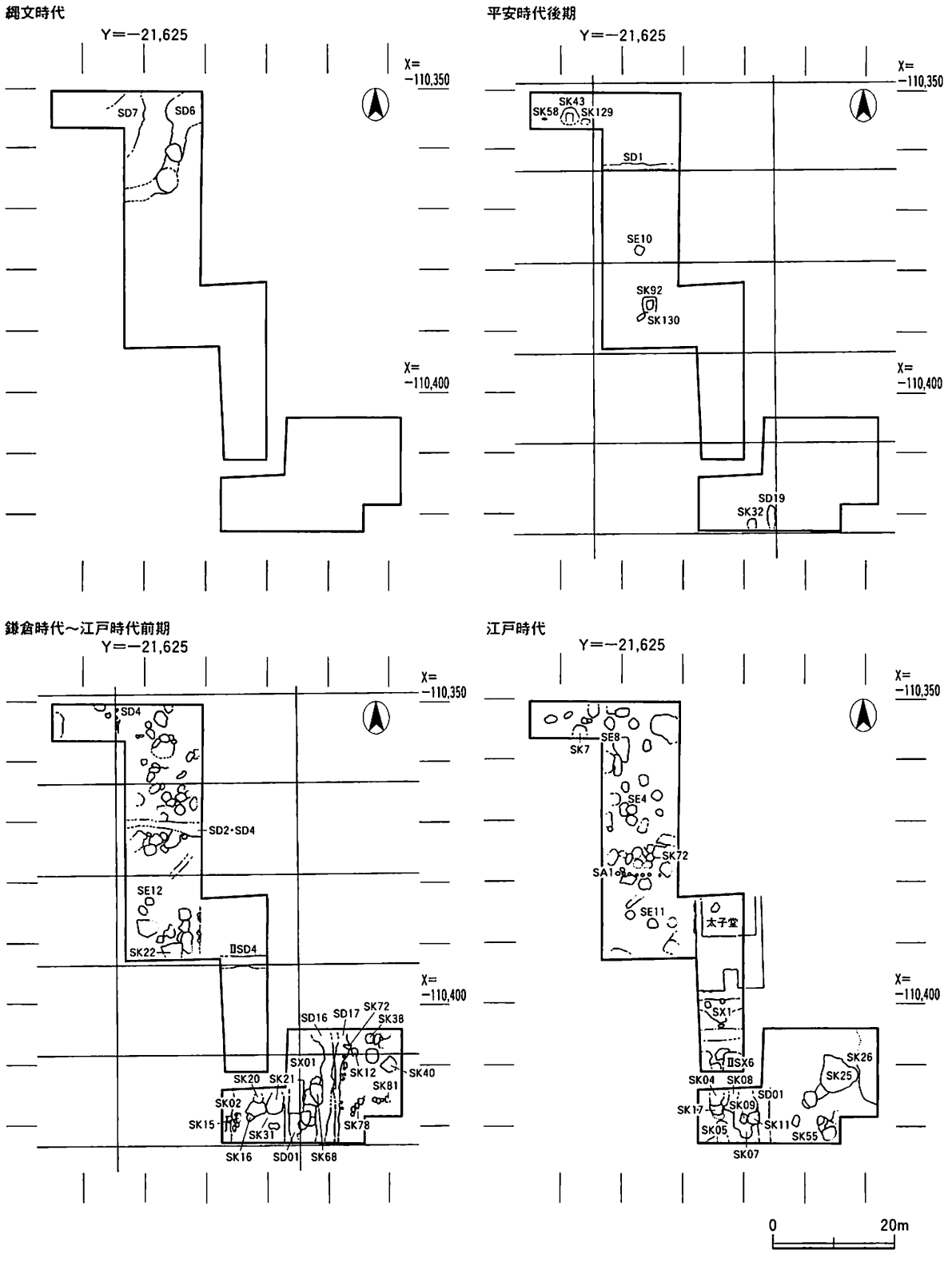
2．平安時代（第74図）

平安時代について第3次調査・第4次調査とも後期の遺構が確認されている。前期・中期の遺物はごくわずか出土しているが，遺構はまったく見つかっていない。

第3次調査では井戸ＳＥ10・ＳＫ43・ＳＫ92，溝ＳＤ1，土坑ＳＫ58・ＳＫ129・ＳＫ130がある。第4次調査では溝ＳＤ19，土坑ＳＫ32がある。第3次溝ＳＤ1は北三門･四門の境界線上に乗る。それは第1次調査ＳＤ339と同一溝であると考えられる。また，第4次溝ＳＤ19は西三行・四行の境界線上である。九条家本『延喜式』によれば六角堂は左京四条三坊十六町内に，六角小路に面して1町より小さく，コの字形に区画されて描かれており，これらの溝は図示された境界を示す施設と考えられる。遺構から類推すれば，平安時代後期の六角堂の寺域は西二行北四門から北八門，西三行北四門から北八門である。これらの溝はいずれも11世紀後半に掘削され，12世紀末には埋没している。しかし，この寺域の範囲は江戸時代初頭の絵地図にも図示されており，少なくとも江戸初期までは踏襲されていたことがわかる。井戸は3基見つかっている。このうち井戸ＳＫ43は西二行北三門にあり，六角堂の施設ではない可能性がある。井戸ＳＥ10は西三行北四門，井戸ＳＫ92は西三行北五門に位置する。この2つが同時に存在したか，時期差があるのかはわからない。ＳＫ92は出土遺物から12世紀末に埋没している。多量の炭・焼土が伴って出土しており，おそらく建久三年（1193）焼亡の際に埋められたと考えられる。井戸ＳＥ10の埋没状況と異なる。この点からは埋没時に時期差を考えるべきだろう。3基の井戸とも縦板組横桟式と考えられる。土坑について土坑ＳＫ58は土師器皿埋納遺構，土坑ＳＫ129は九州産軒丸瓦など多量の瓦が出土した遺構である。どちらも西二行北三門に位置し，六角堂寺域からはずれる。六角堂と関係しないとも考えられるが，特に土坑ＳＫ58は出土土師器から11世紀中葉の遺構で六角堂の寺域が溝で区画される時期と重なる。土坑ＳＫ58の性格が土師器皿の埋納による地鎮遺構とした場合，六角堂の改修に伴う遺構の可能性も否定できない。土坑ＳＫ129は出土遺物から12世紀前葉で瓦と遺構の間に時期差がほとんどないようであり，出土した瓦は使用前に埋没したと考えられる。土坑ＳＫ130は西三行北五門で井戸ＳＫ92の南西に接してある。これはゴミ捨ての土坑であろう。第4次調査でも土坑ＳＫ32があるが，これは火災後の廃棄土坑である。井戸ＳＫ92と同時期であろう。

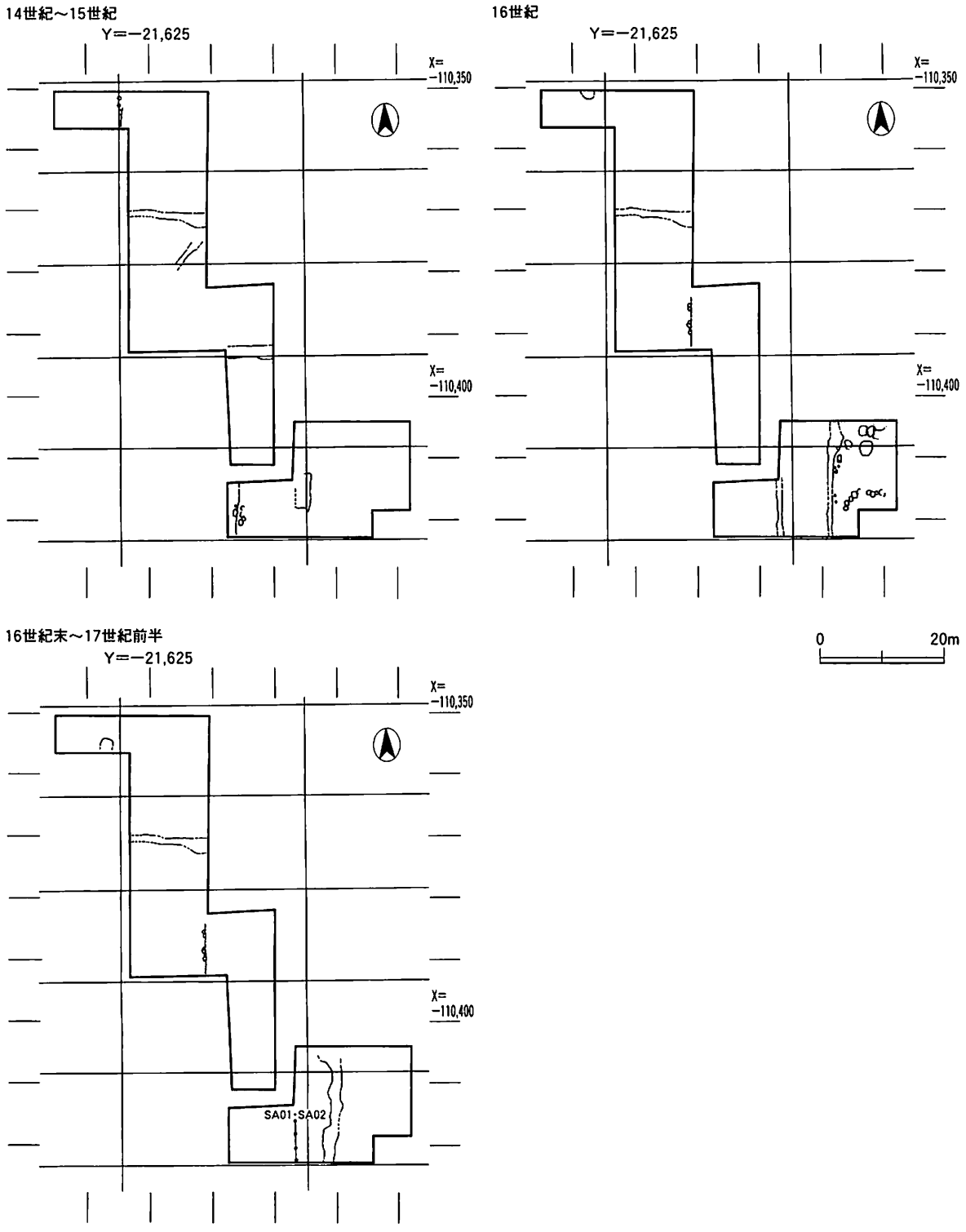
3．鎌倉時代～江戸時代前期（第74・75図）

鎌倉時代から江戸時代前期にかけての遺構について，第3次調査では溝ＳＤ2・ＳＤ3，溝ＳＤ4，溝ＳＤ5，溝Ⅱ区ＳＤ4，井戸ＳＥ7，石列がある。第4次調査では西区西端の段差，溝ＳＤ1下層，溝ＳＤ16，溝ＳＤ17，塀ＳＡ01・ＳＡ02，塀ＳＡ03，土坑墓ＳＫ38・ＳＫ42・ＳＫ78・ＳＫ81がある。また第3次調査・第4次調査とも土坑が多数見つかっている。なお実年代としては13世紀から17世紀前半までをここでは取り扱うこととする。



第74図 六角堂境内における遺構変遷図1

まずこの時期を通じての遺構の分布を概観する(第74図)。西二行北三門では井戸ＳＥ７といくつか土坑があるが，全体に遺構は薄い。西三行・四行の境界に溝ＳＤ４がある。西三行北三門から北四門にかけては反対に土坑の分布が濃密である。北四門の中央を溝ＳＤ２・ＳＤ３が東西に走るが，この両側に土坑が比較的多く形成されている。西三行北四門・五門の境界には塀ＳＡ１がある。西三行北五門には中央に南北方向の石列がある。土坑はこの区画の西半分で確認されているが，南に寄る。東半には江戸時代に太子堂が造営されるため，よくわから



第75図　六角堂境内における遺構変遷図2

ない。ただし太子堂の池の下から東西溝Ⅱ区ＳＤ４が見つかっている。これは西三行北五門・六門の境界線上にのる。これより南，北六門ではこの時期の遺構は見つからなかった。西三行北七門では地山を削り出した段差とその周辺の土坑，および廃棄用土坑が見つかっている。西三行・四行の境界線よりやや西にずれたところに南北溝ＳＤ１下層が走る。西四行北六門・北七門については西端から約10m東にはずれたところを南北溝ＳＤ16およびＳＤ17が走る。これより東側に土坑墓ＳＫ38・ＳＫ42・ＳＫ78・ＳＫ81がある。このほかにも同規模の土坑があり，墓域を形成していたのであろう。

次に時期を細分して遺構の展開を考えたい。おおよそ13世紀，14～15世紀，16世紀，16世紀末～17世紀前半の4時期にわけてまとめる(第75図)。ただし六角堂の敷地の範囲については前述したようにこの時期も平安時代の敷地範囲を踏襲していると考えられる。すなわち西二行北四門から北八門，西三行北四門から北八門である。

まず13世紀の遺構は1つのみである。第4次土坑ＳＫ40であるが，これは西四行北七門の北端に位置するが，前に推定した六角堂の敷地からはずれる地点のものである。また六角堂敷地内である西三行北四門から北七門の遺構出土の遺物とは白磁・青磁が少なく，鍋・釜といった煮炊具が一定量を占めるなど，様相に若干の差異がある。六角堂と関係なく別の所の廃棄物である可能性が高い。しかし，西四行北七門についてみれば，詳細な時期不明であるが，遺構の切り合いから15世紀以前と推測される土坑群が西端に南北に連なって形成されている。これらからは遺物がほとんどなく，この点六角堂敷地内の遺構とは異なる。これらとも関連するとするならば，土坑ＳＫ40の形成の主体者というのはこれらの土坑に囲まれた遺構の見つかっていない場所を居住域としていた可能性が考えられるだろう。土坑がこの居住者の占有地の境界近くに形成されているとするならば，この居住者の占有地の範囲は少なくとも西四行北七門，あるいは北七門と北八門まで含められるかもしれない。

14～15世紀について主要な遺構として第3次塀ＳＤ4，溝ＳＤ2・ＳＤ3，溝ＳＤ5，溝Ⅱ区ＳＤ4，第4次段差，土坑ＳＸ01がある。第3次溝ＳＤ4は六角堂敷地外であるが，西二行・三行の境界線上に位置しており，宅地境界の可能性が高い。また西三行北四門では東西溝ＳＤ2・ＳＤ3が掘られる。これは北四門のちょうど南北の2等分線上に当たる。この北側には特に土坑が集中して形成されるので，この溝は境界を示すもので，この北側に居住域が展開していたと推測される。とすれば溝ＳＤ4と溝ＳＤ2・ＳＤ3で区画された区域は1つの居住域（宅地）として考えるべきだろう。そしてそれはこの時期に出現し，それはまた，六角堂の寺域の北部の一部に食い込んでいるといえる。第3次溝ＳＤ5は西三行北四門にある北東―南西方向の浅い溝で，出土遺物も少ない。性格がよく分からない溝である。第3次溝Ⅱ区ＳＤ4は北五門・六門の境界線上の東西溝である。これは六角堂寺域内であり，その中を区画する溝の可能性も考えられるが，埋土は腐植土を含む粘土層であり，湿地状の堆積土に近い。これは滞水していたことを示しており，園池とつながるような溝であった可能性も考えられるであろう。また，この溝の地点は江戸時代の太子堂の池が造られており，池と連続する溝の可能性を示唆しているといえる。このような点から一応ここでは境界表示の溝とは捉えず，園池の一部と理解しておきたい。

西三行北六門・北七門について，第4次調査西区では地山削り出しの段差が南北方向にある。第4次調査西区は15世紀後半に盛土整地がなされており，段差はこれにより埋まったものである。したがってこれよりも古いものである。また，位置的にも現在の六角堂の真東約10mのところにあり，古くより六角堂の位置は変わっていないとするならば，この段差は六角堂本堂の基壇の一部，ないしそれにかかわる施設の一部である可能性が高い。この段差の上面には土坑ＳＫ02があり，これも六角堂本堂にかかわる遺構と推測することも可能である。しかし，土坑ＳＫ02は柱穴である可能性もあるが，段差について基壇と関わるとする積極的な証拠に欠ける。また西三行北七門と西四行北七門の境界線上に，方形の土坑である第4次土坑ＳＸ01がある。この土坑は他の土坑と異なり，平面形が長方形，断面形が逆台形で，箱形に掘られた土坑である。またこの土坑の埋土には拳大の礫を多く含み，他とは大きく異なる。このような土坑は，単なる廃棄用の土坑とは考えられず，何か意味があるとみられるが，よくわからない。

16世紀について主要な遺構として第3次井戸ＳＥ7，溝ＳＤ2・ＳＤ3，Ⅰ区石列，第4次溝ＳＤ1下層，溝ＳＤ16，土坑墓ＳＫ38・ＳＫ42・ＳＫ78・ＳＫ81がある。西二行北三門では第3次塀ＳＤ4はなくなり，第3次井戸ＳＥ7が掘られる。西三行北四門では東西溝ＳＤ2・ＳＤ3では掘りなおしが行われ，前時期に引き続き機能している。この状況から前時期の西三行北三門で予想された居住域はこの時期に西の西二行北三門にまで広がったと見るべきだろう。それは宅地の拡張と考えてもよいだろう。西三行北五門には南北の石列が見つかっている。これは西三行の中心の南北線上にのる。遺存状態が悪く，かつこの個所については工事用鉄矢板が打ち込まれており調査が十分に行えなかった。そのために詳細がよくわからないが，江戸時代太子堂に先行する池の一

部の可能性も考えられる。西三行北六門では遺構は見つかっていない。西三行北七門では，西四行北七門との境界に第4次溝ＳＤ01下層が掘削される。これは西に2ｍほどずれるが，境界を表示したものである。このほか土坑がいくつかある。そして西四行北六門・北七門では西三行・四行の境界より東へ2ｍほどのところに南北溝，第4次溝ＳＤ16が掘削される。そして第4次溝ＳＤ01と第4次溝ＳＤ16に挟まれた区域にはこの時期の遺構が見つかっていない。このような状況から，この溝に挟まれた区画は「辻子」とよばれる道として機能していたのではないかと推測される。また，第4次溝ＳＤ16の東側には第4次土坑墓ＳＫ38・ＳＫ42・ＳＫ78・ＳＫ81があり，ほか土坑が多数見つかっている。この周辺からは石塔類も特に多数出土しており，基本的に墓域と考えられる。これらは大きく2つに分けることができる。1つはＳＫ38やＳＫ40のような平面形が1辺1.2mほどの方形を呈し，深さが50～80cmの土坑である。人骨は出土していないが，形態的には近似しており，かつＳＫ38・ＳＫ40の周辺，すなわち調査区の北寄りに集まっている。それも東西に並ぶように形成されている。もう1つはＳＫ78やＳＫ81のように1辺0.6mほどで，深さ30cmまでの土坑である。これらも人骨を出土していないが形態的には近似しており，かつ調査区南寄りのＳＫ78やＳＫ81の周辺に，東西に連なって形成されている。前者について土坑墓ＳＫ38では仰臥伸展葬の1次葬の墓であり，後者については土坑墓ＳＫ78が改葬墓であったことから，両者の違いはそのように捉えられるだろう。また，分布域を異にしていることから，前者は家族墓，後者は無縁墓の可能性が想定できるだろう。

16世紀末～17世紀前半について第3次溝ＳＤ2・ＳＤ3，土坑ＳＫ7，石列，第4次溝ＳＤ17，塀ＳＡ01・ＳＡ02・ＳＡ03がある。西二行北二門では第3次井戸ＳＥ7が埋められ，井戸の可能性のある第3次土坑ＳＫ7が掘削される。西三行北四門の第3次溝ＳＤ2・ＳＤ3は引き続き機能している。西三行北五門の南北石列もこの時期機能しているであろう。西三行北六門にはいくつか土坑が形成されるが，具体的な施設についてはわからない。西三行北七門では西四行との境界で第4次溝ＳＤ01下層が埋められ，新たに築地塀である第4次塀ＳＡ01・ＳＡ02が造られる。また西四行北七門・北八門では第4次溝ＳＤ16が埋められ，新たに第4次溝ＳＤ17が掘削される。その東に接して第4次塀ＳＡ03が造られる。第4次溝ＳＤ17は西三行・四行の境界より6ｍ東の南北溝である。この掘削は豊臣秀吉が行った京都の地割の再編と時期的に近い。六角堂は秀吉の京都再編において寺地の移動はなかったが，周辺の地割については影響を受けているといえる。この溝と塀ＳＡ01・ＳＡ02に挟まれた道は前時期に引き続き機能していたものと考えられる。第4次溝ＳＤ17の東側ではこの時期の墓は確認できなかった。墓域としてはすでに機能しなくなっていたとみられる。

このようにこの時期においては遺構の展開に関して主に以下3点が明らかにできた。

1つ目は六角堂北側について14世紀に西三行北三門あたりに居住域（宅地）が新たに成立するが，それは西三行北四門の六角堂の敷地を一部食い込む形で成立する。そして16世紀には西隣の西二行北三門まで拡張し，17世紀初頭まで引き継がれる。

2つ目は西三行北五門において14世紀にまず園池の一部と見られる第3次溝Ⅱ区ＳＤ4が掘削される。15世紀になるとこれが廃絶し，新たに石列が造られる。おそらく池の一部と思われるが，確証がない。

3つ目は西四行北六門・北七門である。西四行北七門において13～15世紀には六角堂の敷地外であり，居住域（宅地）として機能していた。北六門についてはわからない。15世紀に西三行・四行の境界に第4次溝ＳＤ01下層が掘削される。これは六角堂の敷地の東限を画するものである。16世紀になると第4次溝ＳＤ16が成立し，六角堂の東側に道ができる。また溝ＳＤ16の東側は墓地として利用された。それは整列する墓坑から計画的に区画されていると考えられ，場所に応じて家族墓・無縁墓の区別があるようである。16世紀末には第4次溝ＳＤ01下層と第4次溝ＳＤ16は埋められ，新たに第4次塀ＳＡ01・ＳＡ02と第4次溝ＳＤ17・塀ＳＡ03が造られる。これは豊臣秀吉の京都の地割再編に伴うものと推測された。この時期に墓地は機能を失っているようである。

4．江戸時代（第74図）

実年代として17世紀前半から19世紀前半をここでは扱うが，江戸時代の遺構について，第3次調査では太子堂

跡とその関連遺構，井戸ＳＥ１，ＳＥ４，ＳＥ６，ＳＥ８，ＳＥ11，ＳＫ113，塀ＳＡ１，塀Ⅱ区ＳＡ１がある。第４次調査では西区西端石列ＳＸ02，井戸ＳＫ９・ＳＫ11がある。また第３次調査・第４次調査とも土坑が多数見つかっている。

第３次・第４次調査で明らかとなった区画をまず概観すると，西三行北四門と北五門の境界線上に第３次塀ＳＡ01が造られる。これを境に北側と南側では江戸時代を通じて遺構の展開が異なり，かつこれらは池坊（北側），六角堂境内（南側）に踏襲されると考えられる。したがってこの２つの池坊区域・六角堂境内区域とここでは呼ぶことにする。

池坊区域では第３次Ⅰ区北部（ＳＥ１，ＳＥ８）と第３次Ⅰ区中央部（ＳＥ４，ＳＥ６）に２基づつ井戸がある。これらには時期差があり，実態は北部に１基，中央部に１基が同時に存在した。使い分けなどについてはよくわからない。ただし，北部の井戸は室町時代から連続的がたどることができ，居住域により近い井戸ではないかと推測される。土坑は主に廃棄土坑であり，区域の全体に存在するが，特に第３次塀ＳＡ１付近には密集する。

六角堂境内区域ではこの区域の北部，すなわち第３次Ⅰ区南部では土坑が少ない。これは境内という，生活域ではなく神聖な区域という性格によるものであろう。井戸が２基（ＳＥ11，ＳＫ113）があるが，これも時期差があり，井戸ＳＥ11を掘削して，井戸ＳＫ113を埋めたものと考えられる。遺構として確認された太子堂は周辺の池・参道・橋とともに17世紀前半に造営されたようである。その後１度建て直され，天明の大火後に盛土により埋められている。この池に突出した参道東端の南北ラインの南延長上に塀Ⅱ区ＳＡ１がのる。この塀は参道と関係するものと考えられる。また，それは第４次調査井戸ＳＫ９・ＳＫ11の位置にも通り，これらの井戸も太子堂と関連した遺構である可能性が高い。それは太子堂参拝の手水を汲む井戸の可能性があろう。六角堂境内区域においては六角堂本堂東側で江戸時代の土坑が集中する。第３次Ⅱ区南部と第４次西区である。それも長さ２ｍを超えるような大形の土坑ばかりであり，大量の瓦を伴う。被災後の後片付けの廃棄土坑である。しかし，第４次溝ＳＤ01上層ではやっとこ，多量の鉄釘が出土しており，六角堂再建時に廃棄用として機能していた可能性がある。

なお前時期に六角堂寺域の東限として機能していた第４次塀ＳＡ01・ＳＡ02は17世紀前半で廃絶しており，それを埋める形で第４次溝ＳＤ01上層が形成されている。また，これ以降，この場所に区画を示す施設は造られず，さらに東側に六角堂境内と同様の土坑が形成される。このことから17世紀前半で六角堂寺域は東に拡張し，現在の寺域に近くなったと考えられる。

第４次調査東区で見つかった遺構のほとんどが土坑である。東区の土坑は第４次土坑ＳＫ55のように瓦と土器・陶磁器で出土遺物が構成されるものと，第４次土坑ＳＫ25・ＳＫ26のように瓦のみ，すなわち瓦溜と大別される。いずれも被災後の廃棄土坑である。第４次土坑ＳＫ55は天明大火後の廃棄土坑であるが，花瓶，茶陶を含み被災した池坊の廃棄物である可能性がある。第４次土坑ＳＫ25・ＳＫ26は元治元年の大火後の瓦溜であるが，六角堂本堂の瓦は西区の土坑に廃棄されているので，ここは別の建物，池坊あるいは愛染堂ないし愛染院の瓦を廃棄したのではないかと考えられる。建物の明確な痕跡は確認できなかったが，愛染院の建立は瓦溜りの時期から天明の大火後と推測することも可能である。

このように17世紀前半において池坊と六角堂境内について土地区画の変更がなされ，それは現在にまで踏襲されている。かつ六角堂寺域が東への拡張し，現在の六角堂寺域の様相に近くなる。またこの時期には大規模に太子堂の造営がなされる。現在の六角堂の原型がほぼできあがった時期といえ，一大画期といえる。そしてそれは３度の大火による焼失後も再建され，ほぼ変わることなく維持されてきたといえるだろう。そして現在，六角堂は明治十年に再建されたものであり，池坊は第３次・第４次調査終了後に再建され平成九年に完成した。これは六角堂西にはウエスト18という地上８階・地下２階のビル，第４次調査地には地下駐車場を備えたものである。

第2節　六角堂出土遺物の変遷―特に瓦と仏教遺物について―

1．はじめに

六角堂の出土遺物の様相について考察を加えるが，紙数に制限があるので，瓦と仏教遺物に絞って考察したいと思う。というのも瓦については屋根景観について論じるが，それは建築や遺構のあり方とも関わってくるからである。ここでは瓦の細かな同笵関係・同文関係については論じない。また，仏教遺物に関しては六角堂においてどのような信仰があったのか，信仰の様相を知るうえで必要であり，それは寺院という宗教施設である以上，それはどうしても論じないといけないと考えるからである。通常の発掘調査の考察ならば，土器・陶磁器・瓦の様相と画期についてまずまとめるべきであるが，事情によりこうした考察を書かねばならなくなった。御容赦いただきたい。

2．瓦類について―特に屋根景観の変遷について―

六角堂境内から出土した瓦類について特に屋根景観の復元を目指して若干の考察を加える。ただし，発掘した資料について資料の提示が十分ではないところもある。それは予算の制約によるばかりでなく，瓦類の回収が十分でないために数量的検討に耐える資料が少ないためでもある。多分に主観的な判断が出てくるが，これも発掘者の記憶を書き留めなければ資料的には皆無となるという危機感から出てきたものであると理解していただきたい。六角堂境内から出土した瓦類はおおきく4つの時期に分けることができる。平安時代前・中期，平安時代後期～鎌倉時代初頭，鎌倉時代後期～室町時代後期，桃山･江戸時代である。鎌倉時代前期の瓦は未確認であるが，その時期の屋根景観についても検討する。以下時代順に六角堂出土の軒瓦の様相を概観・検討する。

まず平安時代前・中期の瓦類について。第3次調査で前期の軒丸瓦1点と中期の軒平瓦1点，第4次調査で前期の軒平瓦1点が出土している。また第1次調査では前期の軒平瓦1点と中期の軒平瓦1点が出土している。いずれも京都近郊で製作された瓦と考えられるが，全くばらばらであり，軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせはおろか，同時性も論じられない。これから何か特徴を導き出すことは難しい。

平安時代前・中期の軒瓦はこれといった特徴がなく僅少であり，しかも摩滅が著しいものも存在する。量的には六角堂に葺いていた瓦とは言いがたい。また，著しい摩滅は使用されなくなってから埋没するまで風化する時間の長さを示していよう。それは六角堂以外の地から何かの事情で転がってきた可能性も考えられる。植山茂氏は三条西殿の調査報告において(註1)，平安前期の瓦が調査区内では条坊側溝周辺に分布することから，条坊を囲む築垣に使われた瓦であろうと推測している。これも同様の使用法かもしれない。

もし，この時期六角堂に瓦が用いられていなかったとすれば，単なる桧皮葺，あるいは板葺を想定しなければならないが，桧皮や板材ような遺物は現在のところ出土していない。

次に平安時代後期～鎌倉時代初頭の瓦類は多量に出土している。また時期的に4つの時期に細分できる。11世紀後半，12世紀前半，12世紀後半，12世紀末である。軒瓦について概観する。11世紀後半の軒瓦には，軒平瓦のみ5点が出土している。この時期より瓦の出土量が増え始める。12世紀前半の軒瓦は非常に多く出土している。11世紀後半が1つの画期となろう。このような状況は12世紀末まで等しい。

その瓦の葺き方について考えてみる。第4次調査溝ＳＤ19・土坑ＳＫ32では丸瓦・平瓦含めて瓦の一括資料を提示した。そこで示されるように，軒瓦に比して丸瓦・平瓦は少ない。軒瓦がいくつか出土しているにもかかわらず，個体数計算の指標となる四隅が残存する破片はほとんどない。これでは個体数0としか言えないのである。このような点から，この時期の六角堂の屋根景観は甍棟桧皮葺であった見通しが持てる。しかし第3次調査井戸ＳＫ92では丸瓦・平瓦ばかりが廃棄されそこに軒瓦が含まれていないこと，完形の平瓦も出土していることがある。これまでの調査全体での軒瓦と丸瓦･平瓦の比率の問題と平瓦の幅が1/2以上の個体がどの程度含まれるかという問題をクリアーできなければ，基本的に屋根景観について判断できない(註2)。丸瓦･平瓦の詳細な検討を行った上で結論すべきであろう。ここではそこまでの余裕がなく検討できていない。資料はあるので今後の課題

としたい。

鎌倉時代前期について，この時期の瓦類は確認されていない。本来的になかった可能性が高いが，もしそうだとすれば甍棟はなく，単なる桧皮葺ないし板葺を想定しなければならないであろう。

鎌倉時代後期～室町時代後期について六角堂は文永五年（1268），永享六年（1434），応仁元年（1467）の3度焼亡している。また阿弥陀堂と太子堂については永徳二年（1382）にも焼けている。これらと関連すると考えられる遺構について，文永五年焼失時に関連する遺構はない。永享六年焼亡時に関連する遺構には第4次調査土坑ＳＫ21，土坑ＳＸ01がある。応仁元年焼亡時に関連する遺構には第1次調査第6層がこの時の整地層と考えられている。しかし混入がはなはだしい。また，応仁元年焼失・文明四年再建時の所用瓦を検討するためには元和元年（1615）焼亡時，あるいは元和四年（1618）焼亡時に関わる遺構，すなわち第3次調査土坑ＳＫ07と土坑ＳＫ42がある。また第1次調査第5焼土層が元和四年焼亡後の整地層と考えられるが，これも混入が多い。

鎌倉時代後期～室町時代後期の六角堂の屋根景観について，この時期の遺構やこの時期の包含層である第1次調査第5焼土層・第6焼土層および第3次調査・第4次調査のそれに対応する層からは大量の瓦が出土するようになる。しかし第3次・第4次調査ではそうした瓦の回収が十分ではなく数量的実証が不可能である。あくまで発掘担当者の主観でしかないが，そうした大量の瓦からこの時期の六角堂が総瓦葺であった可能性を強く感じているのは確かである。特に鎌倉時代後期の瓦には東福寺や興福寺と同文瓦，同笵瓦があり，それらの使用状況を見れば総瓦葺である。同様であるとすれば，これらの葺かれた時期は総瓦葺であったと推測される。それは文永十年再建時であり，その時点で総瓦葺になった可能性が考えられるだろう。軒平瓦ＮＨ102型式・ＮＨ109型式は東福寺との同文瓦で，文永十年に完成する東福寺法堂所用瓦と考えられている(註3)。時期的には一致する。またＮＨ101型式は興福寺のＸ平Ｄ２型式と同笵である(註4)。これと同文の瓦は興福寺，東大寺のほか京都法金剛院，栢杜遺跡など大和・山城を中心に広く分布しており，重源・栄西との関係が指摘されている(註5)。栄西は東福寺を造営した円爾弁円と関係が深い。総瓦葺への転換の背景として東福寺造営や円爾弁円との関係を想定できる。

桃山･江戸時代の瓦類については，大規模な瓦溜りを形成するので，総瓦葺であったことは疑いようがない。それは『洛中洛外図屏風』や名所図に描かれる六角堂が総瓦葺であることからも裏付けられる。

以上のように六角堂の屋根景観の変遷については大きく4つの時期に分けることができる。

まずは平安時代前・中期で，軒瓦自体僅少であり六角堂に葺かれていた瓦とはあまり考えられない。条坊の築地に使用されていた瓦と考えたいが，文献史料により六角堂は実在しているので，その場合六角堂の屋根は桧皮葺か板葺を想定しなければならない。

次に平安時代後期～鎌倉時代初頭について11世紀後半から瓦の量が増える。これは六角堂で瓦が使用されるようになったことを示しているだろう。軒瓦と丸瓦・平瓦の出土量に比率から甍棟桧皮葺の見通しを示した。またこれは寺院景観を大きく変換しており，11世紀後半を1つの画期と捉えることができる。

鎌倉時代前期，13世紀前葉から中葉，文永五年焼亡時までの軒瓦は確認できなかった。これは今後発掘等により新たに確認されることもあろうが，現段階では本来的にないと捉えておきたい。これは屋根景観が甍棟でなくなり，単なる桧皮葺，あるいは板葺となったことを示していると考えられる。

鎌倉時代後期～室町時代前期の屋根景観については瓦の出土量から，主観的な判断にはなるが，鎌倉時代後期より総瓦葺と考えたい。これも1つの画期となろう。この背景についても軒瓦の同文関係・同笵関係から類推して，東福寺や南都との関係を考えるべきであろう。そして室町時代以降現在に至るまで六角堂は総瓦葺である。それは考古資料だけではなく絵画史料からも，そのように実証される。

なお棟丸瓦は桃山時代に出現し，江戸時代を通じて使用されている。六角堂における最古の棟丸瓦は文様が桐文であり，豊臣秀吉との関連がある。他中心飾りに桐文を配した軒平瓦ＮＨ201型式があり，豊臣秀吉による補修を受けていると推測される。その際に棟丸瓦が使用され始めたと考えられる。

3．仏教遺物の様相―銅製仏像・仏具と石仏・石塔から―

仏教遺物から様相とその変遷をたどるが，第3次・第4次調査で出土した仏教遺物には銅製の仏像・仏具と石仏・石塔がある。まずこれを概観したい。

銅製の仏像には如意輪観音像（第3次銅製品1）と阿弥陀如来立像（第3次銅製品2）がある。如意輪観音像は高さ4.9cmの小形で背面に鏡板に取り付けるための突起があり，懸仏と考えられる。文様や表現のシャープさから鎌倉時代後期，13世紀後半のものと考えられる。阿弥陀如来立像も高さ4.4cmの小さな仏像で，おそらくは結縁の日に個人が寺院に寄進したものであろう。同様の表現のシャープさから鎌倉時代後期，13世紀後半のものと考えられる。

銅製の仏具には独鈷杵（第3次銅製品3），伏鉦（第3次銅製品6）がある。独鈷杵は尖り気味の両端と文様から鎌倉時代のものである。密教系遺物である。伏鉦は両耳が明確に付くことと脚が高く裾広がりであることから15世紀後半のものと考えられる。念仏を唱えるときに叩く鉦であり，浄土教系遺物である。

石仏には二尊仏（第3次石製品1）がある。阿弥陀如来と釈迦如来が彫られている。

石塔はかなり多数出土している。一石五輪塔が最も多く梵字の「キャ」「カ」「ラ」「バ」「ア」が正面に彫られている。しかし，一石五輪塔のなかには「妙法蓮華経」と題目が彫られているものもいくつか存在する（第4次石製品7）。このほか普通の五輪塔，宝篋印塔，笠形卒塔婆がある。笠形卒塔婆（第4次石製品20）には4面に題目が彫られており，いわゆる「題目塔」である。これは題目が彫られた一石五輪塔とともに日蓮宗系遺物である。石塔は墓地が成立展開する時期のものであるのでおおよそ16世紀代のものである。ただし，墓地は六角堂敷地外にあり，果たして六角堂と関係するかどうかは不明である。その点注意しなければならない。

以上のように仏教遺物には密教系遺物，浄土教系遺物，日蓮宗系遺物があった。

まず六角堂の本尊は如意輪観音であり，それは平安時代中期には既にあり，貴賤の信仰を集めていた。本来密教系の仏である。如意輪観音の懸仏は鎌倉時代の作であるが，この延長上に位置するものである。独鈷杵もこれらと関係する遺物である。これも鎌倉時代のものである。密教系遺物はいずれも鎌倉時代のものであるが，六角堂の本尊はそもそも如意輪観音という密教の仏なので，六角堂創建時より密教系仏像･仏具はあったはずである。

浄土教系遺物には阿弥陀如来立像と伏鉦，石仏がある。阿弥陀如来立像は小形のもので，鎌倉時代後半，13世紀後半のものである。伏鉦はこの種の遺物でも古いもので，15世紀後半のものである。石仏も阿弥陀如来と釈迦如来を彫った二尊仏であるが，一応浄土教系遺物に含めておく。16世紀以降のものであろう。浄土教系遺物は13世紀後半以降の時期のものがあるといえる。

日蓮宗系遺物は題目を記した石塔がある。一石五輪塔と笠形卒塔婆である。いずれも16世紀代のものと推測される。ただしこれらは六角堂外の墓地にあるものである。

この他，「キャ」「カ」「ラ」「バ」「ア」と記した一石五輪塔があるが，これはどの系統にも属さず，普遍的な仏教遺物である。

時期的に見れば密教系遺物が六角堂創建時よりあったと考えられ，ついで13世紀後半に浄土教系遺物が出現する。そして16世紀になり，墓地に日蓮宗系遺物が出現したといえるだろう。

第3節　素描・六角堂の歴史

これまで4次に渡る発掘調査が行われてきたが，そこから六角堂の歴史を，寺院景観を中心として描くとすれば次のようになろう。これをもって考察のむすびとしたい。

六角堂は朧谷寿氏によれば，10世紀後半，950～970年ごろに創建されたようである(註6)。本尊は如意輪観音で，六角堂はそれを安置する小堂であったと思われる。「寺」ではなく「堂」であるので，この当時の語法によればそれは僧侶が居住するような仏教施設ではない。「堂」とは僧侶が居住しない仏教施設である。創建当初は小堂の

ためか瓦は葺かず，桧皮か板葺きであったらしい。ただし，条坊の築地は京職によって維持されており，六角堂のある左京四条三坊十六町は築地が巡らされていたと考えられる。11世紀初頭には藤原実資が度々参詣するなど貴賤の信仰を集めるようになった。

六角堂が大きな変貌を遂げるのは11世紀後半のことである。寺域の4周が溝で巡らされる。遺構では確認できていないがこれにはおそらく築地も同時に築かれたと思われる。こうして囲われた寺地は十六町内の西二行から西三行北四門から北八門である。本堂の屋根も単なる桧皮葺から甍棟桧皮葺となる。本堂の建築自体も大きく変更したであろう。『寺門高僧記』巻六の応保元年（1161）条に「六角堂・都内。九間南向。」とあり，寄棟造りないし入母屋造りで正面九間の平入り南向きの本堂で，南に庇がついていたと推測される。この建物はおそらく六角堂を覆う鞘堂であり，六角堂本体はその中に収まっていたと考えられる。こうした構造の六角堂は康治二年（1143）の焼亡の後久安二年（1146）に再建されたものである（以下焼亡と再建に関しては第1表参照）。それ以前の六角堂の形態はこの史料からは分からないが，遺構・遺物から見れば建築の大きな画期は11世紀後半にあるので，このような本堂となったのは11世紀後半のことではないかと推測したい。

しかし，それまでに貴賤の信仰を大いに集めていた宗教施設をこのように大がかりに変更をさせた者は誰か，非常に興味深い。それなりの信仰の対象に改変を迫るような人物は，宗教的にも政治的にも非常に権威ある存在でなければならない。11世紀後半におけるそのような人物とは白河天皇(法皇)以外にはありえないであろう。白河天皇は法勝寺を建立したほか，さまざまな堂塔を造営したことで知られる。また，皇子の守覚法親王を仁和寺にいれ，仏教界を天皇中心のヒエラルキーの中へ取り込もうとしその組織化を計った人物である。権威の条件を十分満たすであろう。ただし文献史料の中で白河天皇が六角堂を修造した記事はない。しかし，如意輪観音は天皇一代の守本尊であり，如意輪法は公家三壇法の1つである。延久五年（1073）にこれを比叡山で初めて行ったのは白河天皇である[注7]。白河天皇は如意輪観音に特別な信仰を抱いていたと考えてもよいだろう。白河天皇がこのような儀式を定式化し，それに伴い六角堂を改築したことも考えられるのではないか。あるいは嘉保二年（1094）九月二十一日には「可令修理諸寺堂塔破損事」として院宣が下されている[注8]。直接的にはわからないが，六角堂を修造した可能性は高いと考える。

さて，平安後期においても六角堂には貴族から庶民に至るまで参拝する人々が絶えなかった。藤原頼長・藤原兼実などは記録により熱心に参詣したことがよく知られている。また，この時期に五観音（七観音）巡りなど観音巡礼が生まれ流行したらしい。六角堂ももちろんその霊場の1つであった。

また六角堂における太子信仰は創建当初よりあったらしい。10世紀中頃に成立した『聖徳太子伝暦』には六角堂は登場しないが，11世紀初頭には記録に「六角堂」が見えることからこの間に創建されたのであろう。そして『六角堂縁起』の成立がその頃であることから，縁起の作成により六角堂と聖徳太子が結び付けられたと考えられる。12世紀中葉には『本朝世紀』康治二年十二月八日条に本尊の観音像について「上宮太子随身持仏也」とされていることから，六角堂における聖徳太子伝説は周知の説話であった。

平安時代後期には六角堂は，比叡山衆徒の強訴に呼応して祇園社とともに閉門しており，比叡山末寺となっていたことがわかる。また平安時代後期では2度の火災に遭っている。天治二年（1125），康治二年（1143）である。しかし，焼亡のたびに再建され，また出土した瓦を見る限りたびたび補修も受けていたようである。これが比叡山によるものか，あるいは寄進をうけてのものかはよくわからない。また，このころ六角堂には別当がいたことが文献史料から明らかにされている[注9]。

鎌倉時代には頻繁に火災に遭う。建久四年（1193），建仁元年（1201），承元元年（1207），建保元年（1213），建保三年（1215），寛元四年（1246），建長元年（1249），文永八年（1268）の8度もある。出土する瓦を見る限り，建久四年あるいは建仁元年に焼亡した六角堂までは瓦が使用されているがそれ以降の鎌倉時代前期の瓦は見当たらない。おそらく屋根はふたたび桧皮葺ないし板葺となったと考えられる。再び屋根に瓦が使用されるのは文永八年焼亡後の再建時である。ちなみに親鸞が六角堂に参籠し，聖徳太子の夢のお告げを受けたのは建仁元年

のことである。

六角堂は文永八年焼失後，文永十年に再建される。この再建は六角堂の歴史の中で画期的なことであった。というのも本堂が総瓦葺となったこと，加えて阿弥陀堂・太子堂が造営されたこと，浄土教系遺物が出現することがある。そしてそれは南都の瓦が鍵となるであろう。それは南都諸寺，あるいは同様の瓦がある東福寺の造営主体との関係を示唆するものである。

東福寺の造営について，文永八年から文永十年にかけて円爾弁円により法堂・祖堂・祀堂が造営された(注E10)。東福寺は嘉禎二年（1236）に九条道家により発願され円爾弁円により創建された大寺院であるが，創建瓦より南都の瓦が多く含まれている。文永年間の造営も創建事業の延長であるが，円爾弁円に関して六角堂との接点は見当たらない。

また，この時期に六角堂の北に居住域が成立する。これは住坊の可能性が指摘できよう。そしてこうしたことは寺号を持つということにもつながる。鎌倉時代末成立の『元亨釈書』に初めて「頂法寺」という現在の六角堂の寺号が登場する。文永の再建の結果，「寺」と呼べるような寺院景観となったのであり，このような寺号は文永以降使用されるようになったと考えるべきであろう。そして六角堂北の居住域について鎌倉時代後期以降連続して営まれており，それは江戸時代以降池坊と呼ばれる子院につながる。逆にいえば，子院池坊の起源は鎌倉時代後期に成立する居住域にあるといえる。池坊家の起源も鎌倉時代後期に遡る可能性も指摘できるだろう。

文永十年再建時の具体的な寺院景観について絵画史料は残っていない。しかし例えば旧町田家蔵『洛中洛外図屏風』は大永五年（1525）以降のもの，東京国立博物館蔵品では天文期，上杉家蔵品は天正二年以前のものとされているが，いずれも雑舎に異同があるが基本的に六角堂を本堂が寄棟造りの大堂で四周を築地で巡らした寺院として描いている。出土する瓦の量は鎌倉時代後期以降非常に多く，また鎌倉時代後期から室町時代後期まで遺構の上で大きな変化はないといえるので，このような六角堂の基本形を鎌倉時代後期まで遡らせて考えることも一応可能と言える。

室町時代に入っても六角堂は民衆の篤い信仰に支えられている。永享八年（1436）に焼亡するが，富徳人の寄進により文安四年（1447）には再建される。寛正二年（1461）の大飢饉では六角堂門前で願阿弥という僧が中心となって巷間にあふれる乞食に施行している。また，文献史料上に池坊が登場するのはこの頃である。15世紀中頃の史料には華の名手として池坊専慶が出てくる。専慶は六角堂執行であったが，池坊家は専慶以降，代々六角堂執行を務めている。

応仁元年（1467）に始まる応仁の乱では下京が焼け野原となり，六角堂もこのとき焼失した。しかし文明四年（1472）には復興する。『洛中洛外図屏風』に描かれるような寺院景観を呈していたのであろう。このころ成立する西国三十三ヶ所巡礼の札所になり，より多くの参拝者を集めていたと想像される。池坊では専順・専応・専好が出て，華道の池坊として広く知られるようになるのもこの頃である。また六角堂は下京の中心的存在としての役割を果たすようになる。天文元年（1532）の天文法華の乱では六角堂で下京に急を告げる早鐘が鳴らされ，それを合図に町衆が出陣したという。あるいは祇園祭における山鉾巡行の順番を決める籤引きが六角堂で行われていたという。他方，16世紀には六角堂の周辺では墓地が営まれるようになる。町衆の墓所として営まれていたのであり，日蓮宗関係の墓標（題目を刻んだ一石五輪塔・笠形卒塔婆）も含まれている。

安土桃山時代になると天正十四年（1586）に豊臣秀吉は京都の再編に着手する。六角堂は寺町に移転することはなかった。これは下京に天正地割が及んでいないこととも軌を一にするであろう。しかし周辺の土地区画は天正地割により再編され，墓地もこの時廃絶したと考えられる。またこの後，具体的な時期ははっきりしないが，豊臣秀吉により六角堂は修復を受けている。

江戸時代に入り，元和元年（1615）と元和四年（1618）に六角堂は火災にあう。元和元年の方は比較的小規模であったが，元和四年には全域が焼失したようである。しかし，寛永十八年（1641）の再建では，再び六角堂が大きく変わる。平安時代以降踏襲してきた寺域を東に拡張し，また，塔頭の池坊と推定される居住域が南に拡張

する。六角堂本堂の北東側に周囲に池を巡らした太子堂が造られる。これは現在見る六角堂の寺域のあり方に近似する。現在の六角堂の原型はここに成立するのである。具体的な寺院景観について見れば，寛文七年（1667）刊行の『京童跡追』，宝永初頭発行の『花洛細見図』では入母屋造りの本堂に南側に独立した礼堂が平行してある。その2つを屋根つきの廊がつなぐという形になっている。南の礼堂は最初からあったものではなく，若干新しいようである。寺域内には池坊や太子堂のほか愛染堂，唐崎神社などが描かれている。

江戸時代ではこのほか京都の大火である宝永五年（1708）の大火，天明八年（1788）の大火，元治元年（1864）の大火で六角堂も焼失するが，いずれも再建され現在に至っている。宝永焼失後，享保十三年（1728）に再建されるが，この時現在のような，六角形プランの本堂になった。現在の六角堂は元治元年焼失後，明治十年（1877）に再建されたものである。そして伝統の観音信仰・太子信仰の霊場として，あるいは華道池坊の家元の地として現在に至るまで信仰と尊敬を集め，ますますの繁栄を続けているのである。

註

（1）植山　茂『瓦について』（定森秀夫編『三条西殿跡』〔『平安京跡研究調査報告』第7輯〕所収，京都，昭和58年）。

（2）この判断の根拠については上原真人氏の論証方法による。上原真人『平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかった―平安京右京一条三坊九町出土瓦をめぐって―』（『高井悌三郎先生喜寿記念論集　考古学と歴史学』所収，西宮，昭和63年）。

（3）山崎信二『中世瓦の研究』（『奈良国立文化財研究所学報』第59冊，東京，平成12年）。

（4）薮中五百樹『南北朝・室町時代における興福寺の造営と瓦』（『立命館大学考古学論集』Ⅱ所収，京都，平成13年）。なお平成17年10月25日に薮中氏の御高配により，興福寺所用瓦を実見し，同笵を確認した。

（5）高橋美久仁『南山城の鎌倉時代の古瓦』（『山城郷土資料館報』第2号掲載，京都府山城町，昭和59年）。

（6）六角堂略史は甲元真之編『平安京六角堂の発掘調査』（財團法人古代學協會『平安京跡研究調査報告』第2輯，京都，昭和52年），特に佐々木英夫『六角堂建築の変遷』と朧谷寿『文献よりみた六角堂』を参照し執筆した。したがってここで引用された史料については註をつけず，新たな史料のみ註を付けた。

（7）『門葉記』五三巻護持層補任の仁覚大僧正の項。

（8）『中右記』嘉保二年九月二十四日条。

（9）『平安遺文』2075号および2247号。なおこの文書は六角堂別当が四条室町に持っていた宅地の相伝に関する文書である。『中右記』永久二年七月二十五日条に「六角堂住僧」が登場するが，このような文書の存在を考えると，寺域内に住んでいたのでなく，寺域外に住地を持っていたと考えたい。

(10)大本山東福禅寺『東福寺誌』（京都，昭和5年）。

第10章　まとめ

第３次・第４次調査では数多くの遺構が検出され，多量の遺物が出土した。それに比して整理できる量，報告できる量が限られていたため，本報告書では残念ながら主要な部分のみの報告となった。そこでとりあえず明らかとなった諸点を以下のようにまとめたい。

１縄文時代

第３次調査で縄文時代中期から弥生時代前期の流路２本を検出した。六角堂境内地における縄文・弥生時代遺跡は初めての発見である。この流路の堆積層からは縄文中期から晩期および弥生時代前期後半の土器片が出土し，付近に集落の存在が想定された。しかし，調査区においてはこの時期の生活に関わる遺構は見つかっていない。なお，六角堂周辺では，高倉宮第４次調査(註1)，左京四条四坊京都市男女共同参画センター地点の調査(註2)において縄文晩期の遺跡が見つかっており，これらと関連する遺跡として注目される。

２弥生時代から古墳時代

弥生時代の甕，古墳後期の須恵器坏身の破片が後世の遺構に混入してわずかに出土している。明確な遺構，残りのよい遺物は見つかっていない。

３平安時代前期・中期

明確な遺構はなく，瓦・土器がわずかに出土した程度である。この時期の六角堂の具体的な様相を把握するには至っていない。

４平安時代後期

六角堂の寺域を区画する溝を検出した。第３次調査では北限を画する溝ＳＤ1，第４次調査では東限を画する溝ＳＤ19である。いずれも11世紀後半には掘削されており，12世紀末に埋没している。この結果六角堂の寺域は左京四条三坊十六町のうち西二行から西三行，北四門から北八門であることが判明した。なおこの寺域は基本的に江戸時代初頭までは踏襲されるものである。寺域内では12世紀に使用されていた第３次井戸ＳＥ10，第３次井戸ＳＫ92，いくつかの廃棄に関わる土坑を検出した。寺域外では西二行北三門において井戸や土師器皿を埋納した地鎮遺構，12世紀前半の瓦が多量に出土した土坑がある。基本的には宅地として利用されていた区域と推測されるが，地鎮遺構や瓦出土土坑は六角堂と関連する可能性も否定しがたい。

出土遺物には土師器・須恵器・白磁・瓦などがある。特に瓦は11世紀後半から12世紀末のものがまとまって出土している。この背景には屋根景観が単なる桧皮葺から甍棟桧皮葺に変更したことが予想される。

５鎌倉時代前期

遺構・遺物ともほとんど見つかっていない。この時期の六角堂の詳細は不明である。文献史料上では六角堂が存在するにもかかわらず，この時期の瓦が出土していないので，六角堂の屋根景観は単なる桧皮葺か，あるいは板葺であった可能性が高い。なお寺域外であるが，十六町南東部の西四行北七門では土師器が大量に出土する遺構があり，そのほか土坑が形成されていた。居住域であったことが推察される。

６鎌倉時代後期から室町時代前半

六角堂の北側，西三行北三門を中心に居住域が成立し，塀ないし溝で区画される。14世紀に西三行北三門西境に第３次溝ＳＤ４を設けるが，15世紀にはこれが廃絶する。この後西限について，西に隣接する西二行北三門に井戸が掘削されるので居住域が西へ拡張したと推測される。またこの南限は西三行北四門の南北２等分線上に掘削された第３次溝ＳＤ２・ＳＤ３であるが，これは六角堂の寺域に一部食い込んだ形となっている。寺域内では西三行北五門において14世紀にまず園池の一部と見られる第３次溝Ⅱ区ＳＤ４が掘削される。また，第４次調査区西端には地山を削り出した段差があり，現在の六角堂本堂に近接することから室町時代前半以前の六角堂本堂の基壇に関わる遺構ではないかと考えられる。このほか六角堂本堂周辺と第３次溝ＳＤ２・ＳＤ３周辺には廃棄

用の土坑が数多く形成される。

出土遺物については土師器，須恵器，古瀬戸，白磁，青磁，瓦，銅製仏，銅製仏具などがある。瓦は鎌倉時代後期に位置付けられる東福寺と同文の瓦，興福寺と同笵の瓦がある。主観的な観察結果であるが，この時期の瓦から大量に出土するようになるので鎌倉時代後期より六角堂は総瓦葺になったと考えられる。この背景には東福寺造営あるいは南都との関係を考えるべきであろう。また如意輪観音の懸仏，独鈷杵など密教系遺物のほか，阿弥陀如来立像が出土しており，浄土教系遺物も出現する。なお十六町内南東部の西四行北六門・北七門について確実な出土遺物はないが，遺構の切り合いからこの時期にも土坑が形成されているようであり，居住域として機能していたと思われる。

7室町時代後半

六角堂の北側の西二行・西三行北三門を中心とした居住域は前時期に続いて機能しており，溝ＳＤ２・ＳＤ３で区画されている。寺域内では西三行北五門において園池の一部と見られた溝Ⅱ区ＳＤ４が廃絶するようで，その後西三行北五門の東西２等分線上に石列が造られる。この石列の性格はよく分からない。しかし，溝を廃絶させて何らかの施設を作ったことは間違いないようである。またこの時期には寺域の東限には第４次溝ＳＤ01下層が掘削される。西四行北六門・北七門には第４次溝ＳＤ01と平行する第４次溝ＳＤ16が造られ，六角堂の東端に沿って幅６ｍほどの道が形成されるようである。第４次溝ＳＤ16の東側は墓地が形成される。第４次土坑ＳＫ38のように土師器皿を大量に埋納した土坑墓，あるいは第４次土坑ＳＫ78のように改葬後の墓とみられる土坑墓が見つかった。基本的に土坑墓のみで形成されるが，墓坑の規格と占地により家族墓，無縁墓の区別されているようである。

出土遺物には土師器，瓦質土器，古瀬戸，備前，白磁，青磁，瓦，銅製仏具，石塔などがある。瓦は平等院と同文の瓦などがある。また浄土教系遺物として古式の伏鉦が出土している。石塔は墓地のあった区域を中心に出土しているが，通有の「キャ・カ・ラ・バ・ア」の梵字を刻んだ一石五輪塔のほか，題目を刻んだ一石五輪塔や笠形卒塔婆なども出土しており，日蓮宗系遺物が出現する。当時下京には法華宗門徒が数多くいた結果であり，また証拠であろう。

8桃山時代

六角堂の寺域と北側の居住域の区画はそのまま維持されている。ただし，六角堂寺域の東限の第４次溝ＳＤ01下層は埋められ，替わって第４次塀ＳＡ01・ＳＡ02が築かれる。この東側も，道は維持されるようであるが，第４次溝ＳＤ16は埋められ，替わって第４次溝ＳＤ17と塀ＳＡ03が造られる。これらは豊臣秀吉の京都の地割再編に伴うものと推測される。この時期には東の墓地は機能しなくなる。

この時期の出土遺物には土師器，瀬戸美濃，唐津，明青花，瓦などがある。

9江戸時代

17世紀前半に大幅に区画が変更される。北の居住域は南に拡張し第３次塀ＳＡ１により区分される。六角堂寺域の東限の第４次塀ＳＡ01・ＳＡ02は廃絶し，東に接していた道や溝ＳＤ17も同時に廃絶，六角堂の寺域は東に拡張された。これは現在の六角堂の寺域と池坊区域に踏襲され，こうしてこの時期に原型というべき寺域が成立する。江戸時代を通じて，この寺域とその区画は維持されている。江戸時代には３度大火により六角堂は焼失するが，そのたびごとに盛土整地がなされ，井戸が掘り直されている。六角堂境内内には少なくとも２基，池坊にも２基の井戸が常時あったようである。またそれぞれの焼亡に対応する瓦溜りや廃棄用の土坑が確認されている。出土遺物は土師器皿，陶磁器，瓦を始め伏見人形，石硯，銅製品，鉄製品など大量にあり，報告できたものはほんの一部である。

おわりに

発掘調査終了から12年が経過しようとしている。報告書刊行に至るまでさまざまな事情により予期せず遅延を重ねる結果となってしまった。そのような状況で，はなはだ不十分ではあるが，こうして報告書を刊行することができた。まずはとりあえずの責務を果たすことができたのではなかろうか。

しかし，責任を十分に果たせたとは言い難い。整理や分析が不充分である。資料があるにもかかわらず，十分に検討できずにいる。報告ではそのあたりを考慮しつつ考察を進めたが，検討できておれば実証できた課題も多い。また，極力避けようと努力したが，やや推論を重ねた考察は今後の研究を誤った方向に導く不安をぬぐいきれない。力及ばず慙愧の念に耐えない。しかし，ここで何らかの形を示さなければ，今後の研究はありえないと考え，このような体裁の報告に踏み切った次第である。今回の報告を叩き台として，報告の中でも再三述べてきたように，資料の再整理を強く要望し，今後の再検討により一層の研究の深化を願ってやまない。

２次に渡る発掘調査ではまず宗教法人頂法寺，華道家元池坊ならびに池坊専永家元，事務局の石原隆光氏・上之薗久氏には御高配をいただいた。報告書の刊行が大変遅延したことをお詫びしつつ深甚の謝意を表する。また，建設事業担当である鹿島建設株式会社，ならびに加藤賢一所長以下所員の皆様にも大変お世話になった。同じく謝意を表する。

古代學協會の角田文衛理事長には発掘調査から報告書刊行まで辛抱強く見守ってくださった。古代學協會職員の皆様には研究・事務の両面から支えていただいた。篤く御礼申し上げる。特に西田泰民氏・前川佳代氏は第３次発掘調査の中心的存在であり，作業を推進してこられた。お二人の退職後，江谷･桐山が作業を引き継いだが，報告まで進めることができたのも，お二人の御努力のおかげである。退職されてからもお二人からは何かとお気使いいただいた。深謝。

発掘調査後，整理するなかで数多くの研究者にお世話になった。特に楢崎修一郎氏には，保存状態の悪い人骨資料を鑑定していただき，御多忙の中玉稿を執筆していただいた。篤く御礼申し上げる。にもかかわらず，協会の都合でそれから３年間も留め置きの状態にしてしまったことは誠に遺憾であり，お詫び申し上げたい。また，瓦については植山茂氏，浜中邦弘氏から多くの御教授をいただいた。このお二人の御協力がなければ，六角堂から出土した平安時代から江戸時代に至るまでの瓦の整理はおぼつかなかったであろう。仏像・仏具については井口喜晴氏，松浦正昭氏に御教授いただいた。また、虎斑石の高島硯については高島市歴史民俗資料館の白井忠雄氏に御協力頂いた。ともに深く感謝申し上げる。

このほか発掘調査および整理作業において，下記の研究機関および研究者には多くの御教示と御協力をいただいた。記して謝意を表する（五十音順・敬称略)。

青木あかね　芦田淳一　泉　拓良　市本芳三　伊藤淳史　上野佳也　上原真人　大澤伸啓　梶川敏夫　久保智康
小池　寛　小泉裕司　古閑正浩　小林康幸　沢野直弥　(故)佐藤宗男　下條信行　杉本　宏　(故)杉山信三
鈴木忠司　清野利明　大洞真白　時枝　務　冨井　眞　中井淳史　中島和彦　永田信一　新倉　香　浜田竜彦
藤田智子　藤本孝一　本澤慎輔　前田義明　南　博史　薮中五百樹　吉村正親　山田邦和　山本雅和　渡辺　誠
綿貫鋭次郎
京都市埋蔵文化財研究所　京都市埋蔵文化財調査センター　京都府京都文化博物館　興福寺　平等院

付論１　六角堂境内第４次調査出土人骨の鑑定

楢崎　修一郎

はじめに

六角堂は京都市街の中心部，京都市中京区六角通東洞院西入ル堂ノ前町に所在する。(財) 古代學協會・古代學研究所による第４次発掘調査が平成８（1996）年１月16日から同年３月２日まで行われた。この調査で，土坑墓ＳＫ38と土坑墓ＳＫ78の２基より人骨が出土したので，以下に報告する。これらの土坑墓の時期は，出土遺物より16世紀中葉に比定されている。

人骨はすでに清掃済みであったので，可能な限り接着復元を行った後，写真撮影・計測・観察を行った。なお，人骨の計測方法はマルティン［MARTIN］に従った(註1)。また，人骨の計測値の比較は，中世のものはまとまった研究が無いために，江戸時代人(註2)及び現代人(註3)より引用した。

１．土坑墓ＳＫ38出土人骨（図版71）

（１）人骨の出土状況

人骨は，長さ61cm・幅78cmの方形の土坑墓より出土している。人骨には，火を受けた痕跡が認められず，土葬されたと推定される。

（２）人骨の出土部位

右寛骨耳状面部及び大座骨切痕部・右脛骨下関節面が出土している。出土時の写真を見ると，頭蓋骨が出土しているようだが，頭蓋骨は，わずかの破片しか取り上げられていない。

（３）被葬者の個体数

出土人骨に，重複部位は認められないため，被葬者の個体数は１個体であると推定される。

（４）被葬者の性別

右脛骨下関節面の大きさより，被葬者の性別は男性であると推定される。

（５）被葬者の死亡年齢

被葬者の死亡年齢推定に有効な，頭蓋骨や歯が出土していないが，恐らく成人であると推定される。

（６）人骨の病変

出土人骨には，特に病変は認められなかった。

２．土坑墓ＳＫ78出土人骨（図版72・73）

（１）人骨の出土状況

人骨は，一辺1.2mの方形の土坑墓より出土している。人骨には，火を受けた痕跡が認められず，土葬されたと推定される。四肢骨が主であり，頭蓋骨や歯は出土していないので，恐らく，再葬墓であると推定される。

（２）人骨の出土部位

左右上腕骨・左右尺骨・左右橈骨・左右大腿骨・左右脛骨等の四肢骨が出土しており，頭蓋骨・歯・肋骨・脊椎骨・寛骨等は出土していない。

（３）被葬者の個体数

出土人骨に，重複部位は認められないため，被葬者の個体数は１個体であると推定される。

（４）被葬者の性別

被葬者の性別推定に有効な，頭蓋骨や寛骨が出土していないが，四肢骨の計測値が比較的小さいので，被葬者

の性別は女性であると推定される。

（5）被葬者の死亡年齢

被葬者の死亡年齢推定に有効な，頭蓋骨や歯が出土していないが，恐らく成人であると推定される。

（6）人骨の病変

出土人骨には，特に病変は認められなかった。

まとめ

六角堂境内第4次調査の土坑墓ＳＫ38と土坑墓ＳＫ78の2基より，人骨が出土した。時代は，出土遺物より，どちらも16世紀に比定されている。土坑墓ＳＫ38からは，成人男性1体が土葬されていたと推定された。土坑墓ＳＫ78には，成人女性1体が土葬されていたと推定された。この被葬者の人骨出土部位は，四肢骨のみであり，出土状況と合わせると再葬墓であったと推定される。

謝辞

本出土人骨を報告する機会を与えていただき，考古学的情報をいただいた（財）古代學協會・古代學研究所の桐山秀穂氏と江谷 寛氏に感謝いたします。

註

（1）馬場悠男　『人類学講座別巻1.人体計測法　Ⅱ人骨計測法』（東京，平成2年）。

（2）遠藤萬里・北條暉幸・木村　賛　『Ⅶ.四肢骨』（『増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体』所収，東京，昭和42年）。

（3）a 蝦名忠次郎　『日本人前腕骨の人類学的研究，其二尺骨』（『慈恵解剖業績集』所収，東京，昭和26年）。

b 西浦四良　『関東地方人上腕骨の人類学的研究』（『慈恵解剖業績集』所収，東京，昭和28年）。

c 大場信次　『関東地方人大腿骨の人類学的研究』（『慈恵解剖業績集』所収，東京，昭和25年）。

d 鈴木信夫　『関東地方人脛骨の人類学的研究』（『慈恵解剖業績集』所収，東京，昭和36年）。

（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　専門員）

【付記】

楢崎修一郎氏に人骨鑑定を依頼したのは，発掘調査終了から約6年が経過した平成14年の冬のことであった。出土した人骨は写真でも分かるようにかなり遺存状態がよく，かつ頭蓋骨など重要な部位が含まれていた。しかし，頭蓋骨について取り上げでかなり破損し，その後の保管状況も悪く，鑑定に出す頃にはすでに鑑定に耐えられないような状況になっていた。これは一重に調査員の責任であり，重要遺物を損なった責任を痛切に感じるものである。また楢崎氏から御玉稿を戴いたのは平成15年3月であったが，それから3年が経過してしまった。このような事態に至ってしまったのも古代學協會内の事情によるものであるが，楢崎氏に対しては深くお詫び申し上げたい。（桐山秀穂）

第２表　土坑墓ＳＫ78出土人骨四肢骨計測表

計測項目（Martinの番号）	SK78	江戸時代人＊		現代人＊＊	
		♂	♀	♂	♀
尺骨（本文註3a文献）					
13　骨体上横径	16 mm	21.2 mm	18.5 mm	20.5 mm	17.2 mm
14　骨体上矢状径	25 mm	26.2 mm	22.5 mm	25.2 mm	21.9 mm
13:14　尺骨扁平示数	64.0	81.1	82.2	82.2	78.4
上腕骨（本文註3b文献）					
5　中央最大径	17 mm	—	—	—	—
6　中央最小径	17 mm	—	—	—	—
7　骨体最小周	52 mm	63.5	54.1	62.3	54.1
6:5　骨体横断示数	100	—	—	—	—
大腿骨（本文註3c文献）					
6　骨体中央矢状径	24 mm	28.3 mm	24.8 mm	27.6 mm	24.5 mm
7　骨体中央横径	25 mm	27.4 mm	24.1 mm	26.3 mm	23.0 mm
8　骨体中央周	76 mm	87.2 mm	76.9 mm	83.7 mm	73.8 mm
6:7　骨体中央断面示数	96	103.9	103.1	105.4	107.3
脛骨（本文註3d文献）					
8　中央最大矢状径	右：28 mm	28.9 mm	25.3 mm	28.7 mm	25.7 mm
	左：28 mm	28.9 mm	25.3mm	28.7 mm	25.7 mm
9　中央横径	右：19 mm	21.6 mm	18.9 mm	22.8 mm	20.3 mm
	左：17.5 mm	21.6 mm	18.9 mm	22.8 mm	20.3 mm
10　骨体中央周	右：77 mm	79.4 mm	70.0 mm	79.0 mm	70.3 mm
	左：74 mm	79.4 mm	70.0 mm	79.0 mm	70.3 mm
9:8　中央横断示数	右：67.9	74.7	72.4	78.7	78.7
	左：62.5	74.7	72.4	78.7	78.7

註１．＊は、本文註２文献より引用

註２．＊＊は、それぞれ尺骨（本文註 3a 文献）・上腕骨（本文註 3b 文献）・大腿骨（本文註 3c 文献）・脛骨（本文註 3d 文献）より引用

付論２　六角堂出土軒瓦の型式一覧表について

これまで４次に渡る六角堂の発掘調査により多数の瓦類を得ることができた。これらをもとに軒瓦の型式分類と編年を試みたい。それはこのような検討により六角堂の創建・再建にかかわる社会的関係やその特質を明らかにできると考えるからである。ここではその基礎的な作業として軒平瓦・軒丸瓦型式一覧表の作成を目指す（図版74～80)。しかしあらかじめお断りしておくが，報告で述べたように諸事情により遺物全般を網羅的に取り上げることができなかった。したがって，ここで取り上げる瓦類もすべてではなく，一覧表は不完全なものとならざるを得ない。しかし，①これまでに数次の発掘調査が行われ，確認できた出土瓦類は一覧表を作成するに足る量の蓄積があり，②今後新たに確認された型式が出てくるにせよ，ある程度研究の指針となる表は現時点で作成しておくことが今後の研究にとって好ましいと判断し，作成することとした。しかし，現時点の整理作業の結果であるので，あくまで中間報告的な性格，試案の域を出ないことに注意を促したい。

一覧表を作成するにあたって基礎とした資料は第１次調査から第４次調査までに報告された軒瓦である。報告資料については網羅しているが，未報告資料中にはまだ表にはない型式が存在する可能性はある。また，資料によっては残存状況が悪く，文様の観察が十分に行えない資料もある。そうした資料については表に含んでいないものもある。さらに第１次・第２次調査の出土資料について実見する機会をついに得ることができなかった。このため同笵関係や軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせを推測に依存して実証的に論じることができないでいる。これはひとえに筆者の努力不足によるものであり，明記して注意を促すとともに，お詫び申し上げたい。

なお，以下この一覧表を作成するにあたっての凡例を記す。

１）型式分類

基本は瓦当文様の構成である。文様構成の細部が一致するものを一型式とした。ただし，
瓦笵の彫り直しや切り縮めなどにより改刻・変形がなされたものには「改」を付して細分にした。軒丸瓦はＮＭ001から，軒平瓦はＮＨ001から型式番号を付した。出土した瓦は大きく４つの時期に分けることができた。平安時代前期～中期，平安時代後期，鎌倉時代後期～室町時代，江戸時代である。このうち平安時代前・中期の瓦は僅少であり，六角堂所用かどうかは疑わしいのでこの一覧表では取り扱わない。平安時代後期以降の瓦について３つの時期に分け型式番号を付すことにした。すなわち平安時代後期の軒平瓦にＮＭ001から，軒平瓦はＮＨ001から，鎌倉・室町時代の軒丸瓦にＮＭ101から，軒平瓦はＮＨ101から，江戸時代の軒丸瓦にＮＭ201から，棟丸瓦はＮＭ251から，軒平瓦はＮＨ201からとした。それぞれの順番について，軒丸瓦は蓮華文・珠文ある三巴文・三巴文のみの順として，それぞれの文様系統の中で古相から新相へ型式が序列化できるように努めた。軒平瓦については唐草文・巴文・剣頭文の順として，これも軒丸瓦同様，古相から新相へ型式が序列化できるように努めた。

２）生産地

平安時代後期の瓦における生産地の問題については，認定可能なものは中央官衙系，播磨系などとした。生産地系列の認定は同文・同笵を基礎とし，製作技法等の類似から認定した。また，瓦笵および製作技法・胎土の同一性からそのうち生産された瓦窯が特定できるものはあわせて記した。

３）年　代

瓦の年代の推定については，軒瓦の型式，出土遺構の年代と六角堂の被災記事のすり合わせによる。六角堂の被災記事については第１次調査報告書の中で既に詳細に検討されており，第１表に示すようにまとめられる。また，第３次・第４次調査で出土した遺構は被災に伴う後片付けの廃棄土坑が多数あり，出土した土器の年代と被災記事とつき合わせることが可能となっている。したがってその廃棄土坑から出土した瓦の主要なものには被災した六角堂の再建時期からいつ葺かれた瓦か一応推測することが可能となっている。しかし，あくまで出土遺構

の年代は，出土した瓦がその年代よりも新しい年代に製作されたのではないことを示しているに過ぎない。火災前に使われていた瓦が火災後に再使用されている可能性やすでに廃棄され破片となった瓦が混入した可能性もあるので，型式学的検討を行い史料批判せねばならない。こうした操作により編年の大枠を作成したが，出土状況が不明確な型式もあれば，対応する瓦の型式がわからない被災記事もある。その部分については型式から推測される年代観をもとに当てはめたものもある。なお，ここで示した年代はあくまで使用年代を示すものであり，製作年代ではない。

【型式一覧表についての注意】

１．型式一覧表掲載の拓本については，文様構成を分かりやすく示すために，合成・回転・反転等により復元した図を使用した。その復元はすべて六角堂境内出土の拓本で行った。なお表掲載の拓本は縮尺を８分の１に統一している。

２．型式一覧表の六角堂境内内の出土資料について調査次数と報告書に掲載された図とその番号により表示した。調査次数とその報告書の対応関係については以下の通りである。

第１次調査：甲元真之編『平安京六角堂の発掘調査』（財團法人古代學協會『平安京跡研究調査報告』第２輯，京都，昭和52年）。

第２次調査：佐々木英夫・松井忠春『平安京六角堂跡第２次発掘調査概報』（京都，昭和55年）。

第３次調査・第４時調査：本報告書

Summary

The Japanese institution of Paleological studies conducted the third and forth archaeological investigation at Rokkaku-do temple(六角堂) in 1994 and 1996. As the result of the investigations the following points are proved.

1. From the Jomon(縄文) period to the early Yayoi(弥生) period

In the third investigation two buried rivers were found. This discovery of the Jomon and Yayoi remains is first time at Rokkaku-do temple. These rivers yielded some fragments of potteries from the middle Jomon period to the early Yayoi period.

2. From the middle Yayoi period to the Nara(奈良) Period

Only fragments of the Yayoi pottery and the Sueki(須恵器) pottery were found. Definite remains of this age weren't found.

3. The early and the middle Heian(平安) period

Only a few fragments of the potteries and the roof-tiles in this period were found. Definite remains weren't found, so we cannot understand the realities of Rokkaku-do temple in this period

4. The late Heian period

Two ditches drown the boundary of the premises of Rokkaku-do temple were found. One is the ditch SD1 at the third investigation that is the north boundary, and the other is the ditch SD19 at the forth investigation that is the east boundary. As a result of this discovery, the real premises of Rokkaku-do temple in the 16th region are proved. In the this promises some wells and pits were found. Out of the premises were found a well and a depo of unglazed saucers for ground-breaking ceremony.

Articles of this period are potteries and roof-tiles. Especially the appearance of many roof-tiles relates with the change of roof style.

5. The early half period of the Kamakura(鎌倉) age

While Rokkaku-do temple existed in historical documents, few remains and articles are found. No roof-tiles were found so that in this period Rokkaku-do temple might be roofed with not tiles but bark boards or shingles.

6. From the late half period of the Kamakura age to the early half period of the Muromachi(室町) age

A living zone birthed to the north of Rokkaku-do temple. The boundary of this zone was walls or ditches. In the premises of Rokkaku-do temple the ditch SD4 in the second district was dug up which is thought a part of a pond. At the west part of the forth investigation area were found a high place that were made by digging down around it. It is possible that the high place may have a relation to the foundation of the main hall of Rokkaku-do temple.

Articles of this period are potteries, chinaware, roof-tiles, a bronze statue of Buddha, instruments for Buddhism ceremony and so on. Some of roof-tiles in this period are same kind of ones of Tohuku-ji temple(東福寺) and others of those are same one of Kohuku-ji temple(興福寺). In this period were yielded roof-tiles so many that Rokkaku-do temple would be roofed all with tiles. This change is supposed the influence of Tohuku-ji temple or temples in Nara. And in this period Articles concerning the Jodo (浄土)sect appear.

7. The late half period of the Muromachi age

The living zone north of Rokkaku-do temple was continued. The ditch SD01 was dug up for the east boundary of Rokkaku-do temple. And to the east of Rokkaku-do temple built road, and east of this were a cemetery. In the cemetery there is a grave with a lot of unglazed saucers like SK38 or a reburied one like SK78.

Articles of this period are potteries, chinaware, roof-tiles, a gong for Buddhism ceremony, gravestones and so on. Some of roof-tiles in this period are same ones of Byoudou-in temple(平等院). A gong is concerning the Jodo sect and gravestones inscribed Daimoku(題目) are concerning the Nichiren(日蓮) sect.

8. The Momoyama(桃山) age

The premises of Rokkaku-do temple and the living zone north of it were continued from the last period. But the east boundary of the premises of Rokkaku-do changed the ditch SD01 to the wall SA01 or SA02. The road east of Rokkaku-do temple was continued but that east side ditch was remade. It is thought this change had a relation to the reorganization of Kyoto by Hideyoshi Toyotomi(豊臣秀吉). The cemetery east of the road became extinct.

Articles of this period are potteries, chinaware and roof-tiles.

9. The Edo(江戸) age

The boundaries of the premises of Rokkaku-do temple and the living zone north of it was changed in the early half of the 17th century. The Living zone north of Rokkaku-do temple was expanded to the south. The premises of Rokkaku-do temple were expanded to the east and the road and the cemetery east of the temple was abolished. This formation has been continued until now. In the Edo age Rokkaku-do temple was burned down three times. The ground level was raised and wells were remade each time.

Articles of this period are potteries, chinaware, roof-tiles, ceramic dolls, ink stones, bronze articles and iron articles. Articles are many kinds and large quantity.

第3表　六角堂周辺試掘・立会調査一覧表

	調査次	所在地	調査年月日		掲載誌	備考
三条三坊十二町						
1	250	三条通室町東入御倉町　70-1	1979	8/22	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和54年度』（京都,昭和55年）,8頁。	立会。遺構なし。遺物なし。掘下底面浅し。
2	6-31	烏丸通三条上ル場之町596	1983	5/4	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和58年度』（京都,昭和59年）,33頁。	試掘。GL-0.6m以下平安後期の整地層、室町～江戸の井戸3、土坑3。
3	6-135	両替町通姉小路下ル柿本町387-1	1984	8/8	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和59年度』（京都,昭和60年）,75頁。	立会。GL-0.2m以下、包含層5、平安後期1、鎌倉1、室町後期1江戸2。
4	6-125	室町町通姉小路下ル役行者町372	1986	8/18	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』（京都,昭和62年）,58頁。	立会。GL-1.01m以下時期不明の包含層2。
5	6-304	三条通烏丸西入御倉町79	1988	3/4	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』（京都,平成元年）,45頁。	立会。GL-0.51mにて室町の包含層。
6	6-158	福良町地先	1989	12/19	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』（京都,平成2年）,47頁。	立会。攪乱のみ。
7	6-69	両替町通姉小路下ル柿本町389	1989	7/23	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』（京都,平成2年）,75頁。	立会。GL-1.7mにて時期不明の土坑。
8	HL64	両替町通姉小路下ル柿本町395	1992	5/21・25	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成4年度』（京都,平成5年）,58頁。	立会。地表下2.23mにて平安後期・時期不明の土坑。
9	01H318	烏丸通場之町905他	2001	10/22,11/28-30	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報　平成13年度』（京都,平成14年）,8－12頁。	試掘。近世の地下蔵2基検出。
10	HL159	両替町通姉小路下ル柿本町393	2003	8/12・13・18-21	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成15年度』（京都,平成16年）,27頁。	立会。No.1;-0.53m, 江戸初期の包含層（土師器皿,唐津碗,黄瀬戸皿,志野,焼締陶器）。－1.72m以下,灰黄褐色砂礫の地山。No.2;－1.7m,江戸初期の落込（土師器皿,平瓦）の東肩。-1.9m以下,褐色微砂の地山。No.3;－1.16m,室町後期の包含層（土師器皿）。－1.7m,室町中期の包含層（土師器皿）
11	HL360	姉小路通烏丸西入柿本町417他2筆	2004	2/3	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成16年度』（京都,平成17年）,20頁。	立会。－1.3mまで現代盛土。
三条三坊十三町						
12	6-197	烏丸通三条上ル場之町604	1990	3/14	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成2年度』（京都,平成3年）,66頁。	試掘。GL-2.18mにて室町の整地層。-2.48mにて平安の整地層。

三条四坊四町						
13	6-6	菊屋町地先	1990	4/6・18	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成2年度』（京都,平成3年）,75頁。	立会。GL-0.21～1.4mにて三条大路路面,以下で鎌倉の包含層。
14	HL102	東洞院通、御池通～錦小路通他地内	1994	6/20・21・29	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成6年度』（京都,平成7年）,49頁。	立会。地表下0.4mで東洞院大路路面14,遺物なく時期不明。
15	HL066	姉小路通東洞院東入蜃華院前町706－3元初音中学校	2003	5/27・28,6/2	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成15年度』（京都,平成16年）,27頁。	立会。－1.0m,近世の包含層。－1.6m,室町時代の包含層（土師器）。
四条三坊九町						
16	34-10	烏丸通三条下ル饅頭屋町604	1979	3/13・20	財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』（京都,昭和56年）。	立会。京都市文化財保護課による。
17	470	室町通三条下ル烏帽子屋町490-1	1980	1/10	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和54年度』（京都,昭和55年）,14頁。	試掘。溝検出。須恵器・土師器・陶磁器・瓦器・瓦・銅・鉄製品出土。
18	34-9	六角通烏丸西入骨屋町152	1980	4/5	財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』（京都,昭和56年）。	立会。京都市埋蔵文化財研究所による。
19	10-157	三条通烏丸西入御倉町80他	1987	9/2	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』（京都,昭和63年）,78頁。	試掘。1T　GL-1.24m以下、平安後期・鎌倉後期・室町の包含層各1。-2.18m以下、平安の整地層2。2T GL-1.9mにて平安後期の東西溝、推定三条大路南側溝。発掘調査に切り換える。
20	10-93	三条通烏丸西入御倉町64他	1988	7/29	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』（京都,平成元年）,56頁。	試掘。GL-1.6mにて桃山の石組み遺構。発掘調査に切り換える。
21	10-193	三条通烏丸西入御倉町68	1989	2/20	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』（京都,平成2年）,37頁。	立会。GL-2.8mにて土坑2,室町・江戸各1。
22	10-96	六角通烏丸西入骨屋町143	1990	9/8	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成2年度』（京都,平成3年）,76頁。	立会。GL-1.4mにて室町の土坑。
23	H306	室町通三条下ル烏帽子屋町486,488,490-1	1999	11/29-12/8	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成11年度』（京都,平成12年）,56頁。	立会。No.2;-1.05m以下,暗褐色砂泥の地山。No.3;-0.5m・-0.8m,江戸時代の包含層（染付・土師器皿）。-0.95m,時期不明の包含層（土師器皿）。-1.12m以下,黄褐色砂泥の地山
24	02H115	室町通三条下ル烏帽子屋町481-1他2筆	2002	10/24	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報　平成14年度』（京都,平成15年）,38頁。	試掘。GL-1.16mで地山を検出したが,ほぼ全面で地山面以下まで近世攪乱
25	HL015	室町通三条下ル烏帽子屋町495番地他	2004	4/15・16・19	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成16年度』（京都,平成17年）,26頁。	立会。－0.37m,江戸時代の包含層。－0.8m,鎌倉後期の包含層（土師器皿,須恵器坏）。

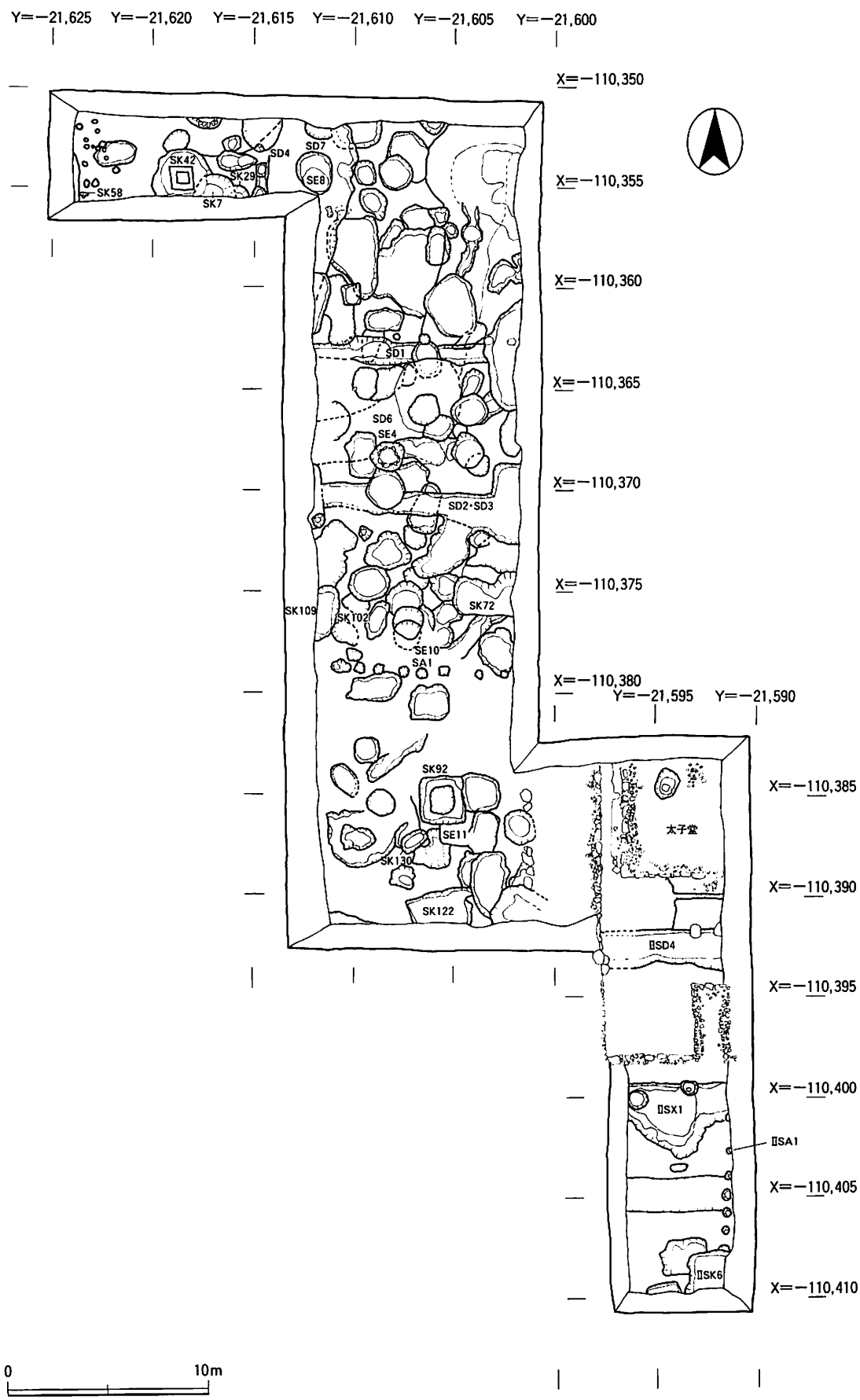
四条三坊十町						
26	34-12	室町通六角下ル鯉山町513	1980	11/17	財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』（京都,昭和56年）。	立会。京都市埋蔵文化財研究所による。
27	HL-66	六角通烏丸西入骨屋町154-5	1982	6/26	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和57年度』（京都,昭和58年）。	立会。対象となる遺構・遺物の検出なし。
28	HL-68	六角通烏丸西入骨屋町154-6	1982	6/26	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和57年度』（京都,昭和58年）。	立会。対象となる遺構・遺物の検出なし。
29	10-310	室町通蛸薬師上ル鯉山町	1985	3/22	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』（京都,昭和61年）,55頁。	立会。GL-1.5mにて鎌倉の包含層。
30	10-239	烏丸通六角下ル七観音町626	1987	1/7	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』（京都,昭和63年）,64頁。	立会。GL-1.63m以下、室町・江戸の包含層各1、鎌倉の土坑。
31	10-260	烏丸通六角下ル七観音町623・624	1987	2/23～25・27	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』（京都,昭和63年）,64頁。	立会。GL-1.48mにて土坑7、平安後期5、平安末期2。
32	10-120	室町通六角下ル鯉山町505-2	1987	8/1	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』（京都,昭和63年）,78頁。	立会。検出できず。
33	10-16	烏丸通六角下ル七観音町635	1989	4/26	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』（京都,平成2年）,47頁。	試掘。GL-1.94m以下包含層3,鎌倉・室町・時期不明。発掘調査に切り換える。
34	10-54	蛸薬師通烏丸西入橋弁慶町233	1990	6/28	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成2年度』（京都,平成3年）,76頁。	立会。GL-1.15mにて鎌倉の土坑。
35	HL490	蛸薬師通烏丸西入橋弁慶町235	1997	3/3	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成9年度』（京都,平成10年）,66頁。	立会。-0.95m以下，室町時代の包含層。
36	HL093	六角通烏丸西入骨屋町144,146，148	2002	7/1-8/7	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成14年度』（京都,平成15年）,23頁。	立会。No.1;-2.1m，室町時代包含層（土師器皿）。No.2;-1.95m,室町時代包含層（土師器皿）。
37	01H501	烏丸通六角下ル七観音町629-1,633他	2002	2/5	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報　平成14年度』（京都,平成15年）,37頁。	試掘。GL-2.5mで室町時代の土坑を1基検出。敷地の奥は近世の堀状遺構
四条三坊十五町						
38	225	蛸薬師通烏丸東入一蓮社町293	1979	8/8	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和54年度』（京都,昭和55年）,7頁・60頁。	試掘。須恵器・陶磁器・土師器・陶器・瓦・瓦器・磁器が出土。発掘調査に切り換え。
39	HL-50	烏丸通六角下ル七観音町638	1982	5/25・6/8	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和57年度』（京都,昭和58年）。	立会。対象となる遺構・遺物の検出なし。
40	10-115	東洞院通六角下ル御射山町281	1984	7/20	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和59年度』（京都,昭和60年）,44頁。	試掘。GL-2.1m以下、江戸の包含層3。-2.4mにて弥生の包含層、室町後期の土坑1。

41	10-56	蛸薬師通東洞院西入一蓮社町306	1985	5/17	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』（京都,昭和61年）,67頁。	立会。GL-1.7mにて鎌倉の土坑。
42	10-125	烏丸通六角下ル七観音町634	1985	7/24・8/28	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』（京都,昭和61年）,34～35頁・67頁。	立会・試掘。GL-1.35m以下、平安後期、室町の包含層各1。
43	10-29	六角通烏丸東入堂之前町245	1986	4/23	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』（京都,昭和62年）,58頁。	立会。試掘調査済（60年度HL-327）。
44	10-217	六角通烏丸東入堂之前町225	1986	11/20・26	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』（京都,昭和62年）,58頁。	立会。GL－1.2mにて土坑3、室町1、江戸2。－1.95mにて平安末期～鎌倉の土坑。
45	10-327	六角通烏丸東入堂之前町245	1986	3/3	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』（京都,昭和62年）,58頁。	試掘。GL－0.4m以下室町・江戸末期の包含層各1、室町後期・江戸の整地層各1。
46	10-193	東洞院通六角下ル御射山町284他	1990	3/6	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成2年度』（京都,平成3年）,66頁。	立会。GL-2.1m以下,流れ堆積。
					四条三坊十六町	
47	6	東洞院通三条下ル三文字町201	1979	2/8	財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』（京都,昭和56年）。	試掘。京都市文化財保護課による。
48	10-276	東洞院通三条下ル三文字町205-4	1984	3/27	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和59年度』（京都,昭和60年）,34頁。	立会。GL-0.2mにて、江戸の包含層。
49	10-119	東洞院通三条下ル三文字町204-1	1984	7/24	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和59年度』（京都,昭和60年）,34頁。	立会。GL-0.3m以下、江戸の包含層3。
50	10-254	六角通烏丸東入堂之前町225	1984	12/17	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和59年度』（京都,昭和60年）,46頁。	立会。GL－1.5m以下、時期不明の包含層。
51	10-54	東洞院通三条下ル三文字町205	1986	5/30	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』（京都,昭和62年）,59頁。	試掘。GL-1.8mにて土坑11、平安後期1、室町9、江戸1。柱穴4、平安後期3、室町1。
52	10-19	東洞院通三条下ル三文字町218	1987	4/2	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』（京都,昭和63年）,78頁。	立会。GL-1.7m以下時期不明の包含層2。
53	10-118	三条通烏丸東入梅忠町20-1他	1987	7/31	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』（京都,昭和63年）,78頁。	試掘。GL-1.3mにて室町末期～江戸前期の木製品を多量に含む池状堆積。発掘調査に切り換える。
54	HL268	東洞院通三条下ル三文字町227-1	1992	10/30～11/1	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成4年度』（京都,平成5年）,17～19頁・58頁。	立会。地表下2.25mにて,室町の土坑、南北方向の溝。
55	HL004	東洞院通三条下ル三文字町207	2000	4/10-18	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成12年度』（京都,平成13年）,36頁。	立会。No.2；－2.95m以下,褐色砂礫の地山。No.3；－2.02m,江戸時代の包含層（土師器皿,陶器水指,焼塩
56	HL251	東洞院通三条下ル三文字町205-3他	2001	11/8・9・12	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成13年度』（京都,平成14年）,29頁。	立会。－2.2m,平安中期の包含層（土師器皿）。推定東洞院大路西側側溝に位置する。

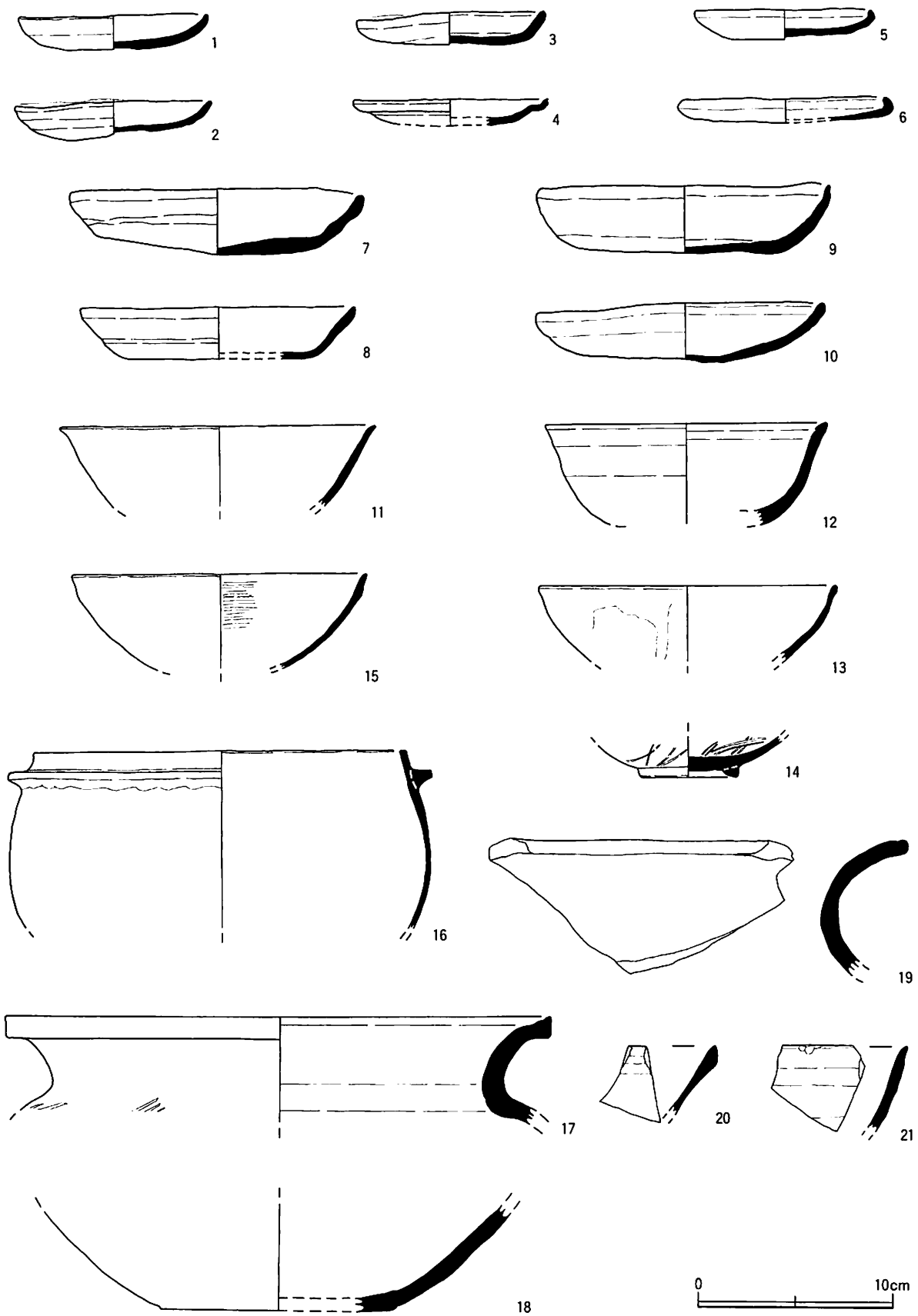
四条四坊一町						
57	557	三条通東洞院東入菱屋町36	1980	3/4	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和54年度』（京都,昭和55年）,17頁。	立会。遺構なし。遺物なし。
58	23-131	六角通高倉滕屋町	1981	10/12,11/14・17	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和56年度』（京都,昭和57年）,14頁。	試掘・立会。表土下0.7mにて包含層（平安後期、室町）、土坑13（平安後期～江戸9）、井戸（室町）。
59	10-173	三条通東洞院東入菱屋町36	1983	10/28	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和58年度』（京都,昭和59年）,34頁。	立会。GL-2.0mにて包含層、時期不明。
60	10-145	三条通東洞院東入菱屋町33	1984	8/21	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和59年度』（京都,昭和60年）,46頁。	立会。GL-0.2m以下、江戸の包含層6。
61	10-295	東洞院通三条下ル三文字町200	1980	3/5	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』（京都,昭和61年）,55頁。	立会。GL-1.3m以下鎌倉・室町の包含層各1。
62	10-119	三条通東洞院東入菱屋町33	1987	7/31	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』（京都,昭和63年）,78頁。	立会。検出できず。
63	10-179	三条通東洞院東入菱屋町43-1	1989	1/30	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』（京都,平成2年）,37頁。	試掘。GL-1.5mにて平安後期の土坑1。
64	HL420	六角通東洞院東入滕屋町191他	1992	3/25～4/28	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成5年度』（京都,平成6年）,58頁。	立会。地表下0.89m以下、室町の包含層、土坑。
65	HL77	三条通東洞院東入菱屋町47-1	1992	5/31～6/22	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成5年度』（京都,平成6年）,65頁。	立会。地表下1.45m以下、室町の包含層、土坑、庄内土器を含む流路。
66	HL283	六角通東洞院東入滕屋町183-1・9・10	1996	10/8・11・15・16	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成8年度』（京都,平成9年）,61頁。	立会。地表下1.83mで弥生の南北の流路、流路を切って平安中期・鎌倉・江戸の土坑。
67	HL323	三条通東洞院東入菱屋町51	2001	2/7・15・16	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成13年度』（京都,平成14年）,21頁。	立会。No.1;-3.3m, 時期不明の落込。No.2;-2.5m以下,灰黄褐色砂礫の地山。
68	HL405	六角通高倉西入滕屋町　183-2	2001	3/29-4/9	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成13年度』（京都,平成14年）,21頁。	立会。No.1;-0.98m, 室町末期の包含層（土師器皿）。-1.16m,室町後期の包含層（土師器皿,陶器）。-1.52m,室町中期の包含層（土師器皿）。-1.9m以下,暗褐色粘質土の地山。No.2;-0.7m近世の包含層（土師器,陶器）。-1.4m以下,オリーブ褐色砂泥の地山。No.3;-0.86m,鎌倉前期の包含層を切って鎌倉後期の落込（土師器）。-1.3m,平安中期の包含層（土師器）。-1.42mでこの層を切って平安末期の土坑（土師器）。No.4;-0.5m,江戸後期の包含層。-0.78m,江戸中期の包含層。-1.15m,平安中期の包含層（土師器）。

四条四坊二町						
69	HL-226	東洞院通六角下ル御射山町206	1982	2/16	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和57年度』（京都,昭和58年）。	試掘。旧建物の基礎により大部分が攪乱。一部で平安後期～鎌倉時代の包含層検出。
70	HL-231	六角通東洞院東入滕屋町187-3	1982	2/28	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　昭和57年度』（京都,昭和58年）。	立会。対象となる遺構・遺物なし。
71	10-104	東洞院通六角下ル御射山町271	1985	7/1	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』（京都,昭和61年）,66頁。	立会。盛土のみ。
72	HL254	六角通東洞院東入滕屋町177	1995	10/24・25・27	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成7年度』（京都,平成8年）,56頁。	立会。地表下0.9mにて時期不明の整地層。
73	HL229	蛸薬師通高倉西入泉正寺町323他	1991	10/9～14	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成3年度』（京都,平成4年）,76頁。	立会。GL-1.12mにて室町の包含層を切って江戸の落込み。
74	HL300	六角通東洞院東入滕屋町185	1995	10/24・25・27	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成7年度』（京都,平成8年）,56頁。	立会。地表下1.5mで鎌倉の包含層。
75	HL140	蛸薬師通東洞院東入泉正寺町337,339-1・3	1996	7/9・15・22・26	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成8年度』（京都,平成9年）,61頁。	立会。地表下1.3mで江戸の包含層。
76	HL183	高倉通六角下ル和久屋町343高倉小学校	1997	7/24・30・31	京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成9年度』（京都,平成10年）,75頁。	立会。-2.8mまで近世の包含層。

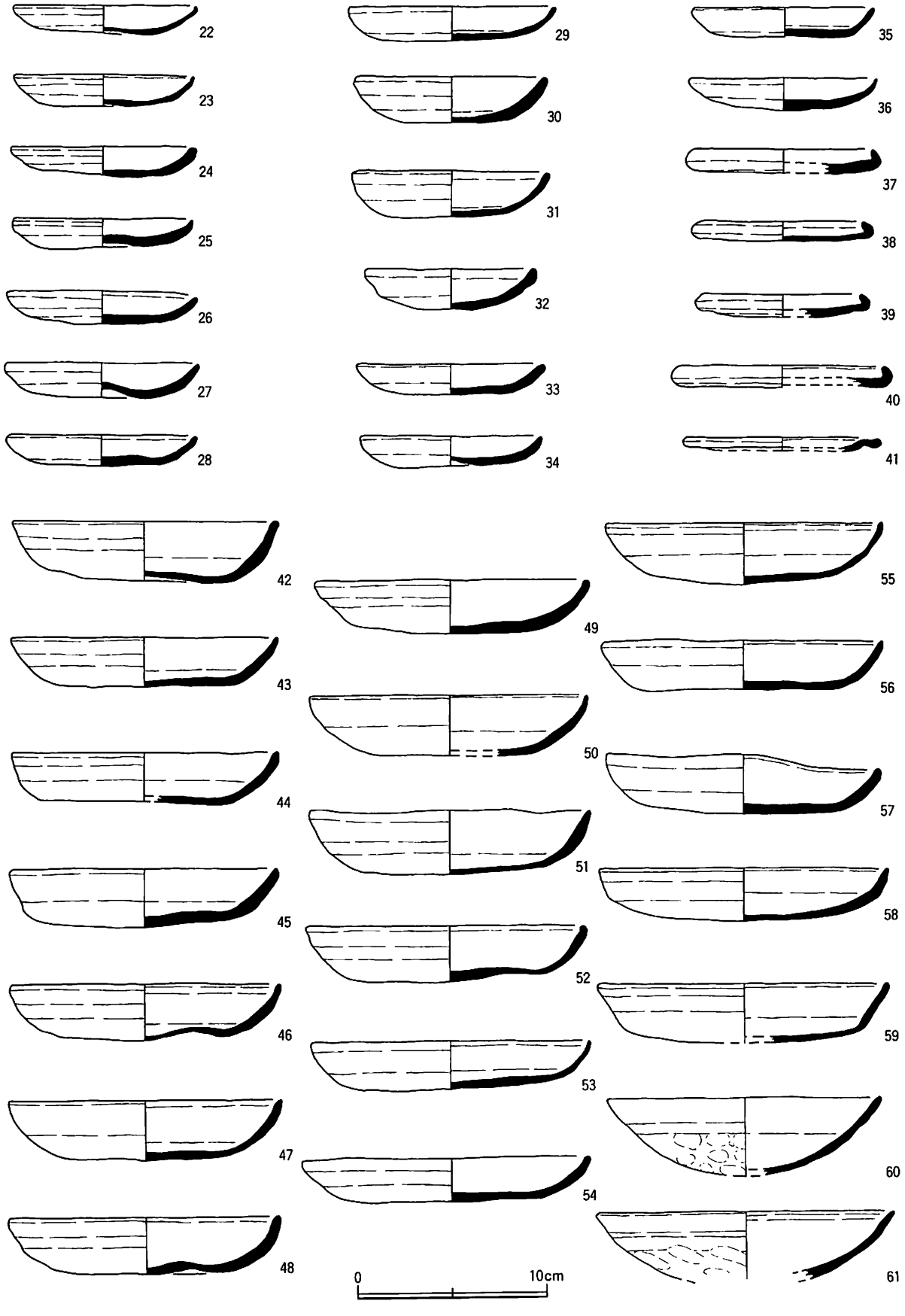
図　　版



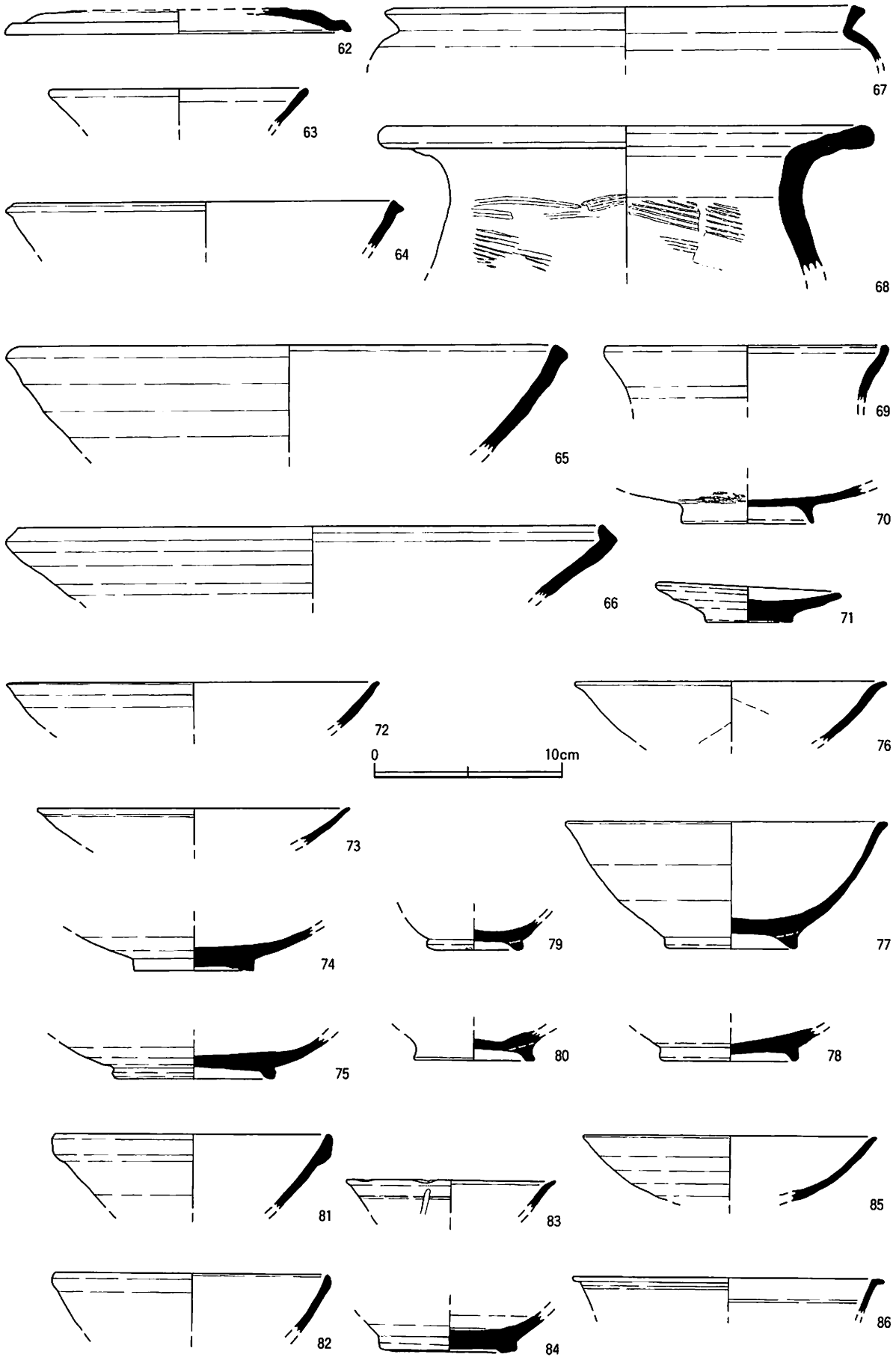
第３次調査区全体図（1/800）



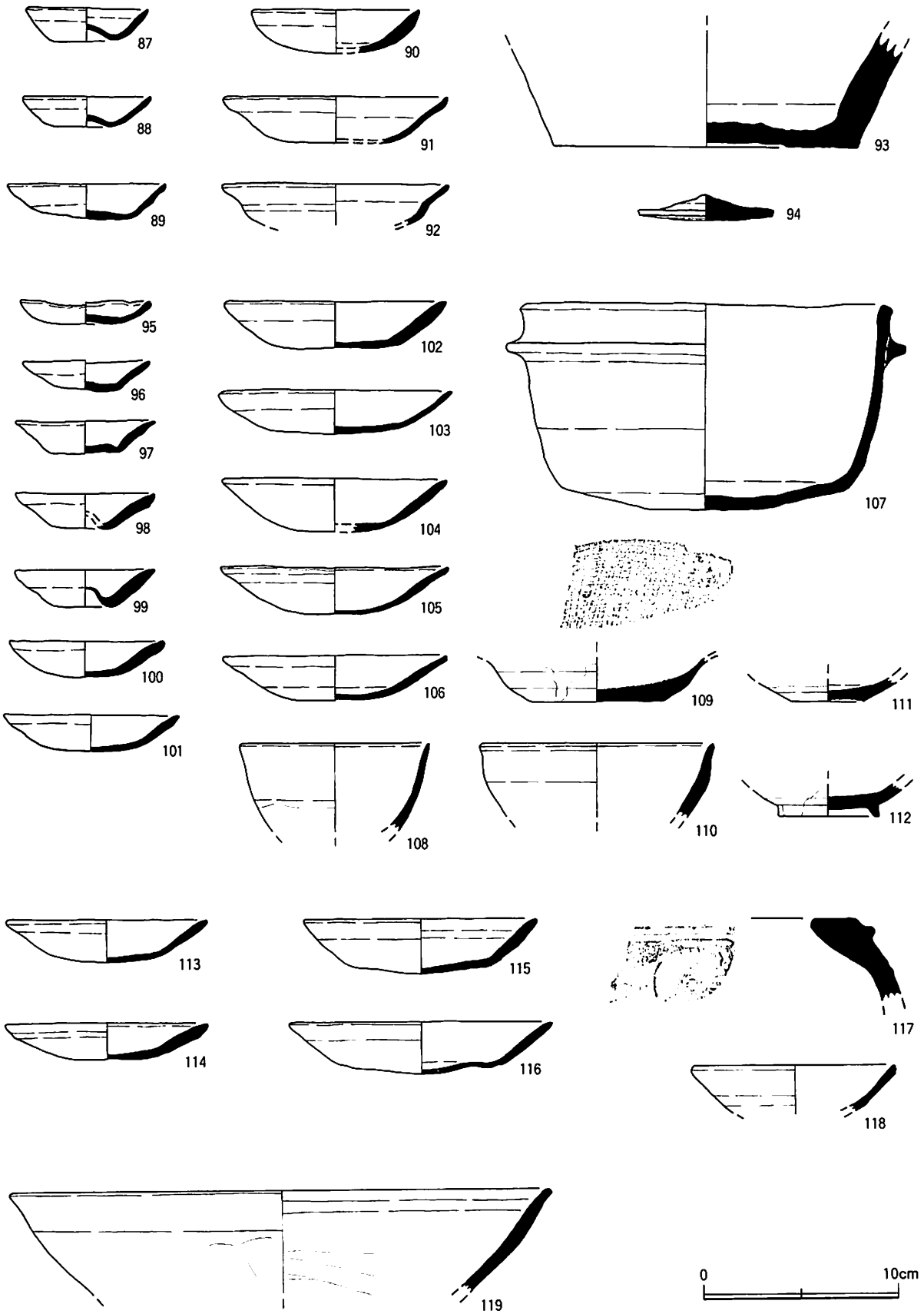
第３次調査溝ＳＤ１出土土器・陶磁器類実測図（1/3）



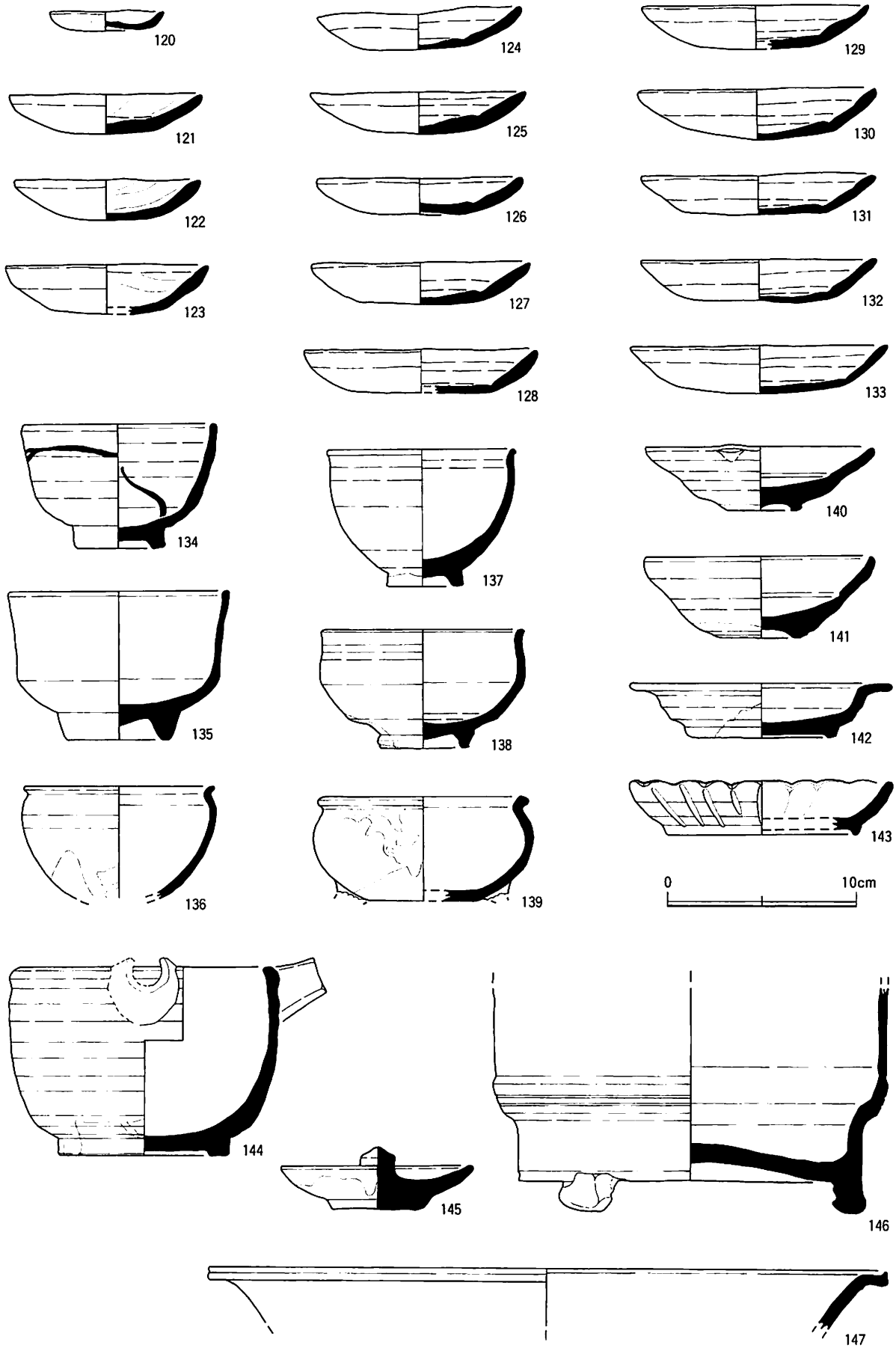
第３次調査土坑ＳＫ92出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）



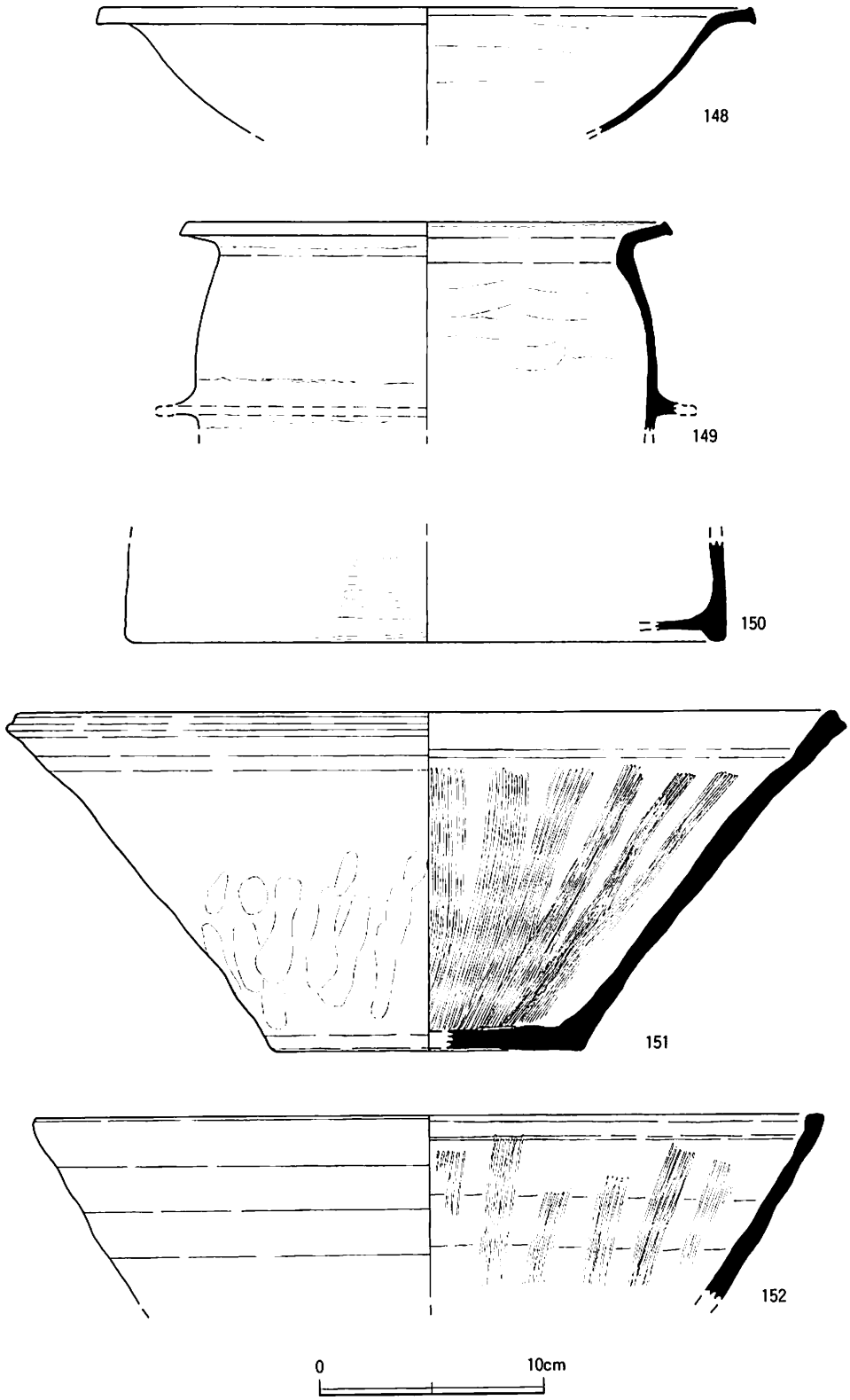
第３次調査土坑ＳＫ92出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）



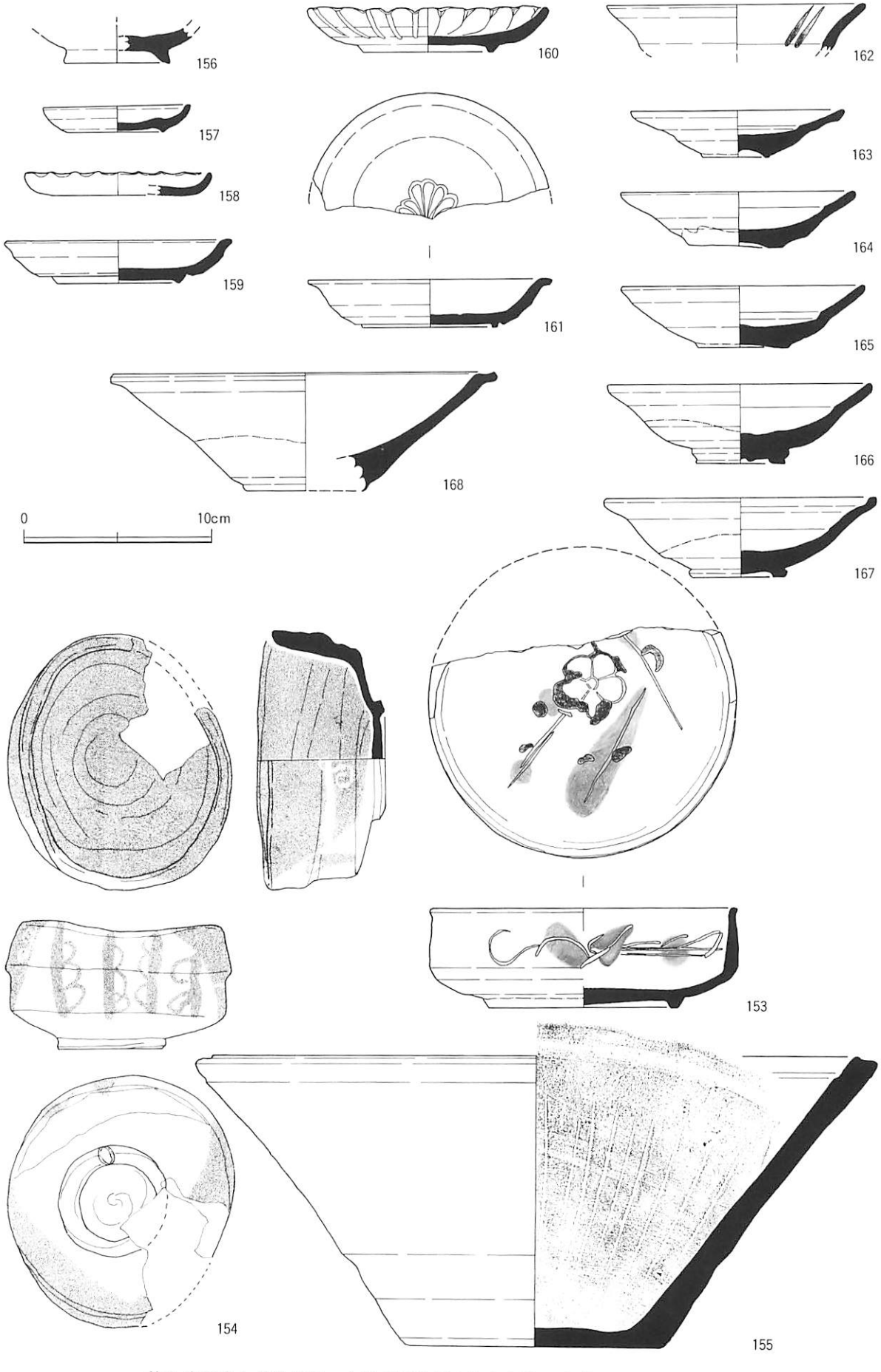
第３次調査土坑ＳＫ122・土坑ＳＫ109・土坑102出土土器・陶磁器類実測図（1/3）



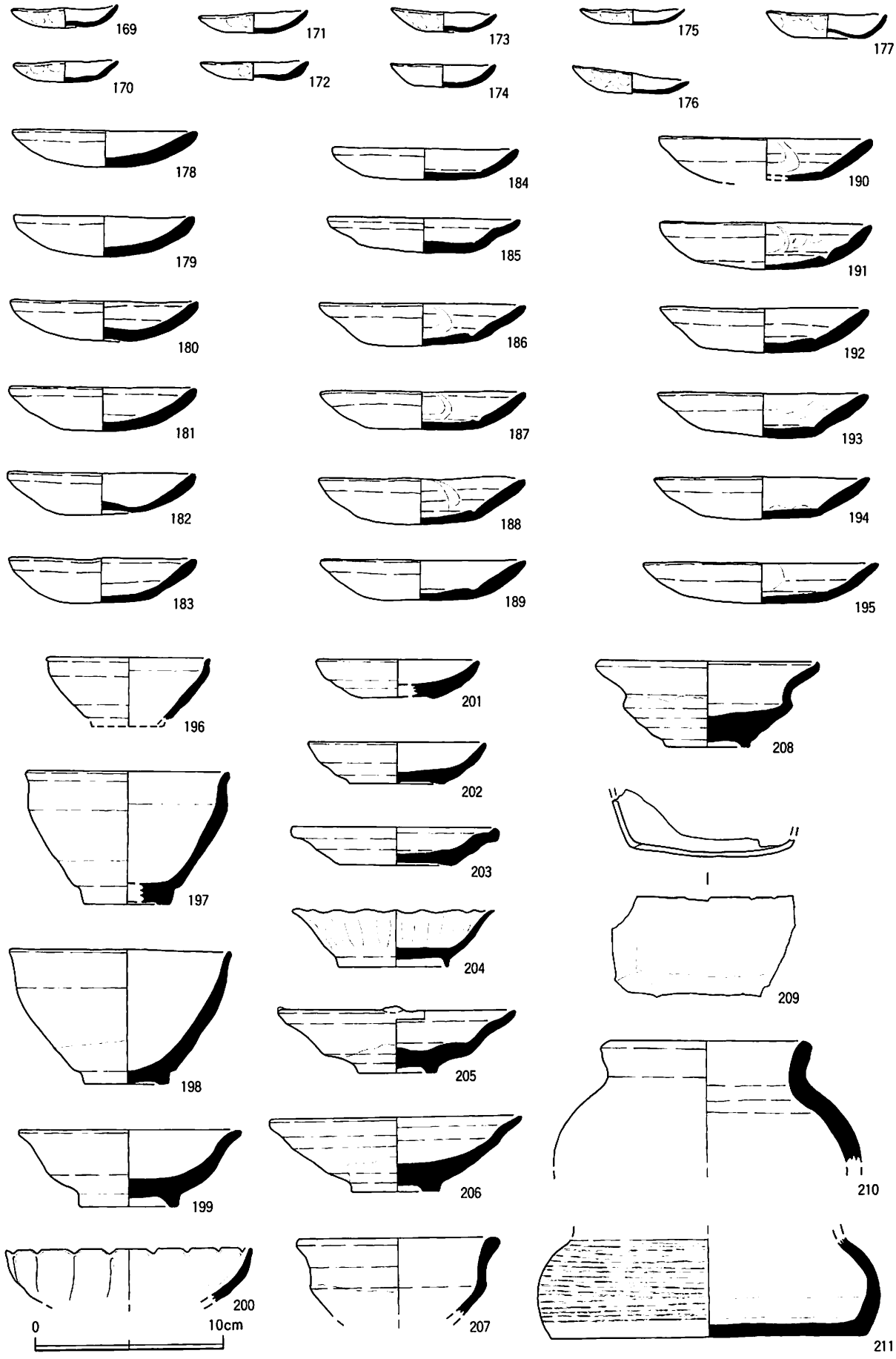
第３次調査土坑ＳＫ72出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）



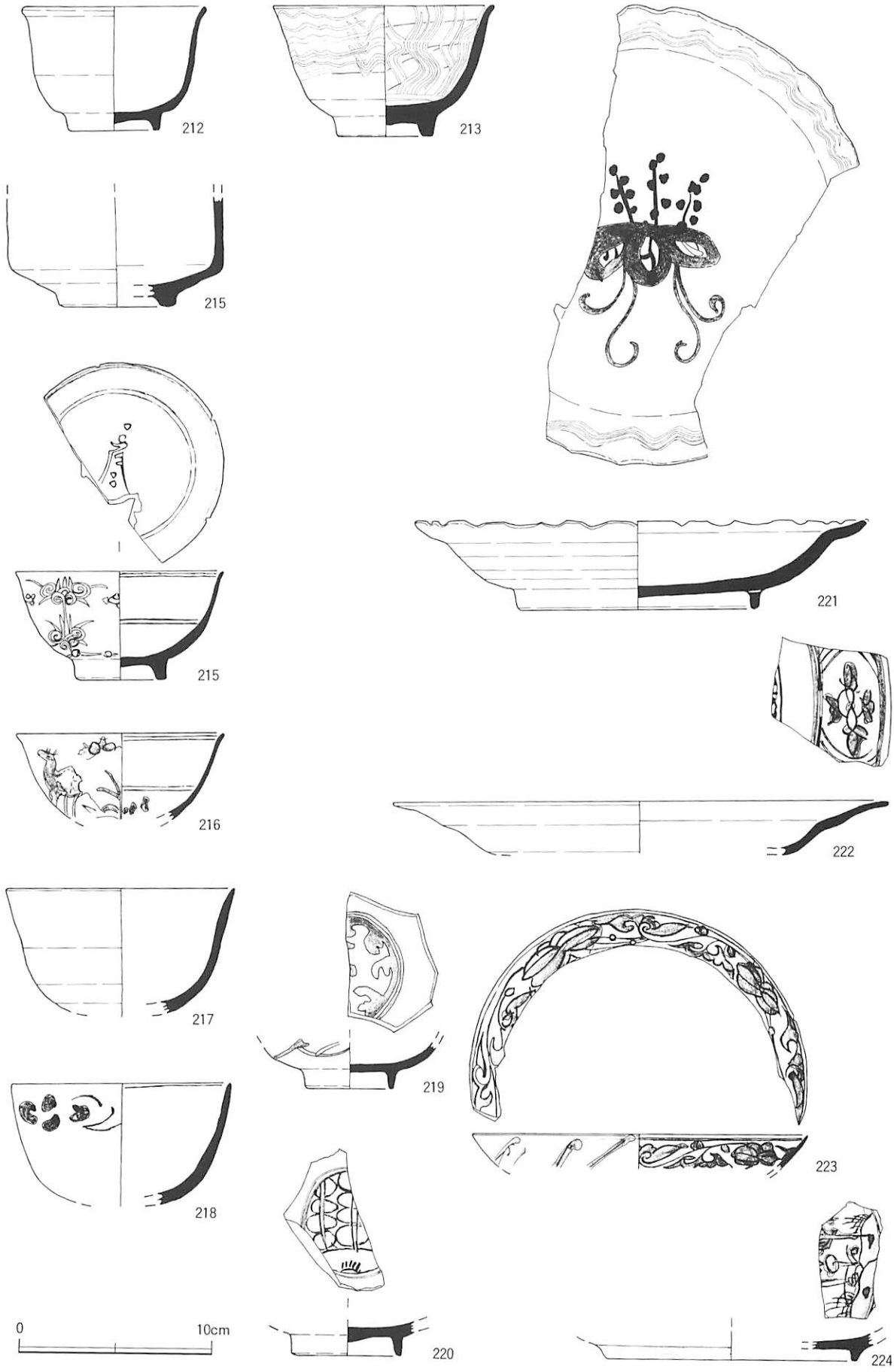
第３次調査土坑ＳＫ72出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）



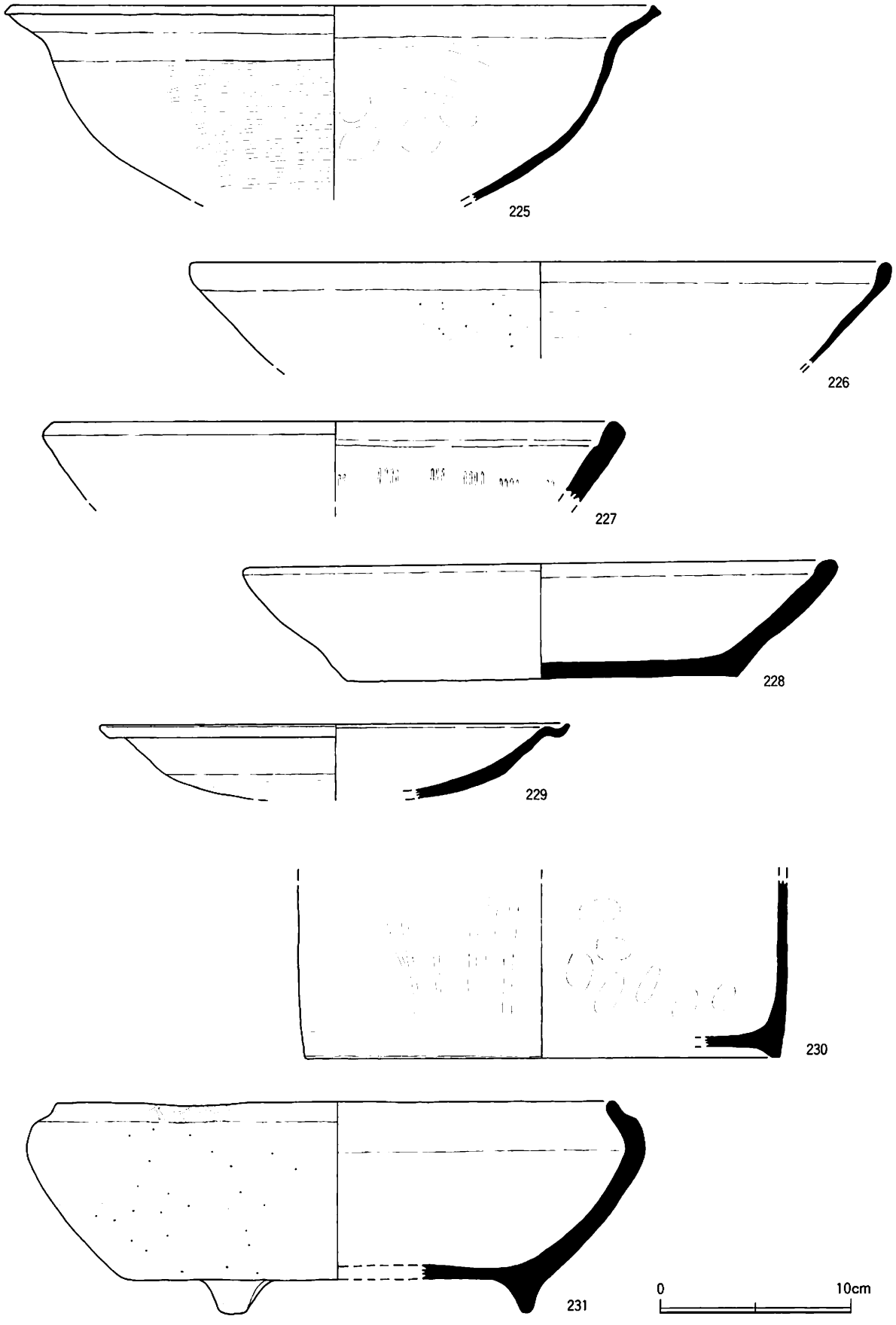
第３次調査土坑ＳＫ７・土坑Ⅱ区ＳＸ１出土土器・陶磁器類実測図（1/3）



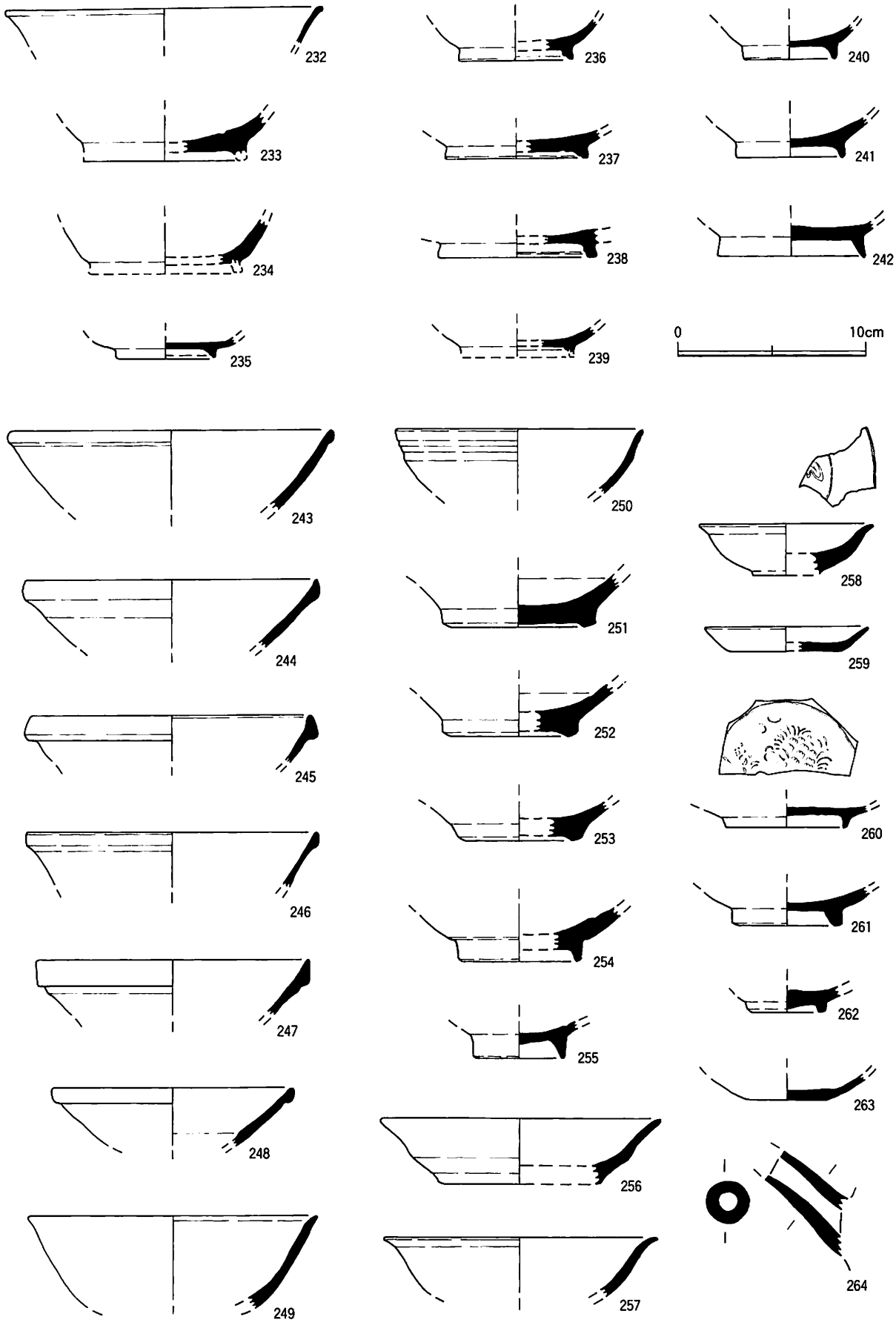
第３次調査土坑Ⅱ区ＳＫ６出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）



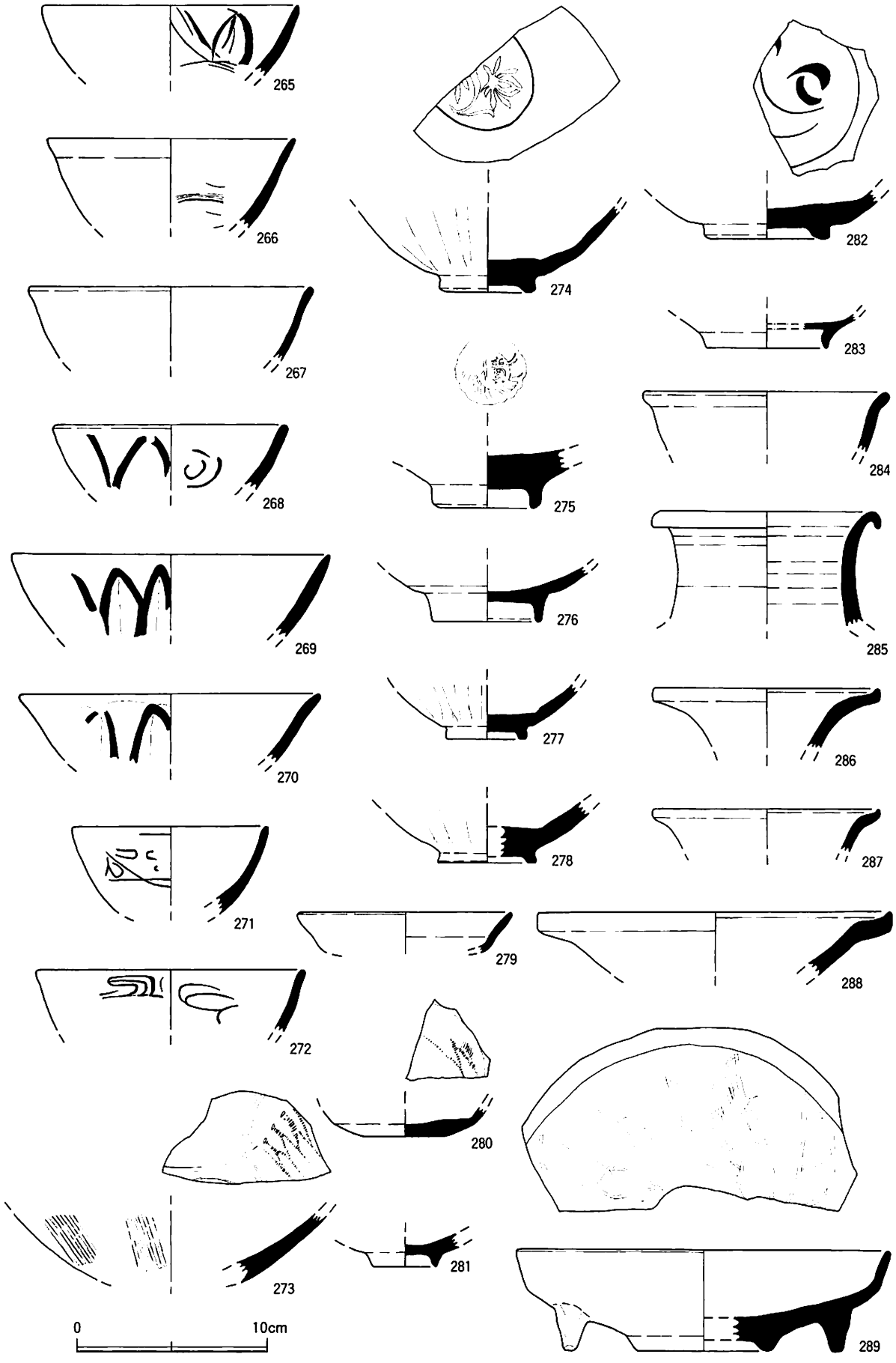
第３次調査土坑Ⅱ区ＳＫ６出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）



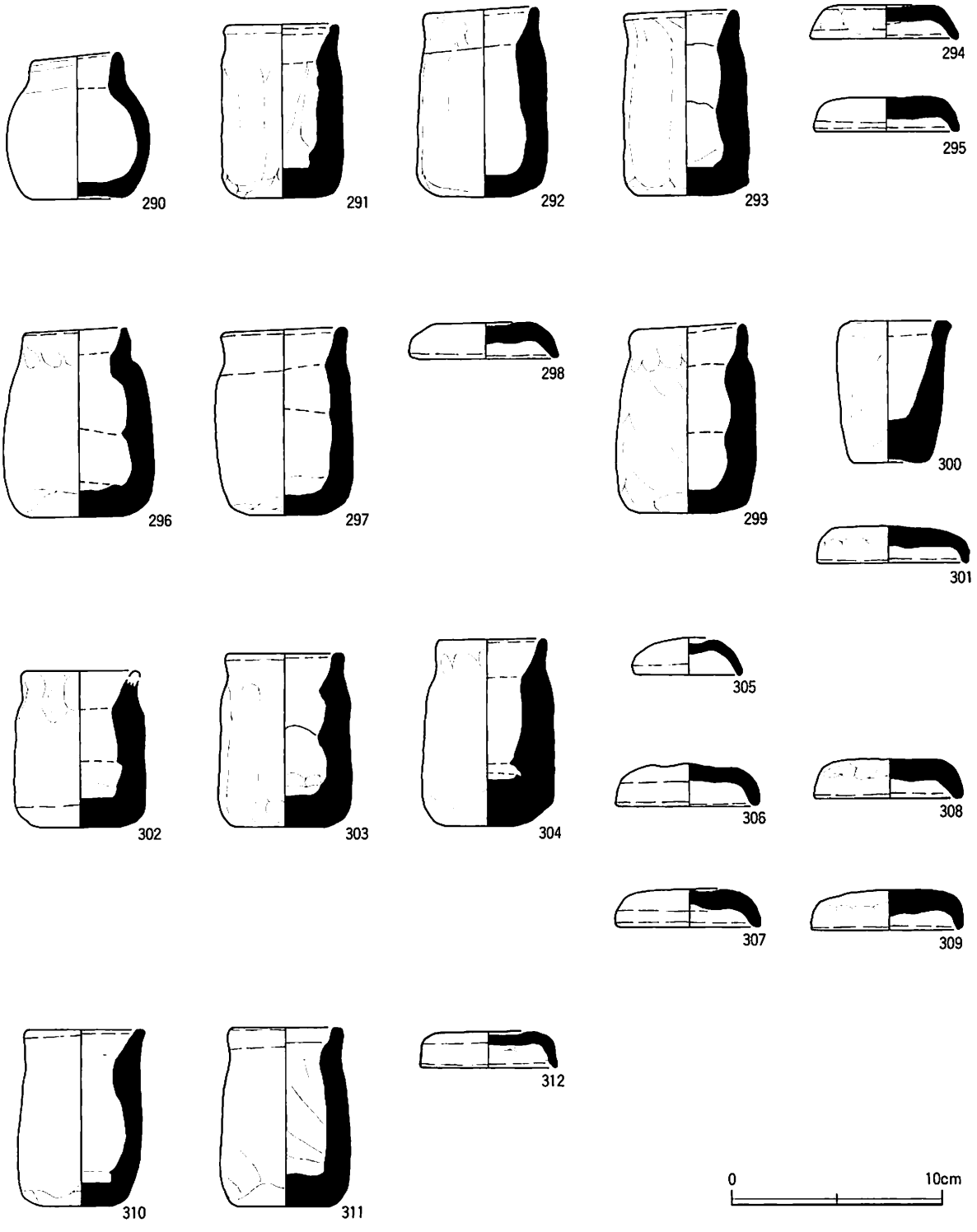
第３次調査土坑Ⅱ区ＳＫ６出土土器・陶磁器類実測図３（1/3）



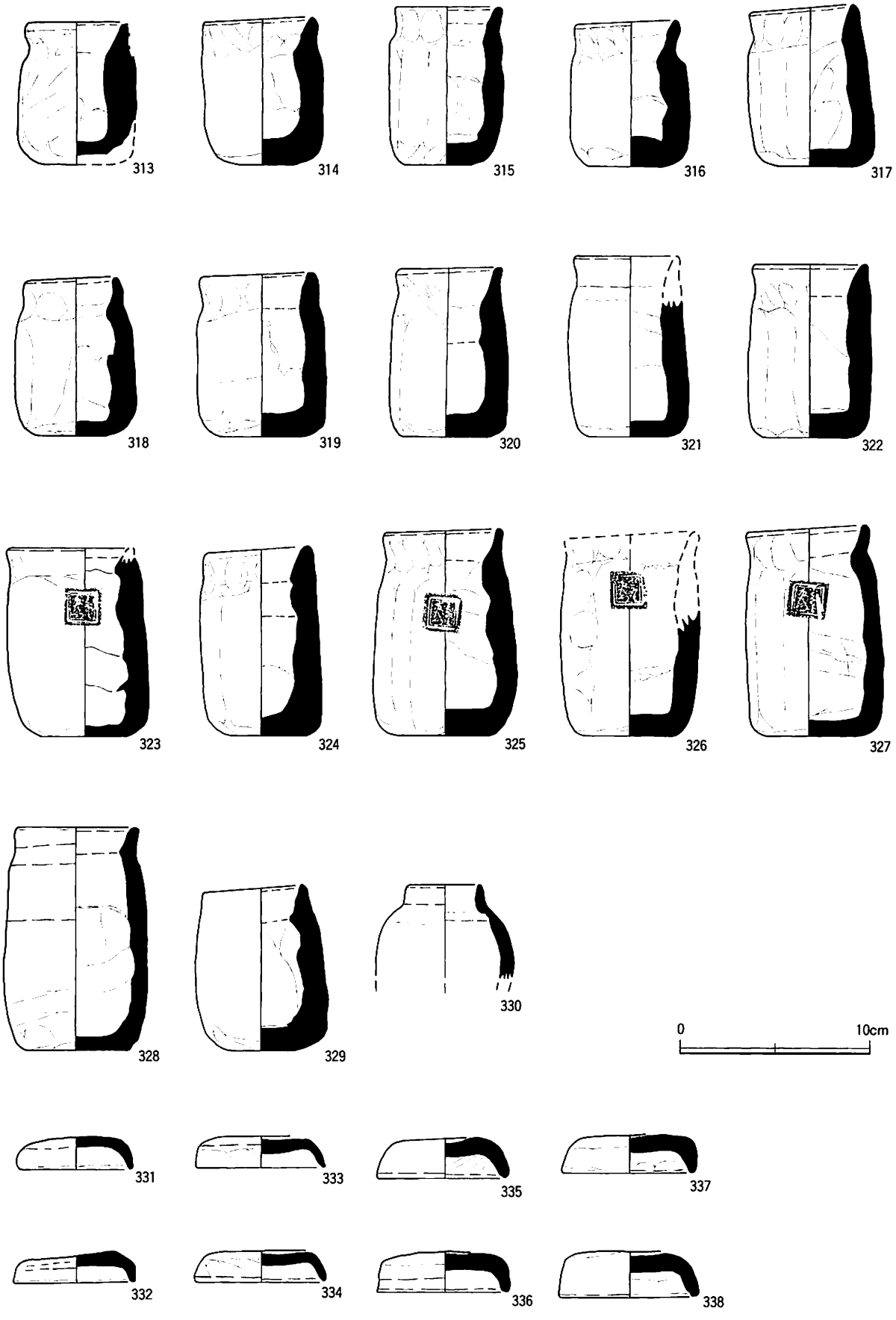
第３次調査出土緑釉陶器・灰釉陶器・白磁実測図（1/3）



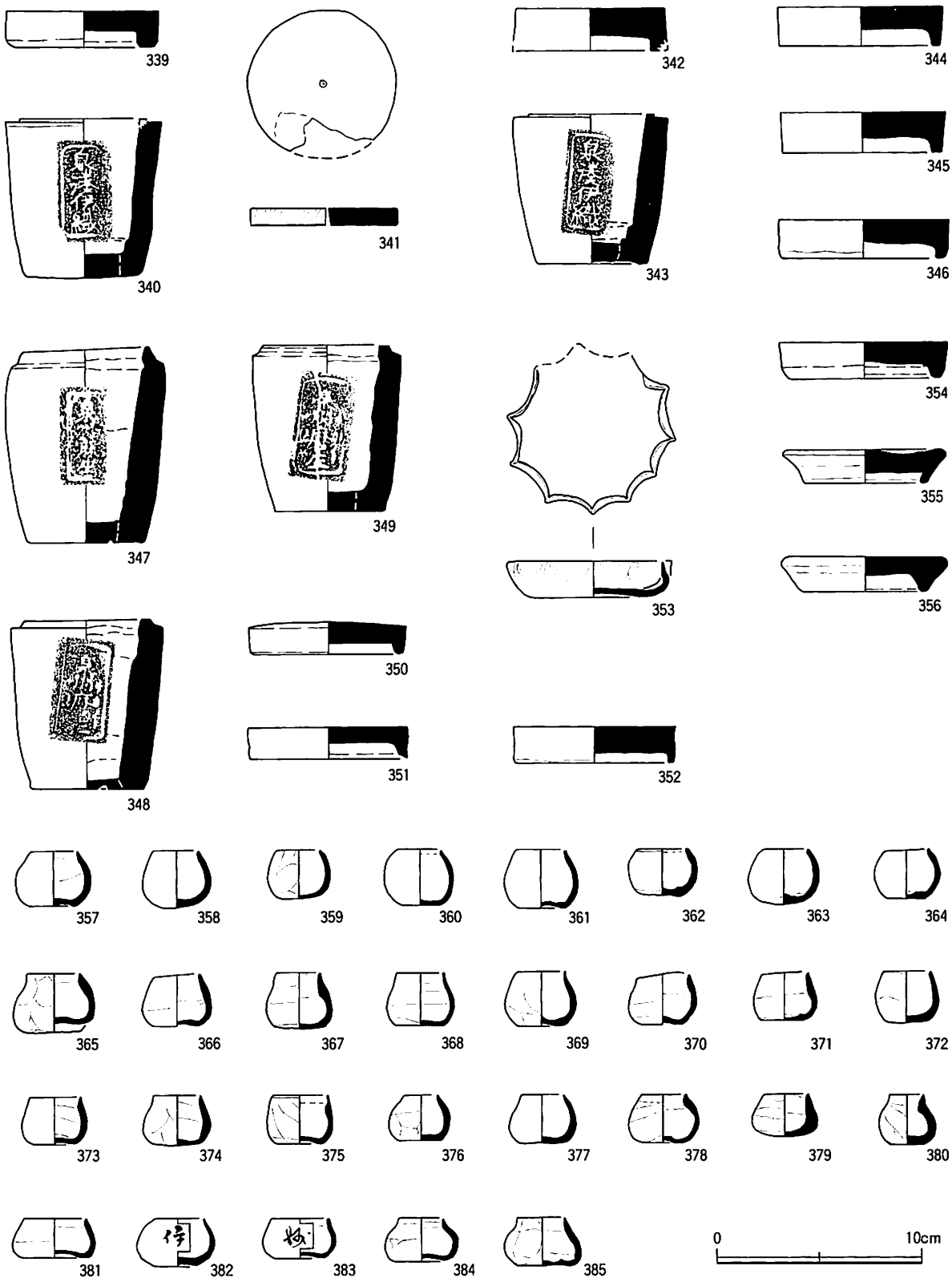
第３次調査出土青磁実測図（1/3）



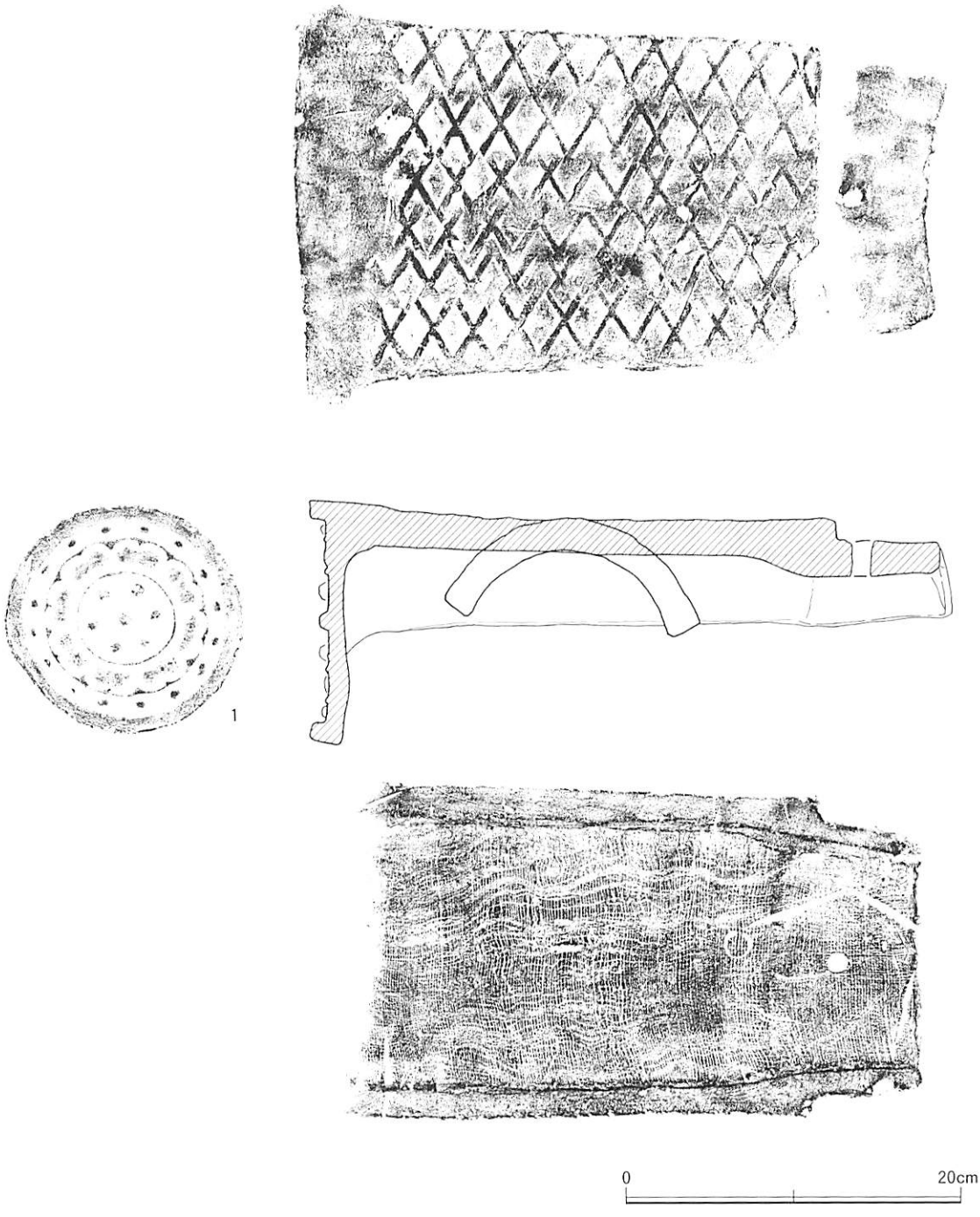
第３次調査出土焼塩壷実測図１（1/3）



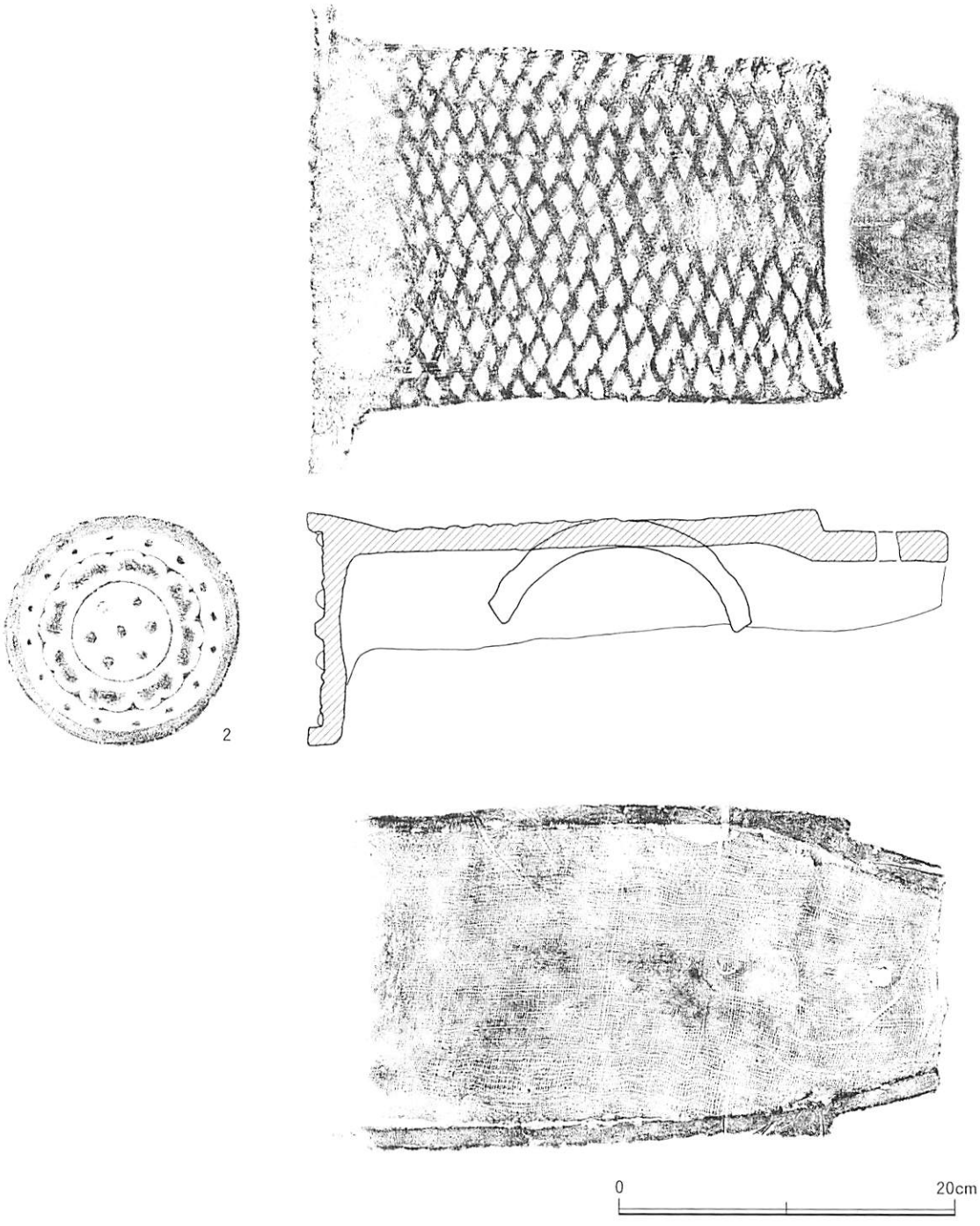
第３次調査出土焼塩壷実測図２（1/3）



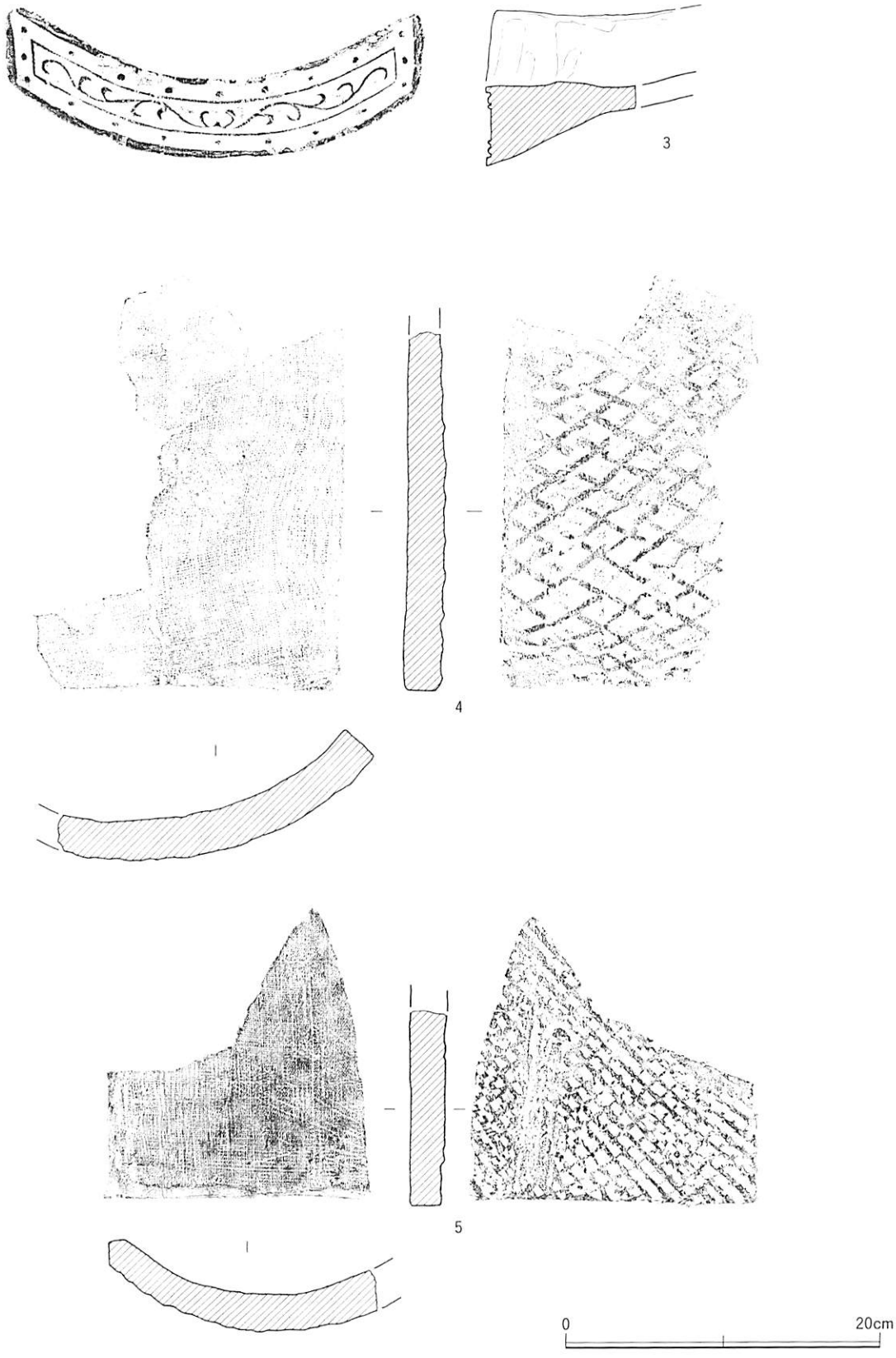
第３次調査出土焼塩壷実測図３・つぼつぼ実測図（1/3）



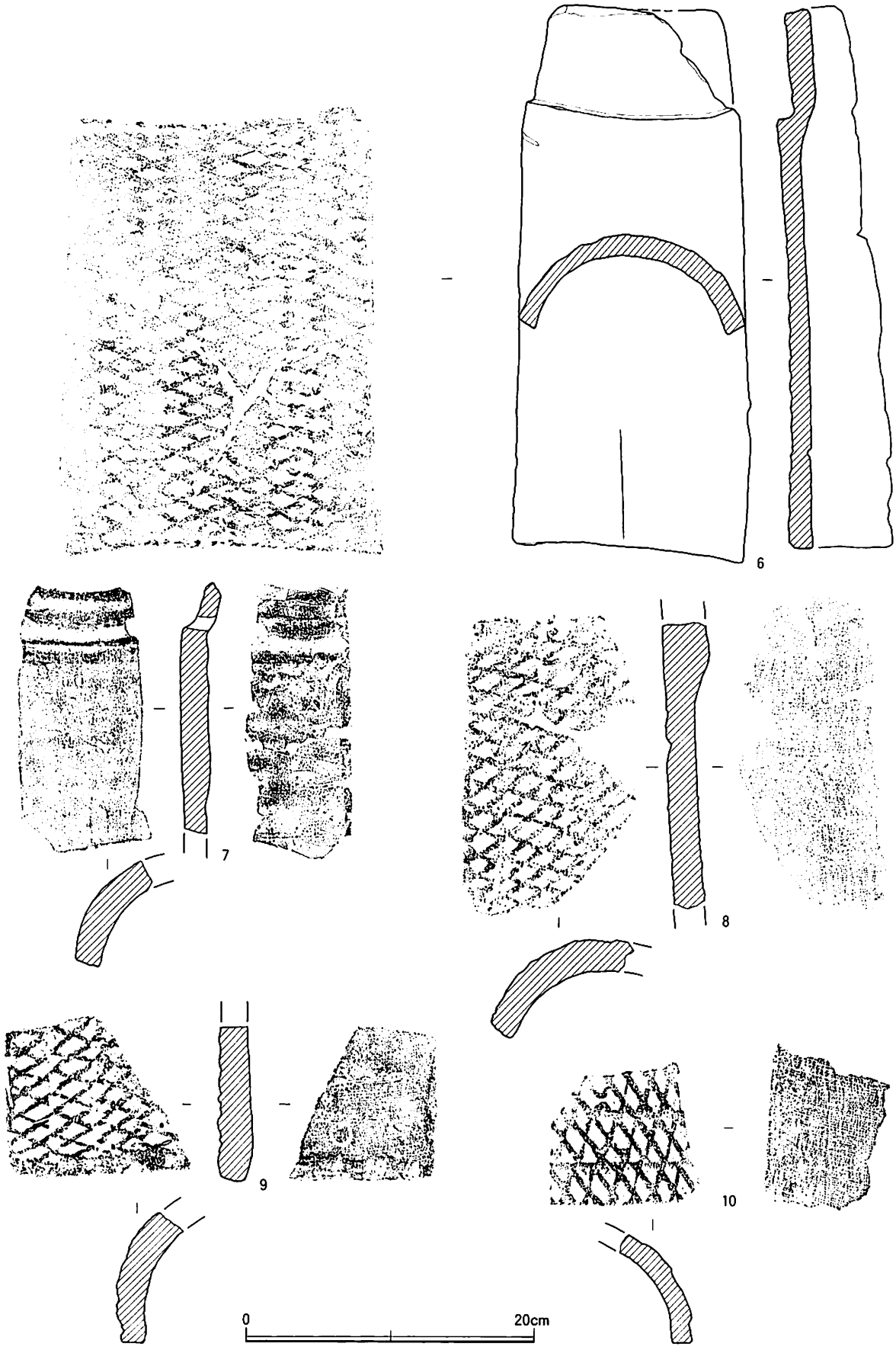
第３次調査土坑ＳＫ129出土瓦実測図１（1/4）



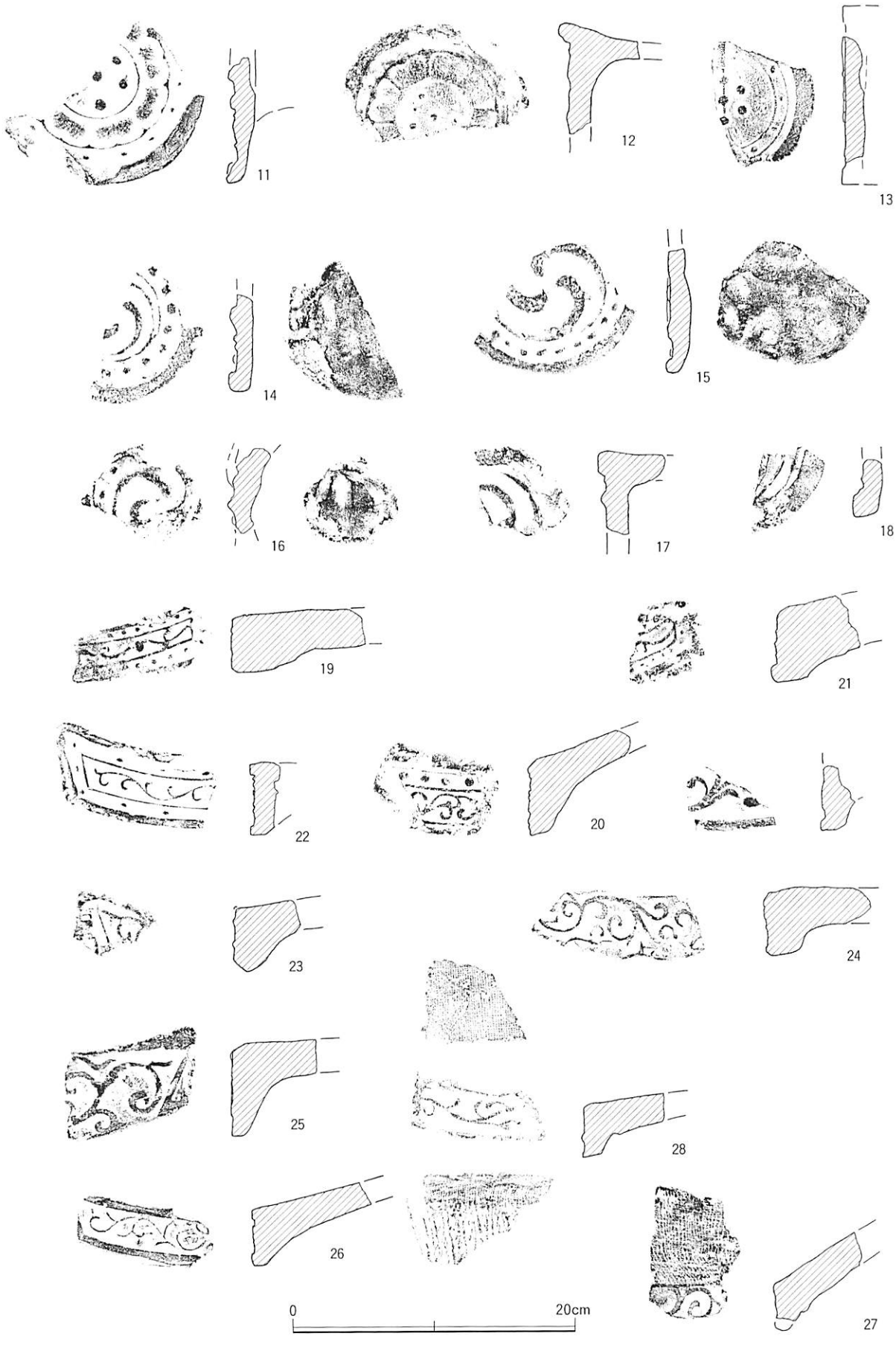
第３次調査土坑ＳＫ129出土瓦実測図２（1/4）



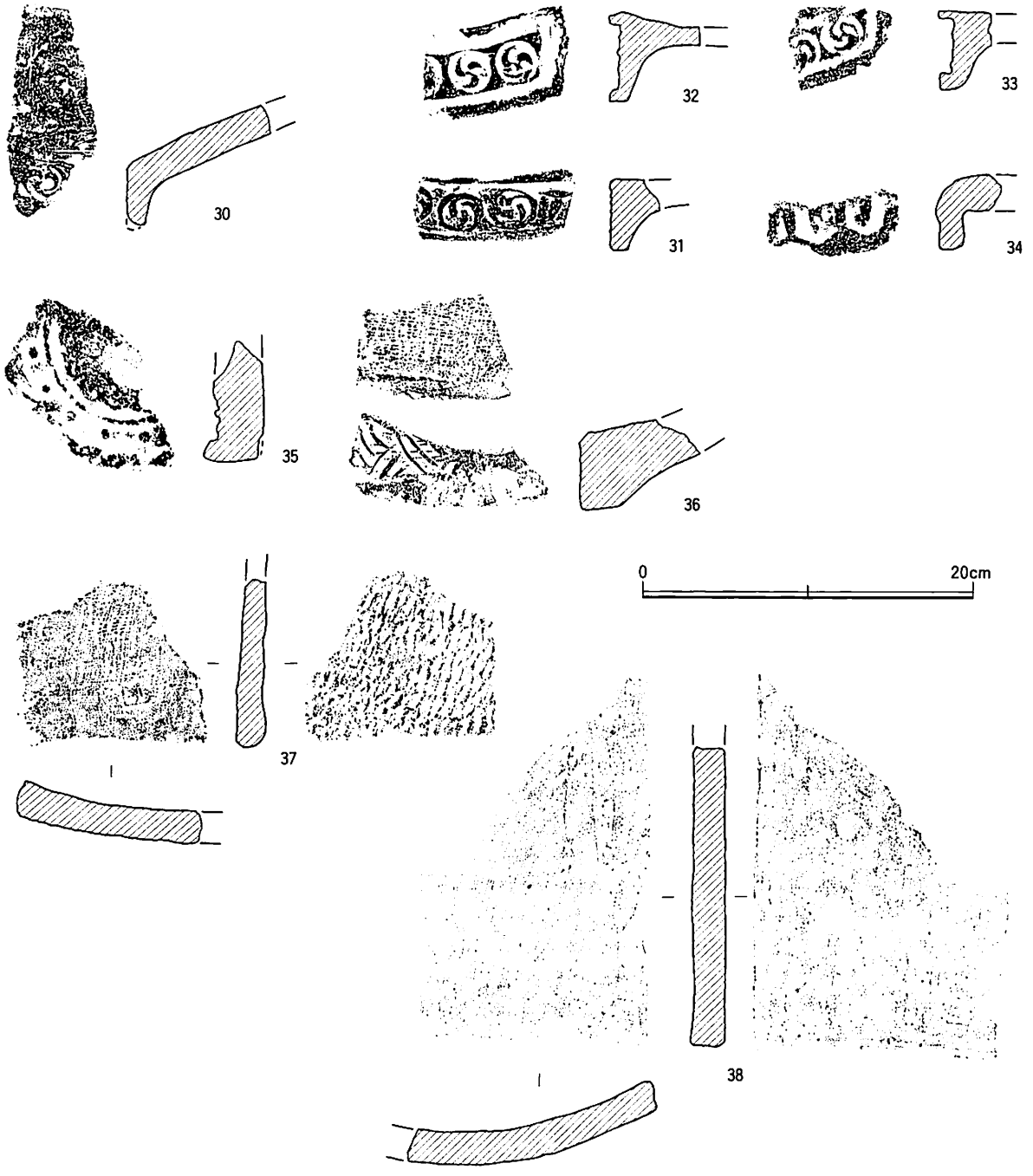
第３次調査土坑ＳＫ129出土瓦実測図３（1/4）



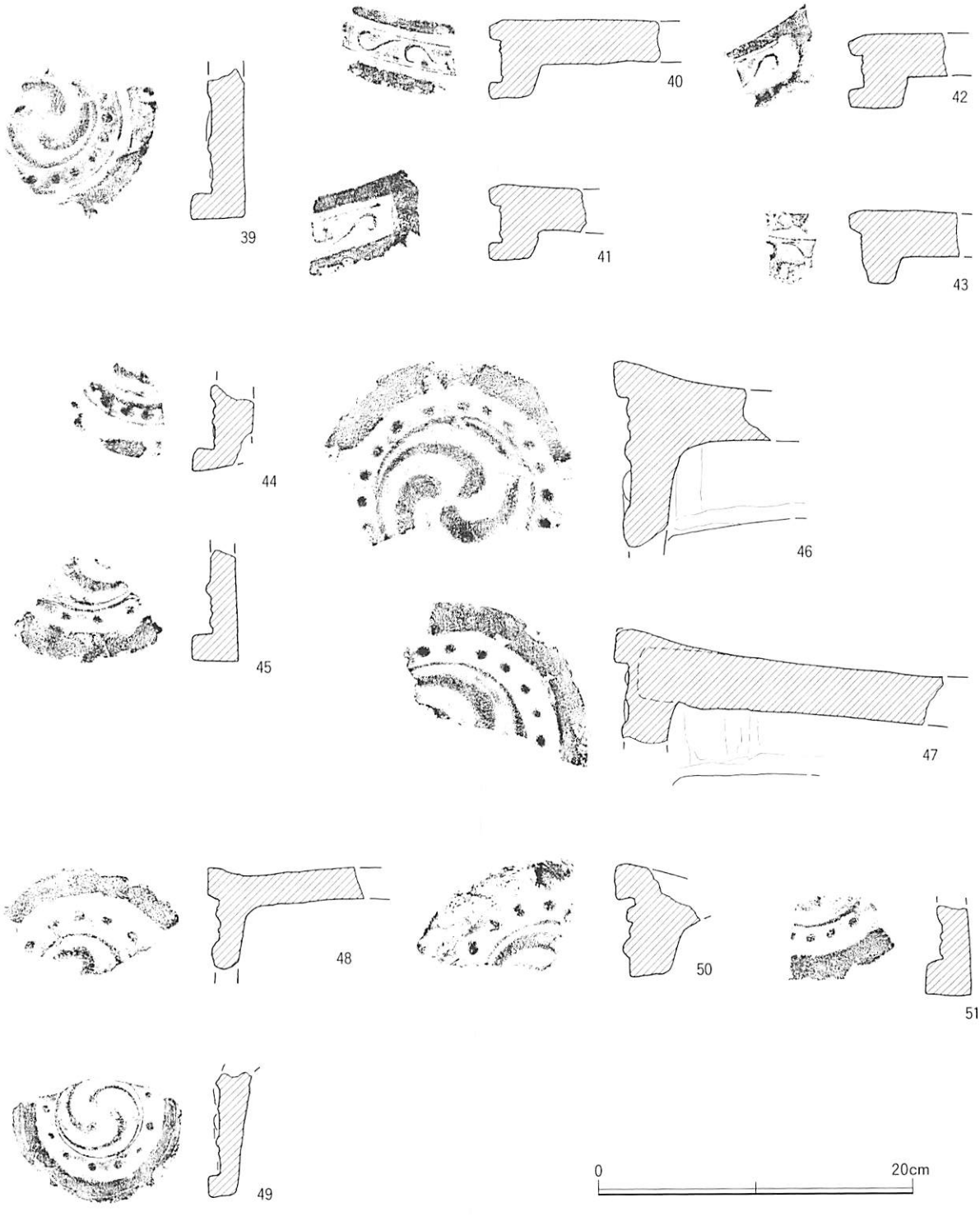
第３次調査土坑ＳＫ129出土瓦実測図４（1/4）



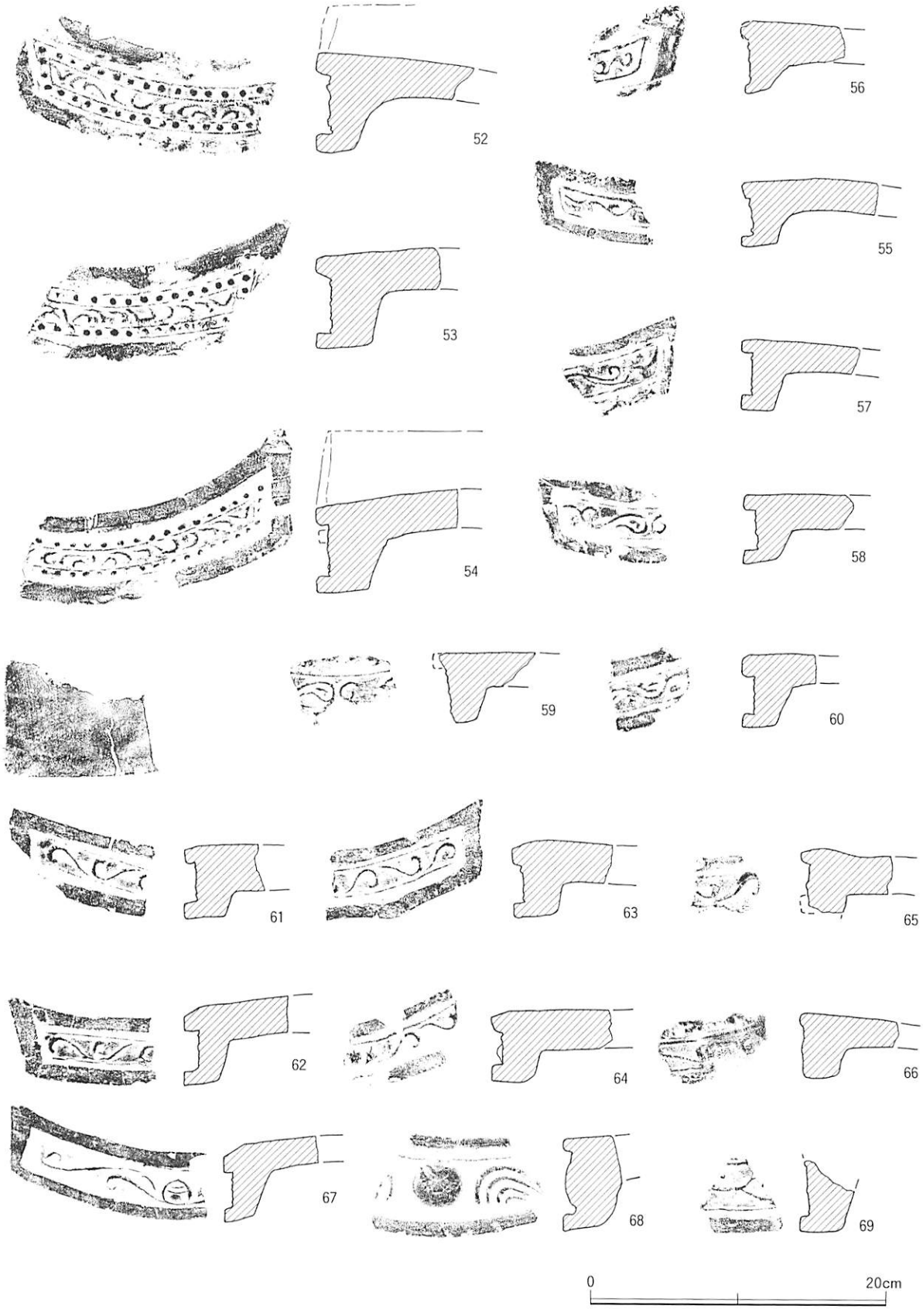
第３次調査出土平安時代前期～鎌倉時代初頭瓦実測図１（1/4）



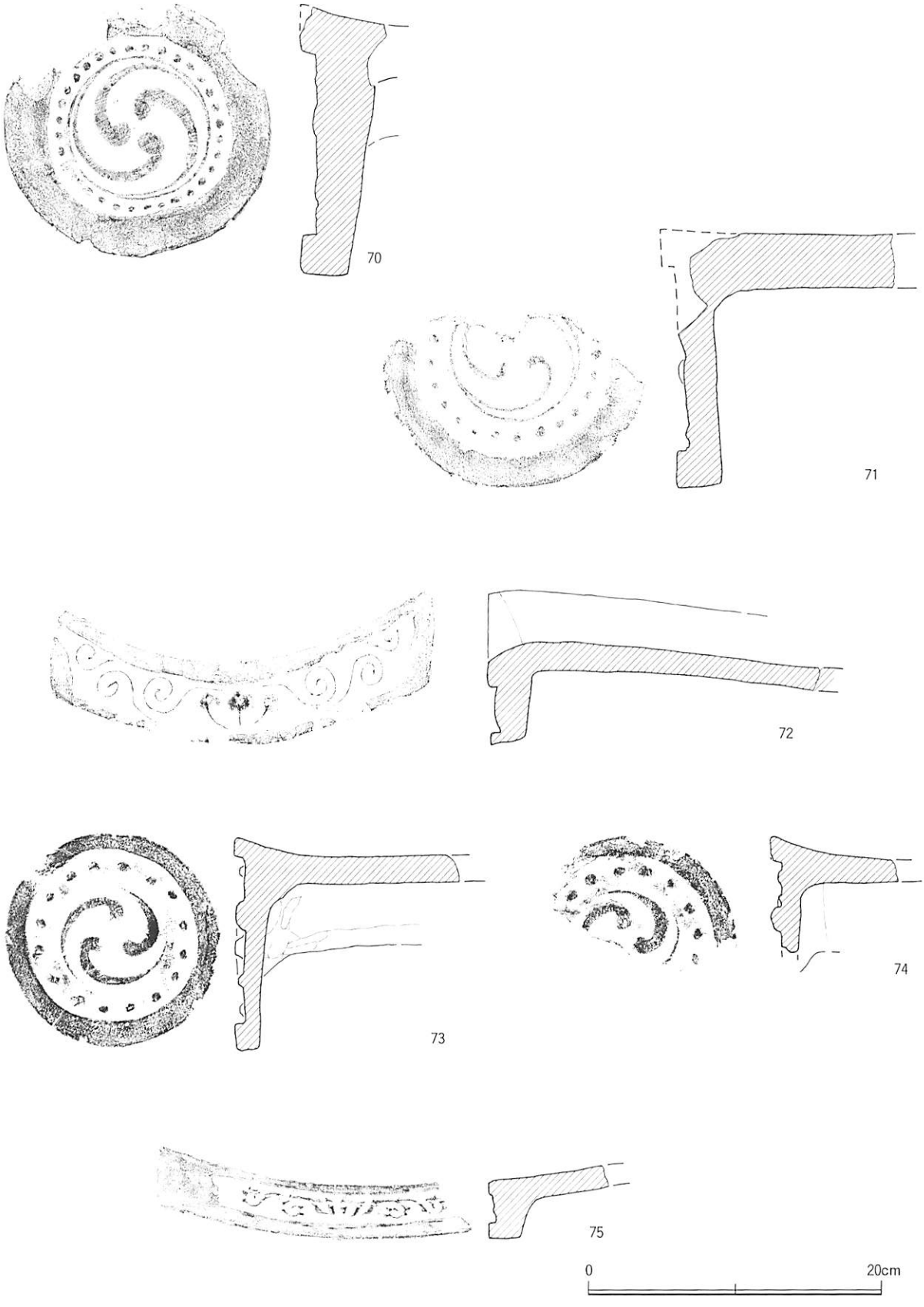
第３次調査出土平安時代前期～鎌倉時代初頭瓦実測図２（1/4）



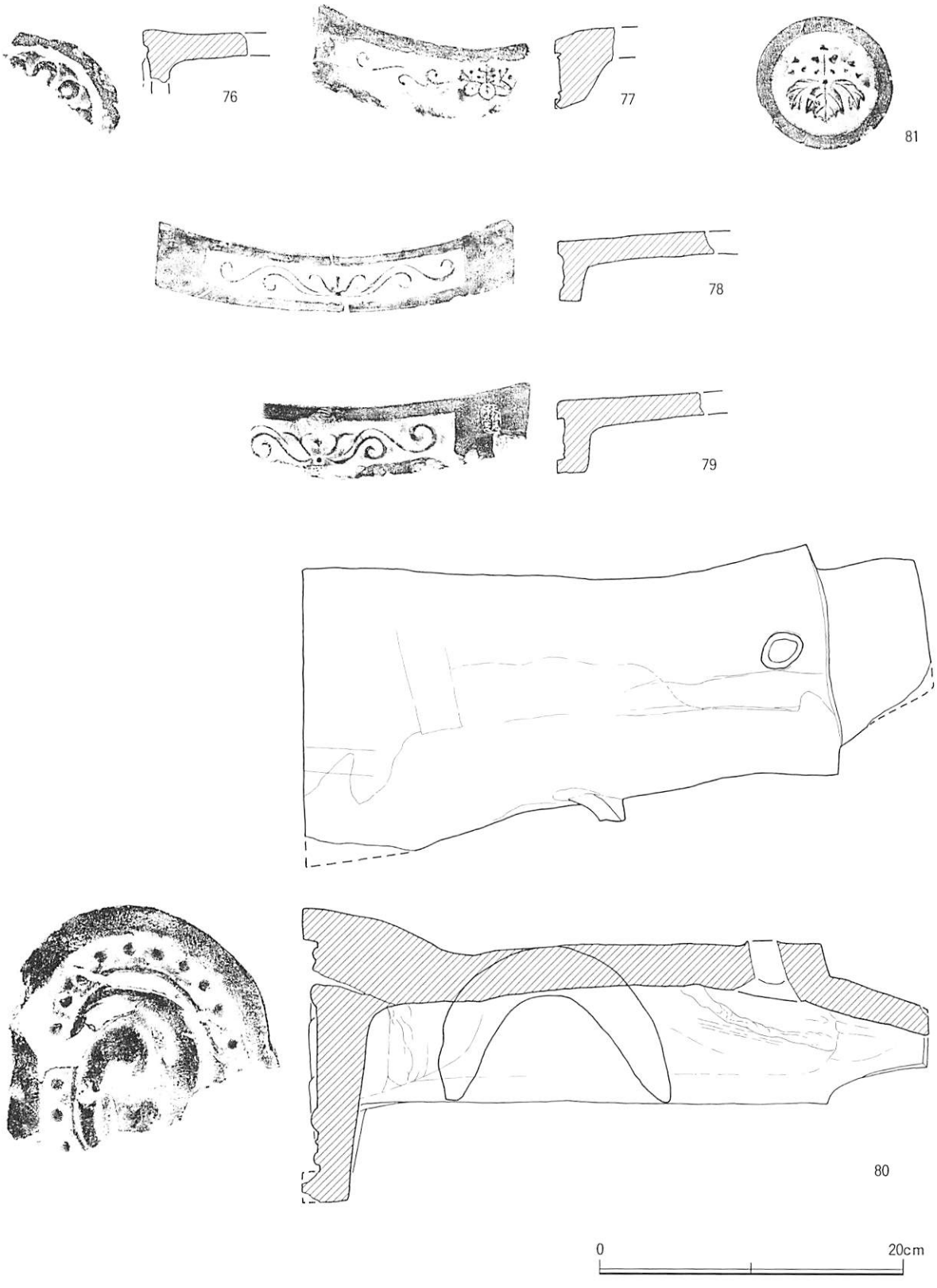
第３次調査出土鎌倉時代後期～室町時代後期瓦実測図１（1/4）



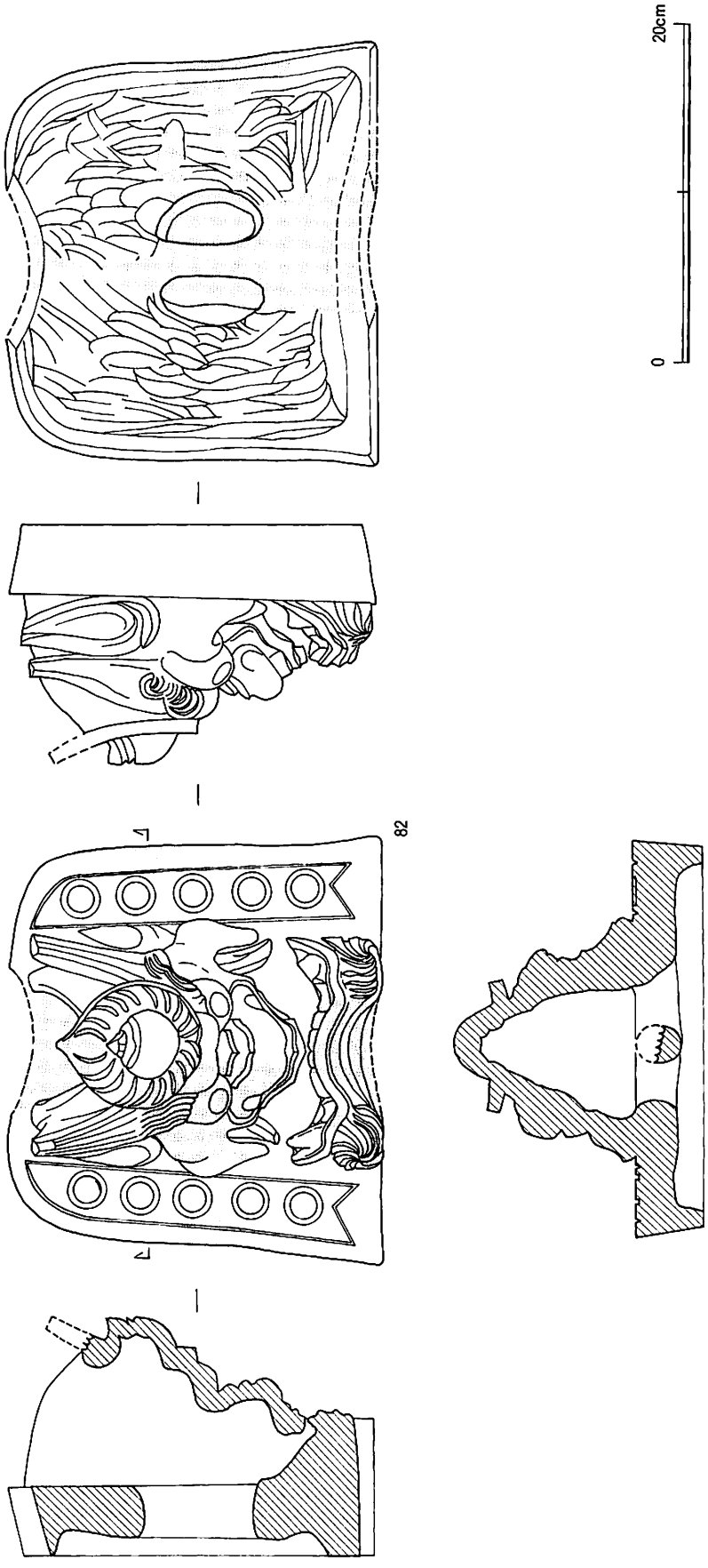
第３次調査出土鎌倉時代後期～室町時代後期瓦実測図２（1/4）



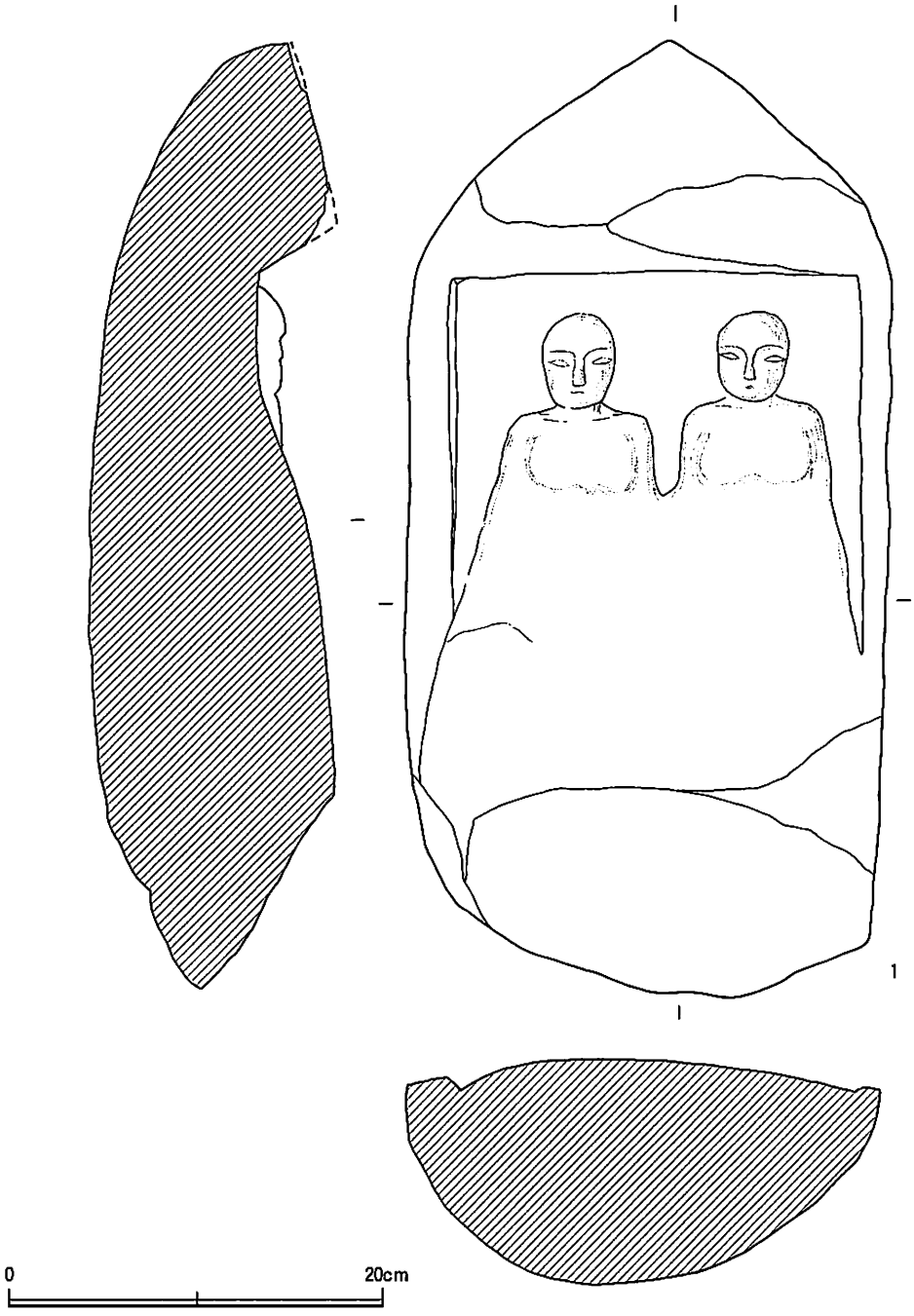
第３次調査土坑ＳＫ７・太子堂池跡出土瓦実測図（1/4）



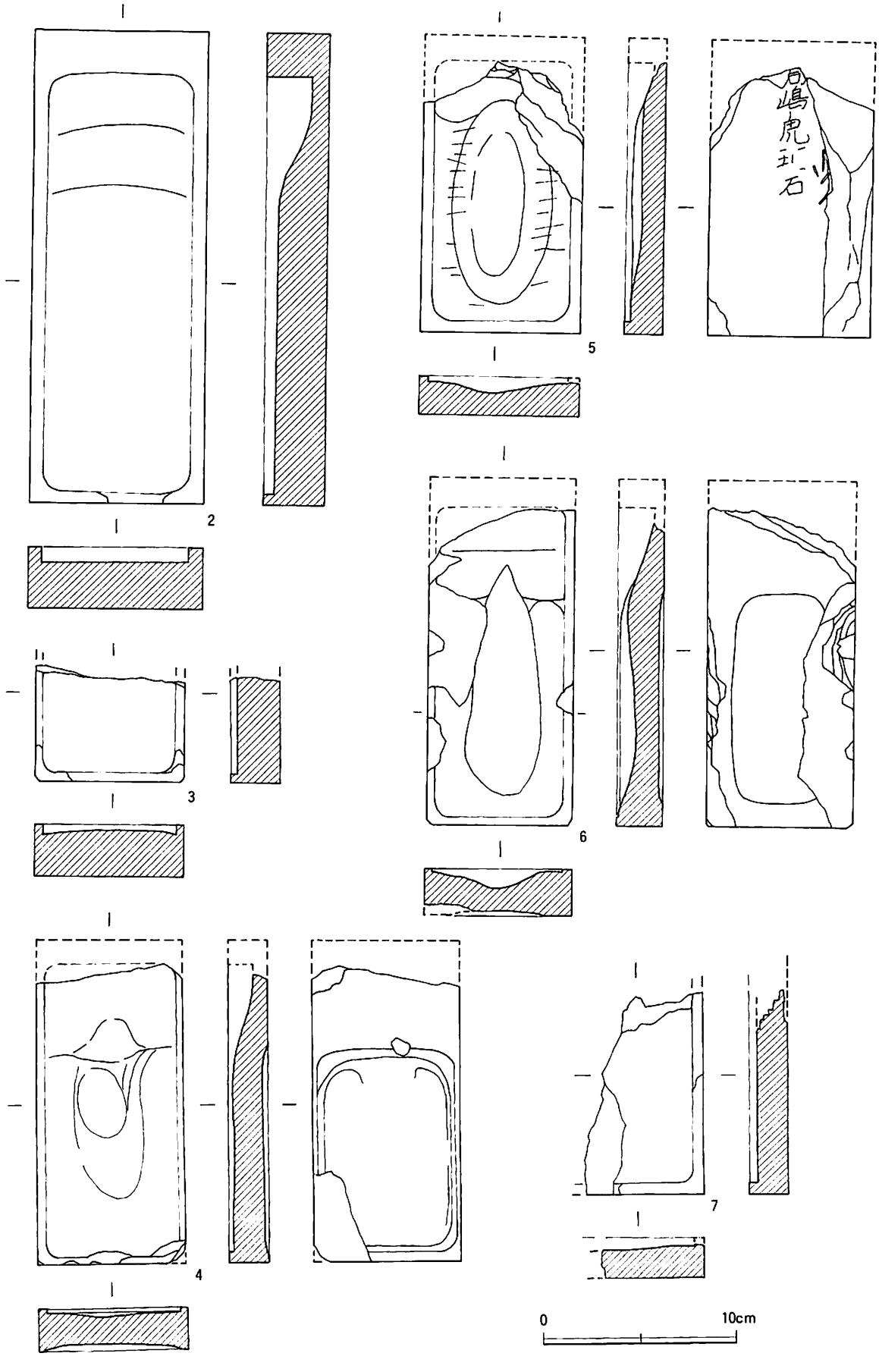
第３次調査出土桃山時代～江戸時代瓦実測図（1/4）



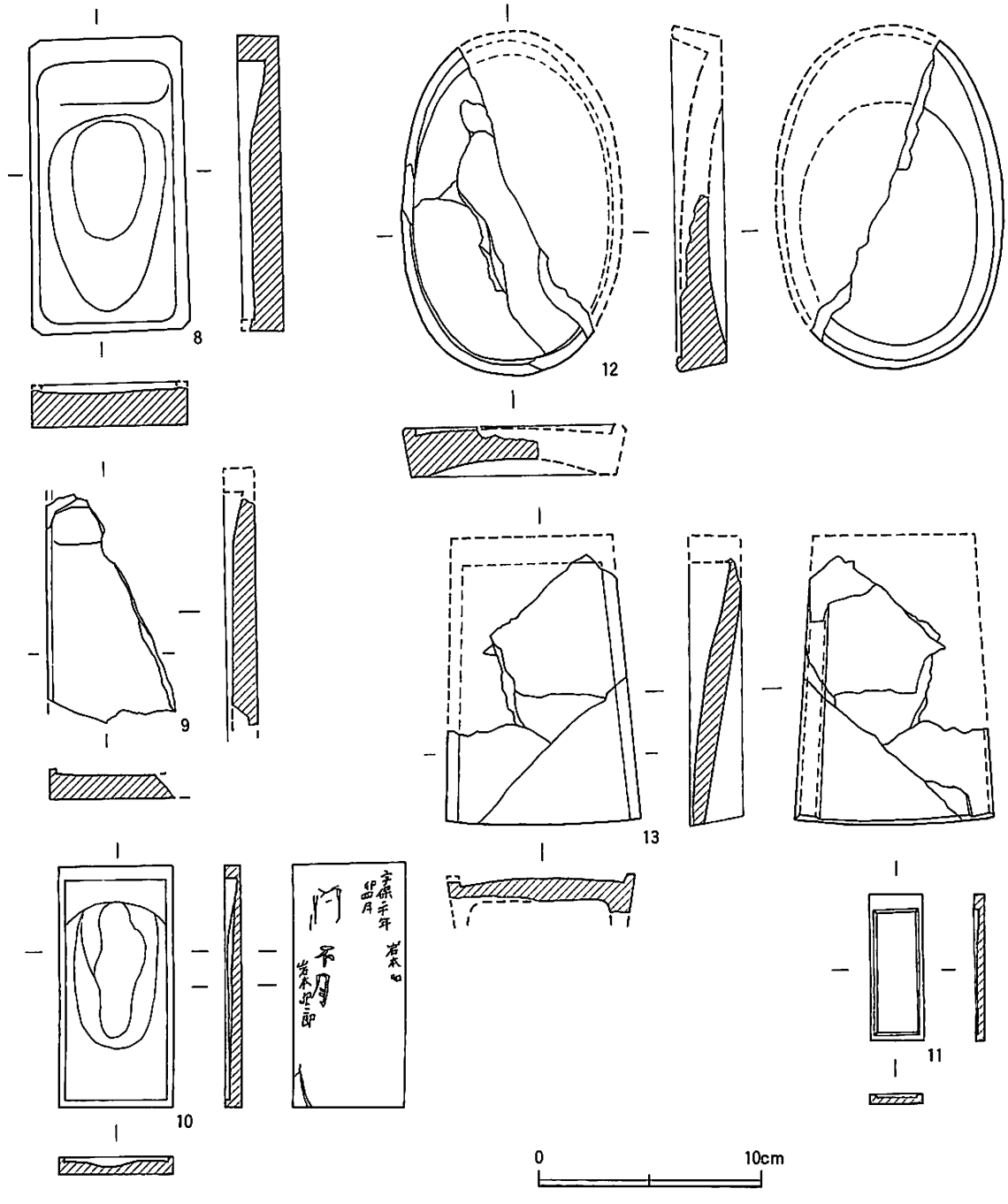
第３次調査出土鬼瓦実測図（1/4）
（トーンは復元部分を示す。）



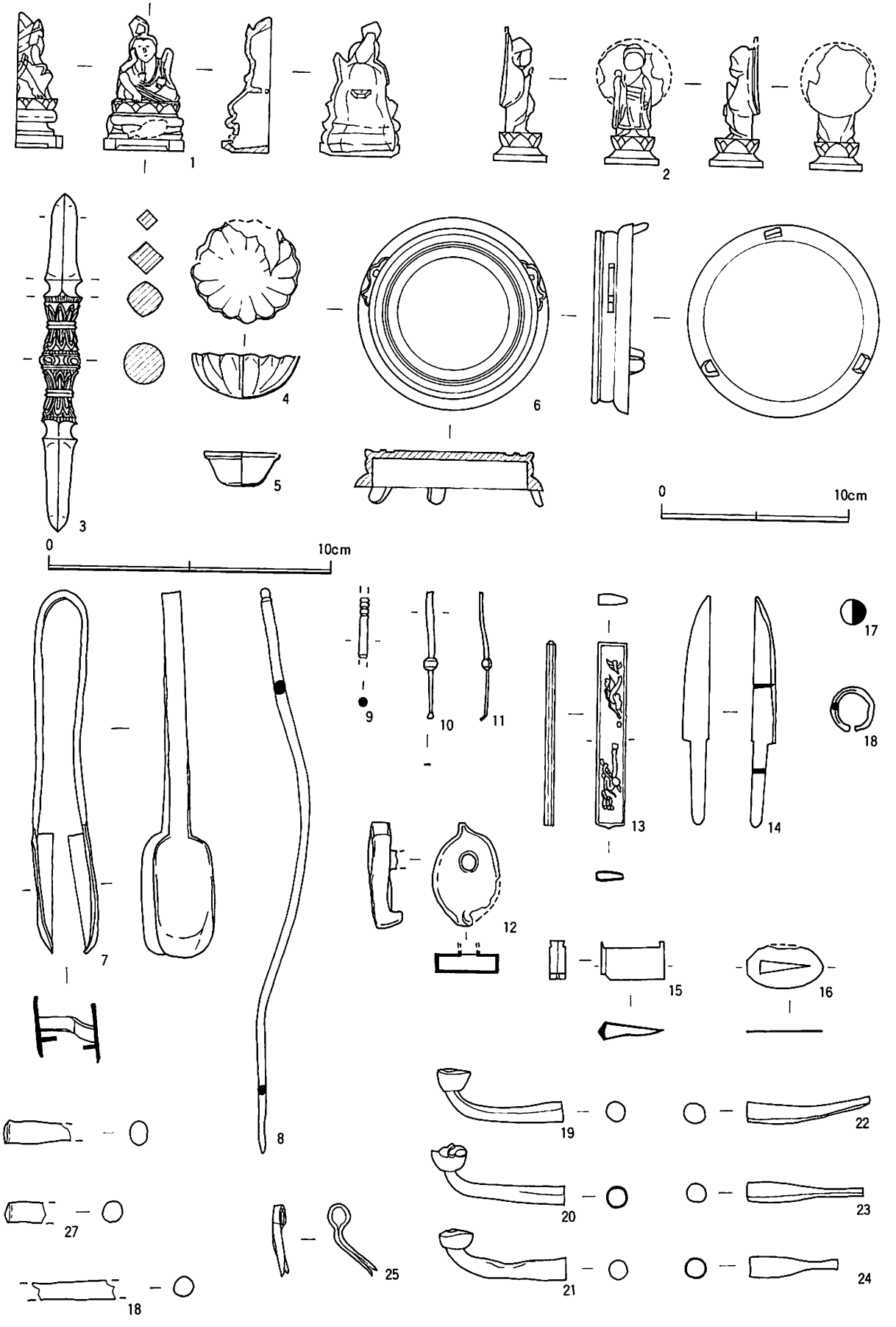
第３次調査出土石仏実測図（1/4）



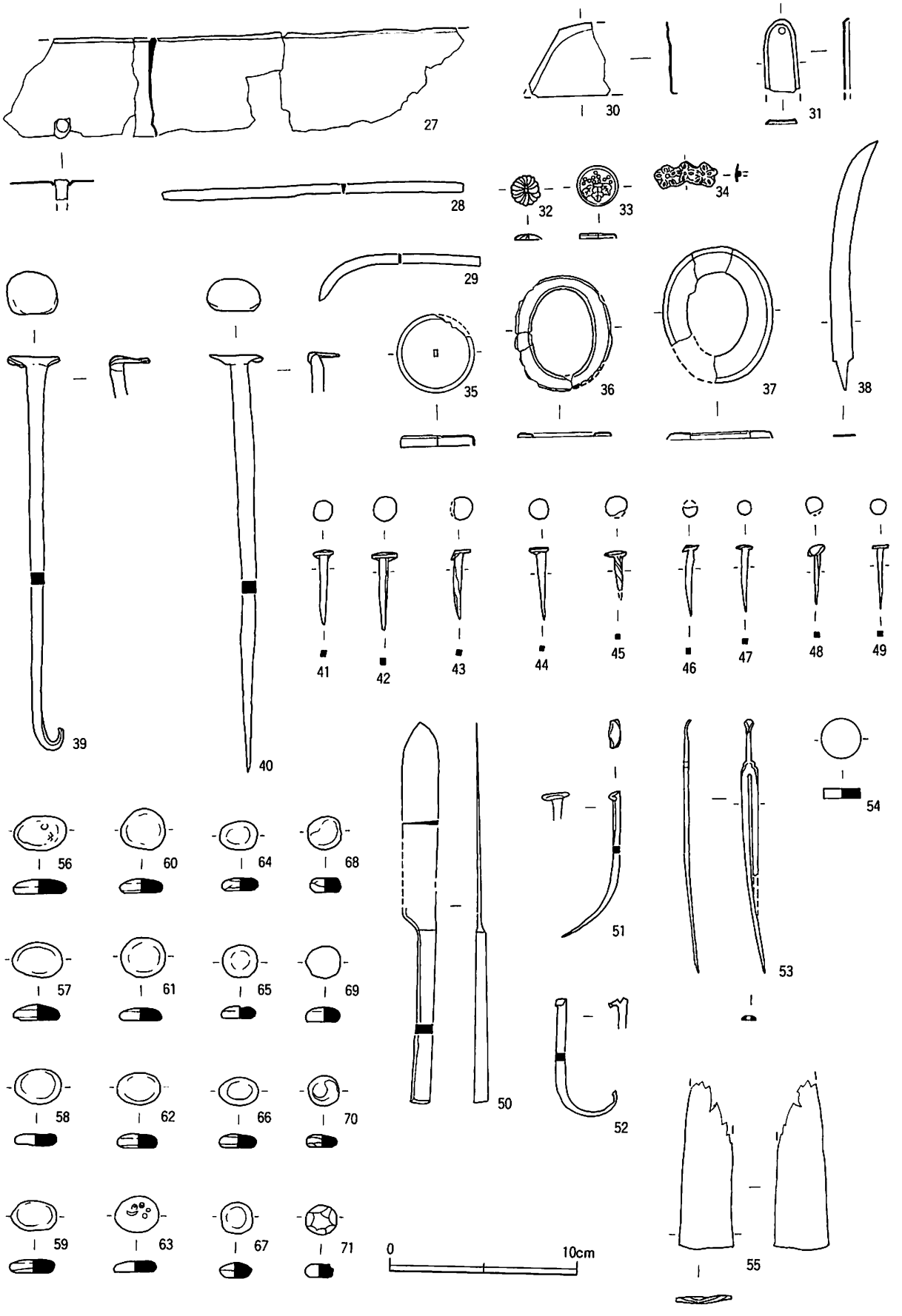
第３次調査出土石硯実測図１（１～５は1/2。その他は1/3。）



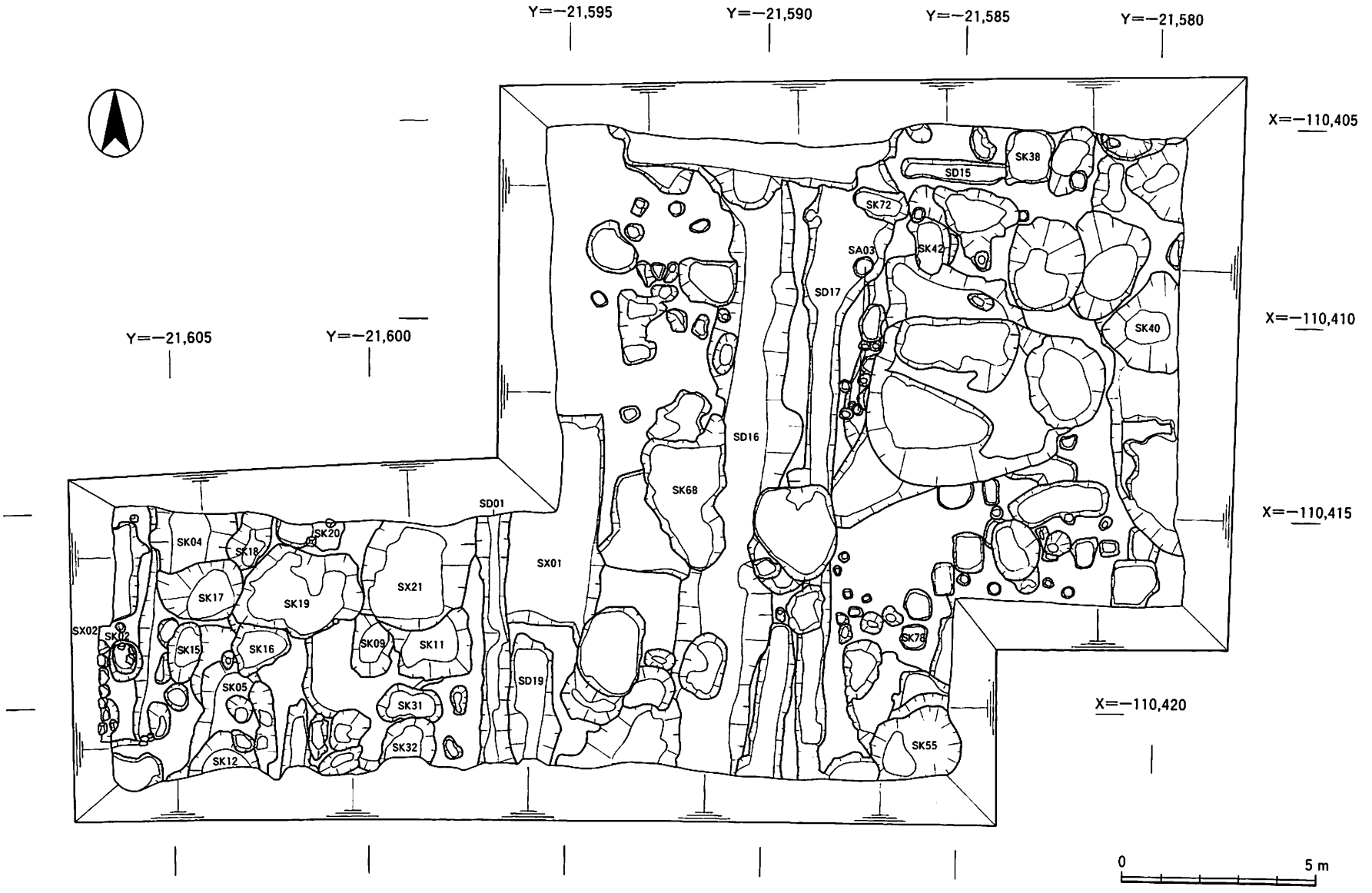
第３次調査出土石硯実測図２（1/3）



第３次調査出土銅製品実測図１（１～５は1/2。その他は1/3。）

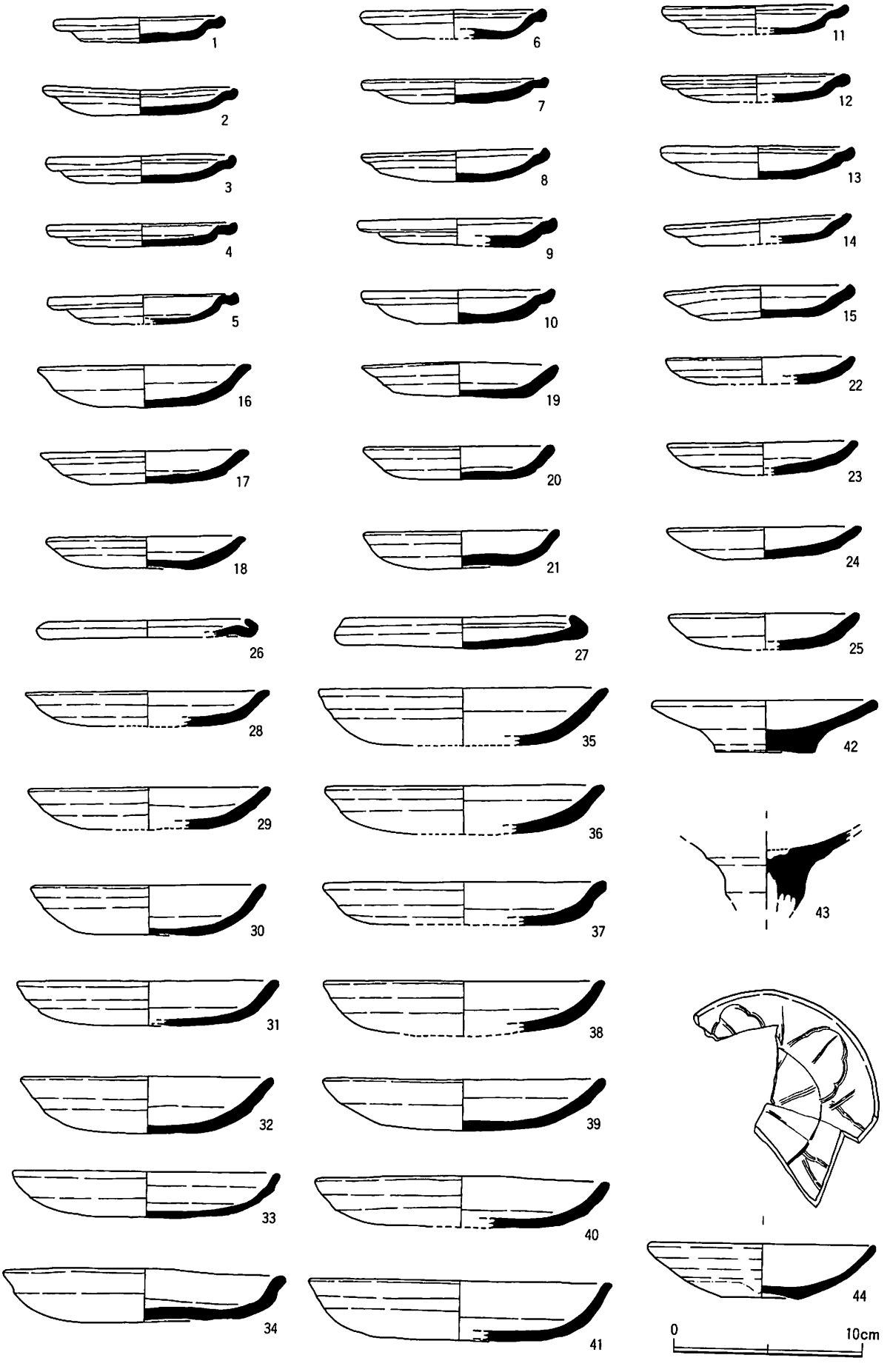


第３次調査出土銅製品実測図２・鉄製品実測図（1/3）

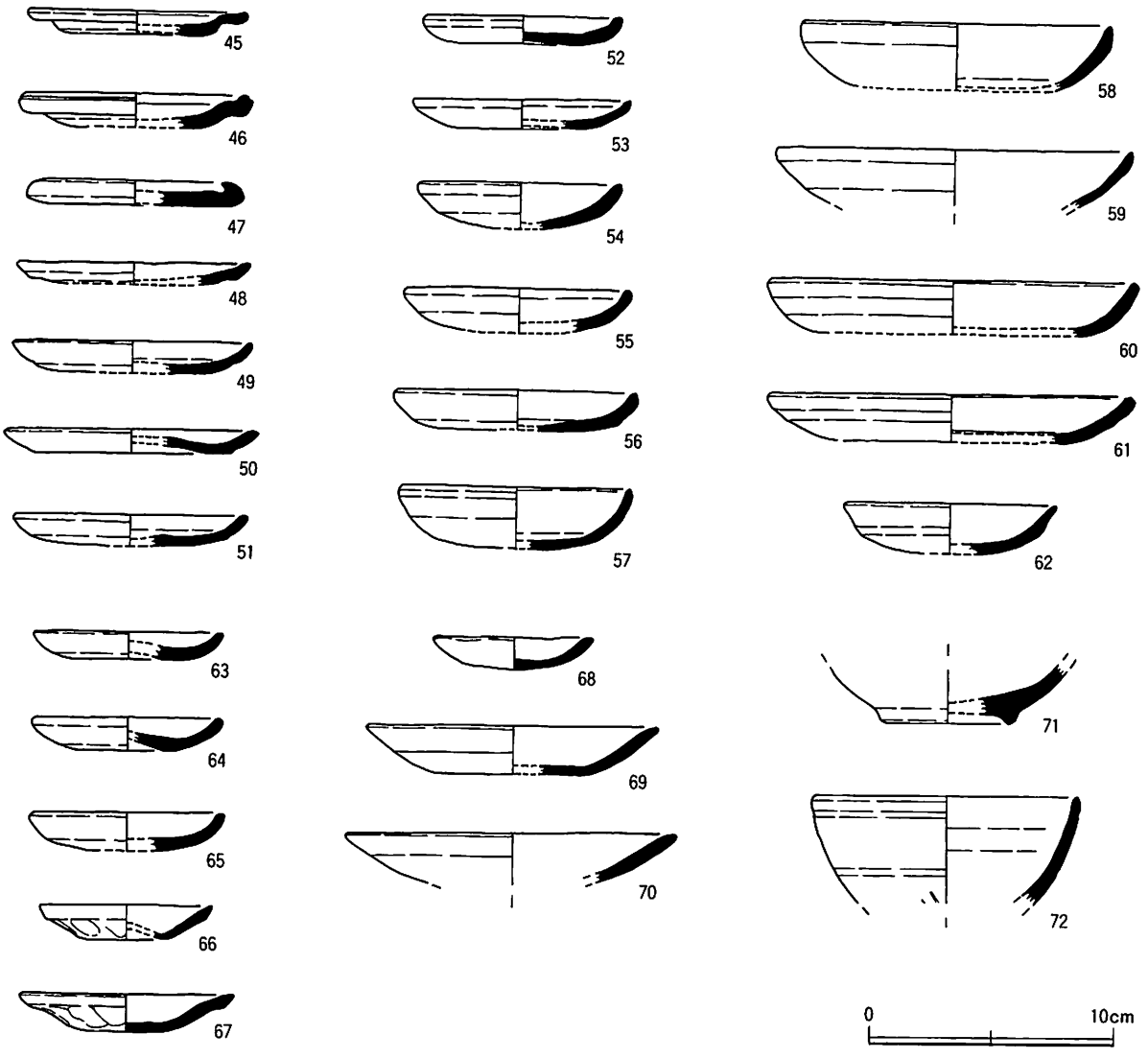


第4次調査区平面図

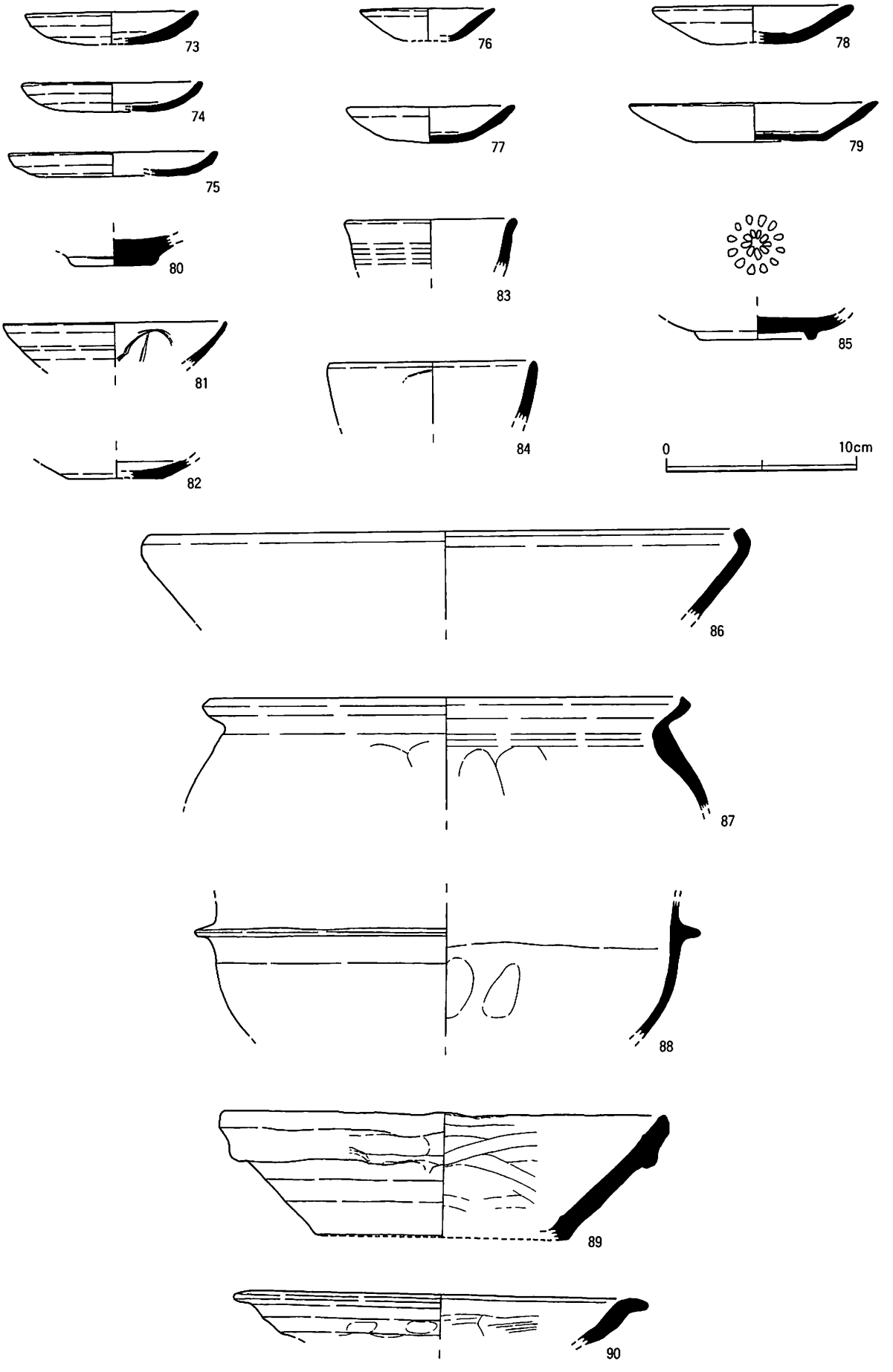
図版11



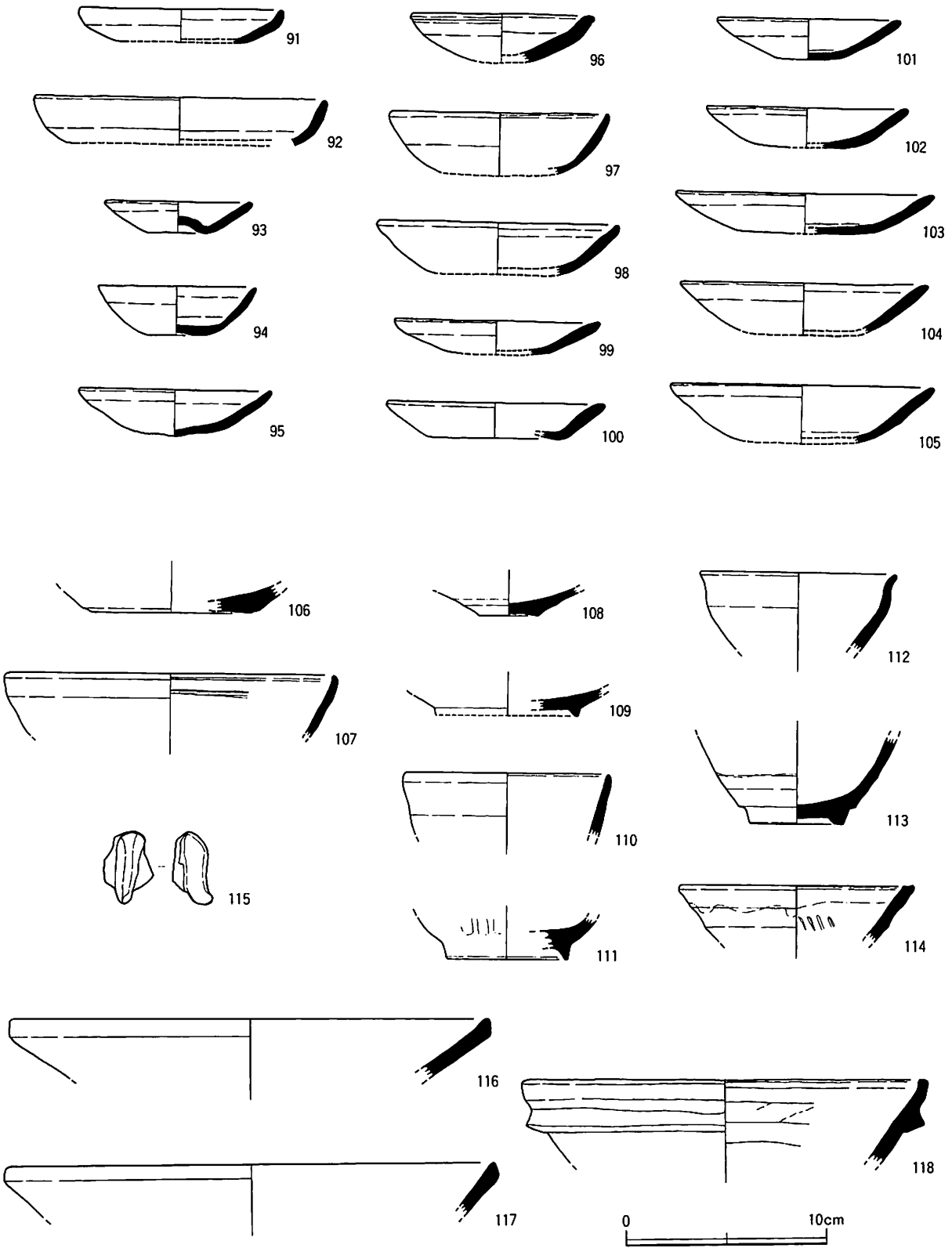
第４次調査溝ＳＤ19出土土器・陶磁器類実測図（1/3）



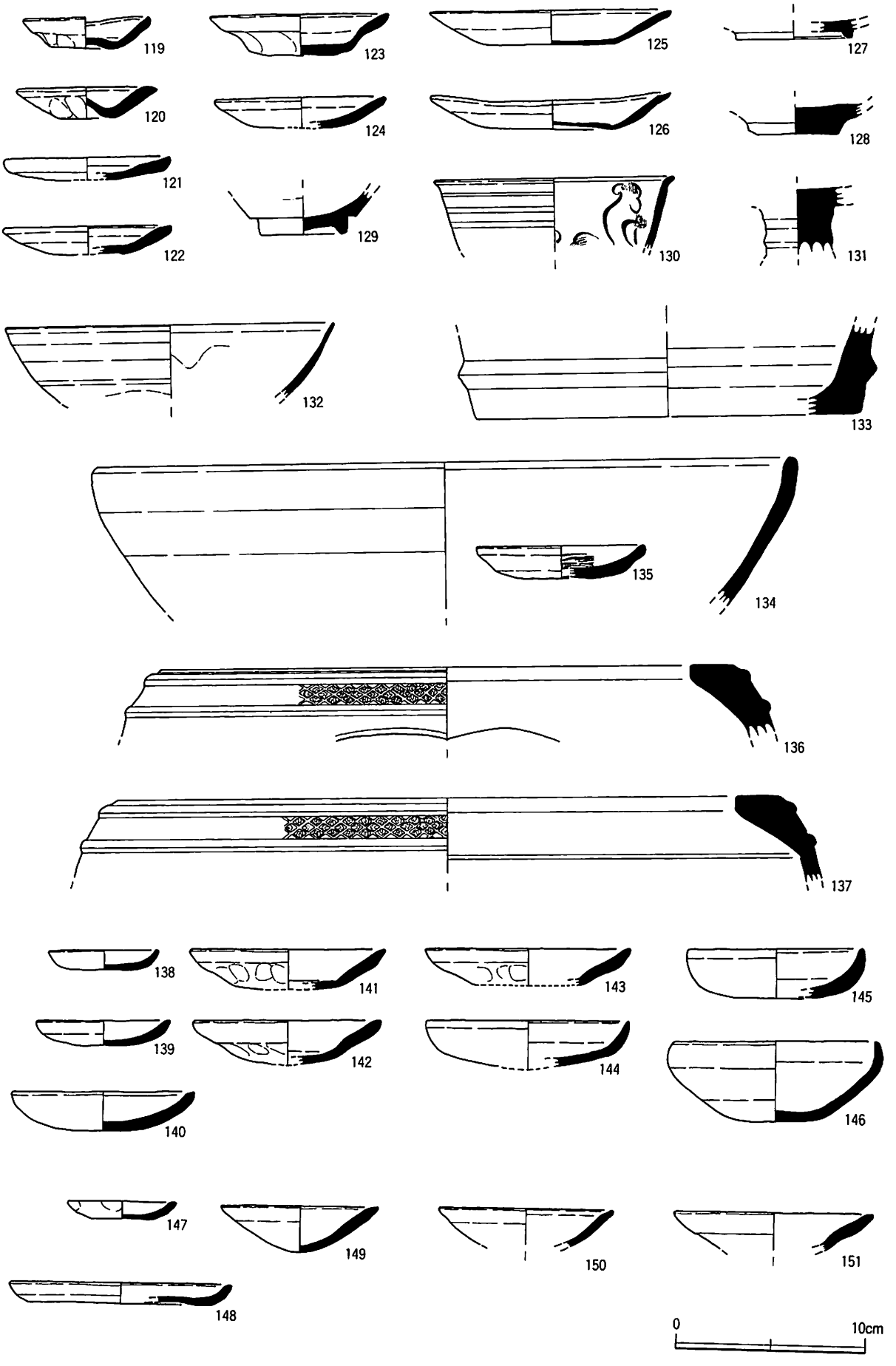
第４次調査土坑ＳＫ32出土土器・陶磁器類実測図（1/3）



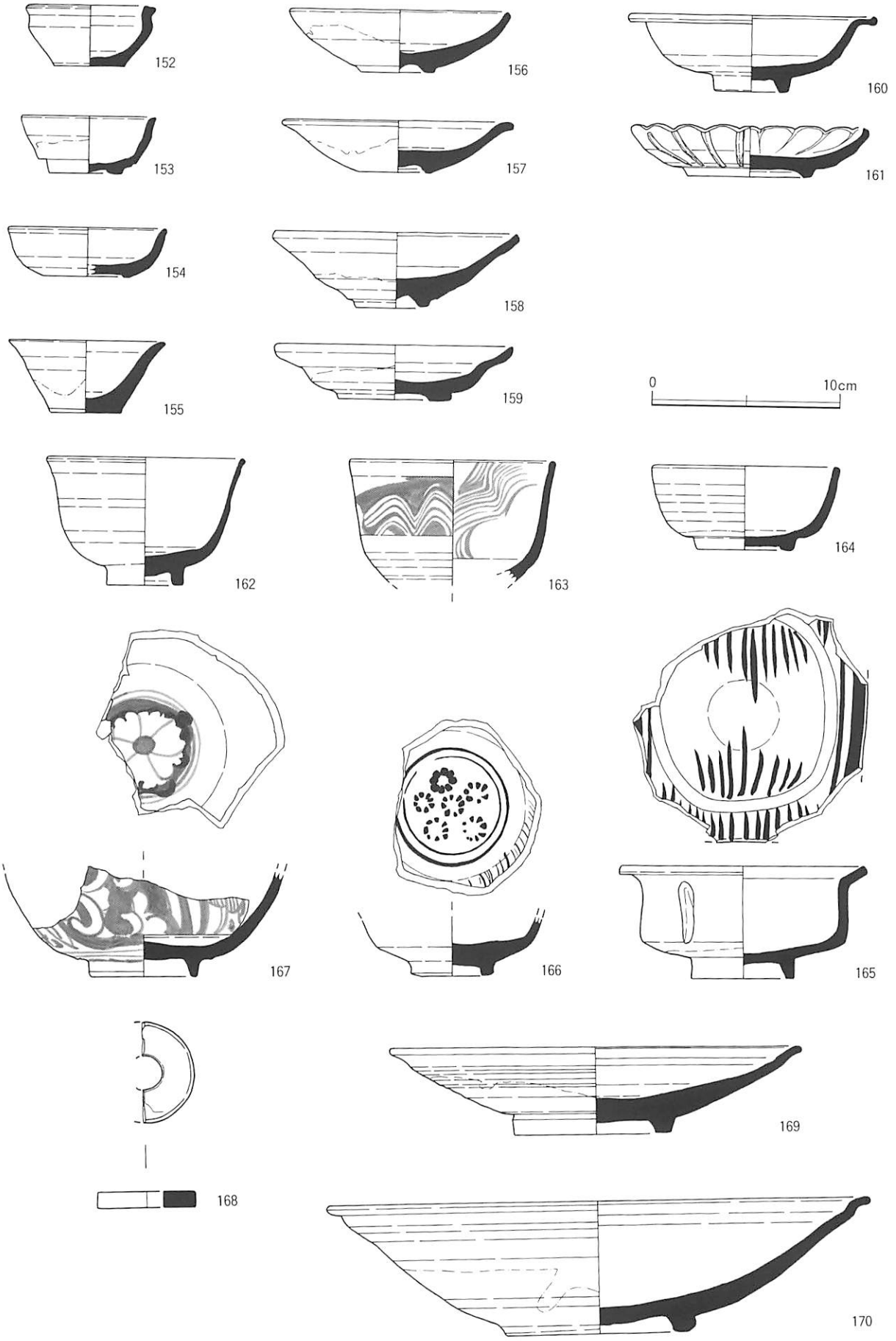
第４次調査土坑ＳＫ16出土土器・陶磁器類実測図（1/3）



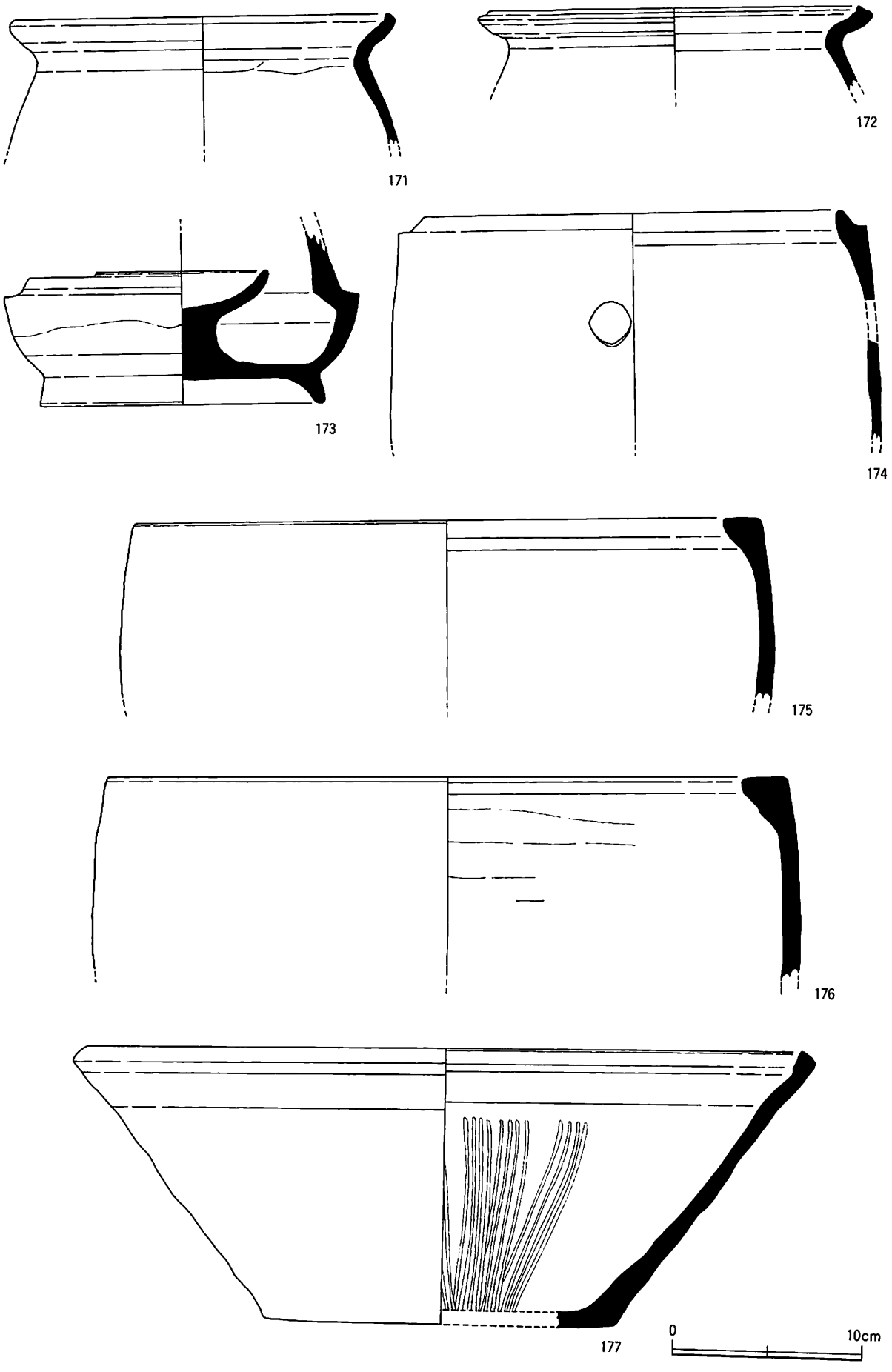
第４次調査土坑ＳＫ21出土土器・陶磁器類実測図（1/3）



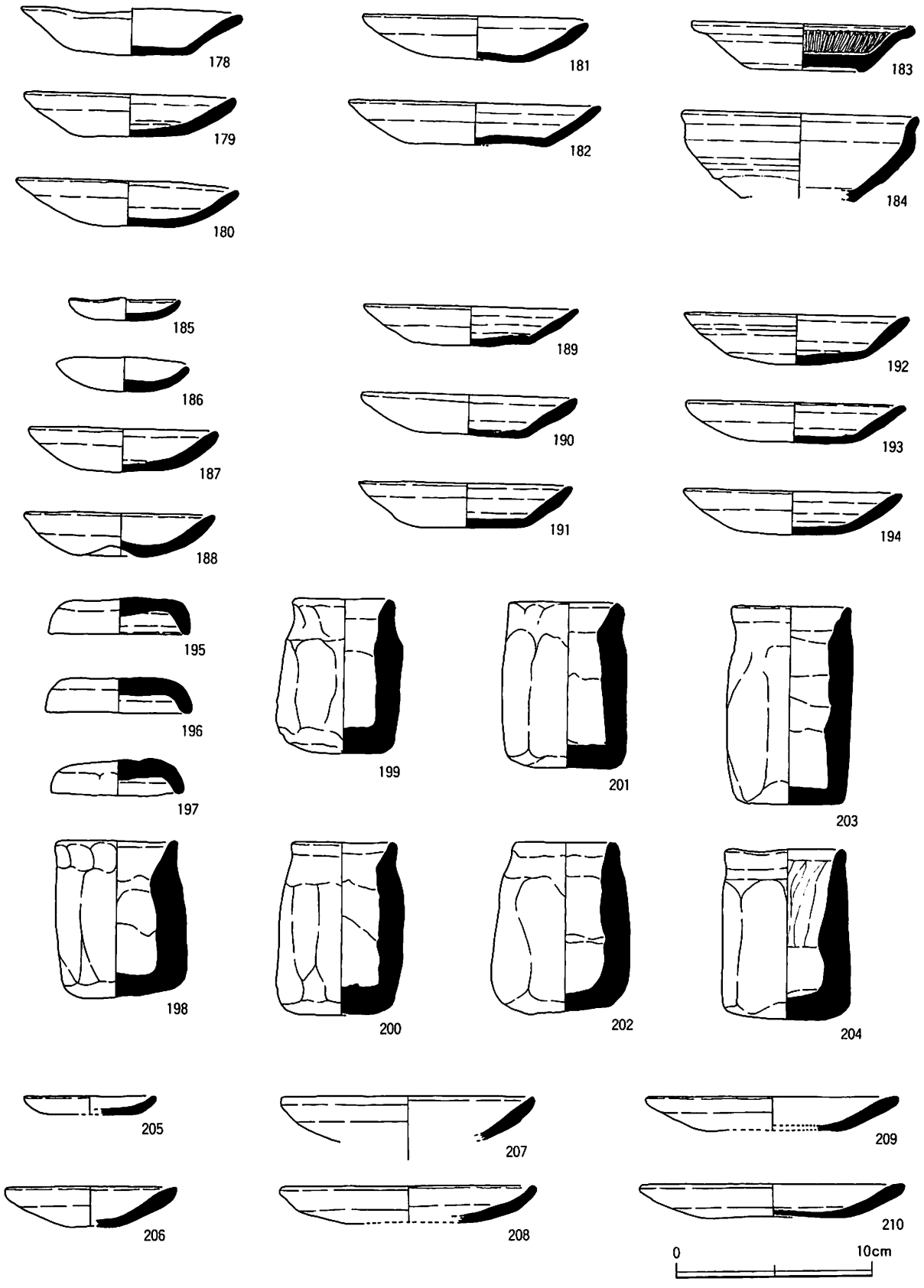
第４次調査土坑ＳＸ01・ＳＫ12・ＳＫ15出土土器・陶磁器類実測図（1/3）



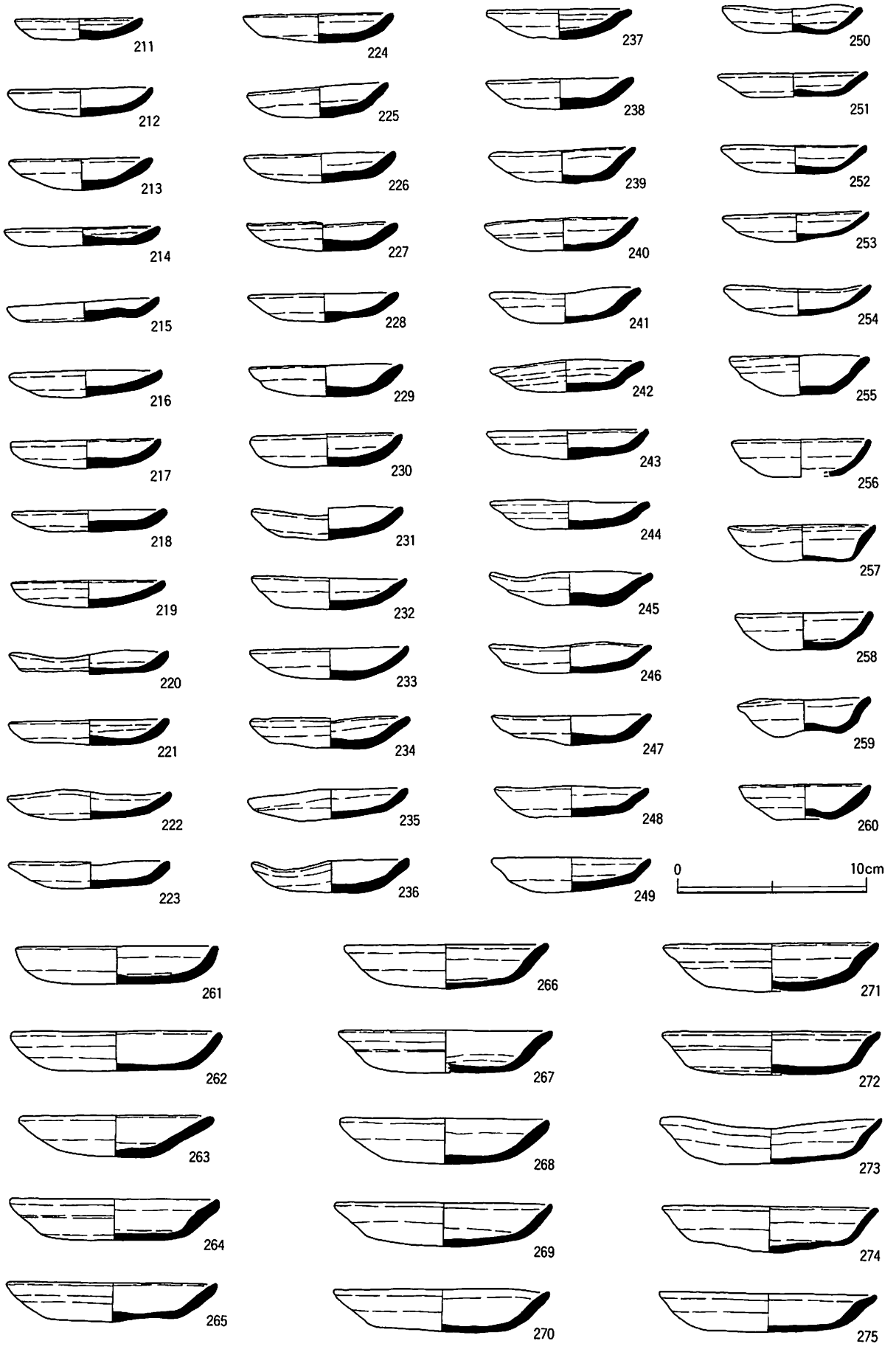
第４次調査溝ＳＤ01出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）



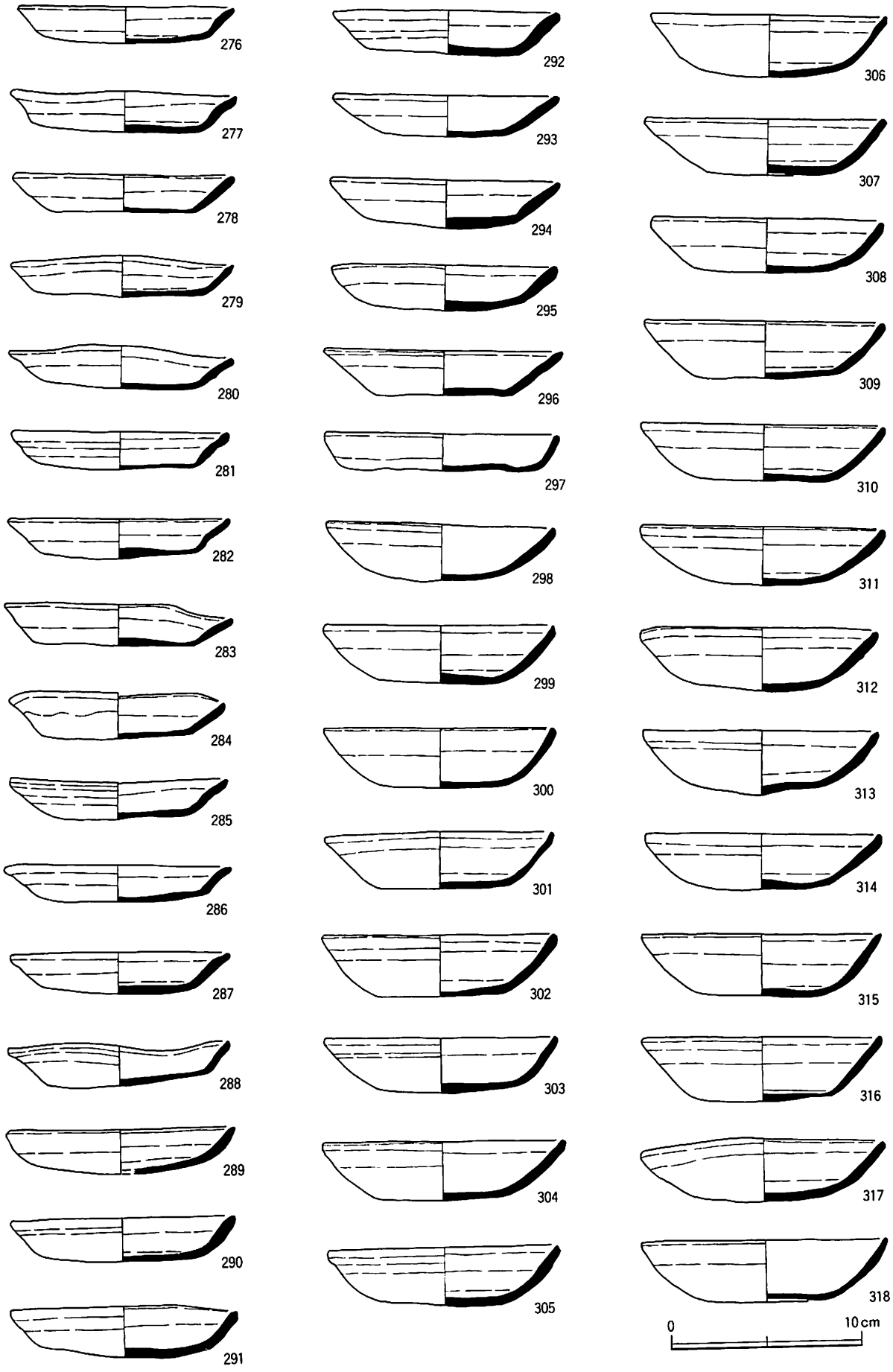
第４次調査溝ＳＤ01出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）



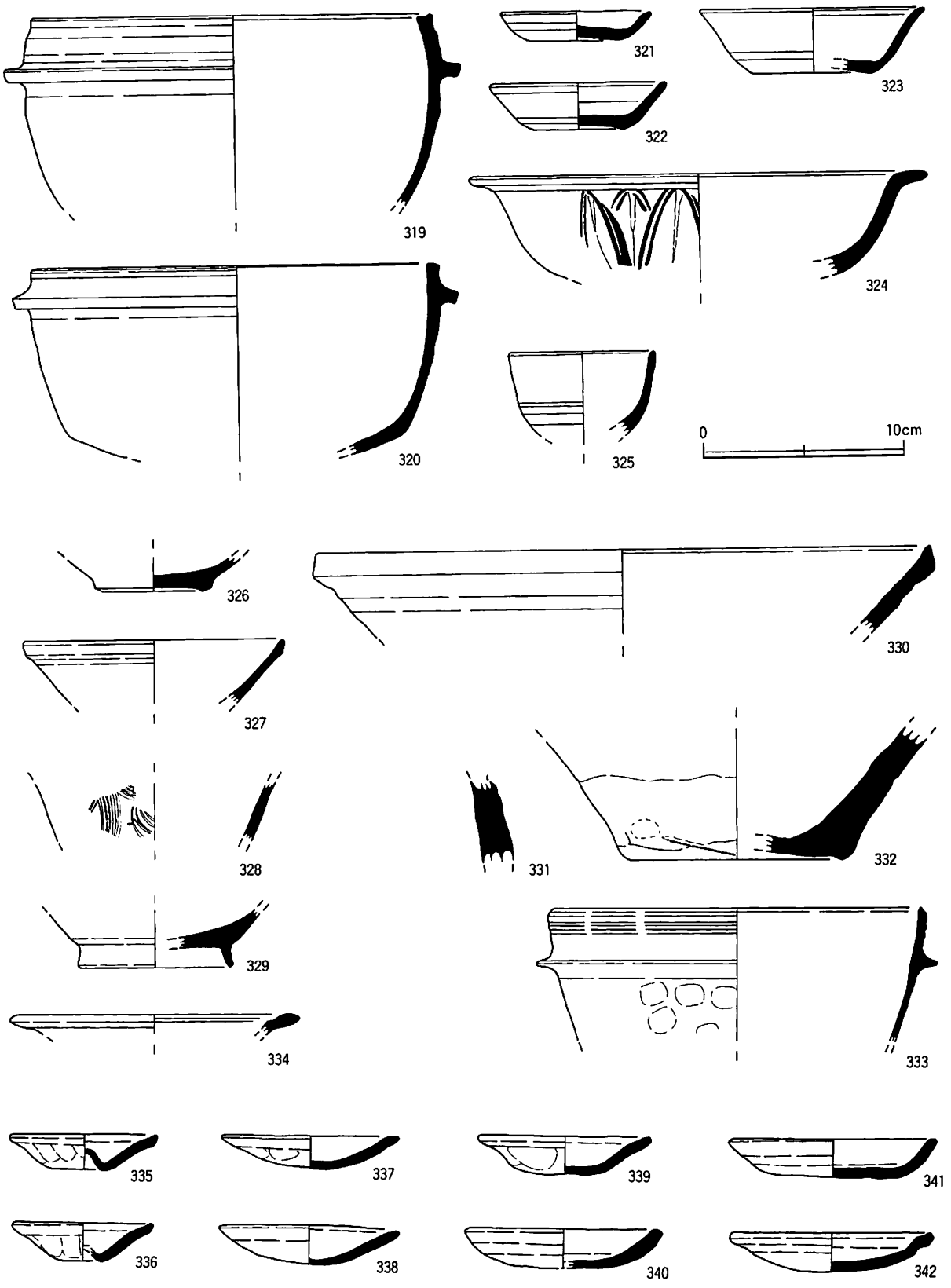
第４次調査溝ＳＤ01出土土器・陶磁器類実測図３・土坑ＳＫ31出土土器・陶磁器類実測図（1/3）



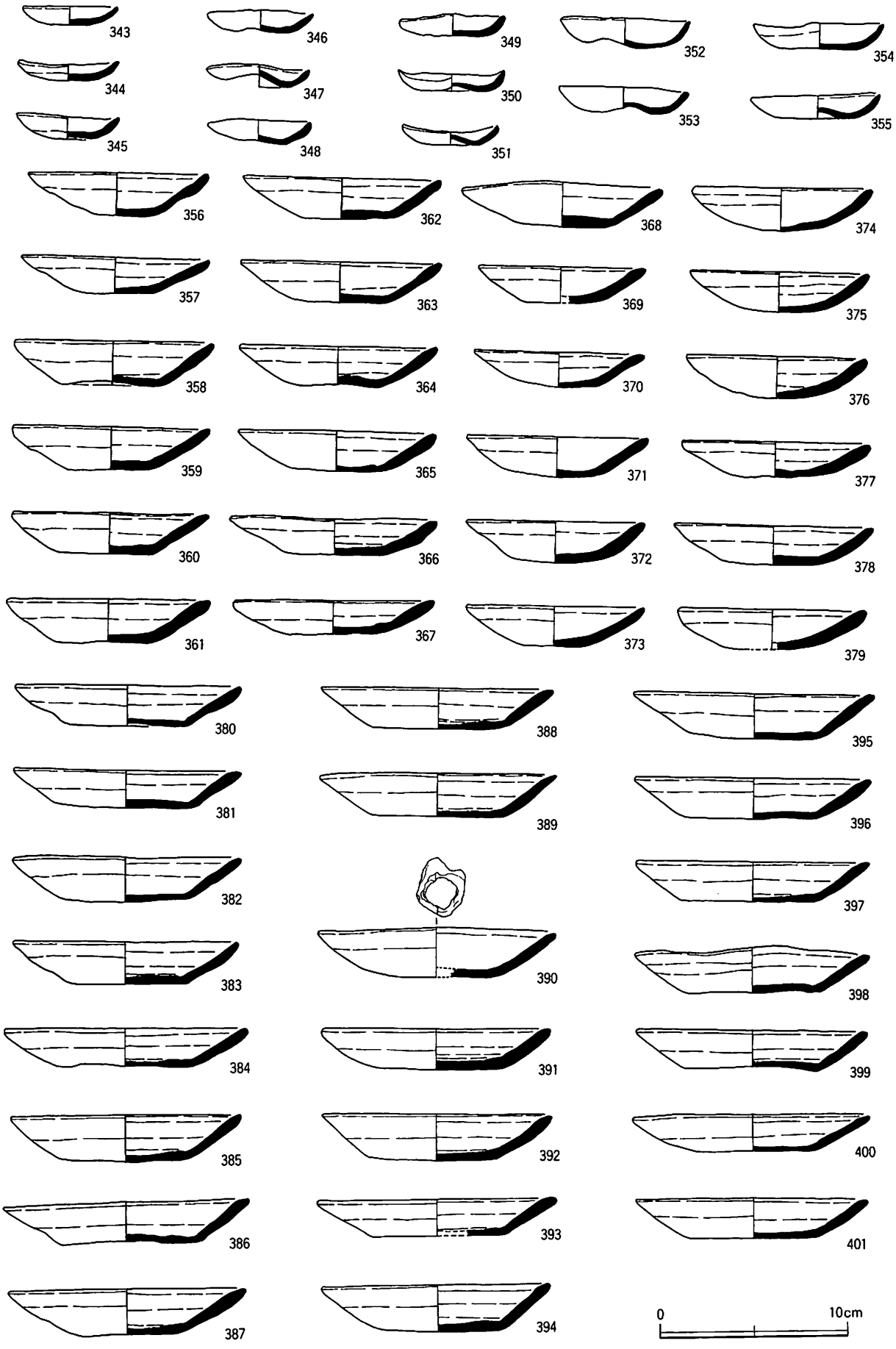
第４次調査土坑ＳＫ40出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）



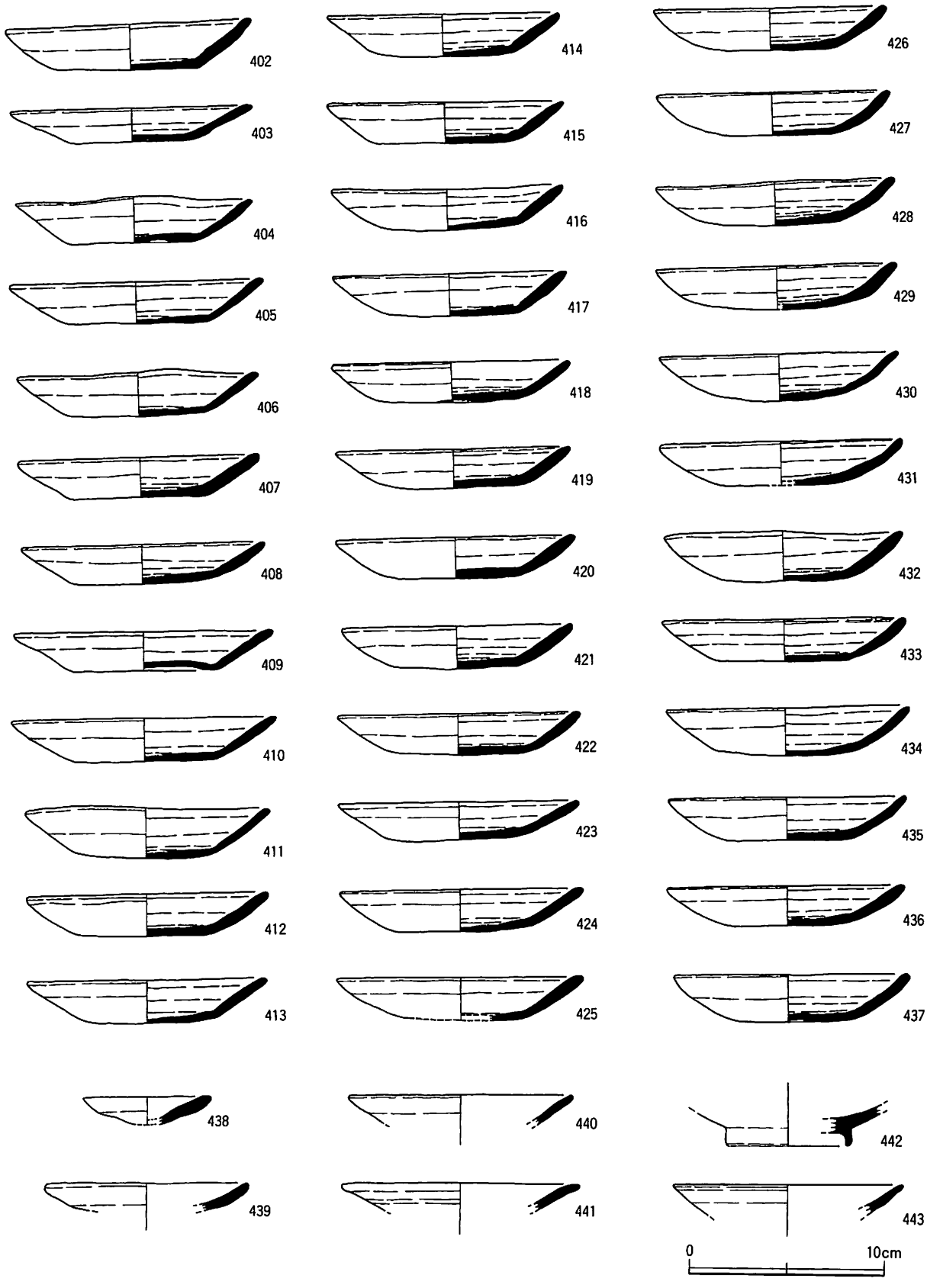
第４次調査土坑ＳＫ40出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）



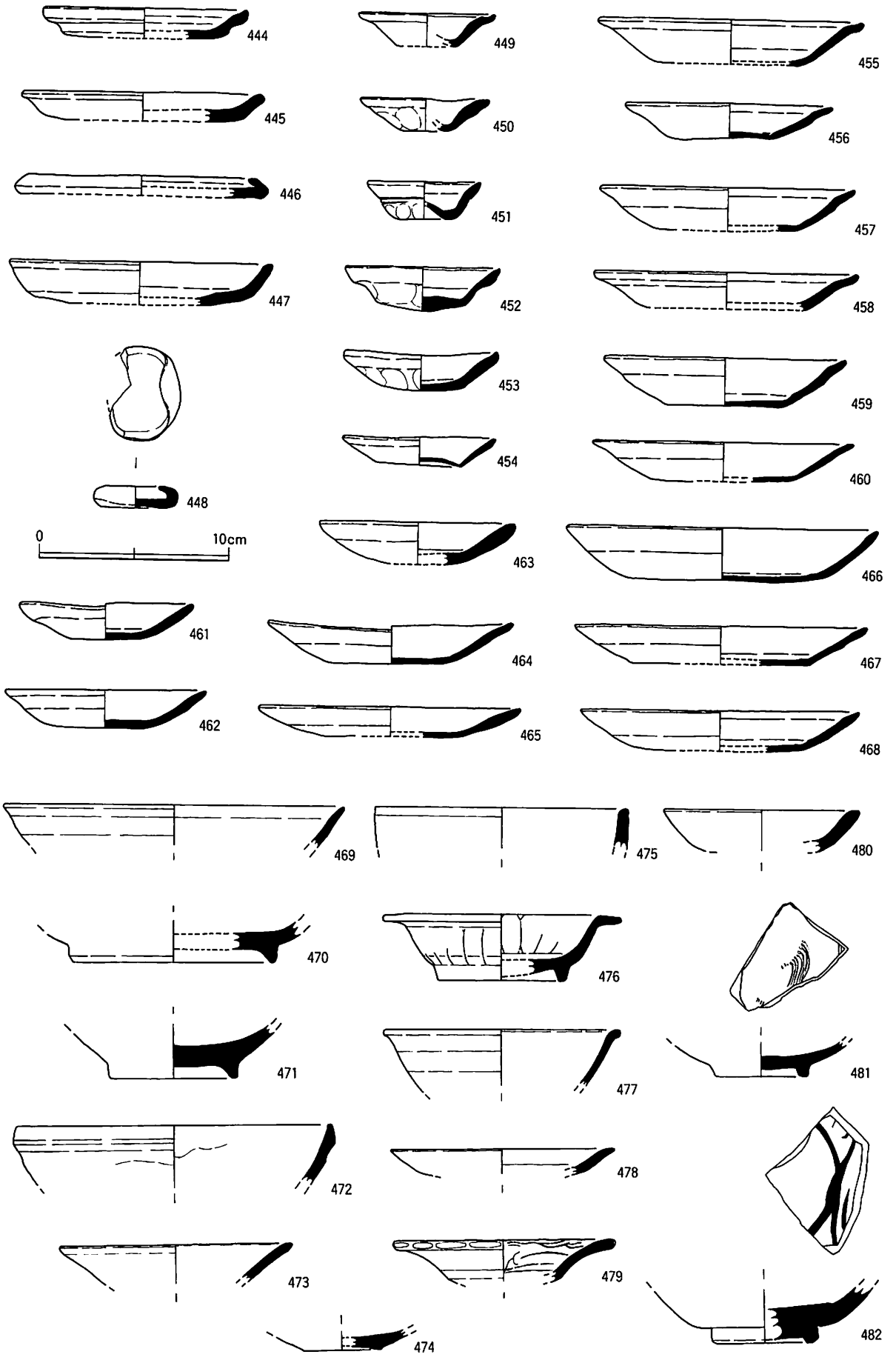
第４次調査土坑ＳＫ40出土土器・陶磁器類実測図３・土坑ＳＫ68・土坑ＳＫ72出土土器・陶磁器類実測図（1/3）



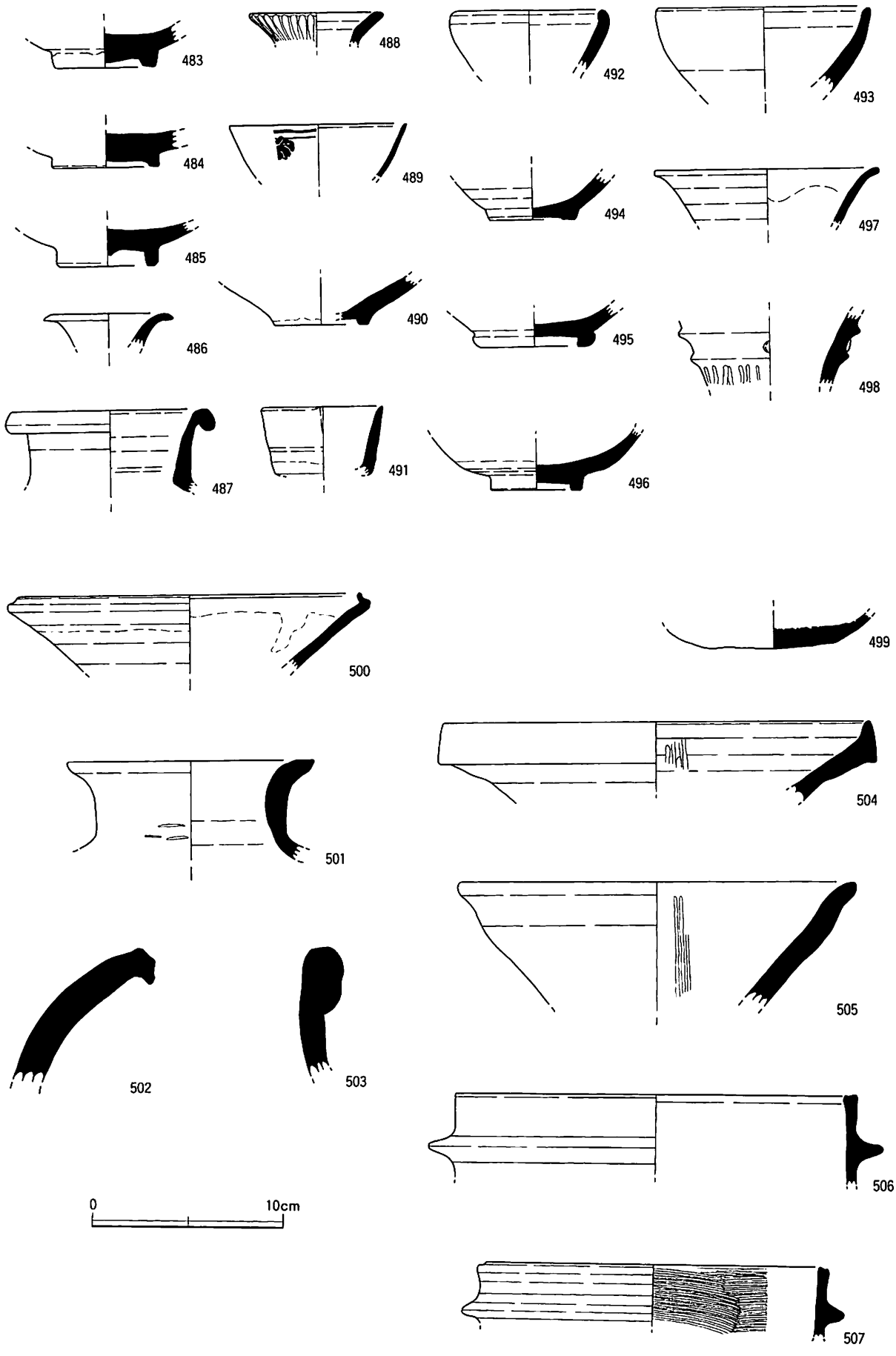
第４次調査土坑墓ＳＫ38出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）



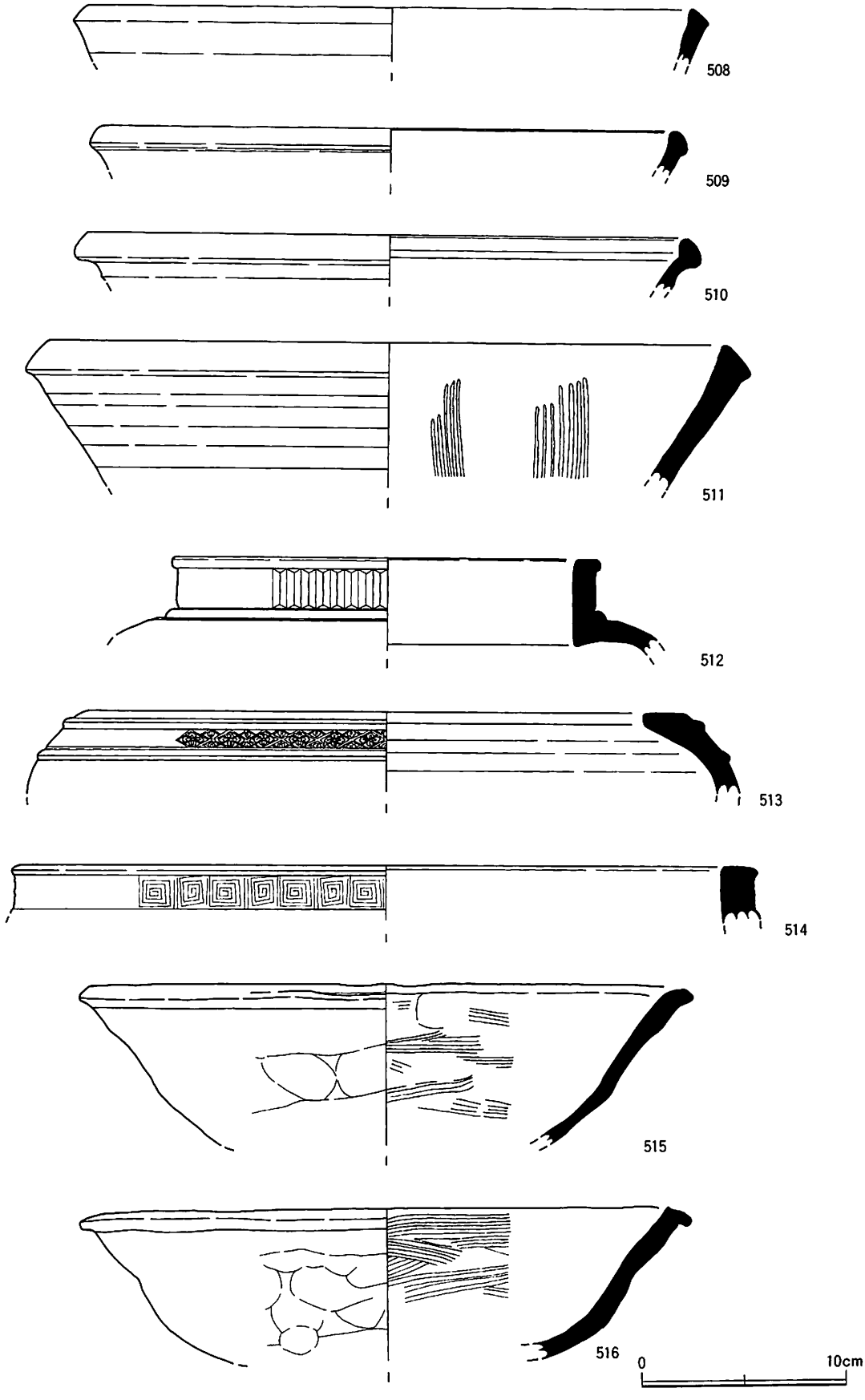
第４次調査土坑墓ＳＫ38出土土器・陶磁器類実測図２・土坑墓ＳＫ42出土土器・陶磁器類実測図（1/3）



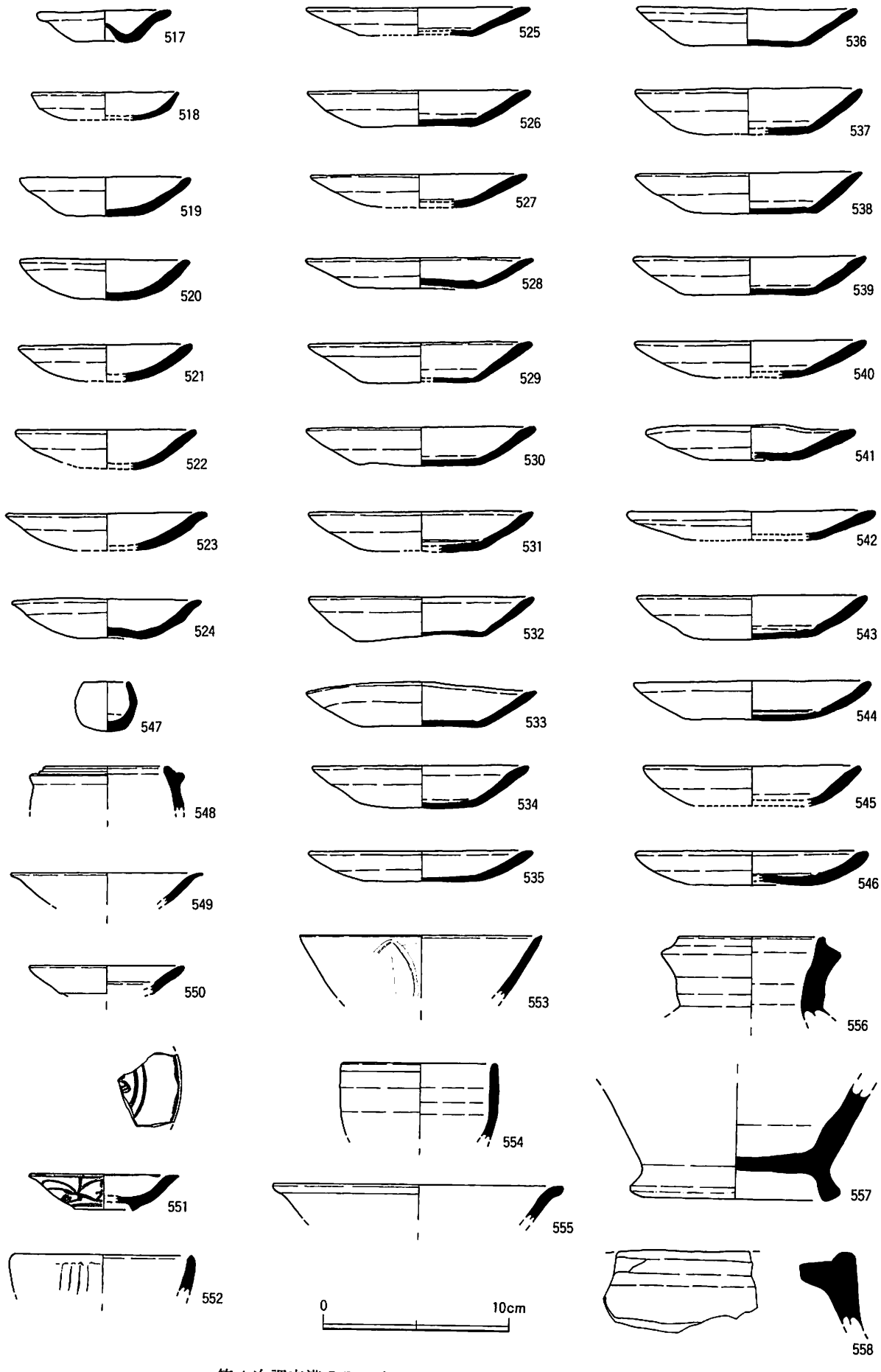
第４次調査溝ＳＤ16出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）



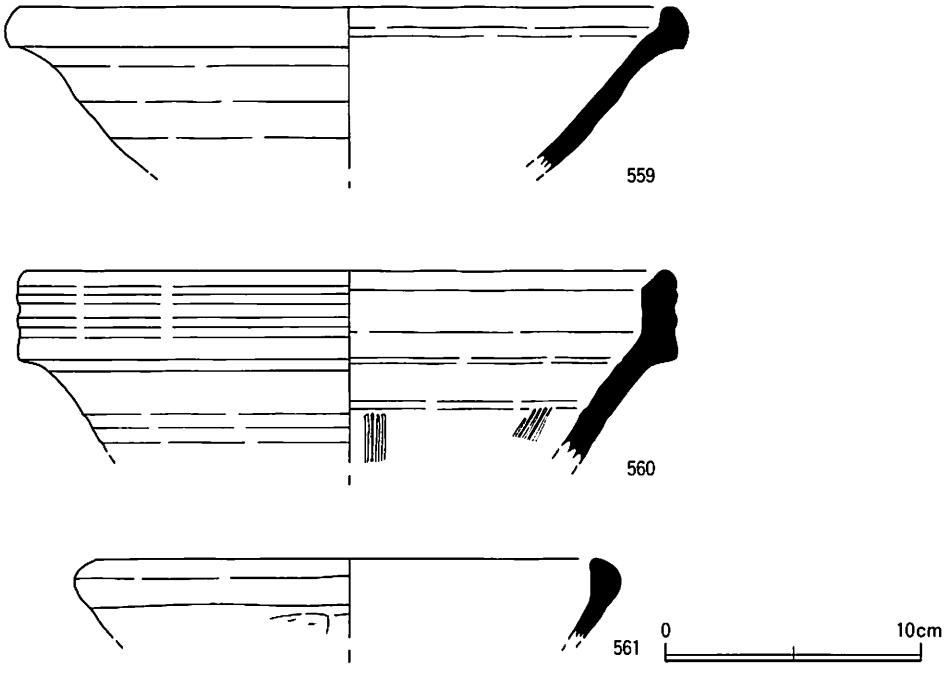
第４次調査溝ＳＤ16出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）



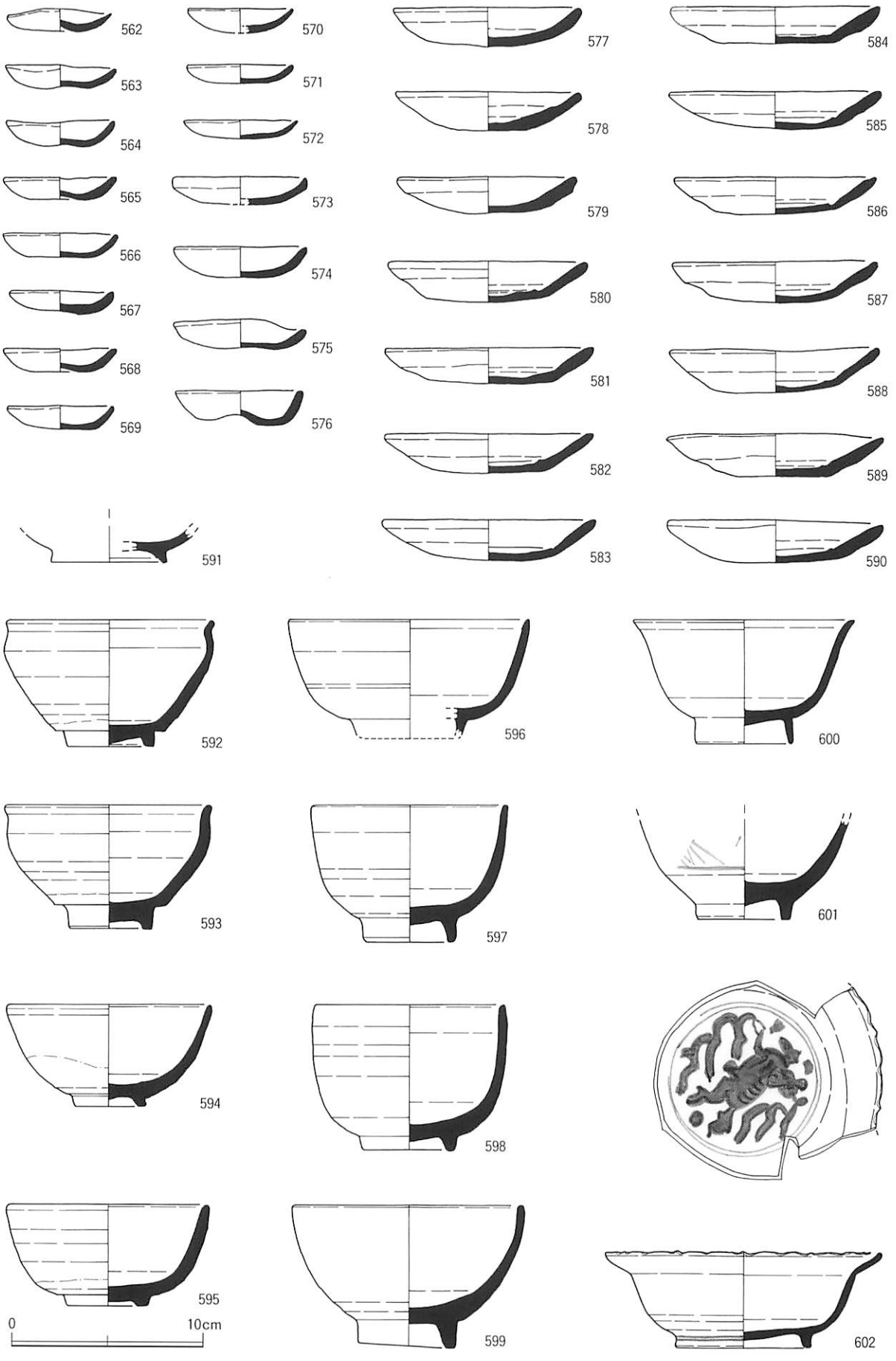
第４次調査溝ＳＤ16出土土器・陶磁器類実測図３（1/3）



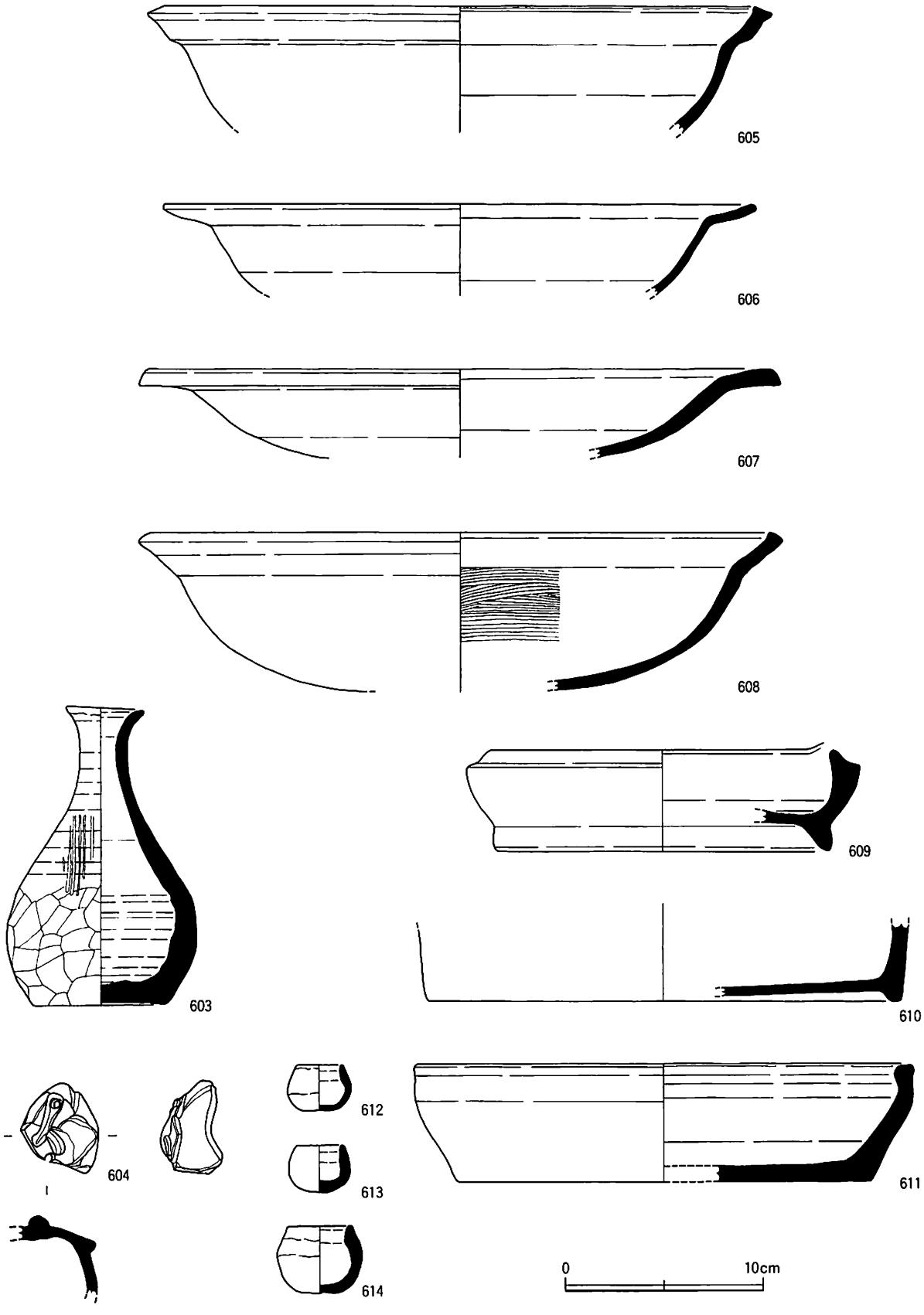
第４次調査溝ＳＤ17出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）



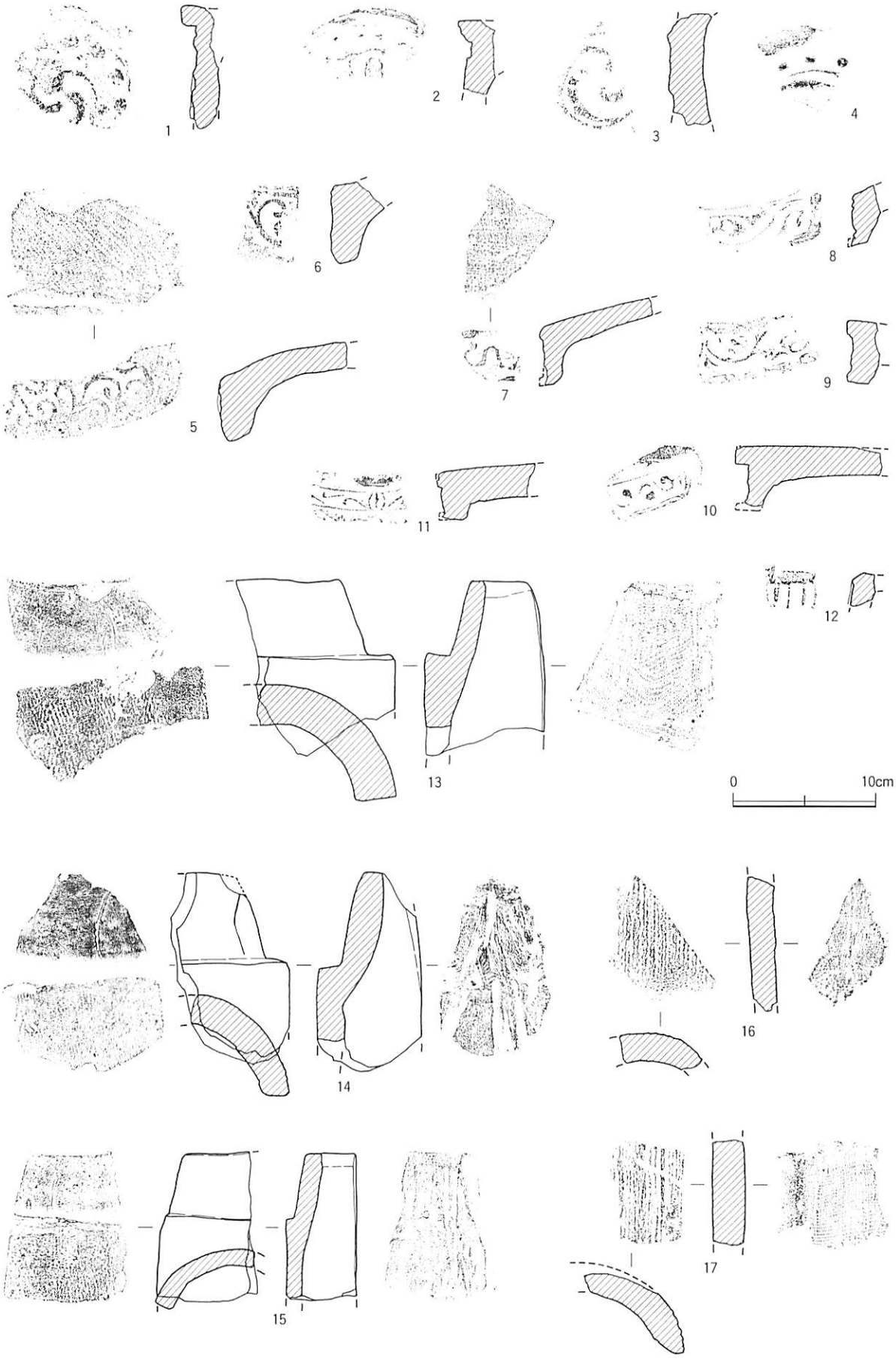
第４次調査溝ＳＤ17出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）



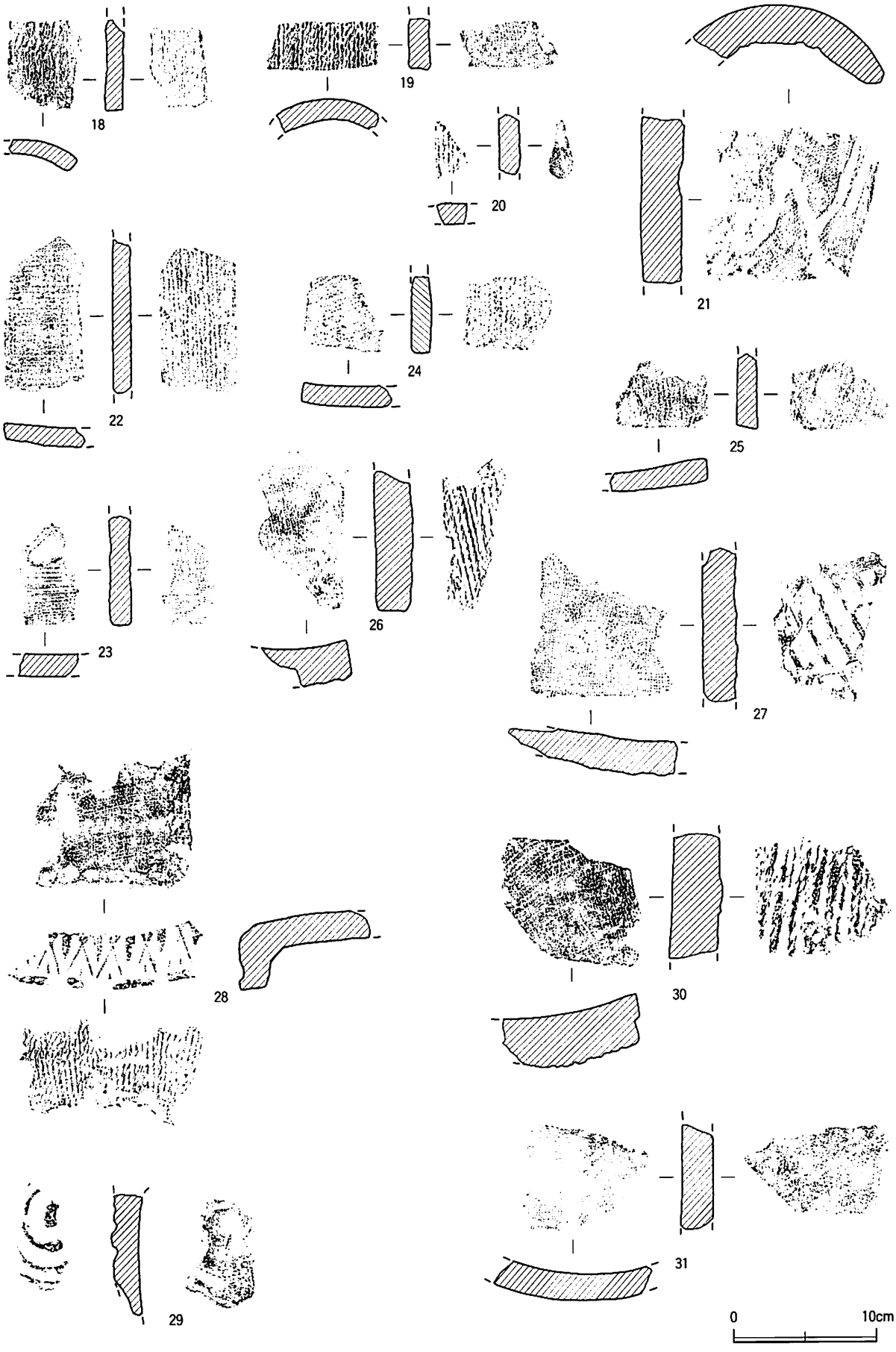
第４次調査土坑ＳＫ55出土土器・陶磁器類実測図１（1/3）



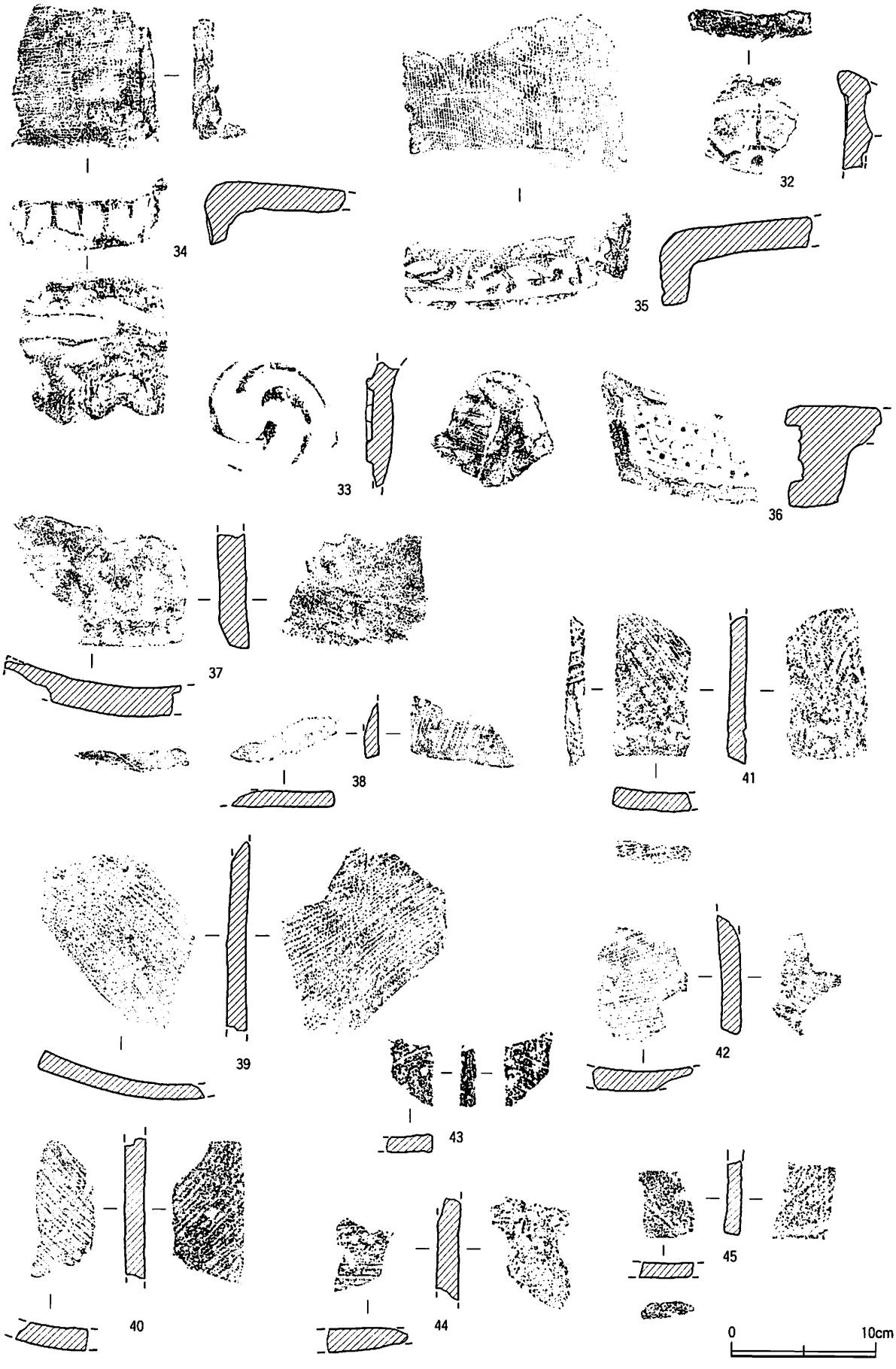
第４次調査土坑ＳＫ55出土土器・陶磁器類実測図２（1/3）



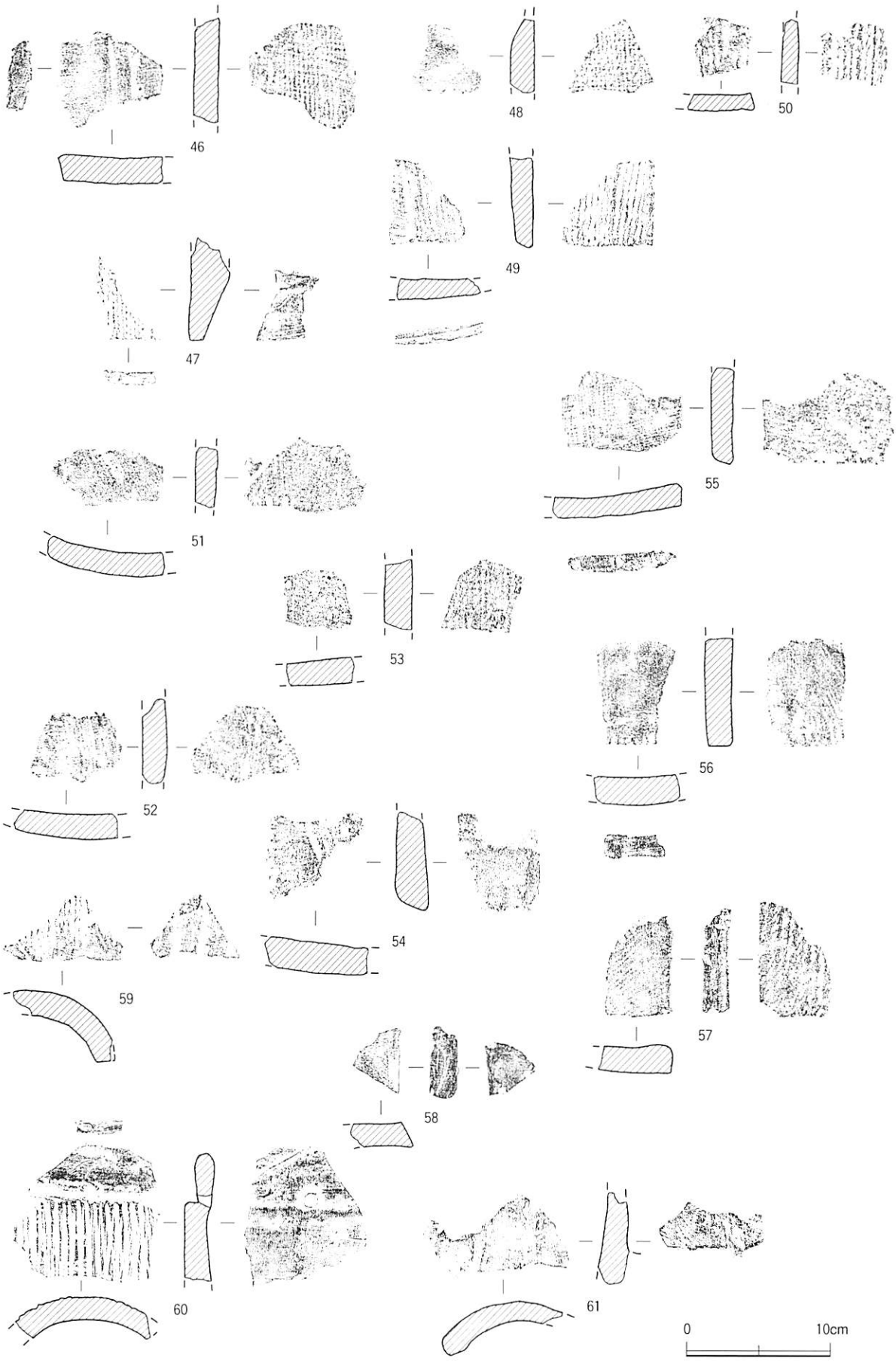
第４次調査溝ＳＤ19出土瓦実測図１（1/4）



第４次調査溝ＳＤ19出土瓦実測図２・土坑ＳＫ13出土瓦実測図（1/4）



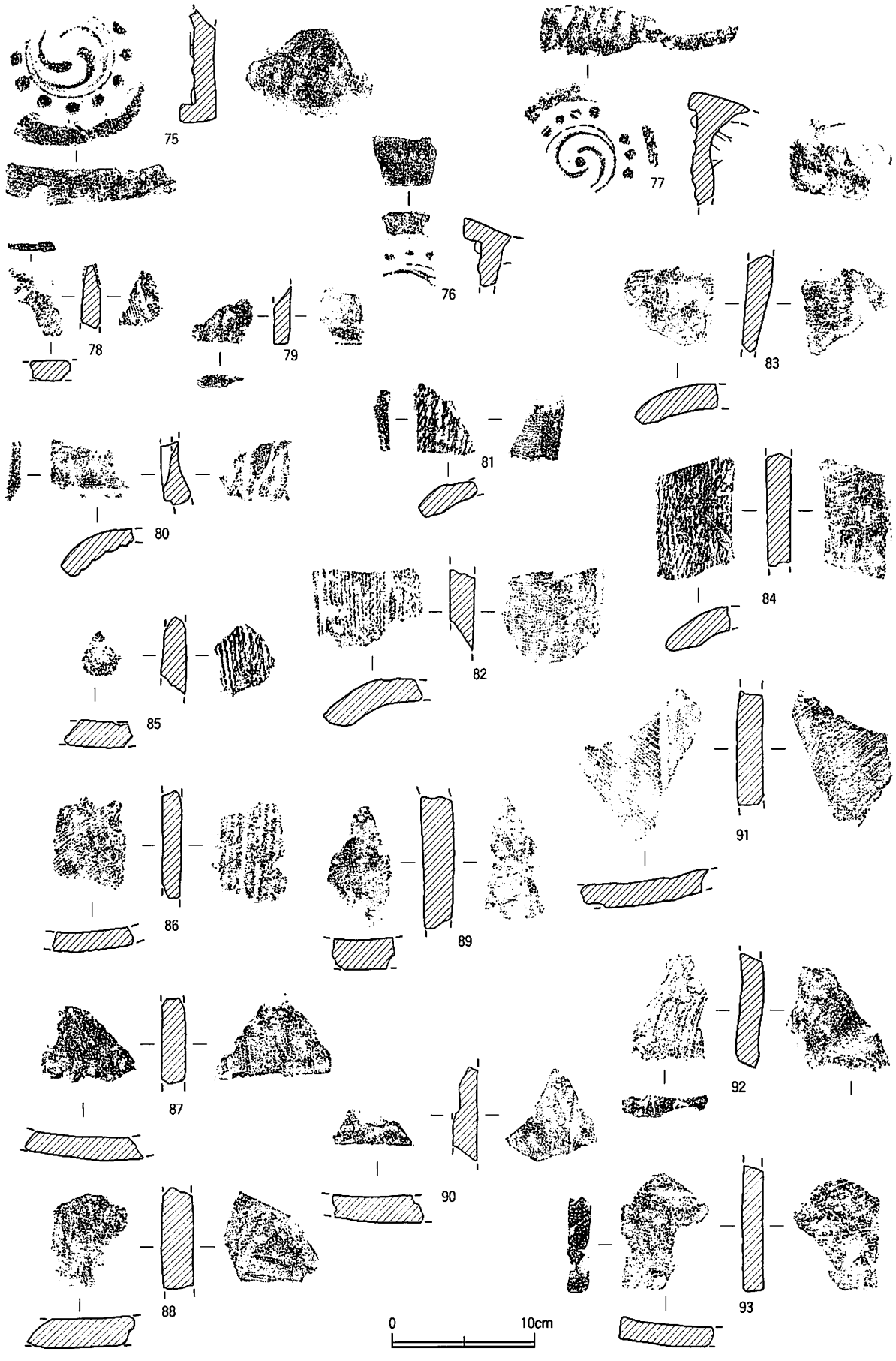
第４次調査土坑ＳＫ32出土瓦実測図１（1/4）



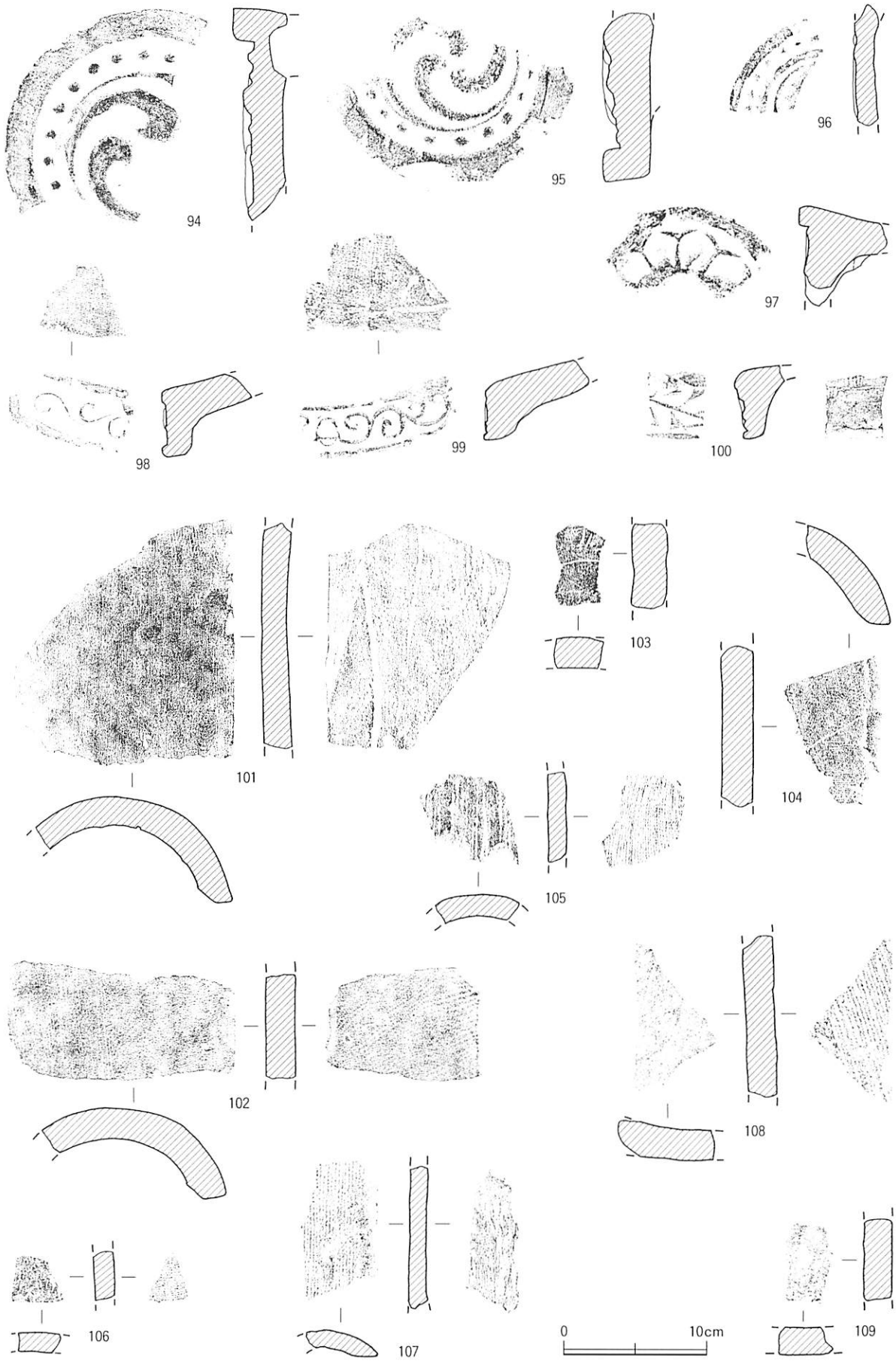
第４次調査土坑ＳＫ32出土瓦実測図２（1/4）

図版五八

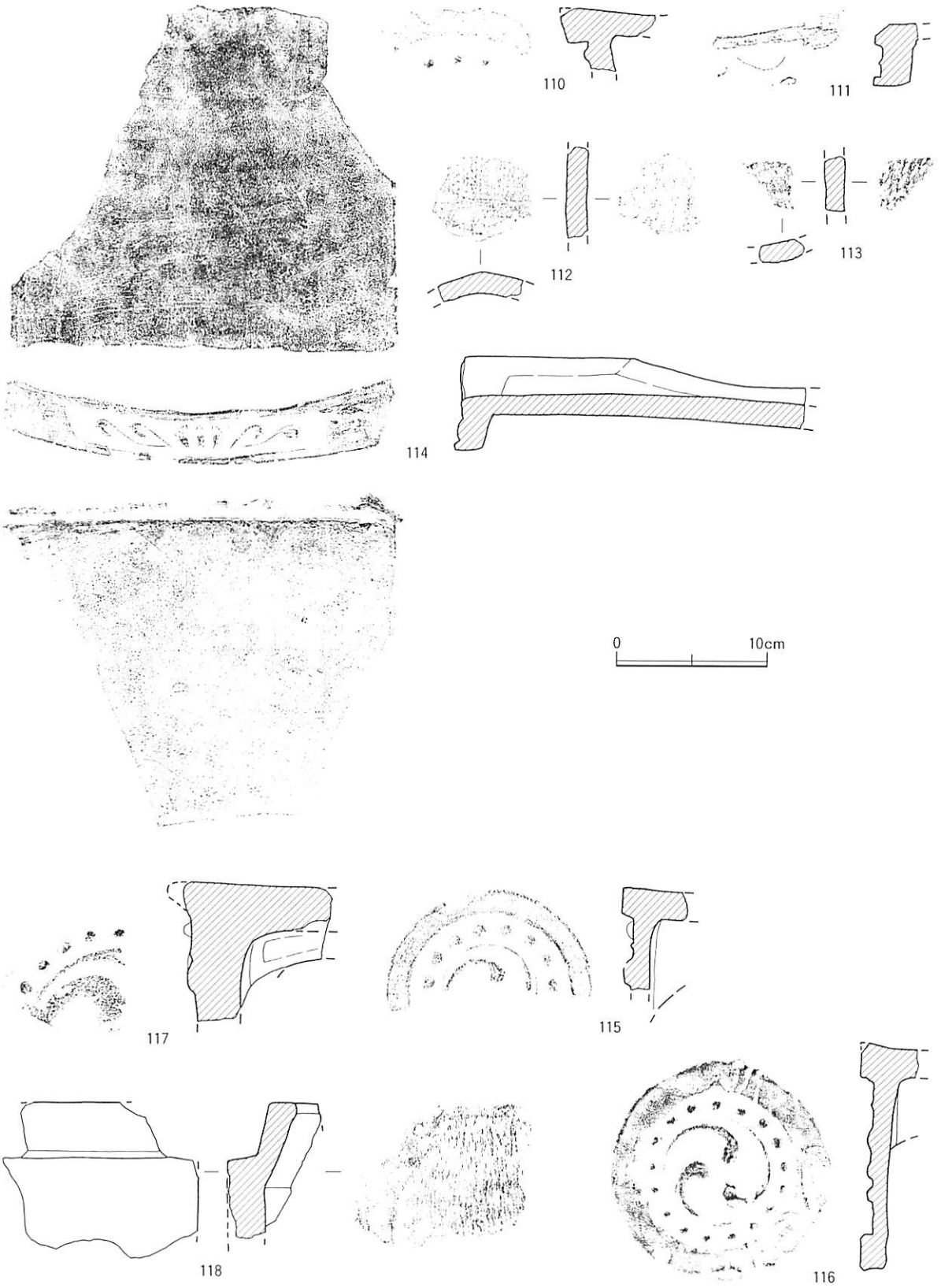
第４次調査土坑ＳＫ31・ＳＫ20・ＳＫ25出土瓦実測図（1/4）



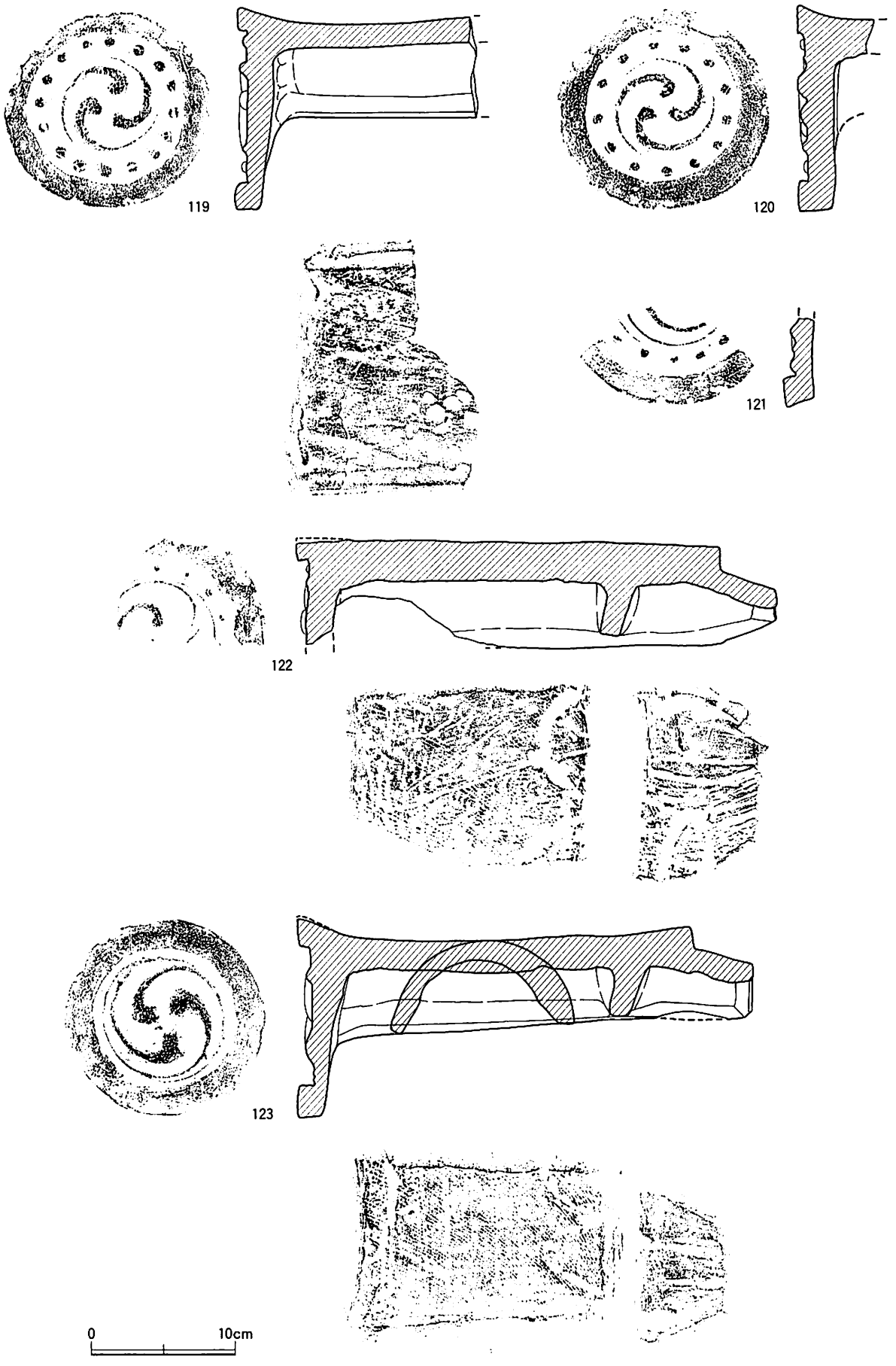
第４次調査土坑ＳＫ21出土瓦実測図（1/4）



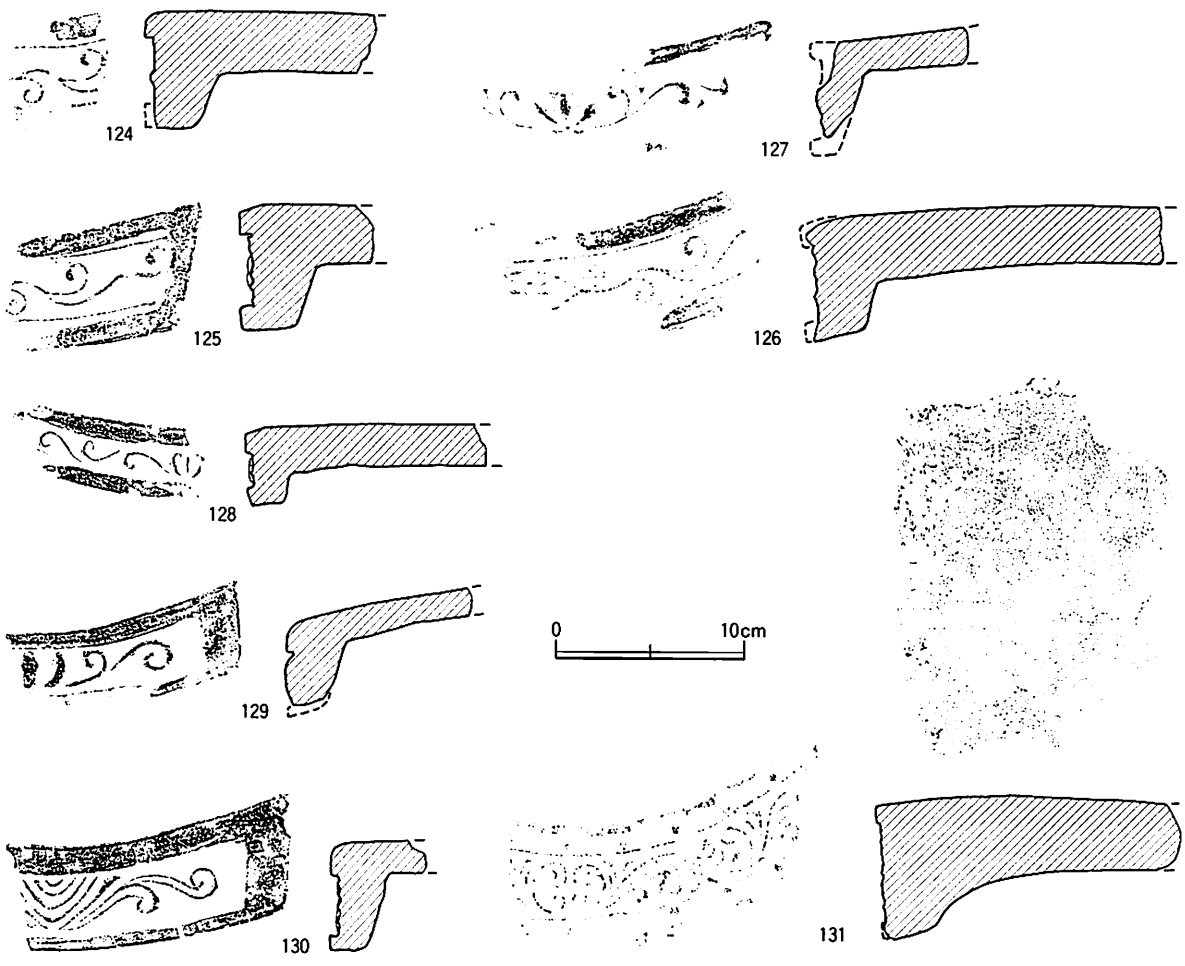
第４次調査土坑ＳＸ01出土瓦実測図（1/4）



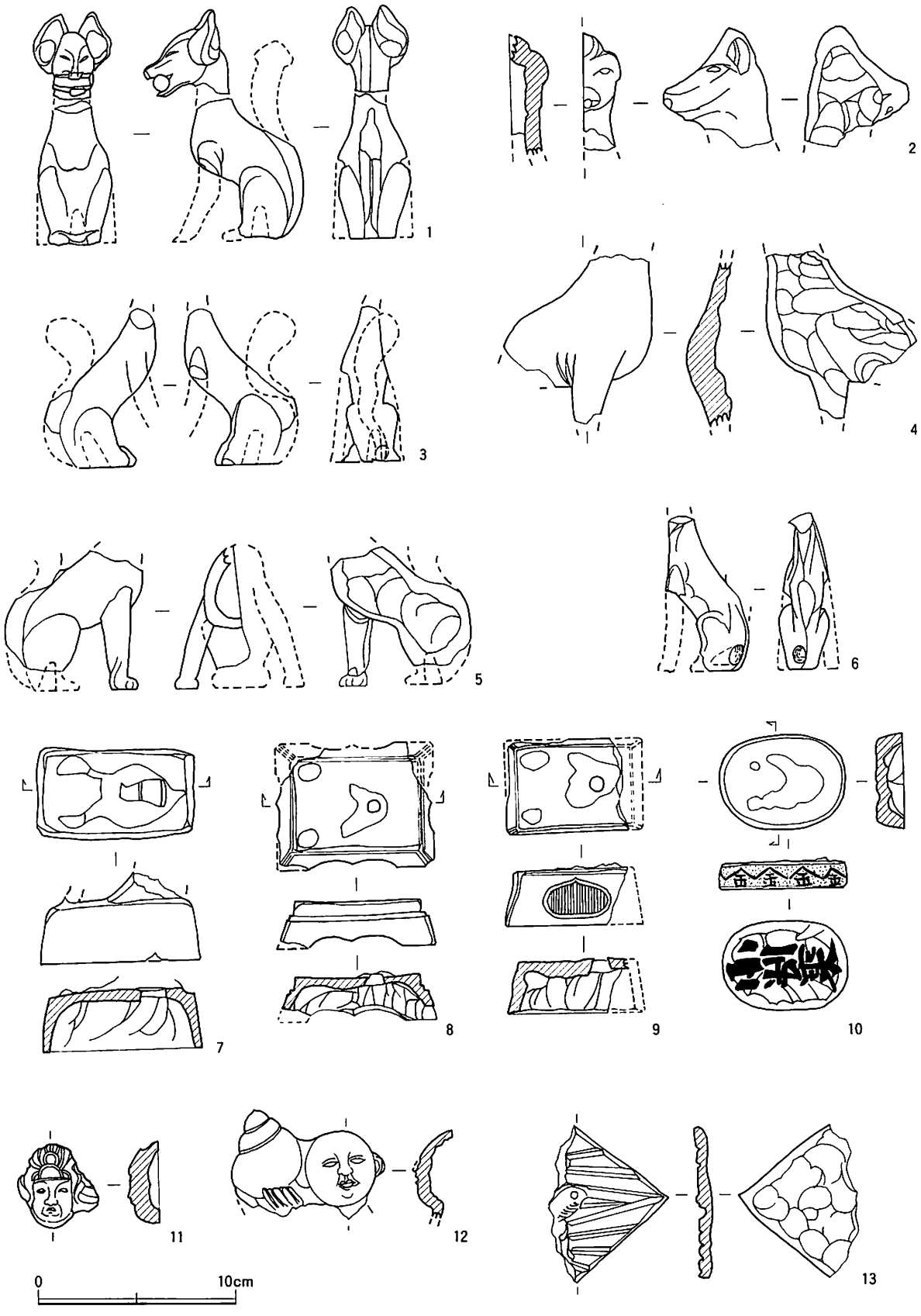
第４次調査溝ＳＤ01・土坑ＳＫ46・ＳＫ55出土瓦実測図１（1/4）



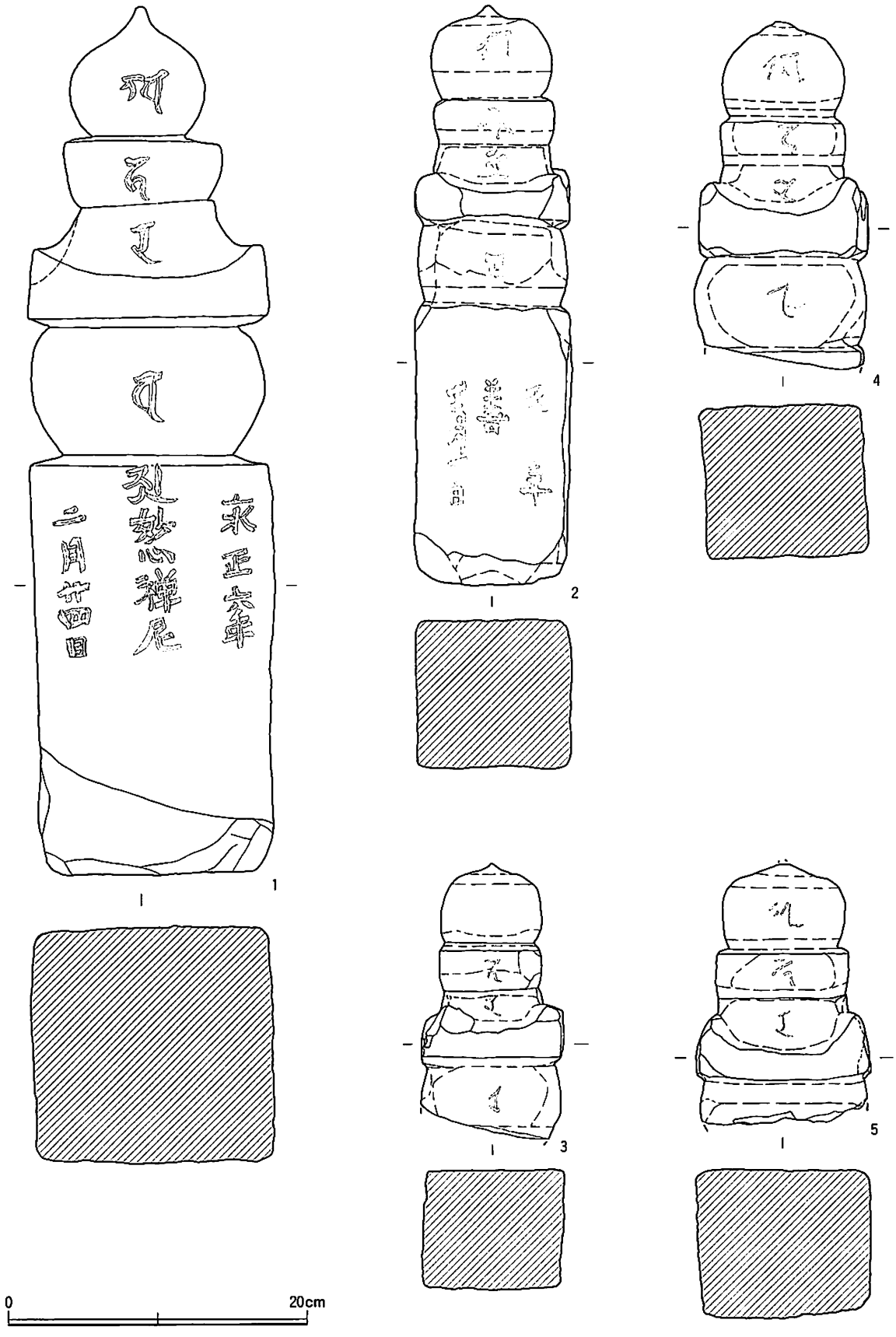
第４次調査土坑ＳＫ55出土瓦実測図２（1/4）



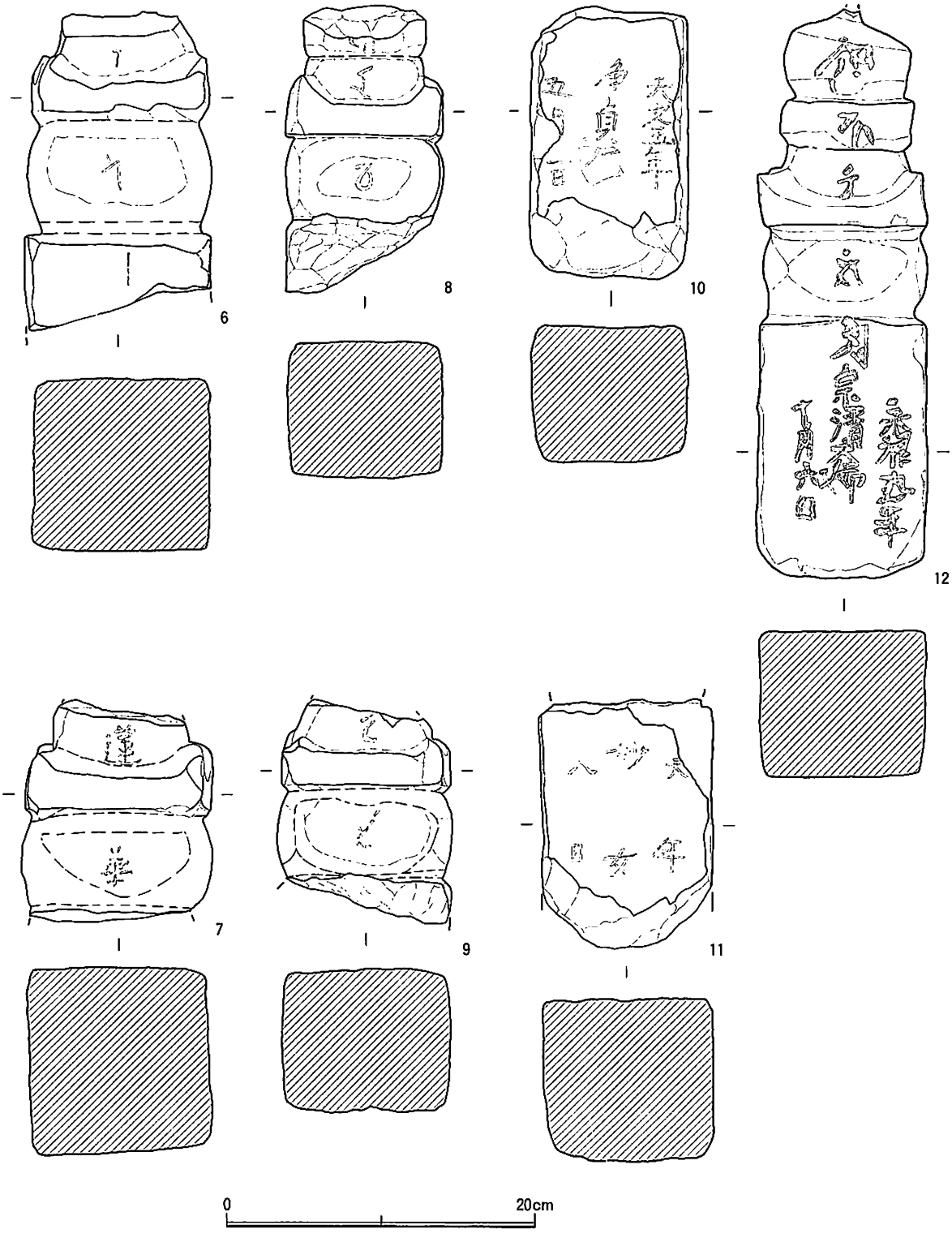
第４次調査土坑ＳＫ55出土瓦実測図３（1/4）



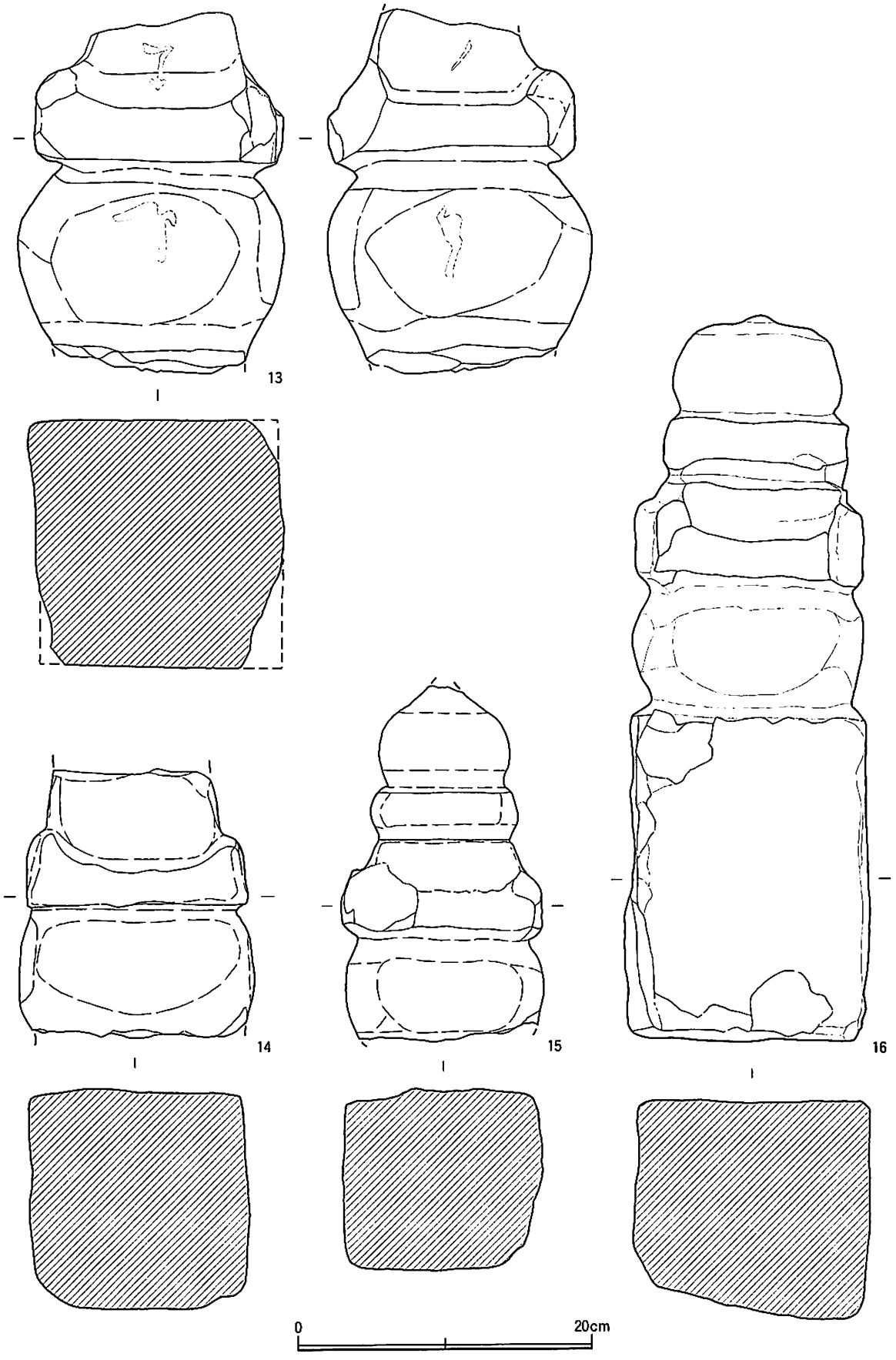
第４次調査出土伏見人形実測図（1/3）



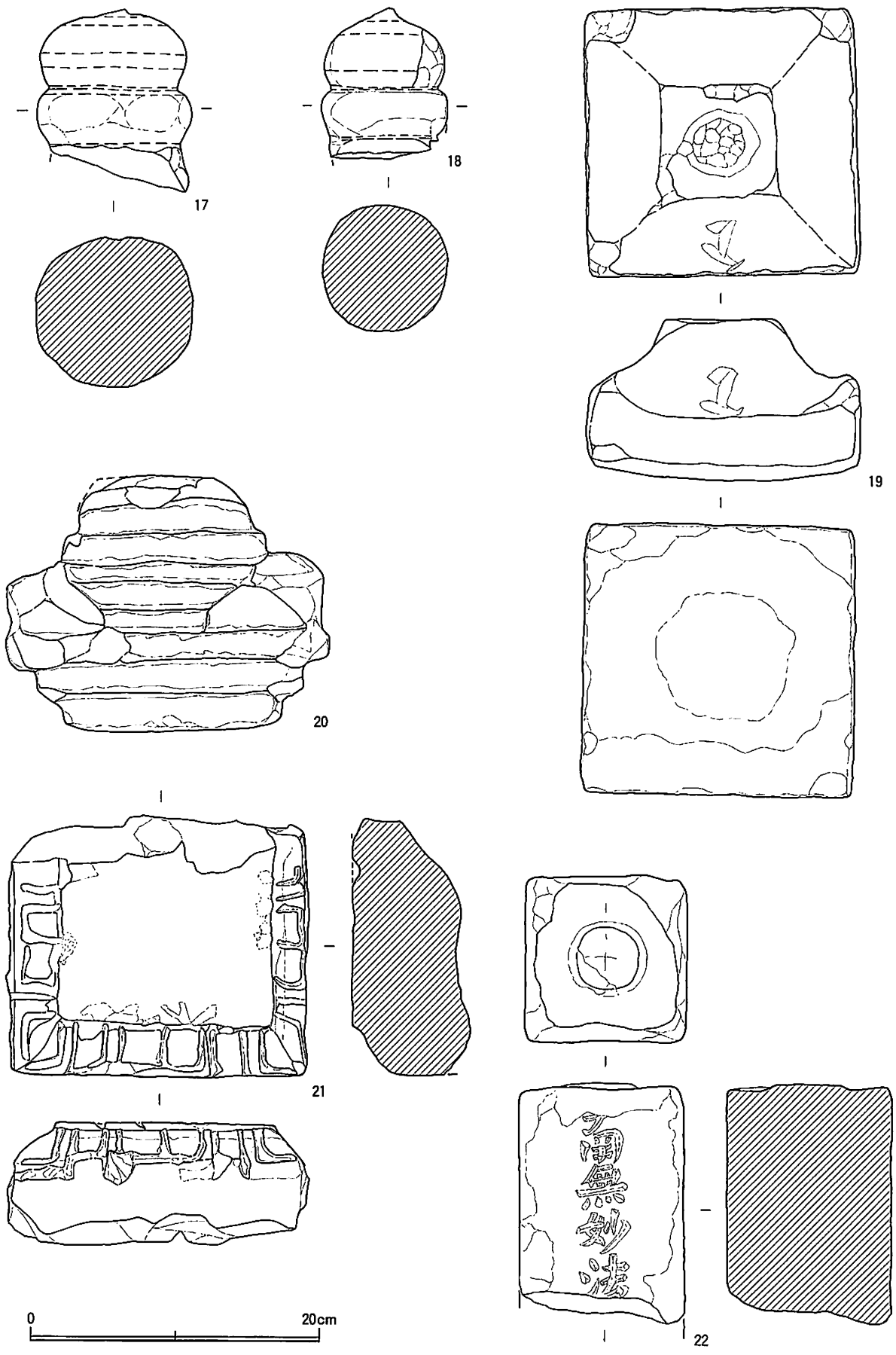
第4次調査出土石塔実測図1（1/4）



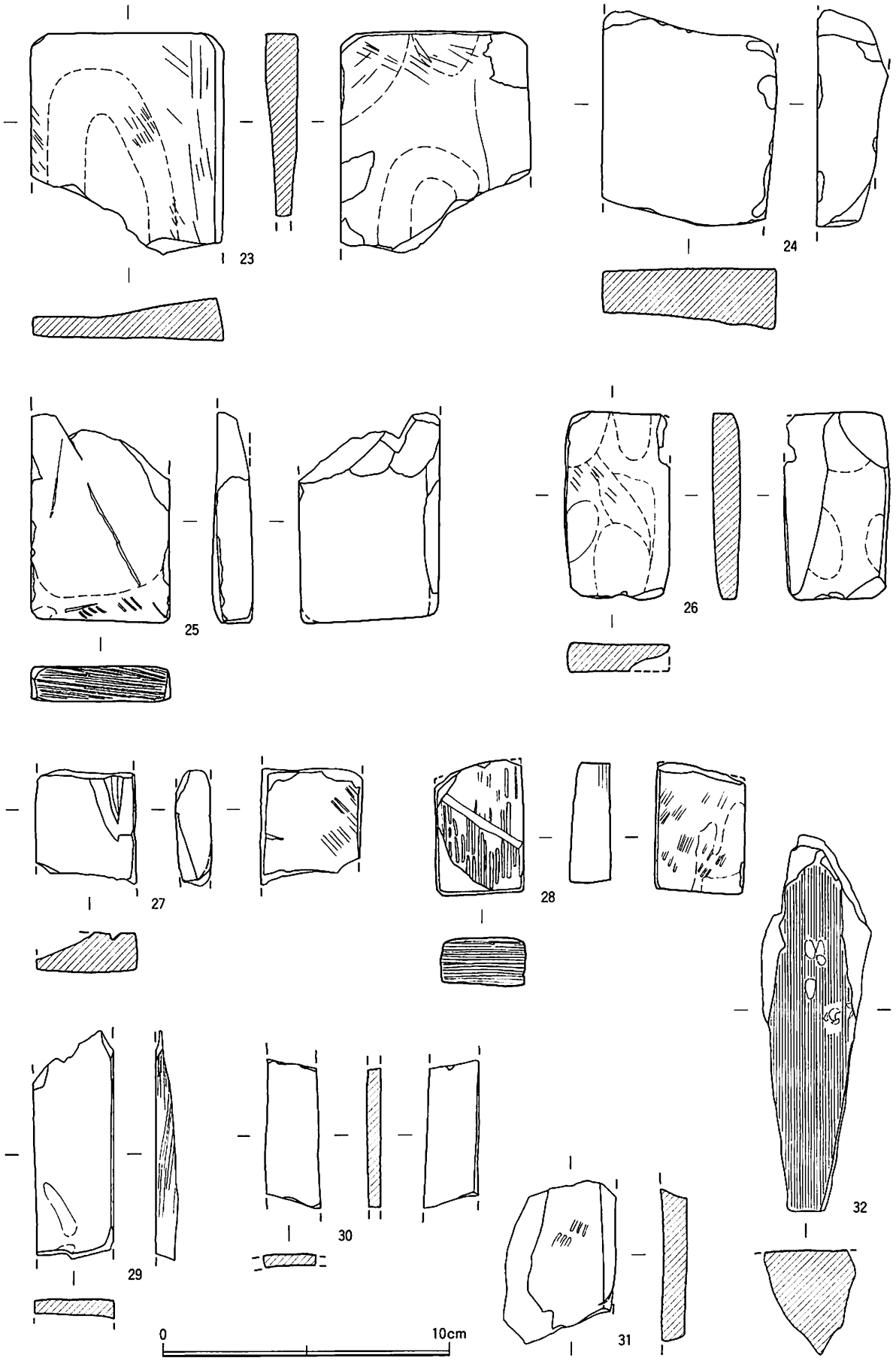
第４次調査出土石塔実測図２（1/4）



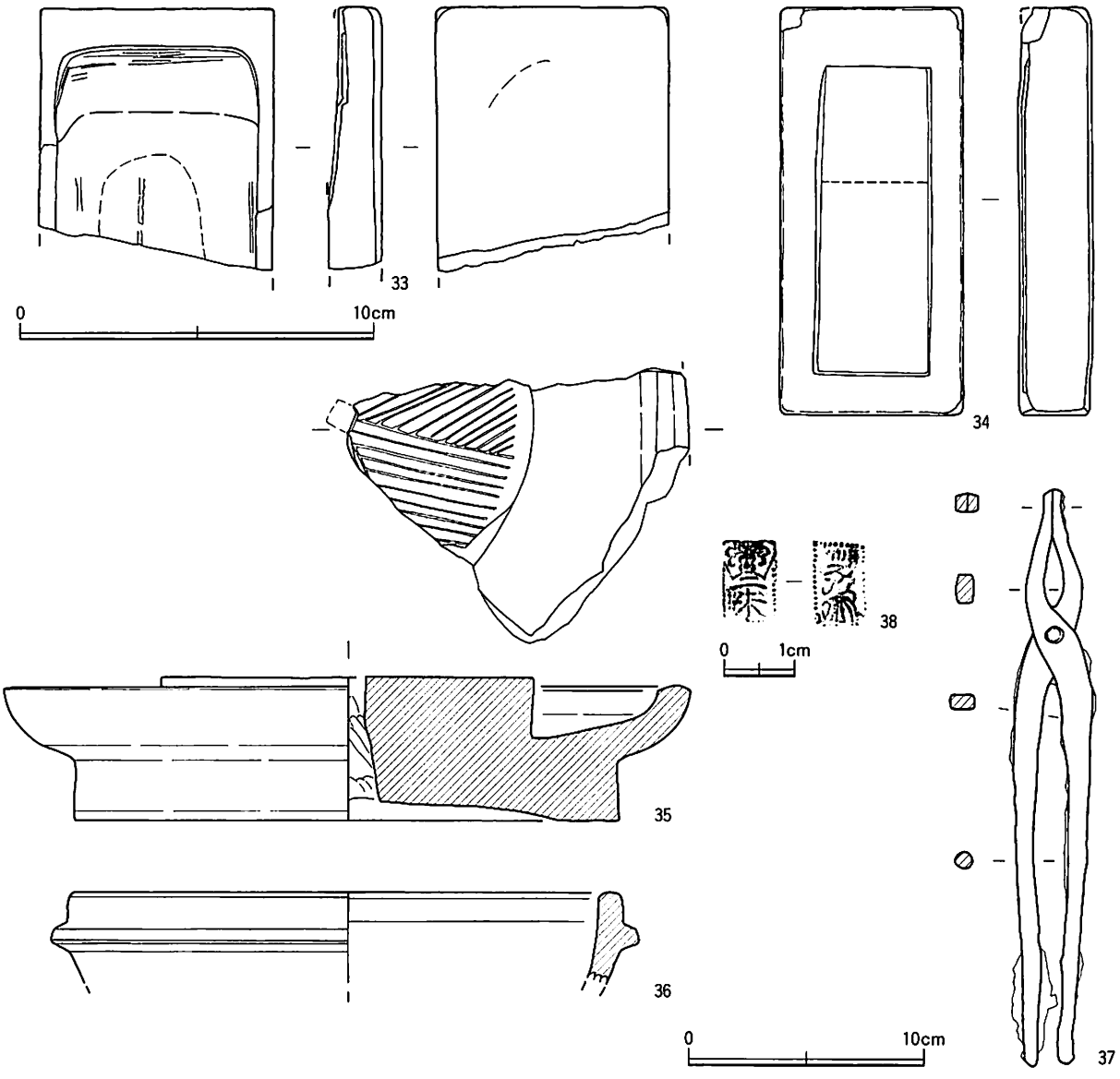
第４次調査出土石塔実測図３（1/4）



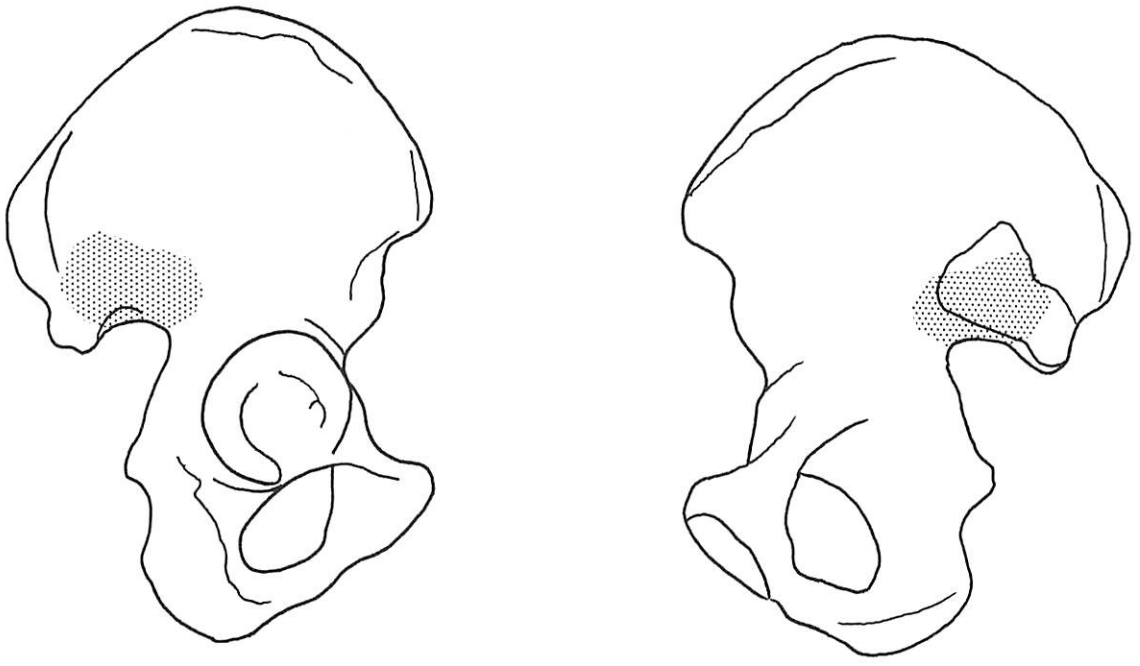
第４次調査出土石塔実測図４（1/4）

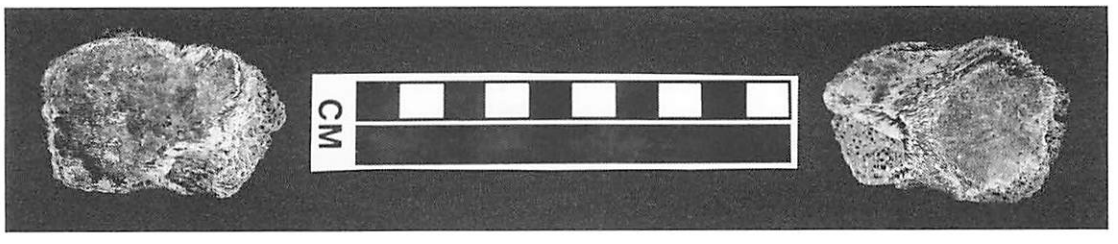


第４次調査出土砥石実測図（1/2）

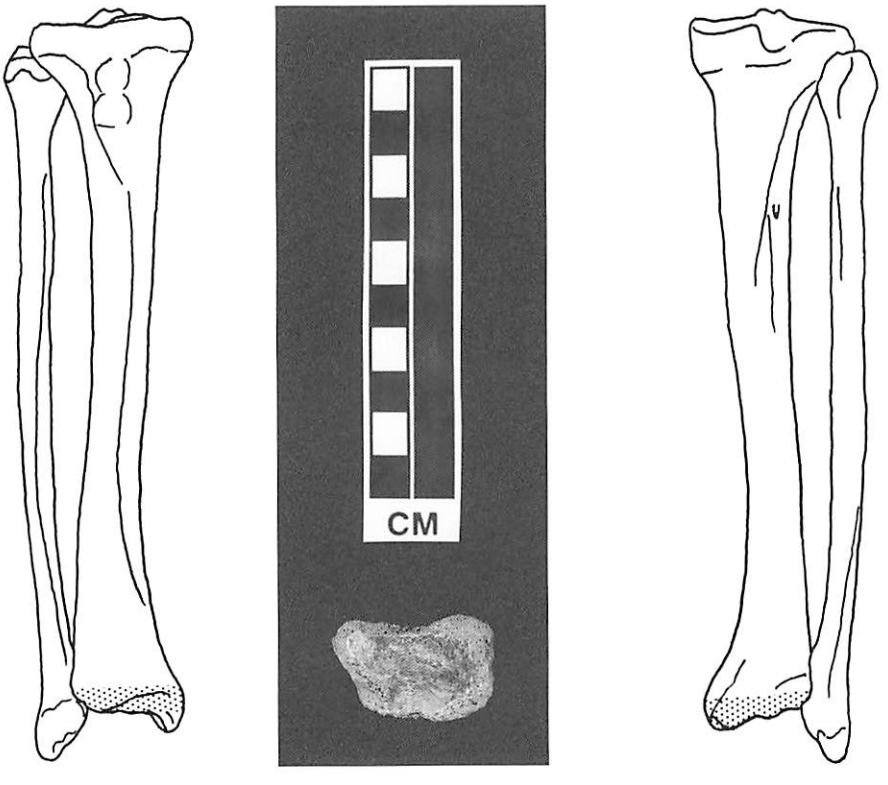


第４次調査出土石硯・茶臼・石鍋・やっとこ実測図（33・34は1/2。38は実大。その他は1/3。）





上：図１.土坑墓ＳＫ38出土右寛骨出土部位［左：外側面、右：内側面］
下：写真１.土坑墓ＳＫ38出土右寛骨［左：外側面観、右：内側面観］



左：図２.土坑墓ＳＫ38出土右脛骨出土部位［前面］
中：写真２.土坑墓ＳＫ38出土右脛骨［下面観］
右：図３.土坑墓ＳＫ38出土右脛骨出土部位［後面］

写真３.土坑墓ＳＫ78出土人骨出土状況
［北から撮影］

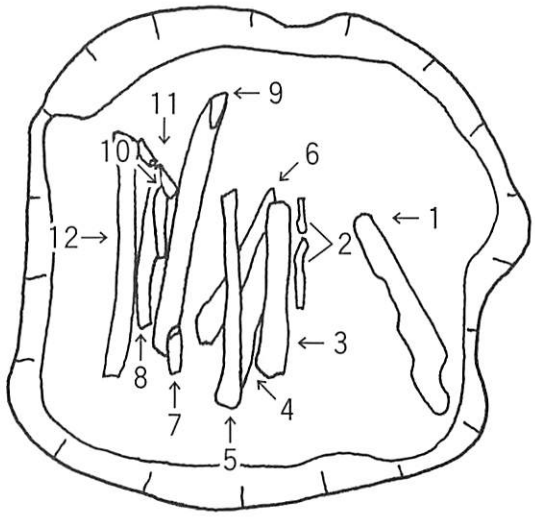


図４.ＳＫ78土坑墓実測図
１．不明？
３．左脛骨
４．右脛骨
５．左右上腕骨
７．不明？
８．左尺骨
９．左大腿骨
10. 右橈骨
11. 右尺骨
12. 左右上腕骨
（註：２と６は、取り上げられていない）

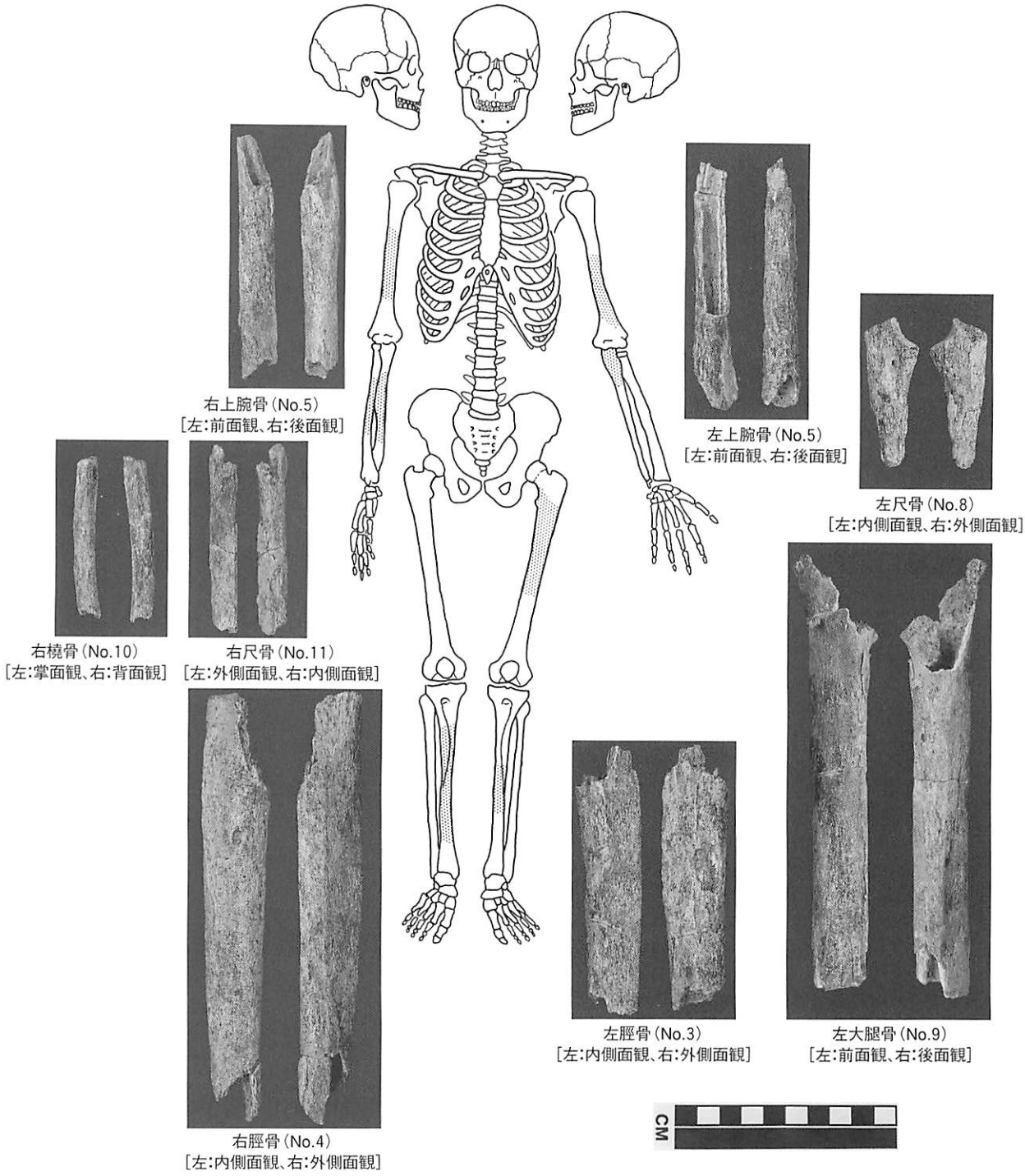


写真４.土坑墓ＳＫ78出土人骨

型式番号	瓦当文様	1:生産地系列 2:時代 3.出土状況	型式番号	瓦当文様	1:生産地系列 2:時代 3.出土状況	型式番号	瓦当文様	1:生産地系列 2:時代 3.出土状況
NM 001		1:丹波系 2:平安 3:第4次SD19 (2)	NM 009		1:中央官衙系 (幡枝) 2:平安 3:第3次Ⅱ区 包含層(13)	NM 018		1: 2:平安 3:第1次第7層 (第14図2)
NM 002		1:播磨系 2:平安 3:第2次土壙1 (第11図1)	NM 010		1: 2:平安 3:第4次SK21 (77)	NM 019		1:中央官衙系 2:平安 3:第3次SD3 (17)
NM 003		1:播磨系 2:平安 3:第4次SX01 (97)	NM 011		1: 2:平安 3:第4次SX01 (96)	NM 020		1:播磨系 2:平安 3:第3次SD1 (18)
NM 004		1:中央官衙系 2:平安 3:第1次第7層 (第14図1)	NM 012		1:中央官衙系 2:平安 3:第3次SK19 (16)	NM 021		1: 2:平安 3:第1次第5 焼土層 (第12図5)
NM 005		1:播磨系 2:平安 3:第3次SK01 (11)	NM 013		1:中央官衙系 2:平安 3:第3次SK18 (14)	NM 022		1:中央官衙系 2:平安 3:第4次SK32 (33)
NM 006 A		1:九州系 2:平安 3:第3次SK129 (1)	NM 014		1:中央官衙系 2:平安 3:第3次Ⅰ区 包含層(15)	NM 023		1:中央官衙系 2:平安 3:第4次SK13 (29)
B		1:九州系 2:平安 3:第3次SK129 (2)	NM 015		1:中央官衙系 2:平安 3:第4次SD19 (1)			
NM 007		1:播磨系 2:平安 3:第3次Ⅱ区 包含層(12)	NM 016		1:中央官衙系 2:平安 3:第4次SD19 (3)			
NM 008		1:播磨系 2:平安 3:第4次SK32 (32)	NM 017		1:中央官衙系 2:平安 3:第2次土壙1 (第11図2)			

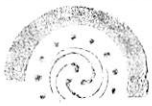
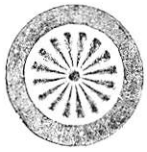
六角堂所用瓦型式分類表 1

型式番号	瓦当文様	1:生産地系列 2:時代 3.出土状況
NM 101 A		1: 2:鎌倉 3:第1次第6焼土層（第13図1,2）
B		1: 2:鎌倉 3:第3次SK42（39）
NM 102		1: 2:鎌倉 3:第3次SD5（44）
NM 103		1: 2: 3:第3次SK19（45）
NM 104 A		1: 2: 3:第1次第5焼土層（第12図3）
B		1: 2:鎌倉 3:第4次SK21（75）
C		1: 2: 3:第1次第4焼土層（第10図1）
D		1: 2:室町 3:第3次I区包含層（49）
NM 105 A		1: 2:鎌倉 3:第1次第4焼土層（第11図1） 第4次SX01（94）

型式番号	瓦当文様	1:生産地系列 2:時代 3.出土状況
NM 105 B		1: 2:鎌倉 3:第4次SX01（95）
C		1: 2:鎌倉 3:第3次SK125（46）
NM 106 A		1: 2:室町 3:第3次SK07（70）
B		1: 2:室町 3:第3次SK07（71）
NM 107 A		1: 2: 3:第1次第4焼土層（第11図2,4） 第1次第6層（第13図3）
B		1: 2: 3:第1次第5焼土層（第11図3）

六角堂所用瓦型式分類表2

図版七六

型式番号	瓦当文様	1:生産地系列 2:時代 3.出土状況	型式番号	瓦当文様	1:生産地系列 2:時代 3.出土状況	型式番号	瓦当文様	1:生産地系列 2:時代 3.出土状況
NM 201 A		1: 2:江戸 3:第4次SK55 (122)	J		1: 2:江戸 3:第4次SK46 (116)	NM 251		1: 2:桃山 3:第1次第4焼土層 (第10図5)
B		1: 2:江戸 3:第1次第4焼土層 (第10図4)	K		1: 2:江戸 3:第3次池跡 (73·74)	NM 252 A		1: 2:江戸 3:第1次第2焼土層 (第9図10)
C		1: 2:江戸 3:第1次第4焼土層 (第10図3)	L		1: 2:江戸 3:第1次第4焼土層 (第10図6)	B		1: 2:江戸 3:第1次第1焼土層 (第8図7)
D		1: 2:江戸 3:第1次第4焼土層 (第10図2)	M		1: 2:江戸 3:第1次第2焼土層 (第9図6)	NM 253		1: 2:江戸 3:第1次第1焼土層 (第8図6)
E		1: 2:江戸 3:第1次第2焼土層 (第9図5)	N		1: 2:江戸 3:第1次第1焼土層 (第8図1)	NM 254		1: 2:江戸 3:第3次Ⅱ区包含層(76)
F		1: 2:江戸 3:第1次第2焼土層 (第9図4)	NM 202		1: 2:江戸 3:第4次SK55 (123)			
G		1: 2:江戸 3:第4次SK55 (120)	NM 203		1: 2:江戸 3:第1次第1焼土層 (第8図2)			
H		1: 2:江戸 3:第4次SK46 (115)	NM 204		1: 2:江戸 3:第1次第1焼土層 (第8図5)			
I		1: 2:江戸 3:第4次SK55 (119)						

六角堂所用瓦型式分類表3

型式番号	瓦当文様	1:生産地系列 2:時代 3.出土状況	型式番号	瓦当文様	1:生産地系列 2:時代 3.出土状況
NH 001		1:中央官衙系 2:平安 3:第3次土壙1（第12図2）	NH 016		1:中央官衙系(栗栖野) 2:平安 3:第3次SK90(27)・第4次SK01(99)
NH 002		1:中央官衙系(栗栖野) 2:平安 3:第3次I区包含層(19)	NH 017		1:中央官衙系(幡枝) 2:平安 3:第1次第7層(第14図5) 第2次土壙1(第12図3) 第3次SK28(26)
NH 003		1:中央官衙系(栗栖野) 2:平安 3:第3次SK109(21)	NH 018		1:中央官衙系(栗栖野) 2:平安 3:第4次SX01(100)
NH 004		1:中央官衙系(栗栖野) 2:平安 3:第3次I区包含層(20)	NH 019		1:播磨系 2:平安 3:第3次SK15・32(29)
NH 005		1:中央官衙系(栗栖野) 2:平安 3:第1次第7層（第14図7）	NH 020		1:播磨系 2:平安 3:第1次第7層（第14図6）
NH 006		1:播磨系 2:平安 3:第3次SK129(3)	NH 021		1:播磨系 2:平安 3:第2次土壙1（第11図3）
NH 007		1:播磨系 2:平安 3:第3次SK40(22)	NH 022		1:播磨系 2:平安 3:第4次SD19(9)
NH 008		1:中央官衙系(栗栖野) 2:平安 3:第4次SD19(6)	NH 023		1:讃岐系 2:平安 3:第2次土壙1（第11図4）
NH 009		1:南都系? 2:平安 3:第1次第5焼土層（第12図6）	NH 024		1:中央官衙系 2:平安 3:第4次SX01(98)
NH 010		1:播磨系 2:平安 3:第1次第7層（第14図9）	NH 025		1:中央官衙系 2:平安 3:第4次SK32(35)
NH 011		1:播磨系 2:平安 3:第1次第7層（第14図3）	NH 026		1:中央官衙系 2:平安 3:第3次II区包含層(28)
NH 012		1:不明 2:平安 3:第1次第7層（第14図10）	NH 027		1:中央官衙系(栗栖野) 2:平安 3:第4次SD19(8)
NH 013		1:中央官衙系(栗栖野) 2:平安 3:第3次SK80(24)・第3II区包含層(23)	NH 028		1:中央官衙系 2:平安 3:第1次第6層（第13図4）
NH 014		1:中央官衙系(栗栖野) 2:平安 3:第4次SD19(15)	NH 029		1:中央官衙系(栗栖野) 2:平安 3:第4次SD19(7)
NH 015		1:中央官衙系(栗栖野) 2:平安 3:第3次SK43(25)	NH 030		1:中央官衙系(栗栖野) 2:平安 3:第3次II区包含層(31)

六角堂所用瓦型式分類表4

図版七八

型式番号	瓦当文様	1:生産地系列　2:時代 3.出土状況
NH 031		1:中央官衙系 2:平安 3:第3次SK42(30)
NH 032		1:播磨系 2:平安 3:第3次SK42(32)
NH 033		1:中央官衙系 2:平安 3:第3次SK119(33)
NH 034 A		1:中央官衙系 2:平安 3:第3次Ⅱ区包含層(34)
B		1:中央官衙系 2:平安 3:第4次SK32(34)
C		1:中央官衙系 2:平安 3:第4次SK20(73)
D		1:中央官衙系 2:平安 3:第4次SK25(74)
NH 035 A		1:中央官衙系 2:鎌倉 3:第2次土壙1(第11図7)
B		1:中央官衙系 2:鎌倉 3:第2次土壙1(第11図6)
C		1:中央官衙系 2:鎌倉 3:第2次土壙1(第12図5)
NH 036 A		1:中央官衙系 2:鎌倉 3:第2次土壙1(第11図8)
B		1:中央官衙系 2:鎌倉 3:第2次土壙1(第11図9)
C		1:中央官衙系 2:鎌倉 3:第1次第7層(第14図8)
NH 037 A		1:中央官衙系 2:鎌倉 3:第2次土壙1(第11図5)
B		1:中央官衙系 2:鎌倉 3:第2次土壙(第12図7)

型式番号	瓦当文様	1:生産地系列　2:時代 3.出土状況
NH 038		1:中央官衙系 2:平安 3:第1次第5焼土層(第12図4)
NH 039		1:中央官衙系(栗栖野) 2:平安 3:第4次SK13(28)

六角堂所用瓦型式分類表5

型式番号	瓦当文様	1:生産地系列　2:時代 3.出土状況
NH 101		1:南都系 2:鎌倉 3:第1次第5焼土層(第12図7·8)·第6焼土層(第15図6)·第3次SD3(52)·SD4(54)·Ⅱ区包含層(53)·第4次SK31(36)
NH 102		1: 2:鎌倉 3:第3次Ⅰ区包含層(55)
NH 103		1: 2:鎌倉 3:第1次第6焼土層(第13図7) 第4次SD19(10)
NH 104		1: 2:鎌倉 3:第3次Ⅱ区包含層(56)
NH 105		1: 2:鎌倉 3:第1次第4焼土層(第11図6)
NH 106		1:南都系 2:鎌倉 3:第1次第6焼土層(第13図11)
NH 107		1: 2:室町 3:第3次SK103(57)
NH 108		1: 2:室町 3:第3次SD5(60)·SK10(58)·Ⅰ区包含層(59)
NH 109		1: 2:鎌倉 3:第4次SD19(11)
NH 110		1: 2:室町 3:第4次SK55(128)
NH 111		1: 2:室町 3:第1次第4焼土層(第10図9·第11図10)·第6焼土層(第13図12)·第3次Ⅰ区包含層(69)
NH 112		1: 2:室町 3:第4次SK55(124,125,126)
NH 113		1: 2:室町 3:第1次第4焼土層(第11図7)·第6焼土層(第13図5)·第3次Ⅱ区包含層(68)
NH 114		1: 2:室町 3:第1次第4焼土層(第10図10)·第6焼土層(63)·SK18(61)·SK42(40)
改		1: 2:室町 3:第3次SD2,SK06(65)·SK42(41·42·43)·SK36(66)

型式番号	瓦当文様	1:生産地系列　2:時代 3.出土状況
NH 115		1: 2:室町 3:第3次SK48(62)
NH 116		1: 2:室町 3:第3次Ⅱ区SK6(67)
NH 117		1: 2:室町 3:第3次SK7(72)
NH 118		1: 2:室町 3:第1次第4焼土層(第11図8)
NH 119		1: 2:室町 3:第4次SK55(130)

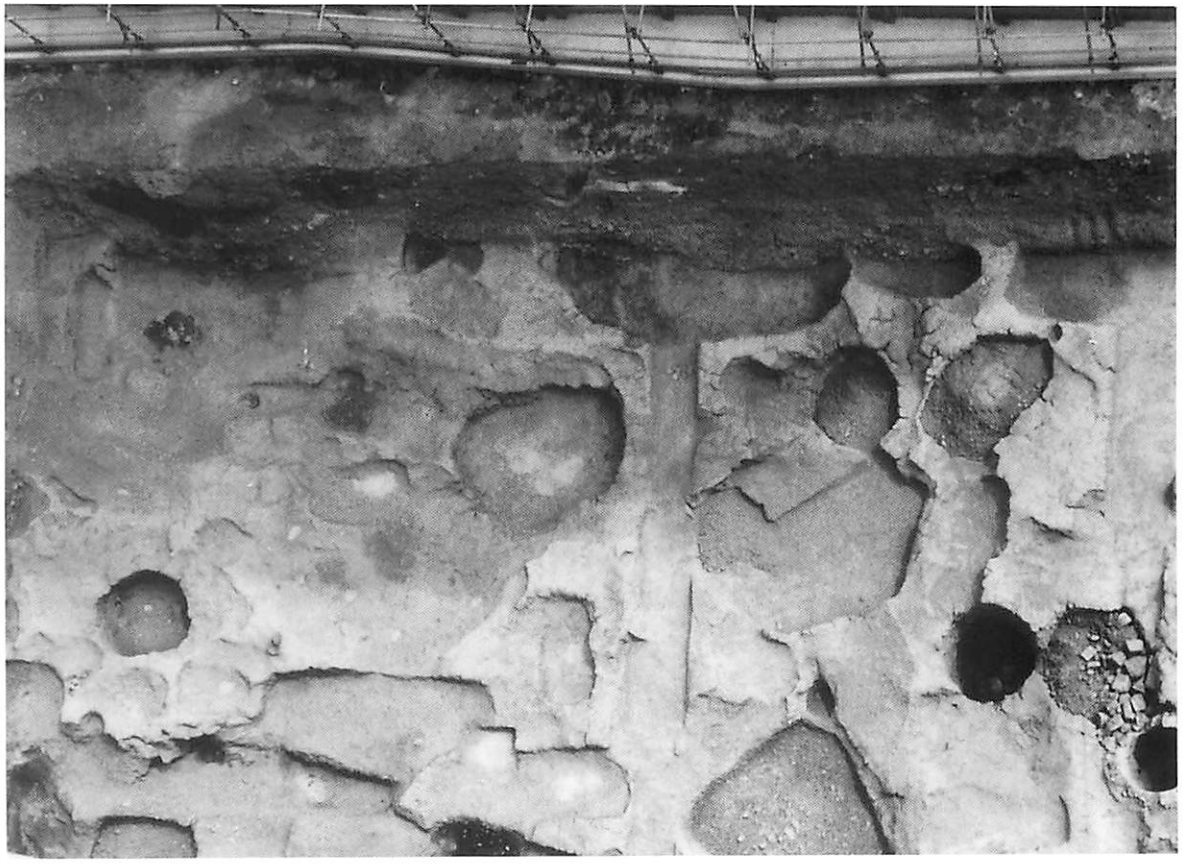
六角堂所用瓦型式分類表 6

型式番号	瓦当文様	1:生産地系列　2:時代 3:出土状況
NH 201		1: 2:桃山 3:第3次SK113(77)
NH 202		1: 2:江戸 3:第1次第6焼土層(第13図10),第4次SK55(127)
NH 203		1: 2:江戸 3:第4次SD1(114)
NH 204		1: 2:江戸 3:第4次SK55(129)
NH 205		1: 2:江戸 3:第1次第6焼土層(第15図8)
NH 206		1: 2:江戸 3:第1次第5焼土層(第11図9)
NH 207		1: 2:江戸 3:第1次第2焼土層(第9図11)
NH 208		1: 2:江戸 3:第1次第4焼土層(第10図12),第3次Ⅱ区包含層(78)
NH 209		1: 2:江戸 3:第1次第4焼土層(第10図14)
NH 210		1: 2:江戸 3:第1次第4焼土層(第10図13),第3次地蹟(75)
NH 211		1: 2:江戸 3:第1次第5焼土層(第11図13)
NH 212		1:京都 2:江戸 3:第3次Ⅱ区SK6(79)
NH 213		1:京都(深草) 2:江戸 3:第1次第1焼土層(第8図10·11)
NH 214		1:京都(深草) 2:江戸 3:第1次第1焼土層(第8図9)
NH 215		1: 2:江戸 3:第1次第5焼土層(第11図12)

型式番号	瓦当文様	1:生産地系列　2:時代 3:出土状況
NH 216		1: 2:江戸 3:第1次第2焼土層(第9図8)
NH 217		1: 2:江戸 3:第1次第4焼土層(第10図8)

六角堂所用瓦型式分類表 7

六角堂と第３次調査調査区（北より）



第３次調査調査区北半終了状況（上が東）

第３次調査調査区南半終了状況（上が東）

第３次調査区Ⅱ区終了状況（北より）

第３次調査井戸ＳＥ10井戸枠検出状況状況（北東より）

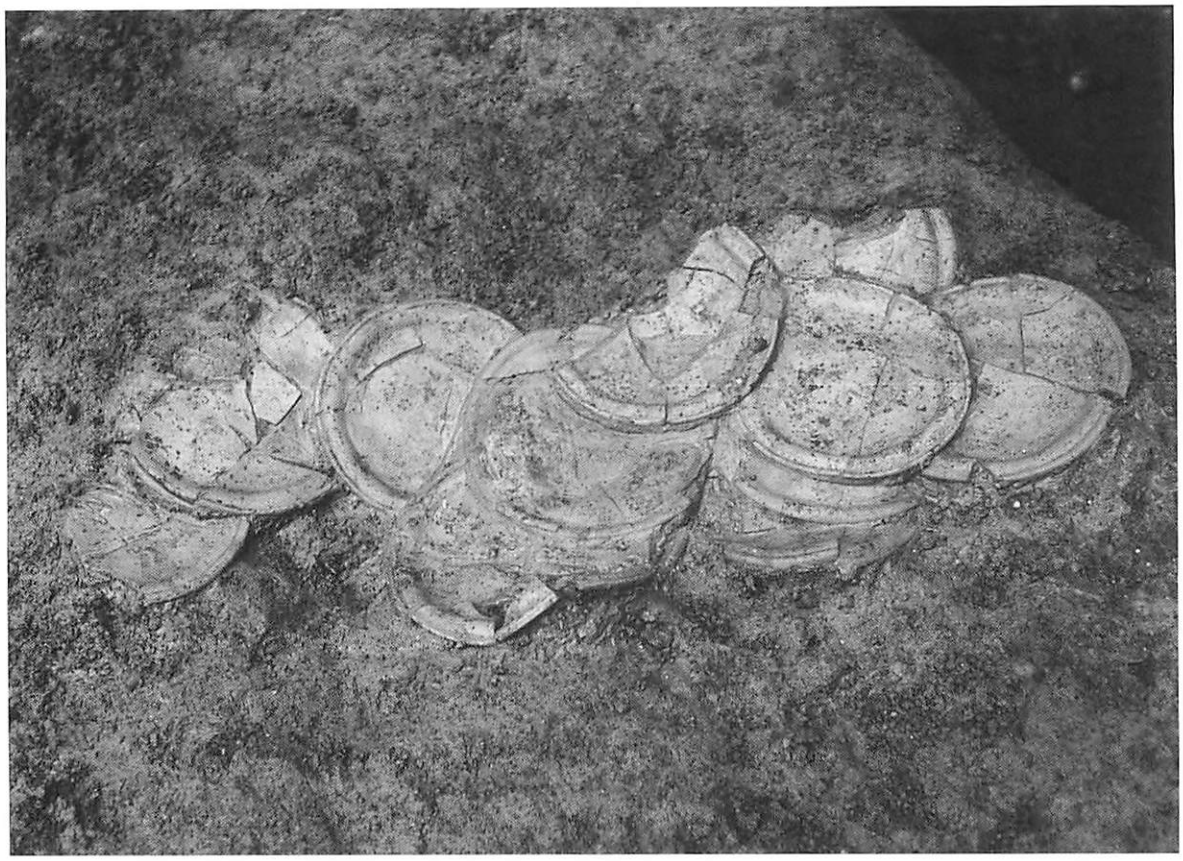
第３次調査井戸ＳＥ10井戸枠内完掘状況（北より）

第３次調査井戸ＳＫ43完掘状況（北より）

第３次調査井戸ＳＥ12完掘状況（北より）

第３次調査井戸ＳＫ92断面（東より）

第３次調査井戸ＳＫ92土器出土状況（北より）



第３次調査土坑ＳＫ58土器出土状況（北より）

第３次調査土坑ＳＫ129瓦出土状況（北より）

第３次調査溝ＳＤ４検出状況（南より）

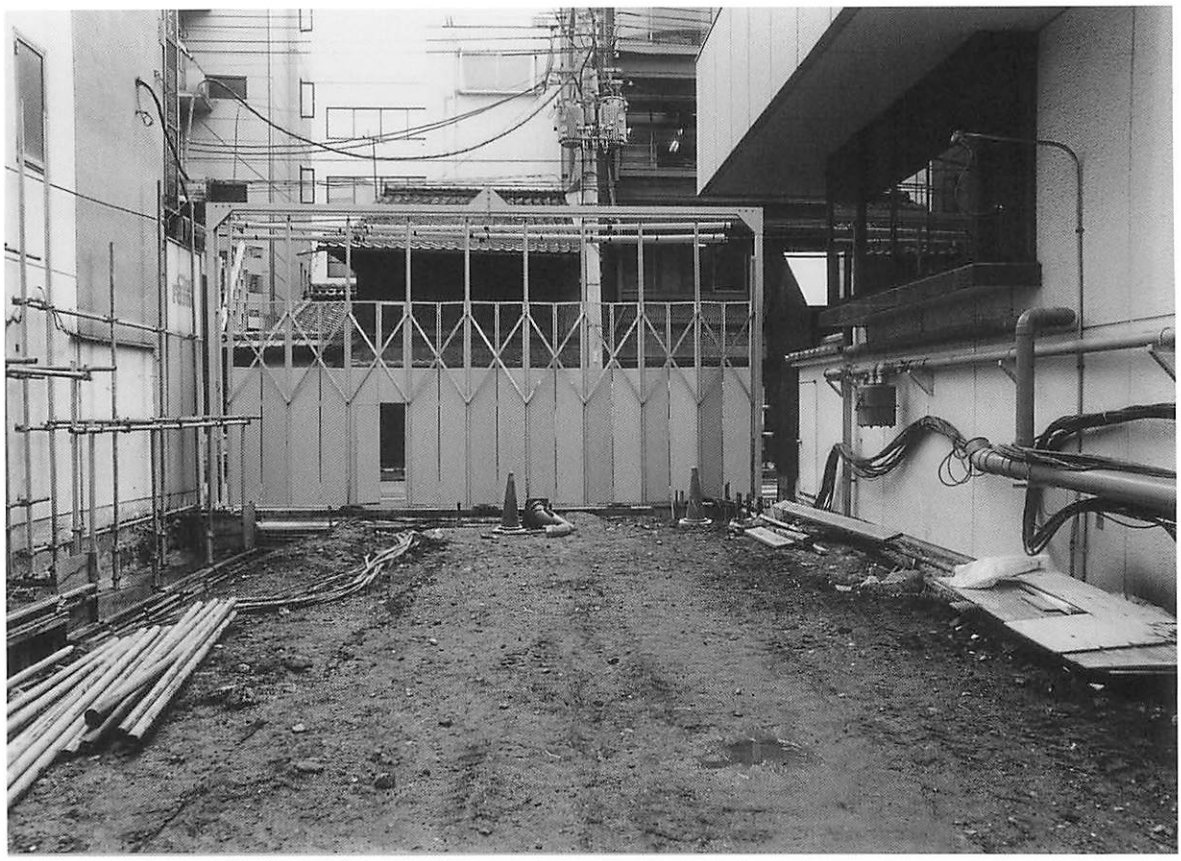
第３次調査溝ＳＤ４完掘状況（南より）

第３次調査Ⅱ区太子堂跡・池跡出土状況（南西より）

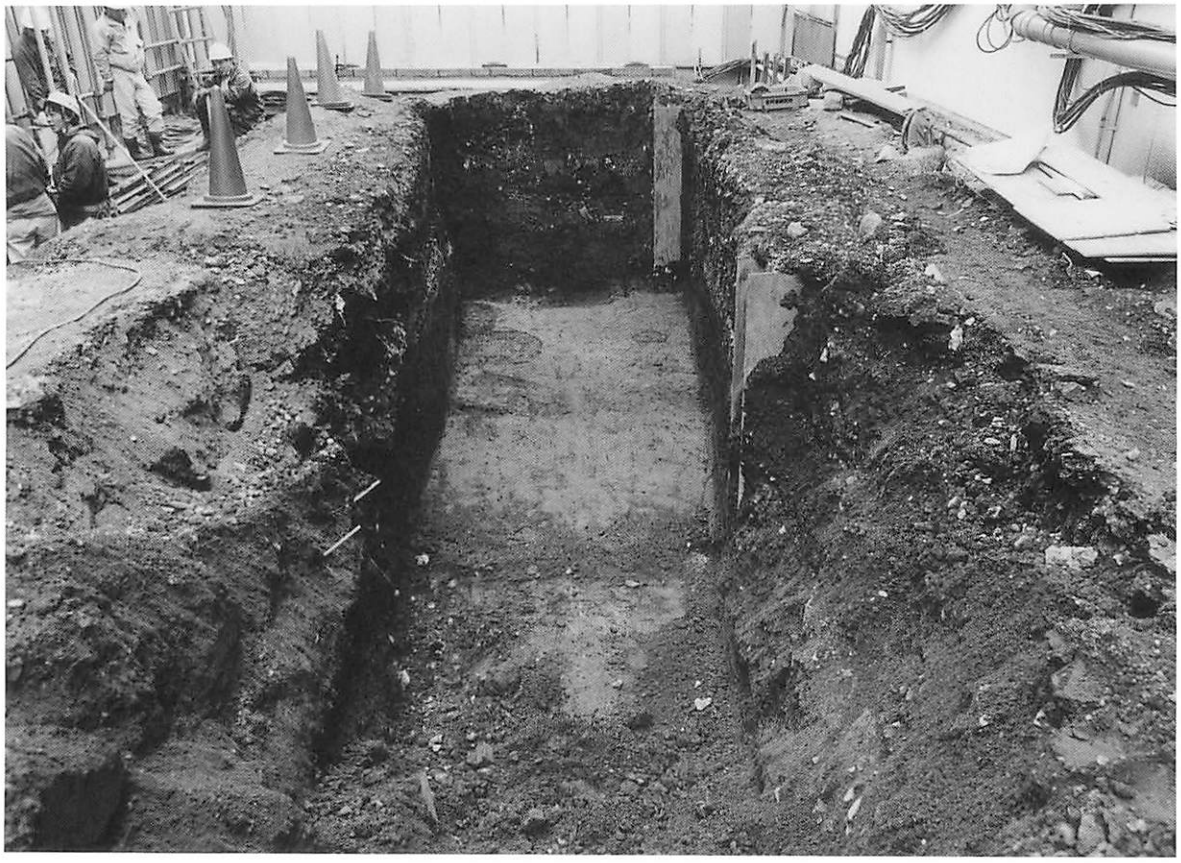
第３次調査Ⅱ区池跡出土状況（南西より）

第４次調査調査前光景（西北西・池坊会館屋上より愛染院を臨む）

第４次調査調査前光景（南西より）



第４次調査試掘調査前光景（北より）



第４次調査試掘トレンチ終了状況（北より）

第４次調査試掘トレンチ遺構検出状況１（西より）

第４次調査試掘トレンチ遺構検出状況２（西より）

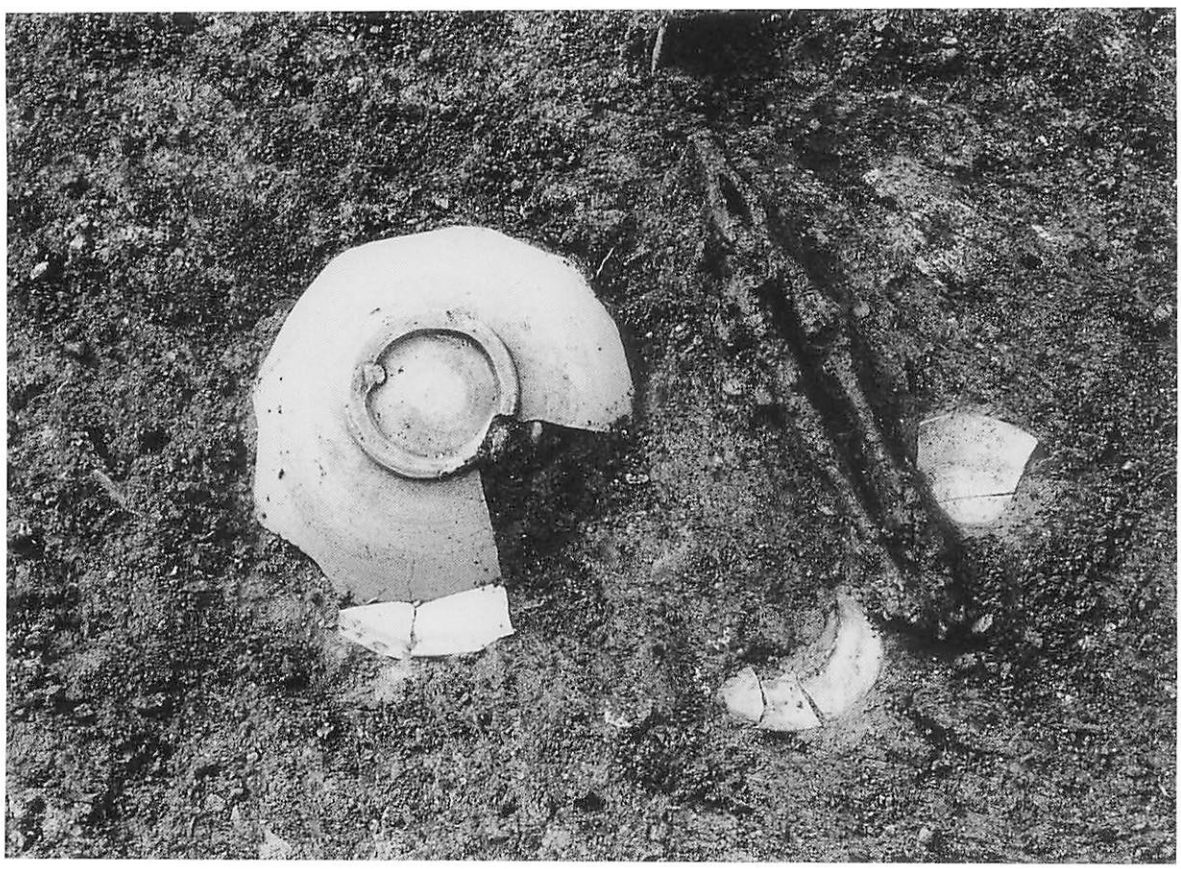
第４次調査調査区終了状況（南東より）

第４次調査調査区終了状況（東より）

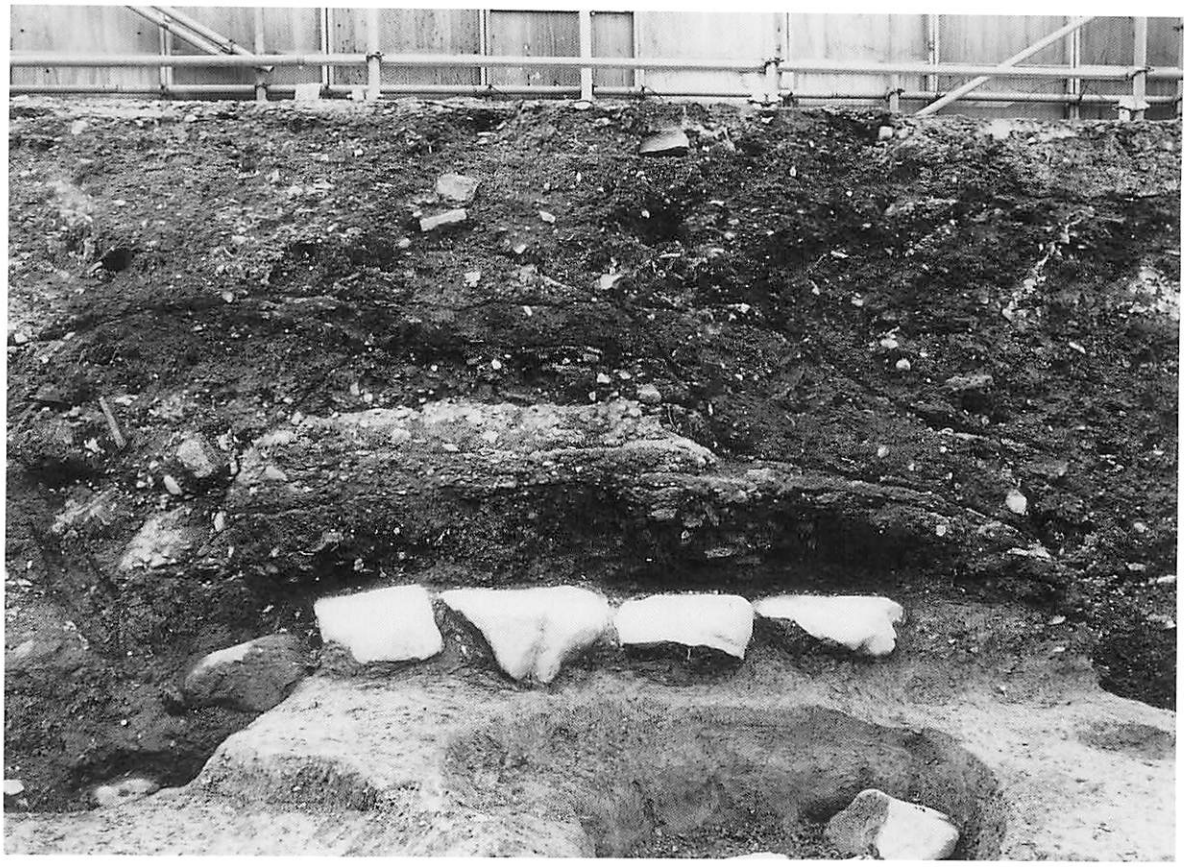
第４次調査溝ＳＤ01完掘状況（南より）

第４次調査溝ＳＤ01上層遺物出土状況（南より）

第４次調査溝ＳＤ01下層遺物出土状況（南より）



第４次調査溝ＳＤ01上層内唐津盤・やっとこ出土状況（東より）



第４次調査石列ＳＸ02出土状況（東より）

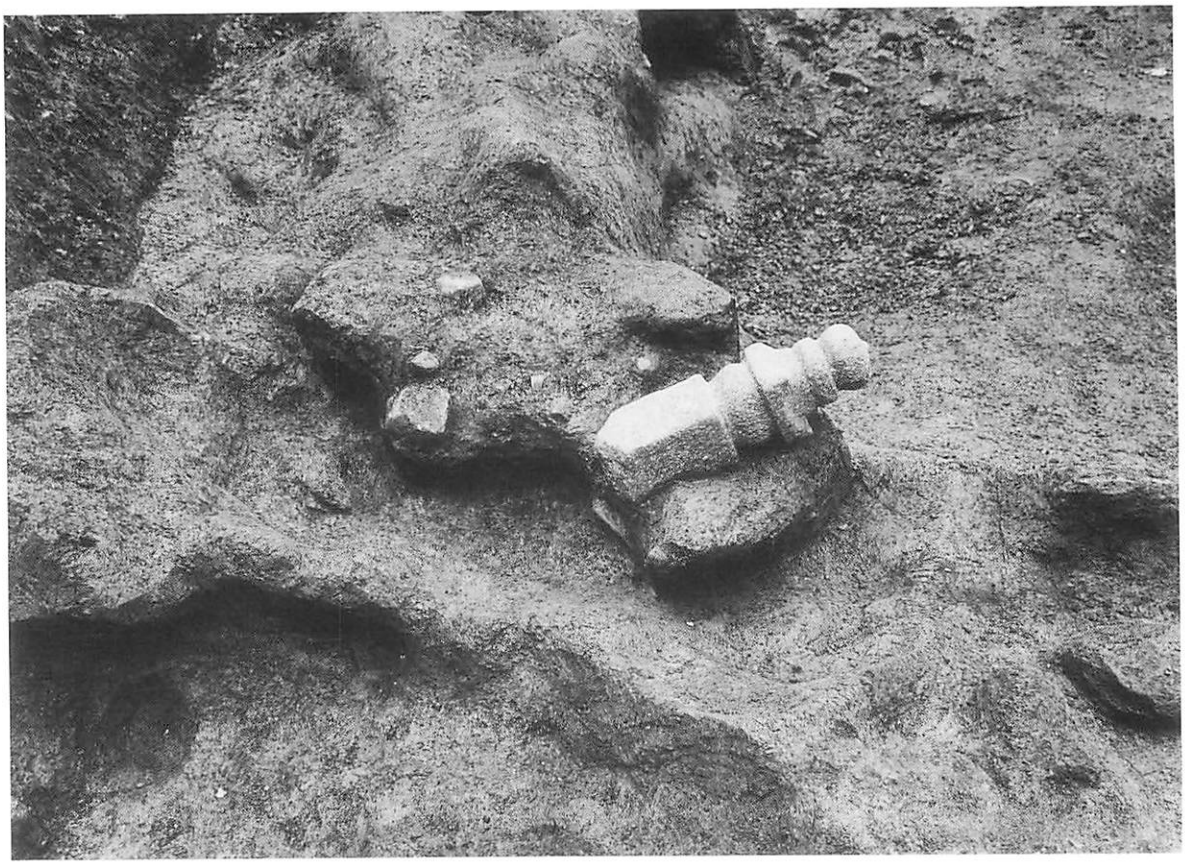
第４次調査溝ＳＤ19完掘状況（北より）

第４次調査溝ＳＤ16・ＳＤ17完掘状況（南より）

第４次調査土坑ＳＫ40断面（西より）

第４次調査土坑墓ＳＫ38土師器皿出土状況（西より）

第４次調査土坑墓ＳＫ38人骨出土状況（東より）



第４次調査土坑ＳＫ20遺物出土状況（東より）

第４次調査土坑墓ＳＫ78人骨出土状況（南より）

報告書抄録

ふりがな	ろっかくどうだいさんじだいよじちょうさ
書　　名	六角堂第３次・第４次調査
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	平安京跡研究調査報告
シリーズ番号	第21輯
編著者名	江谷　寛，桐山秀穂，柄崎修一郎
編集機関	（財）古代學協會
所在地	〒604-8131　京都府京都市中京区三条高倉　TEL075-252-3000
発行年月日	平成18年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
烏丸御池遺跡 （からすまおいけいせき） 六角堂 （ろっかくどう）	京都市中京区 （きょうとしなかぎょうく） 堂ノ前町248番地 （どうのまえちょう　ばんち）	26100	463	35° 0′ 15″	135° 43′ 46″	1994年 ３月24日 ～ 1994年 ９月９日	800	池坊会館建設に伴う発掘調査
						1996年 １月16日 ～ 1996年 ３月２日	500	六角堂駐車場建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
烏丸御池遺跡	集落	縄文時代	自然流路２条	縄文土器・弥生土器・	
六角堂	寺院	平安時代～江戸時代	柵列・井戸・溝・土坑	土師器皿・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦質土器・常滑・備前・信楽・京焼・唐津・白磁・青磁・染付・石仏・石塔・砥石・銭貨・金銅仏・伏鉦・独鈷杵など	

六角堂第３次・第４次
平安京跡研究調査報告　第21輯

発行日　平成18年３月31日
編　集
発　行　財團法人　古代學協會
604-8131　京都市中京区三条高倉
振替 01080- 4 -850
TEL 075-252-3000
印　刷　三星商事印刷株式会社
604-0093　京都市中京区新町通
竹屋町下ル弁財天町300
TEL 075-256-0961

THE THIRD AND FOURTH EXCAVATIONS AT THE ROKKAKU-DO TEMPLE IN THE CAPITAL HEIAN

THE PALEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, Inc.

KYOTO, MMVI